平 成 20 年 度

現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）報告書

～教育実践力の育成と学校・地域の活性化～

（最終報告書）

三 重 大 学 教 育 学 部

はじめに

平成 18 年度の現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代 GP）に、三重大学の「教育実践力の育成と学校・地域の活性化」をテーマとする取組が採択され、平成 18 年度には、一身田校区連絡協議会を組織し、取組全体を推進するための基盤を整備するとともに、主として一身田中学校との連携・協力を進めてきた。また、平成 19 年度には、その基盤の上に立って、一身田中学校だけではなく、白塚幼稚園、白塚小学校、栗真小学校、一身田小学校すべてにおいて、現代 GP の取組を全面展開することができた。

そして、平成 20 年度は、取組をさらに広げることができ、最終年度としての充実した取組を進めることができた。本報告書は、平成 20 年度の取組をまとめるだけでなく、３年間の取組を総括するとともに、今後の教訓を明らかにするものである。

教員養成を主目的とする三重大学教育学部では、学生に教育実践力の基礎を身につけさせるための授業科目として、平成 18 年度から授業科目「教育実地研究」を新設し、三重県下の諸学校のご協力をいただきながら、現場における実践を通した学びを推進する方向がとられているが、本取組はその一環として、教育学部に隣接する一身田中学校区の５校園（一身田中学校、一身田小学校、白塚小学校、栗真小学校、白塚幼稚園）と連携・協力して、学生に対する教育実践力の基礎の涵養を目的とする諸事業を推進しようとするものであった。

平成 20 年度には、理科・家政科・保健体育科・音楽科・幼児教育・数学科に加えて日本語教育コースの教員及び学生が一身田校区５校園の教員、幼児・児童・生徒たちと協働しながら、多様な取組を推進し、学生の教育実践力の涵養と学校の活性化に寄与することができた。

また、平成 20 年度も、地域の活性化のために、２期にわたって一身田校区カルチャー・スクールを開催した。２期６回におよんだカルチャー・スクールは、教育学部の教員等を講師として、生活と健康の問題、日本語表記の問題、人と動物との関わりの問題、身体操法の問題、裁判員制度の問題、音楽療法の問題などをテーマとして開催され、好評を博したものの、参加者数に伸び悩みが見られるという課題も残した。

さらに、平成 21 年 2 月 23 日には、平成 20 年度の取組のまとめ及び現代 GP３年間の取組を総括するための、「第３回　フォーラム in 一身田」を開催したところ、144 名の参加者があり、盛会のうちに終了することができた。

平成 20 年度が現代 GP の取組の最終年度にあたっていたことから、外部評価をお願いしたところ、三重県教育委員会及び津市小中学校長会からは、諸資料を熟読の上、適切なご助言と暖かい励ましをお寄せいただいた。心より厚くお礼申し上げる。

最後になったが、本報告書の作成にあたって、諸資料の提供、原稿の執筆などでご協力いただいた諸氏に感謝申し上げる。

三重大学教育学部･一身田校区連携推進委員会

平成 20 年度　現代 GP 報告書　目次

はじめに

［1］現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代 GP）について …… 1
（1）全体的な取組の概要
（2）平成 20 年度申請書

［2］平成 20 年度の取組（1） …… 11
（1）一身田校区連絡協議会の開催
（2）一身田校区カルチャー・スクールの開催

［3］平成 20 年度の取組（2） …… 37
（1）理科教育講座における取組
（2）保健体育講座における取組
（3）家政教育講座における取組
（4）幼児教育講座における取組
（5）音楽教育講座における取組
（6）数学教育講座における取組
（7）日本語教育コースにおける取組

［4］公開活動 …… 127
（1）現代 GP のホームページ
（2）「第３回　フォーラム　in　一身田」の開催

［5］現代 GP の運営組織及び活動日誌 …… 137
（1）現代 GP の運営組織
（2）現代 GP の活動日誌

［6］「第3回 フォーラム in 一身田」の資料集 …… 146

［7］現代 GP の3年間の総括及び外部評価 …… 199
（1）３年間の総括と自己評価
（2）外部評価（三重県教育委員会、津市小中学校長会）

おわりに

［1］現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代 GP）について

(1)全体的な取組の概要

三重大学教育学部に隣接する津市立一身田中学校区（１中学校、３小学校、１幼稚園）と教育学部が連携協力することによって、当該中学校区の５校園を、教員養成段階における学生の「実践的指導力の基礎」を涵養する教育実地研究の場として位置づけると同時に、当該学区における各学校園の各教科の教育活動、総合的な学習、課題学習、選択学習、課外活動等の諸教育活動を総合的に支援することによって、学校・地域活性化モデル及び幼小中大連携モデルを構築する。

また、当該中学校区における文化的・体育的諸活動はもとより、地域の福祉・健康問題、食問題等に対しても、教育学部の物的資源及び人的資源を投入して、地域の活性化をはかり、一身田学校区全体の地域の教育力・文化力を高めることによって、三重大学教育学部としての地域の文教化に貢献する。

取組の趣旨・目的

科学技術の進展が著しく、国際化や情報化、価値観の多様化が進む変化の激しい今日の社会にあって、教員には従来にも増して多様な資質能力が求められている。教員には教科・教職等に関する専門的知識、授業づくりや教材開発等に関する高い識見はもとより、人間の成長・発達についての深い理解、児童・生徒の人格形成の支援能力、社会の変化への対応や柔軟な発想、教職に関する高い倫理性と優れた人間性などが重要な資質と考えられ、これらを基盤とした「実践的な指導力」がますます必要とされる。

実践的な指導力とは、教科指導に関する教育実践力（教科指導力）だけではなく、学級集団や課外活動集団等の各種のグループを組織し、自律した活動が円滑に行なわれるように指導する実践力（組織力）、学園祭などの諸行事を企画し、運営していくことのできる実践力（企画・運営力）、学校や地域において日常的に発生する諸問題に対して臨機応変に適切に対処できる判断力（臨床的判断力）、児童・生徒や保護者、さらに同僚等との適切なコミュニケーションが実行できる実践力（コミュニケーション力）、児童・生徒の豊かな人間性と人格形成を支援できる実践力（人間力）等が含まれている。

本学部では、平成 16 年度に「三重県教育界のニーズを知る」ために、三重県教育委員会、津市教育委員会、三重県高等学校長会、津市小中学校長会等から代表を招いて懇談会を開催したが、こうした懇談会でも、前述した実践的指導力の養成が急務であるとの意見を聴取している。

そのような実践的指導力の基礎を培うには、講義による理論的な学習だけではなく、実際の教育現場における実地教育が不可欠である。教員免許取得に必要な教育実習は、３年次あるいは４年次に４週間あるいは２週間という期間限定で、しかも附属学校を主たる場として実施されているが、これだけでは不十分であり、年間を通しての学校体験、しかも公立学校における実地的学習によって、前述した実践的指導力の基礎を培うことが可能になると思われる。そのような趣旨に沿って、本学部では平成 18 年度から、「教育実地研究基礎」及び「教育実地研究」という新科目を開講し、学生の実地的な教育を展開する予定になっている。

本取組は、三重大学教育学部に距離的に最も近い津市立一身田中学校区（一身田中学校、一身田小学校、栗真小学校、白塚小学校、白塚幼稚園の５校園、及び北立誠小学校の一部を含む）と連携

協力することにより、下記の 3 つの成果を得ることを目的としている。

①教員養成段階における学生の実践的指導力の基礎を培う。

②当該学区の幼・小・中学校の諸教育活動を支援することを通して、学校活性化モデルおよび幼小中大連携モデルを構築する。

③当該学区の地域教育力を高め、三重大学教育学部としての地域貢献に資する。

なお、この取組を推進するためには、当該学区の学校設置者である津市教育委員会との連携協力及び一身田中学校の積極的姿勢が不可欠であるが、津市教育委員会とは、平成 16 年 11 月 16 日に連携協力のための協定を締結し、学力向上フロンティア事業、SPP 事業、幼小連携事業、小中連携事業等を協働して推進してきている。また、津市立一身田中学校長は津市教育委員会が民間から募集して任命された校長であり、平成 16 年度の赴任当初から、中学校区の教育の改善に努力されていて、本取組に対しては、津市教育委員会及び一身田中学校はきわめて積極的な姿勢を示している。

取組の実施体制等

本学部では、平成 18 年度から「教育実地研究基礎」（1 単位）という科目を 1 年生対象に新設する。その目的は、子どもや教員の実際に触れることを通して、“学校”というものを知り、早い段階から教職への動機付けを高め、2 年生で実施している事前実習、3 年生・4 年生で実施している 4 週間・2 週間の教育実習に繋げていくことにある。したがって、教員養成課程の教育課程内における「教育実地研究基礎」は、本取組の目的を達成するための 1 つの分野として位置づけることができる。

また、本学部では、「PBL 教育実施委員会」が平成 17 年度に設置され、学部の授業科目の PBL 化が推進される方向に向かっている。PBL 教育（Problem-based Learning、あるいは、Project-based Learning）は、現場において生起する問題の把握から問題解決策の立案、実施、評価に至る一連の学習過程を小グループにおけるチューター制で実施する教育形態であり、

①現実の状況に対する問題発見能力、分析力、解決能力を身に付けることができる。

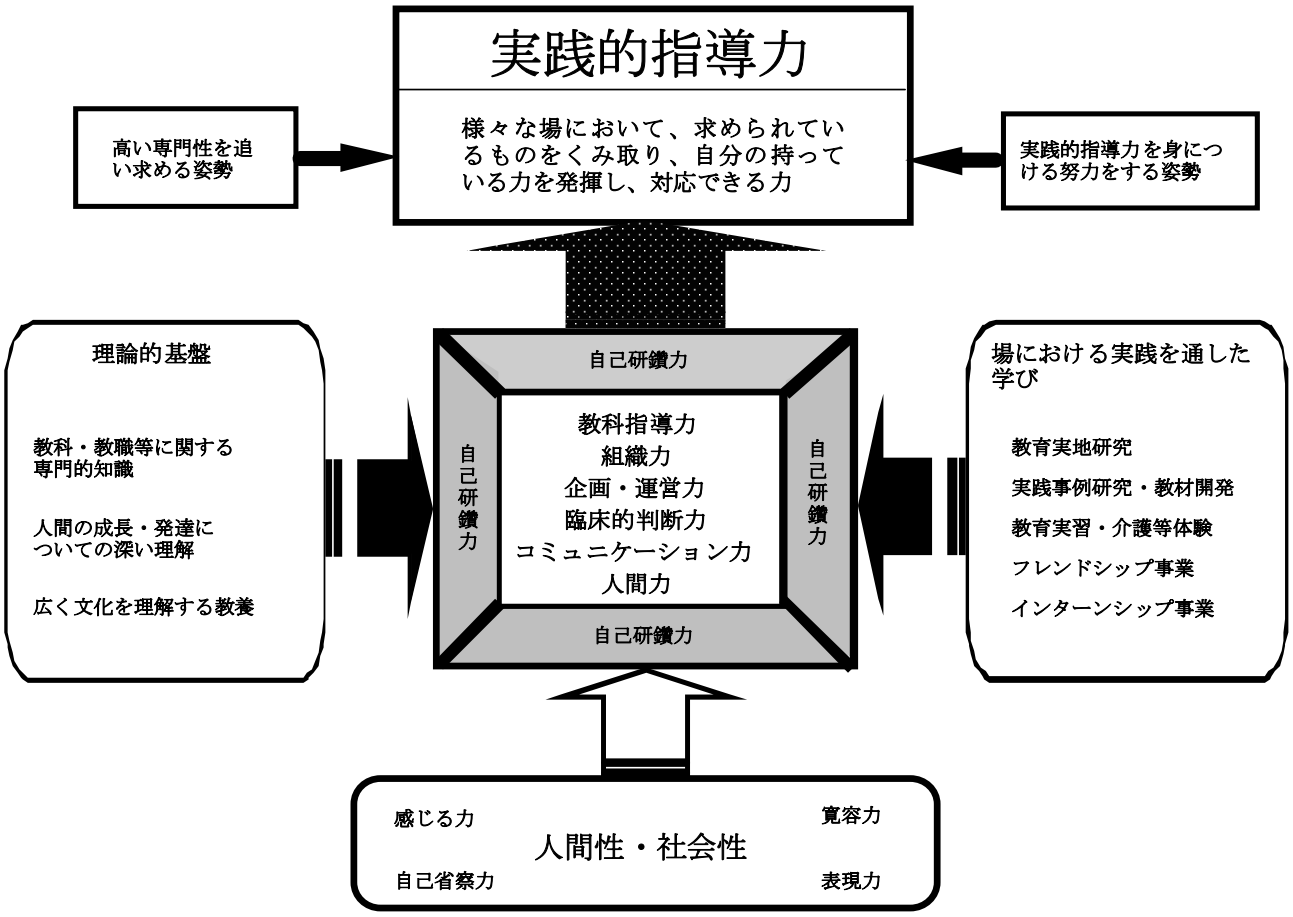
②現実世界の問題を解決していくことにより、理論と実践との繋がりを実感し、自己のアイデンティティの形成を促すことができる。

③問題解決過程、企画実施過程において、様々に有用な知識を活用し、資料探索能力を身に付けることができる。

という意義を持っている。したがって、学部授業科目の PBL 化は本取組の目的と合致しており、「4 データ、資料等」に示すように、三重県下の公立小学校、中学校における先行的な実践も蓄積されてきている。本学部の従来の経験から組み立てられた「実践的指導力を育成するための構造図」は［図 1］の通りである。本学部における実践的指導力育成のプログラムの概要は以下の通りである。第１年次に「教育実地研究基礎」を履修させて、教職への動機付けや意識を高め、第２年次に教科教育法に関する各科目の履修中に教育現場の体験をさせ、理論と実践の融合の重要性を学ばせる。これらの基礎の上に、第３年次の４週間教育実習が位置付けられている。さらに、第４年次には、２週間教育実習と「教育実地研究」の履修によって、資質のさらなる向上を目指す。特に、第１、

２年次に履修する授業科目については、その PBL 化を図る必要がある。

本学部の教員養成課程における教育課程内の授業科目を PBL 化するためには、適切な現場（公立の小学校、中学校、幼稚園）を必要とする。その意味において、本学部に隣接する一身田中学校区と連携を図ることは学部の総意となっている。



［図 1］ 実践的指導力を育成するための構造図

一方、全国的な傾向として、昨今のいわゆる「学力低下問題」や子どもを取り巻く教育環境の悪化に当面する小中学校、幼稚園は多くの課題を抱えている。一身田中学校区も例外ではなく、校内における「学力向上委員会」の設置、幼小連携・小中連携を模索する等の方針を打ち出し、諸問題の解決のため、大学との連携を強く希望している。また、20 の中学校区を管轄する津市教育委員会も、「平成 18 年度津市における学力向上推進計画案」を策定し、11 種類の事業それぞれについて委員会、連絡会等を設置し、それらを取りまとめる「津市学力向上推進委員会」を立ち上げ、教育改革を推進しようとしており、中学校区における教育改革モデルを模索している。

本取組を実施するにあたっては、三重大学教育学部内に「一身田学区との連携推進委員会」（仮称）を設置し、この委員会を中核として事業を推進する。また、当該学区の各学校園にも推進委員会を立ち上げるとともに、それぞれの代表者を構成員とする連絡協議会を設置する。なお、津市教育委員会の教育研究支援課内に置かれる予定の担当者も協議会の構成員となる。そして、事業内容

や実施方法等は連絡協議会における協議に基づいて決定され、実際的な事業遂行は各々の推進委員会を中心として行なわれることになる。

教育改革への有効性

義務教育は小学校と中学校を一貫した連続性の論理の上に成立している営みである。さらに、現代的課題ともなっている幼小連携をも視野に入れると、幼稚園から中学校までを包括した「学区」を義務教育の最小単位と考えることができる。その観点から見て、本取組は従来型の一公立学校との連携ではなく、5つの学校園を擁する中学校区全体との連携による総合的な教育改革に関するモデルを構築するものである。

教員養成課程におけるカリキュラムを実地研究型にしようとする動向は新しいものではないが、PBL教育としての位置づけを明確にし、さらに大学が中学校区全域との連携をはかることによって、複雑で多様な課題に対する解決を目指す幼小中大連携モデルと学校・地域活性化モデルを構築しようとする取組は全国的にもまだ始まったばかりであり、モデル構築はこれからの教育改革にとって有効な指針を与えることになる。以下に、その具体性について述べる。

①三重大学教育学部では、学生の実践的指導力を高めるための取組を平成14年度から種々の形態によって実施してきており、具体的な教育内容、教育方法が整理されつつある。しかし、これらは地域的には個別的であり、学校種の面でも個別対応の取組にとどまっていて、今日的課題ともなっている幼小連携、小中連携の推進にとっての直接的な有効性が検証される取組にまで高められていない。これに対して、本取組は1つの中学校区全域との連携事業であるから、地域的にも、学校種の面でも、幼小中を一貫した取組が可能となり、その中での学生の実践的指導力育成のための教育課程、教育内容、教育方法に関するプログラムの創出が可能となり、今後の教育施策の策定に有効な指針を与えることができると考えられる。

②本取組の連携学区である「一身田中学校区」は、学力向上に係る取組においても、また課外活動に係る取組においても、きわめて積極的な姿勢を示している。しかし、幼小中の連携が十分に成功しているとは言い難い。幼稚園、小学校、中学校はそれぞれ独自の課題を持っており、その教育活動スタイルも異なっているからである。したがって、幼小中の連携推進の有効な指針、内容と方法を構築するためには、高等教育機関である三重大学教育学部の協力が必要とされている。

幸い、本学部はこの一身田中学校学区と距離的に最も近い位置にあるから、この地域において、幼小中大連携モデル及び学校・地域活性化モデルを構築できる体制が備わっていると言える。

③一方、津市教育委員会は、平成17年度からの第2期教育改革の目玉としての「学力向上拠点形成事業」を推進している。すでに、「津市5歳児カリキュラム」の策定もなされ、これに連結した形での「小中一貫カリキュラム」の策定も視野に入れられている。本取組は、津市教育委員会のこうした教育施策とも合致しており、その意味において、津市教育委員会は、一身田中学校区と本学部の連携協力事業に大きな期待をかけている。この取組を推進することによって、行政の果たす役割に関しても、有効な指針が得られるものと考えられる。

（2）平成20年度申請書

１．大学等名／設置者名	三重大学／国立大学法人三重大学
２．プログラム名	現代的教育ニーズ取組支援プログラム（テーマ１）
３．事業名称	教育実践力の育成と学校・地域の活性化
４．選定年度	平成１８年度
５．事業推進代表者／事業推進責任者	事業推進代表者　学　　長　豊田　長康 事業推進責任者　教育学部教授　上垣　渉
６．事務担当者	主担当　学務部教務チーム　チーフ　柘植　智司
	副担当　学務部教務チーム　係員　中村　健太郎

7. 選定取組の概要

平成１８年度現代的教育ニーズ取組支援プログラムで選定された「教育実践力の育成と学校・地域の活性化」は、三重大学教育学部に隣接する津市立一身田中学校区（１中学校、３小学校、１幼稚園）と教育学部が連携協力することによって、当該中学校区の５校園を、教員養成段階における学生の「実践的指導力の基礎」を涵養する教育実地研究の場として位置づけると同時に、当該学区における各学校園の各教科の教育活動、総合的な学習、課題学習、選択学習、課外活動等の諸教育活動を総合的に支援することによって、学校・地域活性化モデル及び幼小中大連携モデルを構築する取組である。

また、当該中学校区における文化的・体育的諸活動はもとより、地域の福祉・健康問題、食問題等に対しても、教育学部が物的・人的支援を行なって、地域の活性化をはかり、一身田学校区全体の地域の教育力・文化力を高めることによって、教育学部としての地域の文教化に貢献する。

8. 補助事業の目的･必要性

（1）全体

本補助事業の全体の目的は、教員養成教育における「実践的指導力の基礎」の育成のため、実地的教育カリキュラムの改善を図り、本学の教育目的である資質の高い人材養成に資するため、学校と地域の活性化を図ることを通して、地域の教育力を高め、幼小中大連携モデル及び学校・地域活性化モデルを構築することである。

幼小中大連携モデルの構築とは、同一地域に並立する幼稚園、小学校、中学校の教育活動の交流を促進し、子どもの確かな学力と豊かな人間性を育むための一貫した教育課程の構築を可能とする典型を創ることであり、学校・地域活性化モデルの構築とは、地域の保護者、住民の教育に関する意識を高め、学校の教育活動と子どもの成長を見守り、支える文教地域として活性化することを意味している。

実践的指導力の基礎を培うには、講義による理論的な学習だけではなく、実際の教育現場における実地教育が不可欠である。教員免許取得に必要な教育実習は、３年次あるいは４年次に４週間あるいは２週間という期間限定で、しかも附属学校を主たる場として実施されているが、これだけでは不十分であり、年間を通しての学校体験、しかも公立学校における実地的学習によって、前述した実践的指導力の基礎を培うことが可能になると思われる。

また、平成１８年度からの正規の授業科目として実施している「教育実地研究」の取組の一層の

充実・発展を図るとともに、本取組を全学的取組として拡充することにより、本学の教育目的である資質の高い教員養成教育における人材養成機能の強化を図ることが、本補助事業の目的である。

(2)本年度

本補助事業の本年度の目的は、平成１８年度に確立した事業推進組織である「一身田校区連絡協議会」を中核とし、昨年度の取組を土台として、学部学生による幼小中学校園の幼児・児童・生徒の「遊び」と「学び」への支援活動、理科教育・食教育・総合学習などに関する教育実地研究の授業の推進、合同研究会の開催と公開授業の実施、親子活動における体ほぐし運動の実施、中学校の文化祭（合唱コンクール）への支援、未就園児保育への支援、大学教員による保護者・地域住民を対象としたカルチャースクールの開催、及び「フォーラム in 一身田」の開催などにより、学生の教育実践力の育成と学校・地域の活性化を推進することである。

9. 本年度の補助事業実施計画

本年度の補助事業の目的を達成するため、下記の取組を実施する。

① ８月、１２月、平成２１年３月　一身田校区連絡協議会の開催

② 年間を通しての「教育実地研究基礎」(授業科目)、「教育実習」(授業科目）の実施（小中学校における学習支援活動など）

③ 年間を通して、中学校における「授業作り研究会」の定例的な開催

④ 年間を通して、小中学校における児童・生徒の放課後学習活動への支援

⑤ 年間を通して、幼稚園における未就園児保育への支援

⑥ １学期ー２学期　幼稚園における「音・音楽遊び」活動と「音楽物語」の上演活動などの実施

⑦ ６月ー７月　小中学校における食教育の実施

⑧ ６月ー１０月　第５期、第６期「一身田校区カルチャースクール」の開催

⑨ ６月ー１２月　小中学校における体育教育への授業支援活動、小学校における水泳教室及び親子活動（体ほぐし運動など）の実施

⑩ ９月ー１０月　中学校における総合的な学習・キャリア教育への支援

⑪ ７月ー平成２１年３月　中学校・合唱コンクールに向けての指導・支援、教育学部とのコラボ音楽祭及び小学校におけるミニコンサートなど音楽活動の実施

⑫ １学期と２学期、中学校「１年生理科」における理科実験の支援

⑬ １１月、理科と家庭科のクロスカリキュラム（中学校２年の解剖実習と調理実習）の実施

⑭ １２月　中学校「選択理科」における「青少年のための科学の祭典」への出展

⑮ １２月ー平成２１年２月　合同研究会の開催と公開授業の実施

⑯ 平成２１年２月　「フォーラム in 一身田」の開催

⑰ 平成２１年３月　報告書の作成

10. 補助事業の内容

本補助事業は、選定された現代的教育ニーズ支援プログラムにおける「教育実践力の育成と学校・地域の活性化」の一層の充実・発展を目指す補助事業であり、内容は以下のとおりである。

① 平成２０年度の取組を推進していくために、適切な時期に情報交換を図りながら、他大学等での取組等を調査し（現代ＧＰフォーラムでの調査及び他大学等への実地調査)、企画と運営に関

する具体的方針を立案するとともに、取組の総括を行なうために、一身田校区連絡協議会を定期的に開催する。

② 大学教員の指導のもとで、教育学部の授業科目である「教育実地研究基礎」の一環として、種々のコースの学生が小中学校における学習支援活動（ティーチングアシスタント）を年間を通して行い、６月と９月には学部の授業科目である「２週間教育実習」と「４週間教育実習」を小中学校において実施する。

③ 中学生の学力向上のために、教材開発や授業案作りを含めた「授業のあり方」を研究するために、大学教員、学生、中学校教員が協働して行なう研究会を定例的に開催する。

④ 小中学校における児童・生徒が放課後に行なう課外の学習活動を「寺子屋・一身田」として組織し、大学教員と小中学校教員の指導のもとで、学生が支援する。

⑤ 幼稚園における未就園児保育の取組である「ぴょんちゃんクラブ」の運営・推進に対して、幼児教育コースの学生が、大学教員と幼稚園教員の指導のもとに活動を行なう。

⑥ 幼稚園の園児に対して、幼児教育コースの学生が、大学教員と幼稚園教員の指導のもとで、「音・音楽遊び」の活動、「音楽物語」の上演活動などの諸活動を行なう。

⑦ 小中学校における食教育の改善や“食”に関する意識向上のために、大学教員と家政科学生、小中学校教員が協働して、「お弁当作り」などの実践を行なう。

⑧ 保護者、地域住民を対象として、教育問題、健康問題、地域問題、時事問題などをテーマとしたカルチャースクールを２期（合計６回）にわたって開催する。

⑨ 小中学校の体育教育に“ラート”や“G ボール”などの教具を導入して、授業改善を図る。また、集団宿泊学習や運動会に向けての体育活動を実施し、夏期休暇中には小学校におけるプール指導の一環として、大学教員、小学校教員の指導のもとで、学生が小学生に対して水泳指導を行なう。また、小学校の PTA の学年・学級行事等において、親子のコミュニケーションを図るなどのために、大学教員と小学校教員の指導のもとで、保健体育科の学生が「親子活動における体ほぐし運動」を実施する。

⑩ 中学校における総合的な学習の一環としてのキャリア教育（職場体験学習）に対して、大学教員と中学校教員の指導のもとに、社会科コース学生が支援を行なう。

⑪ 秋に開催予定の中学校・合唱コンクールに向けて、大学教員と中学校教員の指導のもとで、音楽科学生が中学生に対して実地の合唱指導を行い、大学教員の指導のもとで、音楽科学生が中学校教員と協働して、中学校の文化祭（合唱コンクール、吹奏楽演奏など）を「コラボ音楽祭」として成功させる。また、小学校における連合音楽会、クリスマスコンサート、卒業生を送る会などの行事等に関わって、大学教員と小学校教員の指導のもとで、音楽科の学生が企画立案や実施の支援を行なう。

⑫ 中学校の授業科目である「選択理科」において、大学教員、学生、中学校教員の協働によって、科学実験体験活動を実施する。

⑬ 学部の理科学生（３年生）の授業科目における教育現場での実践活動として、受講生が中学校の「２年生理科」の実験指導を行なう。

また、中学校における「生命尊重」の教育として、解剖と調理を兼ねた実習を大学教員、学生、

中学校教員の協働によって実施する。

⑭　中学校の授業科目「選択理科」の一環として、受講生徒が理科学生や中学校教員の支援のもと「青少年のための科学の祭典」で実験ブースを出展し、幼稚園児や小学生の指導にあたる。

⑮ 中学校が開催する公開授業に大学教員と学生が参加し、合同の授業研究会を開催するなどして、公開授業を成功させる。

⑯　「第３回フォーラム in 一身田」を開催し、２０年度の取組の成果の公表・普及とあわせ、他大学等の実施内容との比較・検討を行う。

⑰　平成２０年度の取組の成果と課題をまとめた報告書を作成し、全体的な総括を行なう。

以上の補助事業において、学生が地域で行なう活動時間数の概数は次の通りである。小中学校における学習支援活動などに関わる学生については年間約４００時間、理科学生については年間約３００時間、幼児教育学生については約２００時間、家政科学生については約１５０時間、体育科学生については約３００時間、音楽科学生については約３００時間、社会科学生については約１００時間、学校教育学生については約５０時間、その他に関わる学生については約４００時間、合計して約２２００時間である。

上記の諸活動を通じて、選定取組を更に充実・発展させ、本学の教育目的である教員養成における資質の高い人材養成機能の強化を図ることが、本補助事業の内容である。

11. 補助事業から得られる具体的な成果

上記の本年度の補助事業実施計画を実施することにより、本補助事業から得られる具体的な成果は、以下のとおりである。

①　一身田校区連絡協議会を定期的に開催することにより、学生の教育実践力育成に関する実態を把握でき、課題がより明確となり、学生に対する具体的な教育方策を継続的にフォローすることができる。また、本学の取組と類似の先行的取組を調査することにより、本学の取組の改善が図られ、学生の新たな教育活動が期待できる。

②　「教育実地研究基礎」の実施において、学生が小中学校の学習支援活動や学校行事支援活動に取り組むによって、その企画・運営力、遂行力、組織力の向上に資することができ、また、教育実習を行なうことによって、学校教育活動の概要を知ることができるとともに、教科指導、学級指導、清掃指導、給食指導など全般的な教育実践力育成の基礎を培うことができる。

③　生徒の学力向上のための基礎とも言える「授業作り」の研究会に学生を参加させることによって、学生の教材観、授業観に広がりと深まりを与えることができる。

④　学生が児童・生徒の放課後学習活動に関わることによって、正規の授業時間には見られない子どもの姿に接することが可能となり、学生の子ども観に新たな視点を付与することができる。

⑤　学生が幼稚園における未就園児保育のための「ぴょんちゃんクラブ」の活動に従事することにより、企画・運営力を高めるとともに、幼児教育の課題への認識を深めることができる。

⑥　学生が幼稚園における種々の音楽活動を展開することにより、幼児との親和を深め、幼児教育の課題や喜び・充実感を実践的に感じ取ることができるとともに、幼児の音楽的能力育成のためのメソッドについて実践的に学ぶことができる。

⑦　非給食時におけるお弁当作りの実践などを行なうことにより、児童・生徒の健康に密接な関わ

りを持つ食問題を学校教育の一分野として捉える視点と意義を学生が身に付けることができる。

⑧　カルチャー・スクールを開催することにより、保護者、地域住民の大学に対する信頼度が高まり、結果として、学生の実地的教育に対する学校・地域の理解が深まり、教育実地研究の取組の進展を図ることができる。

⑨　ラートやＧボールなどの教具を用いた体育指導に学生が関わることによって、児童・生徒の体力と健康に繋がる体育教育の改善のための指導法や教具の意義について、学生が実践的に学ぶことができ、夏の水泳は小学生にとって重要な意義を持つ活動であり、学生がその内容と方法に実践的に関わることによって、将来の小学校教員として必要な資質の基礎を身に付けることができる。また、保健体育科学生がPTAの学年・学級行事における親子活動（体ほぐし運動など）を実践することにより、体育活動に関する実践力向上だけではなく、保護者と子どもの相互理解、それを支援する学校のあり方などを考える機会を得ることができる。

⑩　学生が中学校の総合的な学習の一環としてのキャリア教育を支援することによって、学校教育における総合的な学習の意義と課題に対する理解を深めることができる。

⑪　中学校の文化祭（合唱コンクール）は、中学生にとっての一大イベントであることから、その合唱指導に関わることは学級指導そのものに関わることでもあり、学生が集団指導力や運営組織力の基礎を身に付けることのできる好機会である。中学生の心理や実態に即した指導方法についての理論を学びながら、実践力を培うことができ、併せて中学校文化祭の一環としての合唱コンクールに、音楽科学生による合唱を実施し、コラボ音楽祭とすることにより、学生の中学校行事に対する意識改革を図るとともに、学生の合唱力向上に資する。

　また、音楽科学生が小学校の連合音楽会、クリスマスコンサートなどの諸行事に関与することによって、学校における音楽活動の重要性を体得し、対象校の現状に即した企画立案や運営実施などの実践力を培うことができるとともに、学校の諸行事における音楽の意義をより深く理解することができる。

⑫　中学校の選択授業科目「選択理科」における科学教室等の実施や、理科学生の教材開発力、実践力の向上とともに中学校教員の科学、実験に対する意識の改善を図ることができる。

⑬ 中学校１、２年生「理科」及び「家庭科」の授業で、理科学生と家政科学生が協働して、「命と食を考える」教育実践を行なうことにより、解剖と調理に関する実践力を深めるとともに、複数教科のクロスカリキュラムの可能性を考える機会を得ることができる。

⑭　「青少年のための科学の祭典」への出展内容を学生が企画・立案することにより、行事に対する認識が深まるとともに、企画・運営力の向上が期待できる。

⑮　中学校の公開授業のための合同研究会に学生を参加させ、実際の公開授業を参観させることによって、学生の教材解釈力に資する。

⑯　「フォーラム in 一身田」の開催にあたり、学生がこれまでの成果を整理し、資料の作成に従事することにより、イベントに対する認識を新たにし、将来的な学校諸行事を実行していく上での実践力の基礎を身に付けることができる。

⑰　平成２０年度の取組の成果と課題をまとめた報告書を作成する過程に学生を参加させることにより、資料等を概括し、整理する力の育成に資することができる。

［2］平成20年度の取組（1）

(1)一身田校区連絡協議会の開催

今年度の取組に関する一身田校区連絡協議会は3回開催された。

第1回目は、平成20年1月8日（火）17：00ー19：00に三重大学教育学部・第3会議室において開催された。出席者は、一身田中学校（3名）、一身田小学校（2名）、白塚小学校（2名）、栗真小学校（2名）、白塚幼稚園（2名）、津市教育委員会（2名）、三重大学教育学部（5名）の総計18名であった。津市教育委員会からの挨拶、出席者の自己紹介の後、平成20年度現代GP調書について協議がなされた。その結果、平成20年度には、下記のような取組を予定することとなった。

① 8月、12月、平成21年3月　一身田校区連絡協議会の開催
② 年間を通しての「教育実地研究基礎」（授業科目）、「教育実習」（授業科目）の実施（小中学校における学習支援活動など）
③ 年間を通して、中学校における「授業作り研究会」の定例的な開催
④ 年間を通して、小中学校における児童・生徒の放課後学習活動への支援
⑤ 年間を通して、幼稚園における未就園児保育への支援
⑥ 1学期ー2学期　幼稚園における「音・音楽遊び」活動と「音楽物語」の上演活動などの実施
⑦ 6月ー7月　小中学校における食教育の実施
⑥ 6月ー10月　第5期、第6期「一身田校区カルチャースクール」の開催
⑨ 6月ー12月　小中学校における体育教育への授業支援活動、小学校における水泳教室及び親子活動（体ほぐし運動など）の実施
⑩ 9月ー10月　中学校における総合的な学習・キャリア教育への支援
⑪ 7月ー平成21年3月　中学校・合唱コンクールに向けての指導・支援、教育学部とのコラボ音楽祭及び小学校におけるミニコンサートなど音楽活動の実施
⑫ 1学期と2学期、中学校「1年生理科」における理科実験の支援
⑬ 11月、理科と家庭科のクロスカリキュラム（中学校2年の解剖実習と調理実習）の実施
⑭ 12月　中学校「選択理科」における「青少年のための科学の祭典」への出展
⑮ 12月ー平成21年2月　合同研究会の開催と公開授業の実施
⑯ 平成21年2月　「フォーラム in 一身田」の開催
⑰ 平成21年3月　報告書の作成

第2回目は、平成20年12月24日（水）15：00ー17：00過ぎまで、教育学部・第1会議室において開催された。出席者は、一身田中学校（3名）、一身田小学校（2名）、白塚小学校（2名）、栗真小学校（2名）、白塚幼稚園（2名）、市教委（2名）、大学（6名）、計19名であった。

1学期の活動についての報告と交流、問題点の指摘などが行なわれた後、今後の取組について協議がなされた。すでに具体的な日程も定まった計画もいくつか報告されたが、これから計画される事業もあるとのことであった。なお、全体に関わる件で、今年度の総括のためのフォーラムを平成21年2月23日（月）の午後、大学の小ホールで開催することに決定した。

なお、今後の進め方については、すでに日程などが決まっている取組については、準備を進め、これから企画される取組については、関係すると思われる大学の教員と小中学校・幼稚園とが連絡を取り合い、協議して進めて行くこととなった。その他の件については、代表の上垣と連絡を取り合いながら進めていくこととなった。

第3回目は、平成21年2月10日（火）16：00〜18：00、三重大学教育学部・第1会議室において開催された。出席者は、津市教育委員会（1名）、一身田中学校（2名）、一身田小学校（1名）、白塚小学校（1名）、栗真小学校（1名）、白塚幼稚園（1名）、教育学部（4名）であった。

最初に、これまでの取組と現状について簡単な報告がなされた。その後、2月23日に開催予定の「第3回　フォーラム in 一身田」の内容について協議され、ポスターセッション＆学生の体験発表、パネル・ディスカッション、講演という3部構成のうちのパネル・ディスカッションに関する打合会を行なった。

（2）一身田校区カルチャー・スクールの開催

今年度は、2期6回の講座を開催した。第5期カルチャースクールは、平成20年6月13日、27日、7月11日に、第6期カルチャースクールは、平成20年10月31日、11月14日、28日に開催された。いずれも金曜日の午後7時30分から9時までの90分の講座であった。講座の題目、講師は下記の通りであった。

第5期　第1回「生活リズムと健康　−早ね、早おき、朝ごはん−」
講師／高田短期大学・子ども学科教授 梶 美保（育児文化研究センター長）
第2回「現代日本語表記入門　−「おとうさん」？「おとおさん」？−」
講師／教育学部教授　丹保健一（国語教育講座）
第3回「人と動物のいい関係」
講師／教育学部教授 後藤太一郎（理科教育講座）

第6期　第1回「日常生活への古武術的身体操法の応用」
講師／教育学部教授　脇田裕久（保健体育講座）
第2回「あなたが、裁判員に選ばれたら」
講師／鈴鹿医療科学大学准教授　藤原正範（医療福祉学科）
第3回「音楽で からだも こころも リフレッシュ」
講師／教育学部准教授　根津知佳子（音楽教育講座）

第5期、第6期とも、ポスター100部を作成して、三重大学及び一身田地区の各所に掲示し、宣伝を行なった。そのポスターを次ページに掲載する。

第5期

一身田校区 カルチャー・スクール

6/13(金)・27(金)・7/11(金)

参加費 無料

申し込み・予約不要

（当日ご参加ください）

※一身田校区以外の方でも自由に参加できます。

高田青少年会館

2階・第一会議室

☎059-232-6079

◆主催／一身田校区連絡協議会

◆後援／津市教育委員会

2008 Culture School

第1回講座

6月13日［金］19:30～21:00

『生活リズムと健康　―早ね、早おき、朝ごはん―』

講師／高田短期大学・子ども学科教授　梶 美保（育児文化研究センター長）

第2回講座

6月27日［金］19:30～21:00

『現代日本語表記入門―「おとうさん」？「おとおさん」？―』

講師／三重大学教育学部教授　丹保健一（国語教育講座）

第3回講座

7月11日［金］19:30～21:00

『人と動物のいい関係』

講師／三重大学教育学部教授　後藤太一郎（理科教育講座）

◆問い合わせ先／津市立一身田中学校…059-232-2157　三重大学教育学部…059-231-9347

第6期

一身田校区 カルチャー・スクール

10/31 FRI・11/14 FRI・28 FRI

参加費 無料

申し込み・予約不要
（当日ご参加ください）
※一身田校区以外の方でも自由に参加できます。

高田青少年会館
2階・第一会議室
☎059-232-6079
◆主催／一身田校区連絡協議会
◆後援／津市教育委員会

Culture School 2008

第1回講座

10月31日［金］19:30～21:00

『日常生活への古武術的身体操法の応用』

講師／三重大学教育学部教授　脇田裕久（保健体育教育講座）

第2回講座

11月14日［金］19:30～21:00

『あなたが、裁判員に選ばれたら』

講師／鈴鹿医療科学大学准教授　藤原正範（医療福祉学科）

第3回講座

11月28日［金］19:30～21:00

『音楽で からだも こころも リフレッシュ』

講師／三重大学教育学部准教授　根津知佳子（音楽教育講座）

◆問い合わせ先／津市立一身田中学校…059-232-2157　三重大学教育学部…059-231-9347

第5期　第1回一身田カルチャー・スクールアンケート結果

題　目　　生活リズムと健康　－早ね、早おき、朝ごはん－

日　時　　2008年 6月13日(金) 19時30分～21時00分

場　所　　高田青少年会館　2階・第1会議室

参加者　　20名　（一般参加 14名　　一身田中教員 4名　　三重大学 2名）

アンケート結果　　n＝14　（男＝7　　女＝7）

Ⅰ. 質問事項

性別	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	記入なし	計
男				1	2	1	2	1		7
女			1	3		2	1			7
記入なし										0
計			1	4	2	3	3	1	0	14

○ 「一身田カルチャー・スクール」を、どうやってお知りになりましたか？

	男	女	記入なし	計
□学校からの案内状	2	4		6
□地域のお知らせ	4	3		7
□ホームページ				0
□その他		1		1
計	6	8	0	14

○民生児童委員協議会

Ⅱ.「一身田カルチャースクール」について

○開始時間	男	女	記入なし	計
1. 早くしてほしい				0
2. よい	6	7		13
3. 遅くしてほしい				0
記入なし		1		
計	6	8	0	14

○講義時間	男	女	記入なし	計
1. 長くしてほしい	1			1
2. よい	5	6		11
3. 短くしてほしい				0
記入なし		2		2
計	6	8	0	14

○開始時間帯	男	女	記入なし	計
1. 平日夜間	6	5		11
2. 平日昼間				0
3. 土･日曜日				0
4. その他		1		1
記入なし		2		2
計	6	8	0	14

○金土日夜間

○講座回数	男	女	記入なし	計
1. 多くしてほしい	2	1		3
2. よい	4	6		10
3. 少なくしてほしい				0
記入なし		1		1
計	6	8	0	14

○講座内容	男	女	記入なし	計
1. よい	4	4		8
2. 普通	2	2		4
3. よくなかった				0
記入なし		2		2
計	6	8	0	14

○会場	男	女	記入なし	計
1. よい	4	5		9
2. 普通	2	2		4
3. よくなかった				0
記入なし		1		1
計	6	8	0	14

（アンケートⅡ. に係わってのご意見等）
○空調がよく効いたいい会場です。
○内容がいいので、もっと多くの参加があるといいですね。
○エアコン不要では？　蒸し暑いですが、我慢できそう。「環境にやさしく」という観点から、皆さんに協力をお願いするのもカルチャースクール。

Ⅲ. 今後、どういう講義を希望されますか。

□一般教養（文学･歴史･科学） ･･･ 5名　〇高田本山の歴史について

□消費生活･経済･政治 ･･･ 4名

□医療･健康 ･･･ 4名　〇健康体操の紹介をして欲しい。

□子育て ･･･ 3名　〇やる気の出し方（小5）

□自然環境 ･･･ 4名　〇最近の地球の「さけび」が気になります。

□その他 ･･･ 1名　〇中学給食は、するべきではない。

Ⅳ. 意見･感想･要望など

〇最近、不規則な食事や運動不足が気になりますが、いかに毎日の規則正しい生活リズムが大切か、よくわかりました。大人ばかりでなく、子どもたちも、夜更かし･朝ごはん抜き･･･といったことをよく聞きます。生活リズムの大切さを伝えていかなければならないと思います。
〇早寝早起き朝ごはんは、とても大事だとわかっています。子どもにもそうなるよう努力はしています。が、主婦って本当に忙しくて、母親一人だけに訴えても、なかなか難しいものだと思います。夫やおじいちゃん、おばあちゃんなど、家族の協力がなくては続かないのではないでしょうか。津市で標語が作られるようですが、家族を巻き込むようなものであって欲しいと思います。
〇昔の人間なので、今の子、孫の生活は、ぜいたくだ。

第5期　第2回一身田カルチャー・スクールアンケート結果

題　目　　現代日本語表記　－「おとうさん」？　「おとおさん」？－

日　時　　2008年 6月27日(金)　19時30分～21時00分

場　所　　高田青少年会館　2階・第1会議室

参加者　　20名　（一般参加 14名　　一身田中教員 4名　　三重大学 2名）

アンケート結果　　n＝14　（男＝9　　女＝5）

Ⅰ．質問事項

性別	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	記入なし	計
男		2		1		2	2	2		9
女			1		1	3				5
記入なし										0
計		2	1	1	1	5	2	2	0	14

○「一身田カルチャー・スクール」を、どうやってお知りになりましたか？(複数回答あり)

	男	女	記入なし	計
□学校からの案内状	2	3		5
□地域のお知らせ	4	3	1	8
□ホームページ	1			1
□その他	2			2
計	9	6	1	16

Ⅱ．「一身田カルチャースクール」について

○開始時間	男	女	記入なし	計
1．早くしてほしい				0
2．よい	9	5		14
3．遅くしてほしい				0
記入なし				
計	9	5	0	14

○講義時間	男	女	記入なし	計
1．長くしてほしい				0
2．よい	9	5		14
3．短くしてほしい				0
記入なし				0
計	9	5	0	14

○開始時間帯	男	女	記入なし	計
1. 平日夜間	9	4		13
2. 平日昼間				0
3. 土･日曜日				0
4. その他				0
記入なし		1		1
計	9	5	0	14

○講座回数	男	女	記入なし	計
1. 多くしてほしい	3	2		5
2. よい	6	2		8
3. 少なくしてほしい				0
記入なし		1		1
計	9	5	0	14

○講座内容	男	女	記入なし	計
1. よい	8	4		12
2. 普通	1			1
3. よくなかった				0
記入なし		1		1
計	9	5	0	14

○会場	男	女	記入なし	計
1. よい	8	4		12
2. 普通				0
3. よくなかった				0
記入なし	1	1		2
計	9	5	0	14

Ⅲ. 今後、どういう講義を希望されますか。

□一般教養（文学･歴史･科学） ･･･ 7名　〇宇宙の話を聞きたい。　〇言葉の由来

□消費生活･経済 ･･･ 3名　〇世界平和と宗教(日本の宗教に学べ。宗教戦争なし。)

□医療･健康 ･･･ 6名　〇古武道（生活に生かす）甲野善紀　〇日常生活の健康

□子育て ･･･ 2名

□自然環境 ･･･ 5名

〇地球は、暖かくなっているといわれるが、暖かくなることはいけないことなのか？（地球温暖化について）

□その他 ･･･

Ⅳ. 意見･感想･要望など

〇日本語表記の歴史的なことを知れてよかったです。
〇メールを打つとき助かります。
〇大変興味深い日本語表記を再確認できた。常にインプットの大切さを痛感しますと同時に充実した内容でした。
〇大変勉強になりました。明日からの活動に生かしていきます。ありがとうございました。
〇普段何気なく使っている言葉に深い意味があり、楽しく学べました。

第5期　第3回一身田カルチャー・スクールアンケート結果

題　目　　人と動物のいい関係

日　時　　2008年 7月11日(金) 19時30分～21時00分

場　所　　高田青少年会館　2階・第1会議室

参加者　　19名　（一般参加 15名　一身田中教員 2名　三重大学 2名）

アンケート結果　n＝13　（男＝6　女＝6　記入なし＝1）

Ⅰ. 質問事項

性別	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	記入なし	計
男		1				1	3	1		6
女		2	1	1	1	1				6
記入なし						1				1
計		3	1	1	1	3	3	1		13

○ 「一身田カルチャー・スクール」を、どうやってお知りになりましたか？(複数回答あり)

	男	女	記入なし	計
□学校からの案内状	4	3		7
□地域のお知らせ	2	1	1	4
□ホームページ				
□その他		1	1	2
計	6	5	2	13

○ポスター

Ⅱ.「一身田カルチャースクール」について

○開始時間	男	女	記入なし	計
1. 早くしてほしい		1		1
2. よい	6	5	1	12
3. 遅くしてほしい				
記入なし				
計	6	6	1	13

○講義時間	男	女	記入なし	計
1. 長くしてほしい				
2. よい	6	6	1	13
3. 短くしてほしい				
記入なし				
計	6	6	1	13

○開始時間帯	男	女	記入なし	計
1. 平日夜間	6	6	1	13
2. 平日昼間				
3. 土･日曜日				
4. その他				
記入なし				
計	6	6	1	13

○講座回数	男	女	記入なし	計
1. 多くしてほしい	2			2
2. よい	4	6	1	11
3. 少なくしてほしい				
記入なし				
計	6	6	1	13

○講座内容	男	女	記入なし	計
1. よい	4	5	1	10
2. 普通	1	1		2
3. よくなかった	1			1
記入なし				
計	6	6	1	13

○会場	男	女	記入なし	計
1. よい	4	5	1	10
2. 普通	2	1		3
3. よくなかった				
記入なし				
計	6	6	1	13

（アンケートⅡ. に係わってのご意見等）
○白塚幼稚園児とう一ちゃんを見て、動物があまり好きでない私も考えを直しました。
○すごく参考になりました。ありがとうございました。
○動物を飼育することが人間にとって、いかに癒しになるかよくわかりました。白塚幼稚園の実践報告もよかったです。
○とても有益な楽しい内容ばかりなのに、出席者が少ないのはなぜでしょうか？　次回からは、数々の案内に講義の一部や内容紹介をして、皆さんをひきつける工夫をされてはいかがでしょうか？
○講師については、三重大学の先生主体に三重短期大学や高田短大の先生、時には地域の先生や企業（例：食品関係）も入れていただいたらいかがでしょうか？

Ⅲ. 今後、どういう講義を希望されますか。

□一般教養（文学･歴史･科学）･･･ 6名

〇音楽関係の話　〇裁判員制度について　〇津市の歴史

□消費生活･経済 ･･･ 3名　〇インフレの行方

□医療･健康 ･･･ 4名　〇食の安全楽しい食事など

□子育て ･･･ 5名　〇親と子の適した距離　〇情報の開示はどこまで必要か

□自然環境 ･･･ 3名

〇世界遺産への条件　〇環境問題の話　一人ひとりできることは、何かエコ運動について

□その他･･･

Ⅳ. 意見･感想･要望など

〇自分の飼っている動物たちを大切にしていきたいと改めて感じました。私は、卒業論文のテーマが「動物との付き合いが子どもたちにもたらすもの」です。また参考にさせていただきたいです。よろしくお願いします。
〇子どもが動物からあらゆる影響を受けたり、また、動物と関わることで自分自身が育っていくということが分かりました。どんどん子どもの身近なところで、動物と触れ合える場を作っていくべきだなと思いました。面白かったです。ありがとうございました。
〇最近は、小さいころに生き物を飼った経験の無い子供たちがたくさんいると思います。子どもは飼いたくてもお母さんたちが飼いたくない場合が多いかもしれません。ですから、世話の仕方がわからなかったり、関わり方がわからなかったりする子どもが多いと思います。中には、本物の生き物ではなくゲームペットを飼育していると錯覚していることもあるようです。でも、やはり、特に小さいころに生き物を飼って温かさや命を感じ取る思いやりの気持ちややさしさを育んだり、あるいはコミュニケーションをとったりという体験は、とても大切だと改めて感じました。

第6期　第1回一身田カルチャー・スクールアンケート結果

題　目　　日常生活への古武術的身体操法の応用

日　時　　2008年10月31日(金)　19時30分～21時00分

場　所　　高田青少年会館　2階・第1会議室

参加者　　22名　（一般参加　16名　　一身田中教員 3名　　三重大学 3名）

アンケート結果　　n＝13　（男＝8　　女＝5）

Ⅰ．質問事項

性別	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	記入なし	計
男					2	3	2	1		8
女			1	1	1	2				5
記入なし										
計			1	1	3	5	2	1		13

○「一身田カルチャー・スクール」を、どうやってお知りになりましたか？(複数回答あり)

	男	女	記入なし	計
□学校からの案内状	2	1		3
□地域のお知らせ	3	4		7
□ホームページ				
□その他	3			3
計	8	5		13

○ポスター　○公民館

Ⅱ．「一身田カルチャースクール」について

○開始時間	男	女	記入なし	計
1．早くしてほしい	1			1
2．よい	7	5		12
3．遅くして欲しい				
記入なし				
計	8	5		13

(ご意見欄)
○冬場は、19時開始

○講義時間	男	女	記入なし	計
1．長くしてほしい				
2．よい	8	4		12
3．短くして欲しい				
記入なし		1		
計	8	5		13

(ご意見欄)
○今日の場合は短く感じた。

○開始時間帯	男	女	記入なし	計
1．平日夜間	6	4		10
2．平日昼間		1		1
3．土･日曜日	1			1
4．その他				
記入なし	1			
計	8	5		13

（ご意見欄）
○現状通り

○講座回数	男	女	記入なし	計
1．多くしてほしい	1			1
2．よい	6	4		10
3．少なくしてほしい				
記入なし	1	1		2
計	8	5		13

○講座内容	男	女	記入なし	計
1．よい	6	4		10
2．普通	2			2
3．よくなかった				
記入なし		1		
計	8	5		13

（ご意見欄）
○よかったが、難しく感じたところもあった。

○会場	男	女	記入なし	計
1．よい	7	4		11
2．普通	1			1
3．よくなかった				
記入なし			1	1
計	8	4	1	13

（アンケートⅡ．に係わってのご意見等）
○身体の力を抜くという動作は難しかった。最後の体操では、肩の痛みが軽減したように思う。
○専門的だが、興味深い講義だった。腰痛時、膝痛時の重心移動はどうすればよいのか、脳に入れて行動を心がけたい。ビデオ体操大いに参考になりました。
○初めての参加なので特に意見という意見は無いですが、普段講義を聴くことなどできない先生方の話が聞けるのは大変うれしいです。

Ⅲ. 今後、どういう講義を希望されますか。

□一般教養（文学･歴史･科学）･･･ 7名　〇高田本山の歴史

□消費生活･経済 ･･･ 3名　〇食の問題　この頃食品の回収が多いですが･･･

□医療･健康 ･･･ 6名

〇健康についてのお話をお願いします。　〇よいお医者さんの選び方　〇生活に身近な話

□子育て･･･

□自然環境･･･

□その他･･･

Ⅳ. 意見･感想･要望など

〇自分が筋肉をほとんど使わずに動いていたように思います。はじめの方の図や数値は難しかったけれど、実技があってよかったです。

第6期　第2回一身田カルチャー・スクールアンケート結果

題　目　　あなたが裁判員に選ばれたら

日　時　　2008年11月14日(金)　19時30分～21時00分

場　所　　高田青少年会館　2階・第1会議室

参加者　　28名　（一般参加　23名　　一身田中教員 2名　　三重大学 3名）

アンケート結果　　n＝20　（男＝9　　女＝11）

Ⅰ．質問事項

性別	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	記入なし	計
男					2	2	3	2		9
女		2	1	1	1	6				11
記入なし										
計		2	1	1	3	8	3	2		20

○「一身田カルチャー・スクール」を、どうやってお知りになりましたか？(複数回答あり)

	男	女	記入なし	計
□学校からの案内状	4	4		8
□地域のお知らせ	4	6		10
□ホームページ				
□その他	1	1		2
計	9	11		20

Ⅱ．「一身田カルチャースクール」について

○開始時間	男	女	記入なし	計
1．早くしてほしい		1		1
2．よい	9	10		19
3．遅くしてほしい				
記入なし				
計	9	11		20

○講義時間	男	女	記入なし	計
1．長くしてほしい	1			1
2．よい	8	9		17
3．短くしてほしい		1		1
記入なし				
計	9	10		19

○開始時間帯	男	女	記入なし	計
1. 平日夜間	9	7		16
2. 平日昼間				
3. 土･日曜日	1			1
4. その他				
記入なし		3		3
計	10	10		20

○講座回数	男	女	記入なし	計
1. 多くしてほしい	2	2		4
2. よい	7	6		13
3. 少なくしてほしい				
記入なし		3		3
計	9	11		20

○講座内容	男	女	記入なし	計
1. よい	7	9		16
2. 普通	2			2
3. よくなかった				
記入なし		2		2
計	9	11		20

○会場	男	女	記入なし	計
1. よい	5	11		16
2. 普通	4			4
3. よくなかった				
記入なし				
計	9	11		20

（アンケートⅡ. に係わってのご意見等）
○少し不安だけではありますが、大切なことでもあり、少しずつ勉強したいと思います。
○裁判員裁判の制度がよくわかりましたし、エクササイズもあって、本当に考えさせられました。
○タイムリーな講座だった。裁判員に選ばれないことを祈るしかないが、選ばれたらこれも「ラッキー」と考えて勉強することにしようか・・・？

Ⅲ. 今後、どういう講義を希望されますか。

□一般教養（文学･歴史･科学） ･･･ 9名

〇源氏物語　〇最近歴史的に昔と違っている事柄などが多いので、そのあたりも･･･。

□消費生活･経済 ･･･ 2名　〇食の問題　この頃食品の回収が多いですが･･･

□医療･健康 ･･･ 7名　〇メタボ

□子育て ･･･

□自然環境 ･･･ 1名

□その他 ･･･

Ⅳ. 意見･感想･要望など

〇裁判員に選ばれたら、前向きに取組まなければならないと思いました。
〇どうしたら世界中に戦争がなくなるのか。宗教戦争、貧困等を戦をなくすことによって救われると思うが、キリスト教でも救えず、まだ、日本の宗教が優れていると思うが、生まれたときは神社。結婚時はキリスト教。最後は仏教とこだわらないのが最適である。これが世界に広まれば戦はなくならないだろうか。オバマ大統領にも期待しているが、こんな課題の講座があればと思います。
〇今日のような、いまのところのようなテーマでどしどしとやってほしい。また、なかなか身近では分からないマニアックなことも少しはおもしろいのではないかと思います。
〇申し訳ありませんが、前回急いでいてアンケートを出しませんでした。今日発送とテレビで言っていましたが、前回の裁判員制度のお話本当によく分かりました。津地方裁判所でもとのお話、大都市のことと思っていました。昨年、公民館の寿大学で検察庁の方の裁判員の話を聞きましたが、一つは80歳だから辞退できるという気持ちとわかりにくかったのですが、前回のお話を聞いて、もし選ばれたら出席しようと言う気持ちになりました。ありがとうございました。

第6期　第3回一身田カルチャー・スクールアンケート結果

題　目　　音楽でからだもこころもリフレッシュ

日　時　　2008年11月28日(金)　19時30分～21時00分

場　所　　高田青少年会館　2階・第1会議室

参加者　　22名　（一般参加　17名　　一身田中教員 2名　　三重大学 3名）

アンケート結果　　n＝14　（男＝6　　女＝7　　記入なし＝1）

Ⅰ．質問事項

性別	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	記入なし	計
男					1	1	2	2		6
女		1	1	1	2	1	1			7
記入なし					1					1
計		1	1	1	4	2	3	2		14

○「一身田カルチャー・スクール」を、どうやってお知りになりましたか？(複数回答あり)

	男	女	記入なし	計
□学校からの案内状	1	3		4
□地域のお知らせ	2	2		4
□ホームページ	1			1
□その他	2	2	1	5
計	6	7	1	14

○ポスター　○親から
○音楽療法ネットワークで

Ⅱ．「一身田カルチャースクール」について

○開始時間	男	女	記入なし	計
1．早くしてほしい				
2．よい	6	7	1	14
3．遅くしてほしい				
記入なし				
計	6	7	1	14

○講義時間	男	女	記入なし	計
1．長くしてほしい				
2．よい	5	6	1	12
3．短くしてほしい				
記入なし	1			1
計		1		1

○開始時間帯	男	女	記入なし	計
1. 平日夜間	6	4	1	11
2. 平日昼間		1		1
3. 土･日曜日		1		1
4. その他				
記入なし		1		1
計	6	7	1	14

○講座回数	男	女	記入なし	計
1. 多くしてほしい	2			2
2. よい	4	7	1	12
3. 少なくしてほしい				
記入なし				
計	6	7	1	14

○講座内容	男	女	記入なし	計
1. よい	5	6	1	12
2. 普通	1			1
3. よくなかった				
記入なし		1		1
計	6	7	1	14

○会場	男	女	記入なし	計
1. よい	6	6	1	13
2. 普通				
3. よくなかった				
記入なし		1		1
計	6	7	1	14

（アンケートⅡ. に係わってのご意見等）
○非常に楽しかった。昔を思い出しなつかしかった。相手の女性が20台で60年の違いで話をした。
○日ごろのつかれがとれたような気持ちよかったです。昔は、波の音が好きでよく聞いていたのを思い出しました。自然の音が好きです。
○楽しかった。とても楽しかった。
○大変楽しい講義で時間が早くたちました。
○リフレッシュできました。ありがとうございました。
○広い会場で満足です。

Ⅲ. 今後、どういう講義を希望されますか。

□一般教養（文学･歴史･科学） ･･･ 2名

□消費生活･経済 ･･･ 1名　〇食品の安全について

□医療･健康 ･･･ 3名

□子育て ･･･ 2名　〇子ども関係の講座などもよいと思う。

□自然環境 ･･･ 2名

□その他 ･･･ 〇護身術　〇再度音楽を

Ⅳ. 意見･感想･要望など

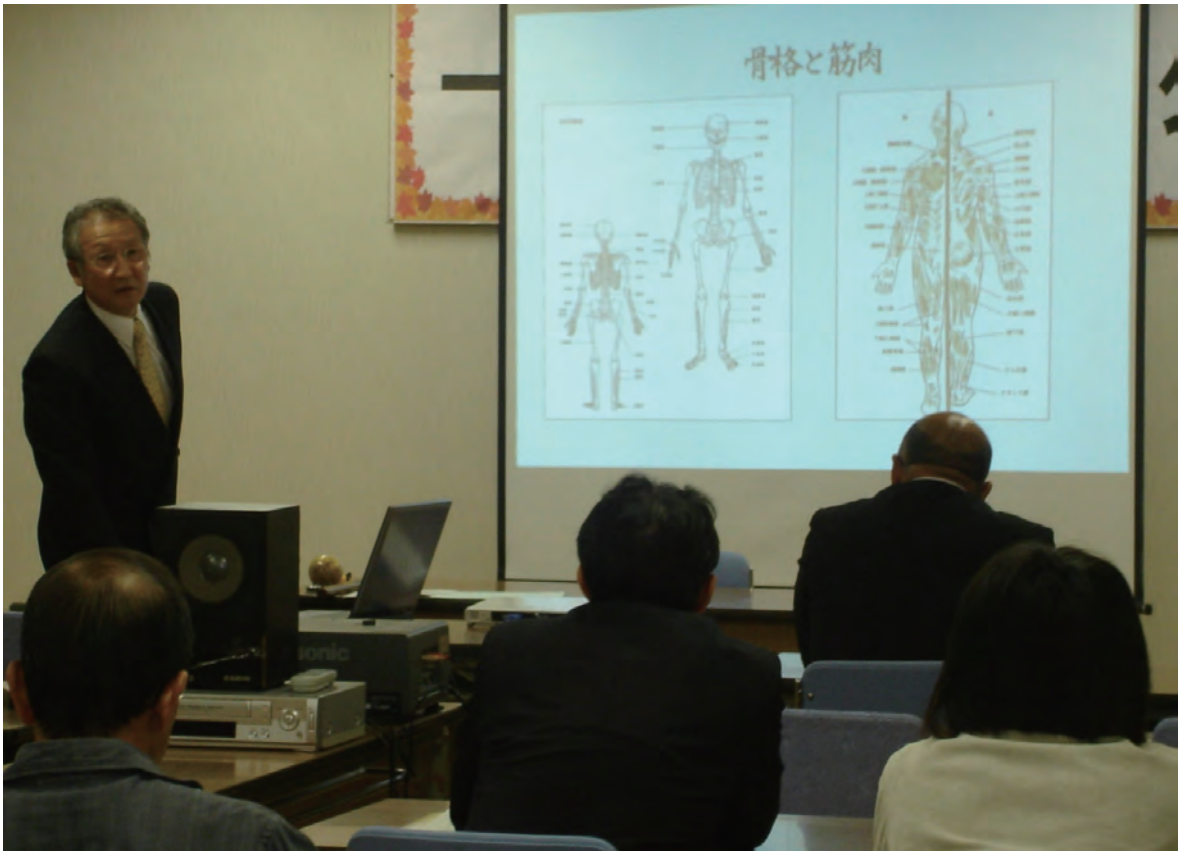
〇アットホームな講座で楽しむことができました。ピアニカの演奏も素敵でした。ありがとうございました。

第５期・第１回カルチャースクール

第５期・第２回カルチャースクール

第5期・第3回カルチャースクール

第6期・第1回カルチャースクール



第6期・第2回カルチャースクール

第6期・第3回カルチャースクール

［3］平成20年度の取組（2）

（1）理科教育講座における取り組み

本年度、理科教育講座で実施した取り組みは以下の通りである。

①一身田中学校および一身田小学校における理科と家庭科のクロスカリキュラム（解剖＆調理実習）の実施

②一身田中学校における教育学部理科教育コースによる理科実験指導の実施

③一身田中学校「選択理科」における「青少年のための科学の祭典」への出展

④一身田小学校における理科の出前授業

⑤一身田小学校における学校行事における科学イベントの支援

⑥栗真小学校における理科の出前授業と授業研究

⑦白塚幼稚園における出前授業

以下に各活動の目的と概要を述べる。

1）一身田中学校における理科と家庭科のクロスカリキュラム（解剖実習と調理実習）の実施

【目的】　正しい生命観を身につける上で、小中学校の理科では「解剖実習」を行うことは大きな意義がある。しかし、生命尊重を重要視されるようになってから解剖はほとんど行われなくなり、指導要領にも記載がない。私たちヒトの体を知る上で、共通した体のつくりを実物でみることは初等中等理科教育で必要なことである。解剖実習を行う上での問題の一つとして、学習後に廃棄してしまう点があげられる。食材となる魚介類を用いて、解剖後に「調理実習」を行うことで食べれば無駄はなく、「命をいただいている」という食育の基本を学ぶことにもなる。教育学部の理科教育講座と家政科教育講座では、理科と家庭科のクロスカリキュラムとして「解剖＆調理実習」の学習プログラムを 18 年度より検討し、地域で特色ある授業づくりを図っている。

【概要】　これまでの経緯を簡単に述べると、18 年度は、材料としてザリガニ、ニジマス、バカガイを使って、一身田中学校 2 年生 3 クラスを対象に試行した。その結果、生徒の反応はニジマスが最も良く、中学校教員からも内容について高い評価を得た。そこで 19 年度は、一身田中学校 2 年生 5 クラスすべてでニジマスを使った実習を行なった。解剖の授業は、最初の 3 クラスは後藤があたり、後の 2 クラスは中学校の中川教諭があたった。調理についてはすべて中学校の安野教諭が授業を行った。実際に中学校の理科と家政科の教員に実施をしてもらった。中川教諭は解剖実習の経験が少なかったためか、生徒の反応の良さに驚いたようであり、担当された 2 クラスの授業には熱意が感じられた。この授業は新聞でも報道され、一身田中学校における「特色ある授業」の 1 つとして位置づけられる方向に向かった。そこで本年度は、この授業がさらに定着するように、解剖については初回だけ後藤が行い、他のクラスは 2 年生理科担当の林教諭が行ない、大学生の補助だけでこの実習が実施できるような体制を作ることを目的とした。

実施は、昨年同様に 11 月に行った。この時期に行う理由は、2 年生は 2 学期はじめに動物の体

のしくみについて学習するが、その後で実物をみせて理解を深めたいという理科担当の中川教諭の提案による。また、生きたニジマスの維持管理には水温が 20 度以下に低下した時期でなければ困難であることもこの時期に行う大きな理由である。すでに基本的な授業プランは確立しており、調理室で解剖と調理を 1 時間ずつ行った。生徒は 6 班に分かれて進めるために、各班に 1 名の教員または学生が補助にあたるようにした。大学からは理科の後藤の他に家政科の磯部教員が関わり、教育学部の大学院生および学部生（理科と家政科 4 —5 名）が補助にあたった。活動は表の通りである。

実施日	時限	クラス	授業者	補助
11 月 4 日	2.3	2 年 2 組	後藤、安野	林、学生 5 名
11 月 5 日	3,4	2 年 4 組	林、安野	後藤、磯部、学生 4 名
11 月 7 日	1,2	2 年 3 組	林、安野	後藤、学生 5 名
11 月 10 日	1,2	2 年 1 組	林、安野	後藤、学生 5 名
11 月 12 日	3,4	2 年 5 組	林、安野	後藤、学生 5 名

この解剖＆調理実習の基本的なスタンスは、「魚介類の調理の前に、体の中をみてみよう」と調理が第一目的であり、その過程で体のつくりについて勉強し、命について考えることをねらいとしている。したがって、実習で用いるニジマスは身近な素材でかつ新鮮でおいしいものであることを生徒に示すことからはじめている。解剖実習のポイントとしては、生きている動物を解剖して心臓の動きを見ることで、生命を実感することと、体のつくりの基本を消化器系の観察を通じて学び、ヒトとの共通性を理解してもらう点にある。また、調理実習のポイントは簡単でおいしいことに絞っている。

昨年度作成したＰＰ加工を施した 4 ページの実習プリントの修正版を用意し、動物の体の構造の基本と、魚の体の内部構造はヒトのそれを単純化したものであることを解説した。その後、解剖の手順を演示してから 2 名で 1 尾のニジマスを解剖した。クラスにもよるが、ほとんどすべての生徒が解剖に関わり、熱心に観察していた。調理も丁寧に行い、残さずに食べていた。昨年と同様にアンケート調査を行ったところ、この授業に対する生徒の評価は高く、2 年生でこの実習をすることは生徒にとって定着したものになっているようだ。

この実習をこれまでと同様に進めるには学生の補助なくしては困難であり、今後も学生による授業支援は欠かせないだろう。これまで、この活動にかかわった学生はボランティアであったが、今後は授業の一環として位置付ける計画である。また、生きたニジマスの維持管理については大学内にある生物資源学部所有の水槽群を借用しているが、今後は教育学部所有の水槽の整備が必要である。

図1.　ニジマスの解剖＆調理実習の様子.

2)一身田中学校における教育学部理科教育コースによる理科実験指導の実施

【目的】　三重大学教育学部理科教育講座では、年間を通して、学生が一身田中学校の理科授業の観察・補助を行い、また学生による授業を行う試みを行っている。この試みを通じて、教育現場に基礎を持つ教師養成教育（school-based teacher training）のモデルを構築し、また地域の学校教育への貢献となることを目指している。

【概要】

1. 授業科目名　理科教育法（担当：荻原彰、平賀伸夫）
2. 受講者数及び学年

   理科教育コース　３年生 15 名、数学教育コース　４年生　３名、計 18 名
3. 活動時期、学生の担当時間数

   前期：５月上旬～７月上旬(全 30 日間、学生１人あたり４時間担当し、1 回の授業に３～４人の学生が参加した)

   後期：12 月上旬～１月下旬(全 20 日間、学生１人あたり３時間担当し、1 回の授業に３～４人の学生が参加した)

4. 活動の対象となったクラス・講座

一身田中学校　1年生 理科（受講生 40名×5クラス）、3年生 選択理科（受講生 10名）

5. 活動の内容と成果

前期に扱った単元は、1年生が「植物のくらしとなかま」、3年生が「音」であり、通常授業では、生徒が学習課題の解決に困っているときにアドバイスを与えるなど、ティーチング・アシスタントとしての役割を担当した。実験指導では、顕微鏡操作、ミクロトーム操作、光合成についての実験などの個別指導を行い、全体への指導を行っている理科教師を補佐した。

後期の活動においては、教育実習を経験しており、その経験を生かして、全体指導を行った。扱った単元は「身のまわりの物質」である。

学生が担当したのは、赤ワインの蒸留実験である。ワインという比較的身近な物質から簡単な操作でエタノールを分離する興味深い実験である。

連携の効果を検証するため、活動前、前期終了後、教育実習後、後期終了後のそれぞれの活動後に、活動を振り返るアンケートを行って学生の意識変化を追跡した。アンケートは「理科の教師に必要な力」を記述式で回答するという形式で行った。

アンケートを分析した結果、次のような傾向が見られることがわかった。

- 教科についての知識の重要性は活動前から意識されている。しかし「教える内容以上の事をおさえておくこと　知識」（活動前）から「教科書の基本的内容をおさえた上で、その内容をさらに専門的に掘り下げた知識をもっておくこと」（教育実習後）へと記述が変化した事例、「その教材に関する知識　教材研究をしっかり行い、その単元について、どう授業を進めていくか、どう教えれば一番いいのか考える必要があるため」（活動前）から「その教材に関する知識　その単元についての授業構成、順番、主発問を考える際に必要」（教育実習後）へと記述が変化した事例に見られるように、より授業に即した形で知識の必要性を捉え直す傾向が見られる。
- 「教室全体を見まわして、理解に苦しんでいる子や、集中できていない子を見抜いて適切な対応をする」（前期終了後）や「理科に対してどのような態度で授業に臨んでいるかを見極める力熱心に授業に参加する姿や気が授業から離れていく姿など」（前期終了後）のように個々の生徒の具体的な状況を見極め、それに応じた対応を行うことの必要性は、前期終了後に意識されることが多い。また「板書　女の子だと工夫して書いている子もいたけど、男の子なんかはそのままでぐちゃっと書く子が多いので、上手にまとめて板書を書く力が必要」（前期終了後）「道具の扱い方の説明は子どもが興味を持ちにくいので話を聞かない子がいる。みんなが教師の説明を退屈せずに聞けるようにするのが良いと考える」のように具体的な子どもの姿から対処のしかたを考える意見が出現する。このような記述は実習終了後にはさらに増加し、その後はあまり変わらない。
- 実習終了後は「クラス全体の雰囲気を知る　クラスの様子を知ることで、グループワークにしたり、一人で考えたり（発問にもよるが）を考える必要がある」、「机間巡視をうまく使う」のように授業者の立場に立っての具体的な手だての記述が目立って増える。また予備実験につい

ての前期終了後の記述「実験を何度も行い、その実験内容・実験器具・成功度などを熟知しておくこと」が実習終了後は「予備実験を何回か繰り返して生徒（児童）の立場となって考えて、わかりにくいところなどをピックアップして改善し、また内容を熟知し、機具などの調整をしっかり行っておくこと」に見られるように、より具体的な記述に変化している。

・ あまり数は多くないが「コミュニケーション能力　生徒一人一人の考えや意見を知るために子ども達が意見を言いやすい環境を作るために必要。また、他の教師とのコミュニケーションも良い授業をするために必要」（後期終了後）、「まわりの先生と授業について相談や話し合いをして、よりよい授業を組みたてる」（後期終了後）といった他の教師との協力関係の重要性に気づく例が見られた。

以上を概括すると、前期の観察を主とした活動の中で、個々の生徒の具体的な姿を見る中から、個に応じた対応の必要性について啓発され、実習を通じて授業者としての立場に立った具体的な手だての必要性を強く意識するようになり、後期の活動ではアンケートで見る限りあまり大きな変化は見られないという結果となった。ただしこれは後期の活動にあまり意味がないと解釈されるべきではなく、むしろ４週間の教育実習がいかに大きな意味を持つかということのあらわれと解されるべきであろう。後期の活動の意味については学生へのインタビューなどを行い、さらに研究したいと考えている。

図2．理科実験指導の様子とフォーラムでのポスター発表．

3）一身田中学校「選択理科」における「青少年のための科学の祭典」への出展

【目的】　児童・生徒を対象とした様々な科学啓発活動が全国的に行われている。その中でも「青少年のための科学の祭典」は最も規模が大きく、三重県でも毎年４カ所で開催されている。参加者の多くは小学生であるが、毎年約 5,000 名の参加者がある。小学生の時に科学の祭典の楽しさを体験したことのある中学生は、科学の祭典で小学生を指導する立場となることで、一層理科学習への取り組みが高まっている。三重大学では毎年「青少年のための科学の祭典」三重大学大会を開催しており、２日間で約 3,000 名が参加する大きな大会となっている。そこで、一身田中学校の２年生選択理科の受講生が実験ブースを出展し、理科を楽しく教える立場となる体験をしてもらうことを目的としている。

【概要】　本年度の「青少年のための科学の祭典」三重大学大会は１１月 29、30 日に開催された。２年生選択理科の受講生による出展は、児童に人気の高い「スライムづくり」を大学教員から担当の中川教諭と林教諭に提案した。実験解説書に掲載したものを次ページに掲載する。中川教諭と林教諭は選択理科の授業の中で２回練習を行った。開催日には２日間で４８名の受講生が指導に当たり、２日間で約 800 名の児童がこのブースを訪れた。また、生徒らは指導に当たった他に、出展ブースをみることで多くの科学体験をしていた。

図3. 科学の祭典におけるブース出展の様子.

4)ー身田小学校における理科の出前授業

４－１　「モーターを作ろう！」　授業者：牧原義一

2008 年 6 月 26 日（木）13：30～15：30（120 分）

教室：一身田小学校 理科教室，生徒 38 名（4 年 1 組），保護者 約 30 名

授業補助：斎藤隆彦先生（4 年 1 組担任）

【目的】

４年生理科の単元「2. 電気のはたらき」の内容と関連して，電池と磁石を使った簡単なモーターを作製する実験を行いました。保護者と協力しながらモーターを作る作業を行う中で，工作の難しさや楽しさを体験するとともに，電気と磁石の両方の働きでモーターが回転することを理解し，電気や磁石に関する興味を深めさせることを目的としました。

【概要】

(1) 簡単な演示実験を行って，磁石の近くを流れる電流が力を受けることを示しました。

(2) 直流モーター作りに必要な電池，磁石，コイル，クリップ等を生徒に配り，ステップごとにパワーポイントを用いて作製方法を説明しながら，順次モーター作りを進めてゆきました。

当日は，学校の PTA 行事ということもあり，子どもたちと保護者が一緒になって，セロテープやカッターを使いながら，コイルや電極を作製して直流モーターを完成させました。

４年生では技術的に難しい箇所もありましたが，保護者が協力しながら工作を行って，最終的にはほとんどのモーターがなんとか回転するようになりました。非常にうまく回転するモーターを作った生徒の得意げな表情が印象的でした。

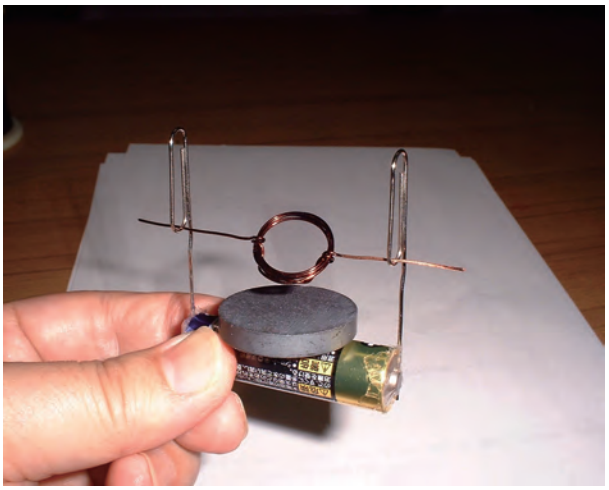


図4. 手作りモーターと授業の様子.

４－２　「砂糖を科学する」　授業者：荻原、平賀、後藤、学生（3 年 5 名、4 年 3 名）

5 年生クラス活動

日時：2008 年 12 月３日（水）13：00～14：30

教室：一身田小学校 理科教室および家庭科室（5 年１組、4 組）

補助：永合先生（5 年 1 組担任）、寺田先生（5 年 4 組担任）

参観：保護者 各クラス約 25 名

【目的】

５年生のクラス活動として親子で楽しむ理科実験実施の依頼を受けた。5 年生理科の単元に関係して、親子で楽しめる実験を企画し、担任教員と実施手順について事前打ち合わせを行い、学生が補助あるいは授業をする計画を立てた。理科の学習を兼ねながら親子で楽しめる連携活動になるかどうか検討した。

【概要】

実験としては、次の３つの内容を考えた。

① デンプンは糖からできている：消化薬でデンプンから水飴をつくる

② 糖の状態変化：綿菓子づくりで、溶けた糖が冷えれば固まることを

③ 糖が沸騰する温度：カルメ焼きづくりで糖を溶かして温度を測定するとともに、重層の働きを知る）

活動時間は 90 分であり、2 クラスで同時に実施することから、実験①②と実験③に分けて各クラスが行うこととした。実験①②は理科室で、実験③は家庭科室で実施することとし、各 40 分程度で交代することとした。

砂糖の甘い匂いが立ちこめる中で、カルメ焼きづくりや綿菓子を作ったが、時間が短いこともあり、全員が作業に関わることはできなかった。消化薬で糊状のデンプンが水のように変化する様子には保護者からも驚きの声が聞こえた。当初の計画段階では１つの実験で 1 時間程度とれる予定であったため今回の実験を考えたが、やや無理があったようだ。保護者の中には積極的に参加してくれる方が多かったので、もう少し短時間でできる実験に修正する必要があるだろう。

5）一身田小学校における学校行事における科学イベントの支援

【目的】　2009 年 3 月 14 日（土）に一身田小学校の学校行事である「一小祭」の中で、「おもしろ理科実験」の企画・実施の依頼を受けた。この学校行事は保護者をはじめ地域の方が参観する盛大なイベントであり、児童による発表、バザー、模擬店、児童作品展、PTA 作品展、舞台発表などがあり、今回はこれに加えて「おもしろ理科実験」を加えたいということであった。今回は学校行事への支援が主な目的で、学生にとっては児童に科学体験を指導する機会と機会とした。

【概要】　出展内容としては、私たちが毎年三重大学を会場として実施している「青少年のための科学の祭典」における出展ブースの中で、本年度人気の高かったものを以下の４つを行った。

① 磁石を使った面白い実験（指導：牧原、学生補助３名）
② スーパーボールをつくろう（指導：荻原、学生補助２名）
③ 香りのリーフ（指導：後藤、学生５名）
④ 飴で綿菓子（指導：後藤、学生５名）

この学校行事では複数のイベントが同時進行しており、理科実験ブースにはクラスごとに来場して好きな実験を体験した。磁石を使った実験では驚きに目を輝かせている児童と、それを嬉しそうに見つめる保護者の姿が印象的であった。実験ブースの補助担当となった保護者の方は、綿菓子づくりに協力をしてくださった。綿菓子器を４台用意したが、順番を待つ児童が多くなると、１つの綿菓子器で同時に４名の児童が体験できるように工夫してくれた。この方法は今後の実施の上で非常に参考になるものであった。

今回の活動は一方的な支援だけであったため、できれば事前打ち合わせによって活動を決めるか、学生の授業の一環として位置付けるものにする方向で、今後は改善していきたい。

図5. おもしろ理科実験の様子.

6）栗真小学校における理科の出前授業と授業研究

【目的】　アメリカザリガニの中には突然変異で体色が白いアルビノ個体がいる。これは珍しいだけでなく、解剖しなくても体内の構造がみえるなど、教材生物として優れた特徴をもつ。後藤はアルビノザリガニの教材化を進めるために、栗真小学校の西村教諭と共同で、2005 年より同校でアルビノ個体の飼育を開始し、繁殖させることで児童への生き物への関心を高めてきた。アルビノ個体と正常個体を交配で生じる子孫の体色はどのようになるのかは児童らの素朴な疑問である。小学校での学習単元にはない遺伝の内容であるが、道徳の時間の中で親から子に伝わる仕組みを学習する授業を考え、実践を行った。両親だけでなく、祖父母の性質が伝わることを、児童が実物を通して理解してくれることをねらいとしている。小学校で実物を使った遺伝の実験が行われることは少なく、ザリガニを用いた例は世界ではじめてであろう。

【概要】

５月２８日に栗真小学校４年生のクラスで、後藤が出前授業を行った。内容は、児童らのアルビノザリガニへの関心度、正常個体と違う点、親子はなぜ似ているか、動物の増え方、正常個体とアルビノ個体の子どもは何色になるか予想するというものとした。そして、児童が教室で飼育しているアルビノのオス個体と、野外から採集した正常なメス個体を一緒にしてみることで、実際に子孫の色を確かめようとした。６月９日に産卵し、６月２７日には孵化個体を得てすべて正常な体色であることを確認した。しかし生存数が少なく、夏休み明けにはオス１個体だけになってしまった。そこで、これとアルビノのメス個体を２月初旬に交配させたところ、２月 20 に産卵した。現在はまだ孵化していない段階であるが、理論的には正常個体とアルビノ個体が１：１の割合で出現するするため、最初に正常とアルビノを交配させた時と今回では何が違うかを児童に考えてもらい、児童らの遺伝に対する関心を高めるようにしたい。

7）白塚幼稚園における出前授業

【目的】　幼児期における動物との触れ合いは、生き物に対する愛情を育むだけでなく、動物を正しく理解するために欠かせない。学校園では小動物を飼育してこれらの目的のために活用することが重要であるが、その際に飼育する動物の選定や飼育環境が重要な意味をもつ。白塚幼稚園の浅田園長がウサギの飼育に強い関心をもっていたため、近年、学校飼育動物として利用価値が高いウサギの品種を後藤が提案し、飼育を開始した。そこで、児童が正しくウサギと付き合う上での基礎を指導するものとした。

【概要】

４月２３日に、生後２か月のロップイヤーという品種のウサギの飼育を開始した。園に慣れたころ、園児らがウサギとの触れ合いをする前に、ウサギについて正しく知るための出前授業をおこなった。まず、群馬県獣医師会で作成された紙芝居を用いて、ウサギの性質について話した。また、ウサギの心拍数について心音計を使って調べるとともに、園児らの心拍数と比較した。園児は全員が自分の心音を聞くことで、自分たちの体への関心も大きかったようだ。園児でのウサギの様子については白塚幼稚園での HP でみることができる。なお、後藤が大学で行っている学校飼育動物に関する授業の中で、白塚幼稚園のウサギを借りて活用している。

図6. ウサギとの接し方の指導の様子.

(2)保健体育講座における取組

表 1 は，3 年間の保健体育講座における取組概要を整理したものである。このうち，本稿では平成 20 年度の取組として四つを報告する。

第一は，一身田小学校における親子活動（体ほぐし）の報告（取組番号 1）で，学生が作成した実践記録とフォトポートフォリオ，新聞記事を参照されたい。第二は，栗真小学校における親子活動（体ほぐし）の報告（取組番号 2）で，学生が作成した実践記録とフォトポートフォリオ，新聞記事を参照されたい。第三は，一身田小学校における体育科授業研究及び事後検討会における報告（取組番号 6）で，授業実施教員の感想を参照されたい。第四は，保健体育科授業参与観察及び指導補助の報告（取組番号 9）で，実践報告（保健体育科授業の教材として導入したラート運動）と学生の卒業論文抄録（中学校体育のカリキュラム改善に関する一考察）を参照されたい。

なお，3 年間の取組を通して浮き彫りにされてきた点は，「地域連携」や「学校教育現場（大学）との連携」のことばの意味するところである。それは，単に協働で何かを行ったり，交流したりすること，ましてや，安易に学生を学校教育現場に参加させることではなく，養成教育と現職教育（教師教育）を連動させていくということである。つまり，これまで別々のものとして，別々に取り組まれてきた「教師の質（教職の専門性）保証」という観点に，大学も学校教育現場も教育委員会も照準を合わせることである。この観点が明確にされなかったり，ぶれたりすることが，本事業に対する負担感や徒労感の増大に結びつくものと考えられる。この点は今後の新展開の課題としたい。

表１ 3 年間の保健体育講座における取組概要

取組番号	活動名称	担当教員	連携校	連携校の担当教員	実施年度	活動内容
1	親子活動（体ほぐし）	岡野 昇	一身田小学校	5年生担任	20	PTA親子活動の一環として、親子でスキンシップをとりながら、心と体をときほぐす「体ほぐしの運動」を学生が企画・実践した。平成20年度に5年生の2クラスで実施した。
2	親子活動（体ほぐし）	岡野 昇 山本俊彦	栗真小学校	1・2・3年生担任	19,20	PTA親子活動の一環として、親子でスキンシップをとりながら、心と体をときほぐす「体ほぐしの運動」を学生が企画・実践した。平成19年度に3年生のクラスで、平成20年度に1・2年生のクラスで実施した。
3	親子活動（体ほぐし）	山本俊彦	白塚小学校	2年生担任	19,20	PTA親子活動の一環として、親子でスキンシップをとりながら、心と体をときほぐす「体ほぐしの運動」を学生がアシスタントした。平成19年度と平成20年度に2年生のクラスで実施した。
4	体ほぐし運動・跳び箱運動の実技講習会	岡野 昇	一身田小学校	全教員	20	教職員研修の一環として、「体ほぐし運動」と「跳び箱運動」の実技研修会を実施した。
5	キャンプファイアー時のゲーム活動検討会	岡野 昇	一身田小学校	5年生担任	19	学年行事として開催されるキャンプ活動におけるキャンプファイアー時のゲーム活動について検討会を実施した。
6	体育科授業研究及び事後検討会	岡野 昇	一身田小学校	1・3年生担任	19,20	平成19年度には、3年生のクラスを対象に3本の体育科授業研究及び事後検討会を開催した。1本目はマット遊び「Gボールのようにころがる」、2本目はボールゲーム「コーン倒しゲーム」、3本目はマット遊び「Gボールと一緒に転がる」の授業を実施した。1本目と2本目は大学教員が授業者となり、学生がアシスタントで参加し、3本目は学生が授業者となり、大学教員がアシスタントとして参加した。 平成20年度には、1年生のクラスを対象に1本と3年生をクラス対象に2本の体育授業研究及び事後検討会を開催しました。1年生のクラスでは表現遊び「動物ごっこ」、3年生の授業ではマットの山を使った運動と障害物ドッジボールの授業を行いました。いずれも担任が授業者で、学生は授業観察及び事後検討会に参加しました。
7	夏休み中の学生による水泳指導	岡野 昇	一身田小学校	全教員	19	夏休み中のプール開放の際、学生（1名）による子どもたちへの水泳指導が1週間にわたって実施した。
8	保健体育科授業参与観察及び指導補助	岡野 昇	一身田中学校	保健体育科教員	18	2年生女子を対象とした「ダンス（現代的なリズムのダンス）」の単元において、授業参与観察及び指導補助として参加した。第1回目（1月11日）の学習指導案検討会は、教育学部保健体育科教員（1名）と一身田中学校保健体育科教員（5名）で指導案検討を行い、第2回目（1月26日）の学習指導案検討会は、教育学部保健体育科教員教員（1名）と一身田中学校保健体育科教員（1名）、教育学部保健体育科の学生（5名）で指導案の検討をした。その後、3名の学生（学部4年生1名、学部4年生1名、学部3年生1名）はのべ23回にわたり指導補助として授業に参加した。また、2名の学生（学部3年生2名）と大学教員（1名）は参与観察という形で授業に参加した。
9	保健体育科授業参与観察及び指導補助	後藤洋子 岡野 昇	一身田中学校	保健体育科教員	20	2年生と3年生を対象とした「ラート運動」の単元において、授業参与観察及び指導補助として参加した。学生（1名）は10クラス、60時間の授業に参加し、授業参与観察記録、質問紙調査等に基づきながら分析・考察を行い、卒業論文（中学校体育のカリキュラム改善に関する一考察）としてまとめた。
10	ラート実技講習会	後藤洋子 岡野 昇	一身田中学校	保健体育科教員	19,20	平成19年度に2回、平成20年度には1回のラート実技講習会を開催した。いずれも一身田中学校の保健体育科教員を対象としたもので、学生は第2回目と第3回目の講習会に参加した。 第1回目の講師は後藤洋子教員（教育学部保健体育科）で、ラートの概要説明及び基礎実技、「ラート検定級ビデオ（日本ラート協会編）」の視聴した。第2回目は講師として西井英理子氏（日本ラート協会）をお招きし、ラート検定5級の技を中心に実習した。第3回目は講師として深瀬友香子氏（日本ラート協会）をお招きし、ラート運動の授業づくりを中心とした実習を行った。

（文責：岡野 昇）

他者とかかわるということ

― 一身田小学校における親子活動の実践から ―

内田 めぐみ　三重大学教育学部保健体育コース３年
浦 知世　三重大学教育学部学校教育コース３年
飯田 健二　三重大学教育学部英語教育コース２年

一般的に“親子関係”は，人と人との関係の中でもつながりが強く，よりよく人が成長していくために必要な関係である。その関係から人は多くのことを学びながら，成長していく。しかし，その関係の強さゆえに，「家庭内」の枠組みから「社会」という広い枠組みの中に飛び込めなかったり，社会に出ても自分の力であらゆることに適応しながら生きていくことが困難になっていたりする側面を持っているように考える。

そこで私たちは 2008 年 6 月 4 日に一身田小学校の 5 年 2 組の親子を対象に，親子活動を行った。そして親子活動のねらいを「親子の殻から出ることを体験しその良さに気づいてもらう」ということに設定した。そのねらいを達成するために，すべての活動をダンスで行い，親と子が離れながらもそれぞれが多くの人と出会い，かかわることのできる活動を考え実行した。そのため親子別々の活動の時間が長く，元々親子に外の世界と親子の世界とを隔てる殻があったのかどうかという点はきちんと確認できなかった。

実際の活動では，参加者が私たちの作った簡単な動きを自分自身の動きにし，リズムに合わせて体を動かすことにより緊張をほぐし，多くの他者と出会い，かかわりを持つことができた。しかし，この親子活動の中で参加者が自分から手を伸ばそうとしない姿や，手と手を合わせて腕を組みまわってはいるが，お互いに顔を見合わせ，目と目を合わせていない姿が見られた。このように自分たちの活動の意図と実際の活動のズレが見られた。そこから，私たちは「多くの人と出会いふれあったが，それは形だけの身体のみのかかわりでしかなく，新たな関係を築くきっかけとなるようなふれあいではなかったのではないか。」という考えに到った。またそもそも“かかわる”とはどのような意味を持っているのか，“他者とかかわること”はなぜ必要なのか，という親子活動の目的をも揺るがす疑問が生まれた。この疑問を私たち自身が抱え，明らかにしていくことが今後の課題である。

キーワード：親子，社会，かかわり，ふれあい

1. はじめに

今回の津市立一身田小学校(以下，一身田小)での親子活動は「総合演習」という三重大学（以下，三重大）の授業の一環である。授業の目的は少子・高齢化を迎えた日本社会のなかで，関係発達という考え方から子育ての根源を問い直し，現在の学校・家庭の根底に横たわる問題を発見することである。そして実践で浮かび上がった問題や課題について討議していくことで，自分自身の問題の見つめ方や問題解決の視点を確かなものにしていくことである。

私たちは親子活動のねらいを，「親子の殻から出ることを体験しその良さに気づいてもらうこと」とし，活動に臨んだ。そこで私たちは，そのねらいを達成するために，すべての活動をダンスで行い，ダンスを通じて多くの他者とふれあう機会を設定することにした。

2. 親子活動の実施概要

親子活動の実施概要は，以下の通りである。

① 実施日程:2008 年 6 月 4 日

② 実施場所:一身田小学校(体育館)

③ 参加者

・一身田小学校 5 年 2 組:

児童 35 名，保護者 26名，教職員4名，

・三重大学:教育学部生 14 名，院生 2 名

3. 事前の打ち合わせ

5 月 13 日に一身田小学校の教員 3 名に三重大へ来ていただき，私たちが各々で持ち寄った 3 つの企画のプレゼンテーションを行った。それに対する質問やご意見をいただき，同時に 5 年 2 組の児童の様子や親子関係の現状を伺った。

それを踏まえたうえで，3 つの企画のうちからダンスを基盤とした活動を選んだ。私たちは親子活動の本番に至るまでに，企画を練り，活動でのダンスの動きや方法を試行錯誤しながら考えた。バスケットボール部とよさこいサークルで，活動の中で行うダンスのリハーサルをさせていただいた。そこで浮かび上がった私たちの声かけの方法やダンスを行う隊形についての問題点を改善し，活動をつくりあげた。5 月 27 日の最終確認時に新たな活動案を提出した。6 月 3 日の活動前日には参加学生全員とダンスの動きを共有し，本番を迎えた。

4. 親子活動の活動概要

当日の親子活動について報告する(表 1)。また活動(下線部)についての具体的取り組みについては以下の通りである。

表 1 当日の親子活動内容

	6 月 4 日 (水)
13:30	親子活動開始
13:40	ウォームアップ
13:45	チュンチュン列車
13:55	花まつり
14:15	人間イス
14:30	親子活動終了

4.1 ウォームアップ

体を動かしても人に当たらない程度に広がってもらい，音楽をかけて手拍子からはじめ，だんだんと体を大きく動かし，エアロビの動きと後の活動で使う動きを入れたウォームアップを行った。主な動きは図1の通りである。参加者全員に動きが伝わっていなかったので，学生の声が届くようにマイクを使ったり，ステージに上がって動きを見やすくしたり，親子の間を動きまわり見本を見せた。

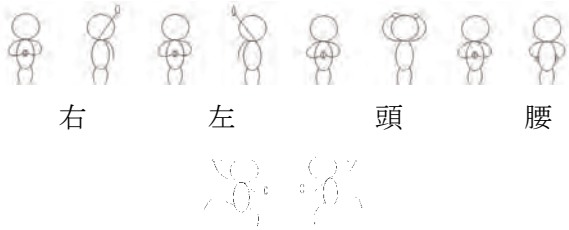


図 1 定型フリ･おっとっと

4.2 チュンチュン列車

ウォームアップの最後の「右・左・頭・腰」(以下定型フリ)を使って，ジャンケン列車をした。ペアで向かい合っている状態で，曲を「チュンチュンワールド(NHK，みんなのうた，1994)」に変えて，定型の動き「右・左・頭・腰」をした後，じゃんけんをするというものである。まず学生が舞台の上で見本を見せた。それに続いて，親子のペアで実際に踊ってじゃんけんを行い，ジャンケン列車のように繋がる練習を行い，続いて本番を行った。最後には，1 つの大きな円になった。

4.3 花まつり (2 回)

チュンチュン列車で円になった状態のまま，親に円の内側に入り，子が外の円，親が内の円というように 2 重円になった。定型の動きとウォームアップで使った「おっとっと・平泳ぎ」の動きを組み合わせ，「花まつり(石井竜也，1998)」の音楽に合わせ，2 重円で回りながらいろいろな人とペアになって踊った。1 回目は，学生の説明がわかりにくく，動き方がわからなくて動くことができず，「踊っている」のではなく「踊らされている」ようだったので，くり返し 2 度踊った。その後，2 重円だった形を1重円にして，みんなで手をつないだ。そのまま音楽のりながら，前後左右に動く

円形コミュニケーションを行った。

4.4　人間イス

計画外ではあったが，せっかくのほぐれた状態を活かすため，「人間イス」を行った。1重円のまま体育館の中央に集まり，全員が左隣の人の肩を持ち，小さな円を作った。そこから，円の内側の足のつま先を前の人のかかとに付けて，きれいな円になるように微調整を行った。足が離れているところがなくなり，完全な円になったところで，全員でタイミングをあわせ後ろの人の膝の上に座った。1回目は足がつながっていない所から崩れた。そしてもう1度円を作り直して2回目で成功した。

人間イス

5. 振り返り

今回の親子活動で私たちが設定したねらいは「親子の殻から出ることを体験しその良さに気づいてもらうこと」であった。そのため，活動のはじめのウォームアップ以外は親子が別々に活動し，あらゆるところでダンスを通して他者とかかわる機会を設けた。

企画から運営までのすべてを自分たちの手で行うということは，今回が初めての経験であり，準備や本番の活動時の進行に不十分な点や，私たちが予想していた姿とのズレに戸惑い，参加者を不安にさせてしまう部分もあった。

はじめに参加者が体育館に入って来た時，子どもたちはこれから行われる活動に期待しているようだったが，親は普段の生活とは大きく異なる環境に身を投じることに非常に抵抗を感じているようで，緊張している様子だった。実際に，ウォームアップの時には，三組の親子が体育館の壁際に立って，活動に入りこめていない姿も見られた。

活動をはじめるにあたり，親子でペアになるように指示をしたが，ほとんどの親子がすぐにペアになっていた。中には，男子児童が親子とペアになることを嫌がり友達と遊ぶ姿も見られたが，それは思春期であることを考えると自然なことなのかもしれない。また，いざペア活動がはじまると親子で楽しそうに活動しており，私たちが現状を聞いて予想していたように親子関係は円滑なもので，親子の距離は近いようだった。

学生による簡単な自己紹介の後，早速ウォームアップを行った。はじめの方は，集団で活動することへの戸惑いや緊張，そして私たちの動きの伝えかたが悪かったため，動きは小さく「動かされている」ようだった。しかし，学生の声が届くようにマイクを使ったり，ステージに上がって動きを見やすくしたり，親子の間を動きまわり見本を見せ，反復して同じ動きをしたことによって，次第に動きが大きくなり笑顔も見られるようになった。活動の随所で使われる他者とかかわることを目的とした「右・左・頭・腰」という動きでは，ペアである親子が失敗しながらも楽しそうに触れ合う姿が見られた。

チュンチュン列車の活動では，定型フリを使ってジャンケン列車を行った。練習の段階では親子で向き合って，楽しそうに手を合わせて踊っている様子が多く見られた。親子で行う活動だったため，ほとんどの親子がリラックスした状態で体を動かしていた。本番になってからは，ジャンケンをする相手を見つけることに戸惑っている姿も見られたが，慣れていくにつれてリズムにのって動いていた。またつながってからもリズムに合わせて後ろで跳ねている子や，学生の動きをまねて前の人の肩で定型フリの動きをしている子どもも見られた。子どもに比べると，親はそこまで乗り切れていない人もいたが，自分なりに楽しんでくれているようだった。この活動が最も参加者

が主体的に活動できていたようだった。

花まつりの活動では，動きが複雑になり動きか分かりにくかったこと，さらに個人と個人が 1 対 1 で触れ合うものであったことから，チュンチュン列車の活動にあったような主体的な動きは減ってしまったようだった。動きが分かると次第に動きが参加者自身のものになっていたが，中には腕を組もうとしない人や，相手を見つけられない人もいた。反対に，自分たちでペアを見つけようとしている姿も見られた。

人間イスの活動では参加者は「人間イス」というものがどのようなものか知らなかったので少し戸惑っていたが，活動の当初のような抵抗や硬さはなかった。みんなで人間イスをする前に，学生が見本を見せてみると歓声があがり，「不安もあるがみんなで挑戦しよう」というような雰囲気もあり，積極的に円を作っていた。人と人とがかなり密着する活動であったが，特に抵抗もなく，自然に触れ合えていた。人間イスが完成するまでに失敗もあったが，うまくできたときには大きな歓声があがり，一体感が生まれていた。

私たちの計画した通り，普段は接触のない人とのふれあいが必ずあり，最初は緊張のためか小さくなっていた動きも活動が進むにつれて徐々に大きくなっていった。実際にチュンチュン列車や花まつりの曲に合わせて 2 重円で踊る活動では，相手を探すのに戸惑いながらも楽しそうに体を動かす姿が見られた。

しかし，ふれあっている姿をよくみてみると，手と手を合わせて腕を組みまわってはいるが，お互いに顔を見合わせ，目と目を合わせるということが少なかった。指示が聞こえなかったり，見本が良く見えなかったりするときに何をしていいかわからないので周囲を見回すことや，次に踊る相手が目の前にいないので必死で相手を探すことはあるが，それ以外では目を合わさない，他者を見ようとはしていないようだった。これは大人にも子どもにも言えることだった。

6. おわりに

私たちは「親子の殻から出ることのよさを体験してもらうこと」をねらいとし，多くの他者とのかかわる活動を設定した。親子別々の活動の時間が長く，元々親子に外の世界と親子の世界とを隔てる殻があったのかどうかという点は確認できなかった。活動は，基本となる動きを中心に繋げていこうとしたが，実際には「定型の動き」を作ることで，その型にはめ込もうとしてしまっていたのかもしれない。しかし，学生の即興でダンスをしてしまうと，参加者の目が学生に向けられてしまい，参加者同士のかかわり合いが生まれないのではないかと考え，今回のようにした。

実際の活動では，参加者が私たちの作った簡単な動きを自分自身の動きにし，リズムに合わせて体を動かすことにより緊張をほぐし，多くの他者と出会い，かかわりを持つことができた。しかし，そのかかわりは私たちが期待したかかわりとはズレがあった。そのズレとは，手を合わせたり腕を組んだりの身体のかかわりはあったが，相手の顔をよく見たり，目を合わせたりはしていなかったというかかわり方だった。それは本当にかかわっていると言えるのだろうか。そもそもかかわりとは何なのか，なぜかかわりが必要なのかを私たちは明らかにする必要がある。

また今回私たちは，親子の関係が密である傾向に着目し，「親子の殻から出ることのよさを体験してもらうこと」をねらいとしたが，親子の殻から出る以前に，関係が十分につくれていない親子があることも考えられる。ゆえに，親子のあり方やかかわり方を問う必要もある。それらが私たちの今後の課題である。

一身田小学校親子活動　　2008. 6. 4

非日常的な空間で，たくさんの人と一緒に活動する。それはとても緊張し，勇気がいることかもしれない。しかし，体を動かしてダンスをするうちに次第に緊張がほぐれていき，気がつけばダンスを通して他者とのかかわりが生まれていたのではないだろうか。「かかわり」に気づくことは，つながるための第一歩でもある。今日の「かかわり」が，明日の「つながり」になればと思う。

（編集・文責：内田めぐみ，浦　知世，飯田健二）

「おっとっと，おっとっと」

三重大生の自己紹介，少し緊張してます

少し照れながら「チュンチュン」タッチ！

ダンスでウォームアップ！！

ジャンケンポン！勝ったかな？

ジャンプで手拍子♪♪

ながーい列車になりました

体育館いっぱいの大きな円ができました

すって～はいて～・・・深呼吸

息をあわせて右♪左♪

きれいな円を作らなきゃ！隙間はないかな？？

スキップでくるくる回ります

成功！みんなでばんざーい！！

集まれ～！！

親子がそろって「ありがとう」

ふれあいから生まれるつながり

―栗真小学校における親子活動の実践から―

伊藤　亜季　三重大学教育学部学校教育コース３年
加藤　拓史　三重大学教育学部保健体育コース３年
大西　康太　三重大学教育学部数学教育コース２年

私たちは，栗真小学校の先生から聞かせていただいた親子関係の実情から，自分の親・子だけでなく，他の親・子とも関わり合い，地域の中で育てる・育てられる関係になってほしいと考えた。

そこで，2008 年 6 月 7 日，栗真小体育館にて，栗真小学校の 1･2 年生とその保護者の方々を対象に，親子活動を行った。元からある親子の直線的なつながりを活かし，そのつながりを他の親子とつなげることで，つながりの輪を生み出そうという意図のもと，接触や密着を伴い，かつ 1 人あるいは 2 人では成立しない内容の活動を企画した。

活動中は，活動前と比べ，参加者同士の間にあった緊張感はほぐれ，自然と会話が生まれているグループもあったが，中にはぎこちなさがまだまだ残るところもあり，グループによって大きな差がついてしまっていた。それは，私たちがグループに意識が向きすぎてしまい，グループを一つの個体として扱ってしまったため，地域や全体を一体とした空間を創ることができていなかったからだろう。その結果，関係の構築やそこに関わる問題がグループ内だけに留まってしまった。このことから，今後の課題として，全体を一体とする空間創りをするということが浮かび上がった。

キーワード：つながりの輪，輪の広がり，地域一体の家族感，ふれあい，会話

1. はじめに

総合演習の授業の中で学生が3つのグループに分かれ，白川小学校，一身田小学校，栗真小学校(以下，栗真小と記する)をそれぞれのグループが担当するという形で，親子活動のねらいから活動内容までを企画し，実践した。

その中で，私たちのグループは栗真小の1･2年生の親子活動を担当することになった。私たちは，事前打ち合わせで栗真小の先生から教えていただいた子どもたちの様子や親子関係の現状をヒントに，親子を基にして，親子を超えたつながりをつくることで，既にできているつながりをつなげるという，「つながりの輪」をこの活動のテーマとした。子どもたちは，親と自分，友達と自分，というように，単独の強いつながりはできているようだが，友達の親，あるいは親同士の関係はまだ薄いようである。そこで，既にできているつながりをつなげることで，線であったつながりを輪にしようと考えた。そして，地域の中で親密な関係が生まれれば，自分の親・子どもだけではなく，子どもたちは大人たちに育てられ，大人たちは子どもたちを育てるという，地域全体が家族のような感覚が生まれるのではないだろうか。そのような地域を一体とした家族感が生まれれば，子どもが育つにあたっても，親が育てるにあたっても，より良い環境ができるだろう。また，子どもたちはより多くの価値観を見ることになり，親子間や友達同士だけではできない経験もできるだろうし，親は自分の学校での子どもの様子や，友達の中のわが子を見ることによって，今までとは違った視点から子どもたちを見直すことができるのではないか。つながりの輪を広げることによって，

自身の視界が広がるだけでなく，親または子どもを見るときの見方も広がるだろうと考えたのである。そこで，「ふれあい」を手がかりにして，つながりをつなげることによって，地域一体の家族感を創るきっかけになるよう，この活動を考えた。

本稿では，以上のような視点から，当日の活動を報告する。

2. 親子活動の実施概要

親子活動の実施概要は，以下の通りである。

① 実施日程：2008 年 6 月 7 日(土)

② 実施場所：栗真小体育館

③ 参加者

・栗真小：児童　1年生 12 名，2 年生 18 名。
　　保護者 29 名。

・三重大学：教育学部4年生2名，3 年生 7 名，
　　2 年生 3 名，院生 1 名。

④ 活動のねらい

活動の中に接触や密着を取り入れることによって，自然なふれあいや会話が生まれ，親同士や異なる親子間で新たなつながりを創り出されることをねらいとした。そのために，一人あるいは二人だけでは成り立たない活動をすることによって，ゲームの中で抵抗なく他者とふれあうことができるようにした。また，テーマが「つながりの輪」ということで，輪を意識してもらえる活動を行った。

3. 事前の打ち合わせ

学生によるグループ内での打ち合わせを重ね，ねらいを軸に，1・2 年生に合わせた活動内容を考えたのだが，途中，5 月 13 日に一度，栗真小の先生のお話を聞かせていただいた。それまでは，近年，核家族や両親共働きの家庭が増加しているという傾向や，普段の生活の中で私たちが実際に目にしていることから，親は子どもに「かまうことができない，面倒くさい，悪いことをしても注意しない」，それに対して，子どもは「親の言うことを聞かない，信頼できない」といったように，親子関係は，親と子の間の距離が大きく離れてしまっていると，私たちは予想していた。しかし，お話を伺ったところ，親子はすごく仲が良く，親と子の間の距離は無いほど近いものだが，それによって自分の親・子どもしか見ていないというのが現状であるそうで，私たちの予想とは大きくズレがあるということを感じた。そこで，再度，ねらいと活動内容を練り直した。形が浮き上がってきた企画を教員に報告し，ねらいをはずさないように，大勢でしか成り立たないゲームで，ふれあいながら，かつ 1・2 年生の子どもたちが行うことを前提にした内容や展開を考えなくてはならないことを助言していただき，企画内容を明確にしていった。

当日までには，他のグループの学生たちにも協力してもらい，予定している活動を試しに行いながら，活動の細かなルール等を決めていった。

4. 親子活動の活動概要

当日の活動と時間を表にまとめた(表1)。主な活動には下線を引いた。下線について報告する。

表 1　当日の親子活動内容

時	活動内容
	親子活動開始
10:00	あいさつ
10:05	自己紹介
10:10	名札づくり
10:20	ペア・ストレッチング
10:30	グループ作り(1)・バタ子さんを守れ！
10:40	グループ作り(2)・自己紹介
10:45	フワポン
11:00	グループ作り(3)・くっつけ新聞島
11:15	～休憩～
11:25	つながれ輪っかっか
11:35	クールダウン
11:40	佐藤先生の小さな結婚式♪
11:45	終わりのあいさつ
	親子活動終了

4.1 名札作り

参加者たちに学生と同様の名札をそれぞれに作ってもらった。今回の活動後，普段の生活の中での交流をねらい，親にはニックネームに加え，「○○(子供の名前)の父・母」と書いてもらった。親子二人が向き合い，一緒に名札を作っている姿が見られた。

このとき，学生は後のゲームに使う 4 種類のアンパンマンのお面(バタ子さん・バイキンマン・アンパンマン・食パンマン)を参加者たちに配った。このゲームは4人1組になって行うので，できる限り異学年を含んだグループを作れるようにした。

4.2 ペア・ストレッチング(アイスブレーキング)

まず，学生からは特に指示は出さず，それぞれの親子がそれぞれ好きなように動いてもらおうと考えた。見本を示すことで，それを真似することばかりに注意がいかなように，あえて見本を見せないようにしたのだ。しかし，実際には，何をやれば良いのか分からず，戸惑ったまま動けない親子も多くいた。

そこで，体育館の真ん中で見本を示す形でペア・ストレッチングをすることにした。始めは，見本を見ることに集中してしまったり，普段少なくなりつつあるスキンシップに親の中には照れもあったようで，動きがぎこちない親子もいたが，少し慣れれば，皆見ながら動き，動きながら見るようになっていた。大きく体を動かしたり，親子でマッサージすることで，自然と親子間での肌のふれあいが生まれ，体も心もほぐれていたようだった。

4.3 グループ作り(1)・バタ子さんを守れ！(輪っかオニ)

場がなごんだところで，「バタ子さんを守れ！」というゲームをするために親子2組4人のグループを作ってもらい，4人にはそれぞれ，名札作りのときに配ったバタ子さん・バイキンマン・アンパンマン・食パンマンのお面をつけてもらった。はじめに，学生が説明をしながら一組のグループに見本をしてもらい，それから全員に活動へ入ってもらった。

このゲームが鬼ごっこを基礎としているということもあり，溶け込みやすく，参加者は夢中になっている様子であった。ゲームに夢中になると，体が触れ合う場面が自然に生まれており，お面を交換するときなど，参加者たちが自らメンバーに話しかけている姿もよく見られた。ただし，この時点では，子どもも親も知り合い同士でグループが作っているところがあったということも，その原因の一つだと考えられる。そのためか，反対に，遠慮をしてゲームがブツブツと途切れており，会話も少々ぎこちなさが残っているというグループもあった。

4.4 グループ作り(2)・自己紹介

今までの4人グループを2つ合体させ，8人グループを作ってもらった。前のグループの時点では，つながりが元からある人がメンバーというグループも多くあったが，この時点では初めてかかわりを持つ他者がいるグループになるため，新しい関係性を今後にもつなげてほしいということで，自己紹介を入れた。自己紹介の意図としては，そのグループで，次に名前を呼び合うゲームをすることもあり，また，自己紹介する上で丁度良いくらいの人数でもあるだろうということもあった。

ここでは，自己紹介の仕方を特に指示はせず，ただ名前を発表するグループもあれば，名札を見せながら自己紹介したり，グループ内全員で復唱したり，自分よりも先に自己紹介を行った人の名前を覚えながら自分の自己紹介を行うというグループもあり，それぞれそのグループの色が出ていたように思う。

子どもたちは，知らない大人の前で話すことへの不安や緊張感から，自己紹介を恥ずかしがり，親へ助けを求めるようにアイコンタクトを送っている様子が多く見られた。それに対し，親は子どもの耳のそばで何かを話したり，背中を押すなど，子どもへ行動を促すための後押しをしていた。子どもたちが学校の中でも親が近くにいれば，無意識の内に親に頼る姿から，親と子の中に，親と子の距離の近さを感じた。

4.5 フワポン

自己紹介では他者と意識的に関わることになるが，次はゲームを通して無意識的に関わり合い，他者と思い合ってもらおうと考え，体格が全然違う親と子どもが混ざり合い，手をつないで動きを制御させた。

ルールは「つないだ手を離さずに，風船を落とさないようにする」という簡単なものであるが，他者とつながることによって，自分の思い通りに動けなくなるが，参加者たちはそれをまた楽しんでいたように思う（写真1）。始め，中には，自分がどう動いていいか分からず，手をつないではいるのだが止まっているという人もいたが，グループ全員の視線は一つの風船に自然と集まっていた。慣れてくると，動きも，子どもたちは高くジャンプしたり，大人たちは足を使うなど，手をつないでいる他者のことを思った行動や，風船が遠くへ飛んでしまったときに，皆と一緒に走る，つまりグループの世界に入っていない人がいないという状態が生まれていたと思う。

参加者たちがゲームに少し飽きてきたところで，「名前を呼び合う」というルールを付け加えた。ここでも学生が見本を示したのだが，説明が不十分だったのか，前よりも動きが小さくなっていたグループもあった。まだこの時点では，名前を呼ぶことに遠慮があったのかもしれない。もっとこのゲームに引き込めるような自然な流れと空間を創り出したかった。

写真 1

4.6 グループ作り(3)・くっつけ新聞島

まず，今までのグループを2つずつくっつけて，親子8組 16 人のグループを作ってもらった。

フワポン（写真 2）では，手をつなぐ，つまり接触を意識的に行ってもらったが，くっつけ新聞島では，ゲームの中で参加者が無意識的に接触し，密着することを意図とした。また，フワポンでは，相手に合わせて自分が動いていたのだが，ここでは，過度な密着のため，信頼にも大きくつながる，「委ねる−委ねられる」の関係が必要になってくるだろうと考えた。

くっつけ新聞島では，「じゃんけんに勝って嬉しい」という楽しさではなく，「乗れるか乗れないか」というギリギリ感や日常ではできないくらい他者と密着したり，抱き合って何か面白いという感覚からの楽しさ，そこから生まれる会話というものを創り出そうと考え，あえて，勝ったらそのまま・あいこと負けは半分に折るという，やや厳しいルールにした。

じゃんけんで負けが続いたチームでは，全員が「密着しよう！」という意欲を持ち，「もっと寄って！」「つかんでいいよ」というような会話が生まれ，くっついており，自己紹介のときにあった遠慮などは見られなかった。誰も指示は出していないが，密着しているグループは，全員が中心に体を向け，輪のようになっており，視線はグループに注がれていた。また，今までの活動では，親と子は常に隣同士にいて，その関係が崩れることは無かったが，この活動ではグループ内での位置が柔軟に入れ替わっていた。反対に，じゃんけんで勝ちが続いたグループは，勝って嬉しいという雰囲気で，私たちがねらった楽しさは感じることはできていなかったように思う。勝ち続けたグループは，全員が司会者の方に体を向けており，視線はグループの外側へ散らばっていた。

写真 2

4.7 輪っか通し

これは時間の都合上，計画には無かったゲームを急遽取り入れたのだが，今までにできあがったグループの関係を切らず，かつキーワードでもあるふれあいや会話を生む空間を創るという意図をはずさないよう考慮した。また，つながりをつなげる，輪を広げるというテーマから，輪を意識したゲームとなり，ねらいにつながったと思う。

フラフープを人の輪に通すという単純なゲームなのだが，グループの作った輪にフラフープの輪を通していく中で，「次の人が通りやすいように」「フラフープを受けやすいように」と考えた行動や，「頑張れ」と言った声かけなど，始めには無かった大きな輪の関係が，この頃には無意識の内にできていたように思う。

4.8 クールダウン

再び，元の親子2人ペアを作ってもらい，親がベッドになり，その上に子どもが寝転がってもらった。ここまでは，“動”の空間の中で，今までに無かったつながりを作ってもらっていたが，ここで，“静”の空間の中で，元の親と子が肌や重さを通じて親子関係の大切さや深さ，またお互いを感じてもらおうと考えた。

落ち着いてから，今日の目的を改めて言葉にすることで，活動の楽しさの中にあらゆる他者とのかかわりがあったことに気付いてもらおうとした。

子どもたちは遠慮することなく親に身を委ね，全体重を親に任せている子もいた。親に身を預けることへの安心感が，子どもたちの中にあったのだと思う。親は，子どもに話しかける人もいれば，何も言葉にはせず，体を触ったり，手をつないでいる人もいた。その空間は穏やかで，始めのぎこちなさは大分解けており，親と子，お互いがお互いへの愛しい気持ちを再確認していただろう。そこには，以前からつながりがあったが，さらに深い関係ができていたと思う。

5. 振り返り

私たちは，終始「つながりをつなげる」ことをねらい，この活動では「肌の触れ合い」「輪」「一人あるいは二人ではできないこと」「会話」を手がかりに企画を進めた。そして，ゲームを通してこれらのことが生み出される活動を考えた。

特に，くっつけ新聞島の中では参加者同士の関係の構築について顕著に見ることができたので，これを例に参加者たちの関係を振り返ってみた。

5.1 活動から

まず，それまでのフワポンなどのゲームの中では，私たちがつながりをつなげていたという感覚が拭えなかったのだが，このくっつけ新聞島では，つながりがつながっていたように思う。例えば負けが続いたグループでは，子どもが他の子のお父さんの髪の毛をつかんだり，それを許すお父さん，「もっと寄って～!!」と言うお母さん等，それまでの活動では見られなかった親密さが見られた。密着せざるを得ない状況ができ，全員でやり遂げようとする意欲や会話，視線の集中というものが生まれていた。くっつくことに拒否感を示している参加者は見られず，むしろ，自らくっついたり，また他者にくっつくことを求めたり促す声かけや行動が見られた。

しかし，反対に，このゲームで勝ち続けたグループでは，空間的にも，状況的にも余裕が残り，先ほど述べたような密着や意欲，会話や視線の集中は生まれにくかった。勝ちが続いたグループでも，じゃんけんをする代表者を決めるときに，子どもたちが背を比べあったり，それを親たちが判断したり，他人事と済ませず，他者と積極的に接しようとする姿は見られたが，密着やその楽しさを味わえていなかった。つまり，勝ち続けたグループのみ私たちが考えていた世界へ引き込むことができなかったということになる。

全体的に見たとき，私たちがねらいとしてきた「つながりをつなげる」ということは，活動の中でできていったと始めは考えていた。しかし，このように細かく見ていくと，私たちのねらいが達成できたとは言えないグループもある。私たちは，この活動が，活動を終えた後のつながりのきっかけになってほしいと考え，

常にグループを作り，そのグループは合体させるだけで崩そうとはしてこなかったので，グループごとで関係の出来方が全く変わってしまい，ねらいが達成できたところとできなかったところに分かれてしまった。多くのグループがそのねらいに達していたので，始め，私たちは「全体的にできていた」と思ってしまったが，同じ活動を同じ空間の中で行っている限り，全ての人が関係者なのである。そう考えると，この活動でねらいを達成できたと言えない。

5.2 参加者の感想から

ここで，保護者の方が書いてくださった感想を，「関係性の捉え方」という観点で分類されたので，観点別に報告する。

私たちはこれらを「①他の親子との関わりについて書かれているもの」「②親と子の関わりについて書かれているもの」「③親から見た子ども（関係の矢印が一方向）について書かれているもの」「④その他，関わり以外のことについて書かれているもの」の4つに分類された。

最も多かったのは，②の「親と子の関わりについて」で，9名の方が書いてくださった。活動の前提として「親子活動」という名で行われたため，親子という意識が強かったということも考えられるが，やはり親と子のつながりが強いのだろう，と感じた。改めて親子でスキンシップを取ることができて良かったという感想が多かった。

次に多かったのは，ねらいでもあった①の「他の親子との関わりについて」で，6名の方が書いてくださった。これらの中には，他の親子（特に親）と接することができる機会になって良かったという感想と，もっとたくさんの親子と関わりたかったという意見をもらった。「もっと関わりたい」という気持ちは，次の「つながりをつなげる」原動力にもなり，関わろうとする意欲・態度が今後の生活へとつながっていくだろう。大変嬉しいことである。

③の「親から見た子どもについて」は，2名の方が書いてくださった。④のその他は，4名の方が書いてくださり，ゲームに対する感想が多かった。③と④については，おそらく，あまり「つながり」というものが大きく引っかからなかったのだと思う。意識的にしろ，無意識的にしろ，私たちの意図が伝わっていなかったのだろう，と反省した。

6. おわりに

今回の活動では，ゲームの内容からして，全てのグループにおいて表面的な身体的つながりはできていたと思うが，そこから内面的なつながり，具体的には，会話やグループへの興味等を生み出せていたかというと，グループによってそれぞれであった。ゲームが終わってからも，輪（円形）のまま楽しそうに話したり，肩をたたきあっているグループもあれば，ゲームが始まる前や終わった後に会話が少なかったり，輪でつないでいた手をすぐに離し，輪（円形）を崩す様子などが時々見られ，ゲームをこなすためにつながっていたと感じるグループもあったからである。

グループを構成するメンバーが違うのだから，このように，グループごとに雰囲気が変わってくるのは当然のことなのかもしれないが，ねらいを達成できたグループとできなかったグループに分かれてしまったのは，全ての人が，私たちが創り出そうとしていた空間に入り込めていなかったからなのだろう。また，そもそも，私たちがグループごとに分けて見てしまっているという時点で，グループを完全な一つの個体として意識してしまっていたのだと思う。これは，無意識のうちに，関係性ではなく，一人ひとり，あるいは親子を個体として捉え，全ての場面を断片的に見ていたからなのだろう。参加者たちが，私たちが創り出そうとした空間に入れなかったというよりも，参加者全員を一体とする空間ができていなかったのかもしれない。

以上のことから，一人ひとりを個別に見るのではなく，関係というものに注目し，全員を一体とする空間創りをすることが，今後の課題として浮き彫りにされた。

栗真小学校親子活動

2008. 6. 7

　親子関係は友達などの関係と比べて特質な関係である。それは表面にでているものではないが会話・ふれあいなどのコミュニケーションの中に必ず現れている。しかし，自分達の中だけでなく外に目を向けることも大切。他の親子は鏡。鏡を見て自分達を見直すことも必要である。また，地域の大人と子どもとの間には誰の親・子という隔たりのない愛が必要なのではないだろうか。

（編集・文責：伊藤亜季，加藤拓史，大西康太）

親が子どもを楽しませる

今日のわたし(名札)づくり

子どもが親を笑顔にさせる

活動前で少し緊張してるかな

恥ずかしいけど背中をおされて自己紹介

体操で体も心もほぐれる

無意識のうちに相手を気づかう

輪がくずれないようみんなで移動！！

落ちちゃう！？誰でもいいからつかんじゃえ！！

みんなで協力して広げる

輪を通すには…思いやり！！

陣地が狭くなると密着するしかない

お互いに温もりを感じあう

落ちないよう子どもをおんぶ

心と心がつながる

一身田小学校における体育科授業研究及び事後検討会

1. 3 年 3 組授業研究

〇日　時　平成 20 年 12 月 4 日(5 限)

〇場　所　体育館

〇指導者　岡田一清

〇題材名　「マットの山」を使った運動

〇目　標

・マットの山」を使って，とびのる・転がる・とびおりることを楽しみながら，とびばこあそびやマットあそびにつながる体の使い方を身につける。

〇感　想

「マットの山」という場を，子どもたちは初めて経験したと思われる。準備に時間がかかりすぎることや日程の都合などで１回しか実践できなかったが，子どもたちが自発的に繰り返し挑戦する姿を見て，「場の工夫」によって子どもたちの意欲をそれほどにも掻き立てることができるのかと驚いた。場の工夫の大切さを痛感した。また，自発的に取り組む事によって，子どもたちは本当に自由な発想で運動することができることを教えてもらった。跳び箱の楽しさの本質は，踏み切ってから着手するまでの**「フワッと感」**と着手してから着地までの**「グルッと感」**を味わうことであると教えていただいた。今後も，その**「フワッと感」**と**「グルッと感」**をより楽しむことのできる場や環境を整え，より楽しい跳び箱の授業に臨みたい。

2. 1 年 2 組授業研究

〇日　時　平成 21 年 2 月 3 日(5 限)

〇場　所　体育館

〇指導者　加藤真由子

〇題材名　動物ごっこ

〇目　標

・まねをしてみたい動物になって，特徴ある動きをまねして遊ぶことができる。

・友だちの動きをまねしたり，いっしょに工夫したりすることを通して，力を合わせて遊ぶよさを感じる。

〇感　想

体育の授業で「表現」の領域は取りかかりにくく，指導者である私に苦手意識があった。本時でも，子どもたちが海の動物になりきって動きを工夫できるよう考えていたが，ねらっていた活動には至らなかった。その理由として，「動物になりきって」動く楽しみを私がしっかり認識していなかったこと，その上４つのグループに分けたためそれぞれに適切な言葉がけができなかったことが考えられる。事後の反省会で，創作・表現の授業は，リズムや動きの型が決まった運動会のダンス等とは，正反対

のものであることを教えていただいた。はっきり決まっている型を教えるのは簡単である。そのことも大切だと思う。しかしそれだけではなく，イメージを活かしたもっと非定型な授業を，１年生の子どもたちと創っていきたいと感じた。他の教科についても同じことを思っている。

子どもたちはこの「動物ごっこ」の活動が大好きで，休み時間にもなりきって遊んでいる姿が見られる。そんな豊かな感性を引き出す様々な方法や言葉がけを，これから意識して学んでいきたい。

3. 3 年 4 組授業研究

〇日　時　平成 21 年 2 月 3 日(6 限)

〇場　所　体育館

〇指導者　高橋宜記

〇題材名　障害物ドッジボール

〇目　標

・ライトドッジボールを用いたり，障害物を利用してボールを避けたりすることで，ボールを怖がらずどの子も楽しくゲームに参加することができる。

・日常の遊びでドッジボールに参加しようという意欲が持てる。

〇感　想

今回授業をみていただいたことで，多くの学びを得ることができた。

まず，私自身についてである。今回の授業を計画するにあたって，学級の状態や子どものつまずきを把握し，ドッジボールという題材で子どもたちに味あわせたい内容を明確にしたうえで，授業のねらいを考えることができた。前回の跳び箱の授業で，先生から何度も言われた「中心となる楽しさ」を軸にして授業を考えることが，子どもたちの満足できる活動につながる事を実感できた。今後の授業づくりの考え方として大いに役立てていきたい。

次に，子どもたちの変容である。私の学級では，休み時間に男女が一緒になって遊ばないことが気になっていた。授業の最後に，子ども達に感想を求めたところ，「ボールが持ちやすくて投げやすかった。」「今までボールが怖かったけど，当たっても痛くなかった。」「跳び箱に隠れたりして楽しかった。」「跳び箱の置き場所を変えてみたい。」という声が聞かれた。ほとんどの子が今回の授業には満足した様子であった。翌日も子どもたちから「あのボールで早く遊びたい。」という声があったので，早速クラスボールにした。すると，今までボール遊びをしなかった子が遊ぶ姿やお楽しみ会で男女一緒になってドッジボールをする姿が見られるようになった。他の学級でも，あのボールを使って遊んでいる姿が見られる。これまでボールを怖がっていた子の抵抗が少なくなり，ボール遊びを通じて子どもたちの関わりが増えたことは大きな成果であった。

これからも様々な事に挑戦する気持ちをわすれずに実践を重ねていきたい。

実践報告/保健体育科授業の教材として導入したラート運動について

1. これまでの経緯

私たちはこれまでラート運動の特性である「非日常的な身体感覚」，「器具に身を任せる感覚」，「身体の認知」に着目し，中学校の保健体育科授業の教材として導入するために準備を進めてきた。我が国ではヨーロッパの国々と比較してラートの普及度があまり高くないため，中学生を対象にラートの授業を実践した例が見られないこと，授業担当教員にラートの経験が皆無であったこと等の解決すべき課題があり，教員の実技研修を始めとして入念な準備が必要であった。また，ラートは直径が約 200cm，重量が約 50kg の大きくて重い器具であるため，安全管理の面から保管方法の検討も不可欠であった。

平成 18 年度，19 年度の 2 年間で概ねこれらの課題が解決されて準備が整ったので，本年度正課体育の授業として実施することができた。繰り返しになるが，我が国では前例のない取り組みなので，授業中の生徒の様子と今後の課題について報告する。

2. 実施した授業の概要

対象としたクラスは 2 年生全 5 クラス，3 学年全 5 クラス，合計 10 クラスであった。器械運動の新しい種目として位置付け，平成 20 年 9 月から 10 月にかけて各クラス 6 時間，合計 60 時間の授業が実施された。

授業実施に際しては，何よりもまず安全管理に配慮し，原則として複数教員が関わる TT とした。さらに本学教育学部保健体育コースの学生 1 名が授業記録として全 60 時間の VTR 撮影を担当し，時間の許す限り本学教育学部保健体育科教員 2 名（後藤・岡野）も参加した。

3. 授業中に観察された生徒達の様子

(1)新しい教材であったこと

本授業実践でラート運動は器械運動の教材として取り扱われた。単元計画を作成した一身田中学校の体育教員，がラート運動の特性は器械運動と類似した構造を持つと考えたことによるものと思われる。もちろん伝統的な器械であるマット，跳び箱，鉄棒などを使った運動も工夫次第で十分楽しむことができるが，これらは何れも生徒に学習経験があり固定したイメージがある。苦手意識を持つ生徒にそれを克服させ，面白さを理解させることは困難な場合が多い。その点ラートは誰もが始めての体験であり，少なくとも苦手という先入観は持たれていない。さらに新しいことに挑戦するという期待感を持つことができる。

生徒達はまず，ラートという大きくて存在感のある新しい器具に引きつけられたようであった。これから何が始まるのかという緊張感と自分に出来るのかという不安感が漂っていた。

授業はラートに慣れることから開始された。特別な技能を必要としない，誰にでも出来る運動から徐々にラートの特性を利用した運動へと展開された。

2 時間目からは実際にラートの輪の中に入り，側転に挑戦することになった。1 台のラートに数人でグループをつくり，お互いに補助をし合って回った。中学生の身長は様々であるため，ラートの直径も各種用意し，自分の身長に適したラートが選択できるようにした。従って男女混合で身長別グループとなることが技の習得に適している。しかし実際には男女別で仲の良い生徒同士のグループが出来上がっていた。仲が良い生徒同士のグループは技の習得には効率的ではないが，友達という意識からかお互いに補助し合う場面が多く観察された。ラートのサイズによって運動感が異なるが，例えば「シーソー」や「跳び越し」等，サイズに関係なく取り組める運動もある。初心者の段階ではあまりラートの適正サイズにこだわらなくても良いのかもしれない。課題をどこに設定するかということとも深く関わってくるので，グループをどう分けるかについて今後の検討課題となるだろう。

(2)多様な生徒のニーズ

生徒達は誰もラート運動の体験が無く，授業を開始した時点では全員が同じスタートラインに立っていたが，実施時間数の増加に伴い技術の達成度や取組方にバラツキが現れていった。生徒一人一人の運動能力，身体能力が異なっている以上，当然のことではあるが，教師の簡単な説明

と運動全体をイメージさせる師範で，難なく新しい技を習得していく生徒がいる一方で，中々最初の一歩が踏み出せず，最初の側転を実施するまでに随分と時間がかかった生徒も見られた。また，生徒がラートで回転する運動に取り組む姿勢にも様々な場面が見られた。例えば次々と新しい技を要求してくる者，専ら補助する側になる者，自分ばかり回してもらっては悪いから順番に補助しようとする者，自分ができるようになった技を友達に教えようとする者，友達とペースが合わなくて自分一人で回っている者などである。

ラート運動の一つの利点は，必ずしも高度な技を追求する必要がないことである。例えば二人組で実施する「シーソー」は倒立姿勢を経過しないため，比較的恐怖感が少ないが，パートナーと協力して重力加速度を感じたり，体が高く持ち上げられる感じを体験することができる。導入段階で用いられた運動であるが，毎時間生徒達自ら実践している姿が見られ，6 時間目になっても喜々として行われていた。しかし 6 時間目のシーソーは，もはや 1 時間目の恐る恐る揺れているものではなく，ダイナミックに緩急の振幅が増加し，ラートへの乗り降りを切り替えるタイミングもスムースに移行しており，そこには明らかに技能の向上が見受けられた。

私たちはとかく技術を難易度順に一直線に並べてしまいがちである。一つの運動ができれば次の運動を与えたくなる。しかし気に入った運動を何度も納得するまで繰り返し，それが習熟していく過程を待つことや，同じ難度で少し形を変えたバリエーションを数多く経験することも，身体感覚を高めるために十分価値があると考える。

(3)踵つきベルトの功罪

ラートの中に入って最初に回転する技は側転と呼ばれている。両足をステップにベルトで固定して，グリップを両手で持ち，側方に回転するものである。また，それができるようになると持ち方を変えたり，回転の方向を変えたりして様々な回転技に挑戦することができる。しかし足のベルト固定が確実でなかったり，倒立姿勢になった時点で恐怖から手を離してしまったりすることでラートから落下するリスクが生じてくる。これを回避するために踵つきベルトがある。踵つきベルトは足をステップに 2 方向から固定するため，殆ど外れることはない。指導者の数が足りないときに，取りあえずの安全管理をする上で非常に便利である。

一方，ラートの特性を活かして一つ一つの技を正しく習得していくためには，自分が実施した運動が理にかなったものであったかどうか判断する必要がある。通常のベルトを使用していれば，ベルトの装着が甘かったり，重心を移動させるための身体操作を誤ったりした場合，ラートから落下したり，途中で停止してしまう等のアクシデントが発生し「今実施した運動は正しくなかった」ことが自覚される。

踵つきベルトを装着すると，落下防止という安全性は確保されるが，正しい身体操作で技を遂行しなくても，不都合が生じない。従って導入段階を過ぎたら，なるべく早く踵つきベルトから通常のベルトに移行することが望まれる。ところが生徒達は一度踵つきベルトの安心感を体験してしまうと，中々通常のベルトに移行しようとしなくなってしまった。　生徒達に最初の段階で踵つきベルトのメリット，デメリットをしっかり説明する必要があると思われた。

(4)自分から「回る」と言うまで待つ

最初はこわごわ回っていた生徒達も，ラートに触った時間数にほぼ比例して慣れていき，楽々と回れるようになってくる。しかし回れるようになるために必要な時間は個人によって様々であり，決して一律ではない。この時，補助者は決して焦らず，生徒が自分から「回る」と言わない限り補助者はラートを回さない，ということを大前提としたい。鉄の輪の中に入って逆さまになって回るということが高いハードルになっている生徒もいる。気持ちがネガティブなうちはポジティブになるまでひたすら待つことを徹底したい。

友達が一人，また一人と回っていくと自分も回ってみたいという気持ちは膨らんでいく。また，自分と同じような友達が何度も回っているのを見ている内に徐々に自分にもできそうだという見通しを持つことができるようになる。実際に回るのはそれからでも遅くはない。

生徒の中には，自分が回れるようになると，友達を回したくなる者がいて，誘うのは良いのだが，それが高じて無理矢理回してしまう場面が見受けられた。たまたま事故には繋がらなかったが，気持ちが後ろ向きになっているときに無理をすると大きな事故に繋がりかねない。生徒一人一人の意志を尊重すると同時に，常に危険と背中合わせであるという緊張感や運動に集中するという意識を持ち続ける必要がある。

4. 今後の課題

ラート運動は個人的な運動であるが，安全確保のためにも補助者が不可欠である。そのため生徒同士がお互いに協力し合う関係が生まれるが，同時にTTが非常に有効であることも想像に難くない。本年度の一身田中学校での実践では，原則として複数の指導者の下で授業が実施された。ここに本学学生が介入する余地があるように思われる。

つまり，本学における体育実技の授業でラート運動を取り入れ，ある程度の経験を積んだ学生が一身田中学校のTAとして参加するという関係である。学生は体育の授業現場に参加することができるし，学校ではTAを確保することができる。この協力関係を今後構築していきたいと考えている。

我が国におけるラート運動は徐々に広まりつつあるが，未だ普及度が高いとは言えない。一身田中学校の体育教員および生徒もラート運動の経験は皆無であった。本プロジェクトでラート運動の研修を受けた体育教員の異動により，新しく一身田中学校に着任した教員がラート運動の経験を持つ可能性は殆ど無い。体育授業にラート運動を定着させるためには，体育教員を対象とした実技研修会を定期的に開催する必要があるだろう。

（文責　後藤洋子）

5. 授業実践を行った教員の感想

授業を始める時は，まずけがをしないか，授業はうまくいくかなど不安がたくさんありました。しかし，6時間分の授業計画を立て実際に授業をしていくと子どもたちの力もありましたが不安はすぐに消えました。まずラートの授業の良かったところの1つ目は，子どもたちが全員，初めてだということでスタートラインが一緒だったこと。そのことによって全員ラートに興味を持ちまわってみたいと思ってくれたこと。2つ目は，グループ学習がやりやすかったこと。ラートの数は7つありそれぞれ大きさが違うので自分にあったラートを選びその中でグループを作り，補助をしあったり励まし合ったりしてグループ活動を行っていました。3つ目は，達成感が味わえること。跳び箱やマット運動，鉄棒は，怖かったら自分でやめてしまうことができるが，ラートは一度まわってしまうとやめることができないのでどうしてもできてしまうというところがあり，一度できる達成感を味わうと子どもたちはどんどんと成長していきました。しかし中には途中で怖くなり自分でベルトを外してしまいラートから落ちた生徒もいましたがそれでも何回も挑戦してまわれるようになりました。このようにラートの授業を終えていいところをたくさん知りました。また，多くの子どもたちの感想にも，もう一度やってみたいとか楽しかったなどの感想をもらいやってよかったと思いました。

しかし，その反面これからの課題としては，指導者の技術面である。何回か講習を受けましたが子どもたちは思っていた以上に成長が早く，自分たちが用意していた技を3時間ぐらいですべてできるようになった生徒もいました。また，今年は2年生が6時間分授業をやったので来年度，新しい技を教えていかないといけないので自分たちがはたして指導できるのだろうかという課題がある。それと，グループ学習の見直しなどもう少し工夫が必要である。どうしても怖がらずにやる生徒はどんどんとうまくなり技術に差が生じてくる。そのあたりを考えていかなければならない。

その中で技術を早く習得した生徒に，ラートの種類に斜転という競技がある。その技をやらしてみたがこの技は難しく中々習得するには時間がかかる。これをやるにしても6時間程度では習得するには無理だろう。これを選択体育などを利用して1年間やってみるといいかもしれない。

（一身田中学校教員　下地啓一）

生徒の様子で明らかに他の運動と違う点は，ラートという種目に興味を持って，意欲的に活動へ入っていくことができたということである。器械運動＝マット・跳び箱・鉄棒と，小学校からやってきているものでよく知っていて，苦手な子にとっては「楽しくない」「嫌い」というイメージが強い。しかしラートは皆初めてで，しかも見た感じ楽しそうな雰囲気がある。やったことがないので興味がある。はやくやりたい！といった風だった。

導入ではリングの上にのぼったり，バランスをとりながら歩いたり，ハムスターの様にリングの中を歩いたり，シーソーをしたり。活動量としては少なく簡単な動きだけだったが，初めて触れるラートの感触・感覚を楽しんでいた。

2時間目以降は，安全確保や技術の基本的な所から入っていき，徐々にたくさんの技を紹介して

取り組んでいった。意欲的で飲み込みの速い生徒は,どんどん難易度の高い技を習得していき,4時間目ごろには技をいくつか組み合わせた連続技も難なくこなしていた。逆に,恐怖心の強い子や消極的な生徒は,後半になっても側転をするのが精一杯だった。

2年生の授業を終えて良かった点は,全体を通して意欲的に活動できたことである。初めての取り組みで興味が強かったということが大きいが,他にも危険が伴う競技なので細かい説明等を真剣に聞こうとする態度があったり,友達とお互いに補助したり声をかけ合いながら活動できたように思える。ラートの授業を終えた時の感想にも,「練習をする時は,同じラートを使っていた子に手伝ってもらったりアドバイスをしてもらったりしたので,ラートは協力し合うことが上達のコツだと思いました。」「今まであまり話さなかった子とも協力ができていいと思いました。」「皆に手伝ってもらって出来るようになった時は,達成感があって嬉しかった。」など,生徒同士の横の繋がりをつくるのにも役立ったと思う。

逆に今後の課題としては,特に2年生は来年どうしていくかである。側転が精一杯だった生徒はそこから次の技へと進んでいけるが,かなり高い技能を習得できた生徒には次にどういった指導をしていったらよいのか。教師側も引き出しが少なく,持っているものは全て今年の授業で出してしまったので,3年生になった時に次はさらに難易度の高い技をするのか,それとも・・・。また教師側の研修をして授業の展開を考えていく必要があると思う。

（一身田中学校教員　堤あい）

今回，ラートの授業で怪我無く無事に終了できて一安心しています。先生方のサポートもあり，ほぼ各グループに補助者がつけて，とても安全に活動できたと思います。
器械体操という領域の中では，得意不得意の差がはっきりしていて，やはり得意な生徒はどんどん練習も行いますが，不得意な生徒はなかなか練習に参加するのが難しいと思いますが，この『ラート』では，まずほとんどの生徒が授業に入る前から「これなんなん？」「どうやってするの？」と，興味津々ですぐにラートに触っていました。今まで見たことも，触ったことも無い器具（ラート）を使った授業に対してとても意欲的でした。

基本的には，こちら（教師側）からの補助で練習していたが，慣れてくると自分たちで補助をし合い積極的に練習に励んでいる生徒を見るのはとても嬉しかったです。

ラートの個人個人のスキル上達以外に，生徒同士の助け合いや仲間作りといった内面的な成長が見られラートに取り組んだことは大成功だったといえます。ありがとうございました。

今回のラートの授業では，主に3年生のTT（Team Taching）で入りましたが，生徒たちの技術の吸収が早くてとても驚きました。自分たちが教えてもらった1回目，2回目のラート講習会の内容をすいすいとこなしていく様子は嬉しい反面，次はどのような技を練習させるのか，自分の引き出しの少なさにショックを覚えました。来年度の新2年生の中にも今年度の内容をすいすいとこなす生徒がいないとも限らないし，新3年生のカリキュラムをどう組んでいくかも考えさせれます。

やはり，教師側のスキルアップが必要不可欠だと強く感じました。定期的に自分たちで練習会を持つことや，専門家の講師，先生方を招き講習会を開いて，知識をつけ，ラートに親しんでいくことが生徒たちにも還元できることなのかなと考えました。これからも自分たちの研修を重ねていくことが必要だと思います。

（一身田中学校教員　杉崎隆典）

卒業論文抄録/中学校体育のカリキュラム改善に関する一考察

保健体育コース　57 期　205121 番　山本洋也
指導教員　岡野　昇

問題の所在及び目的

筆者は公立中学校の教育実習を経験し，中学校の体育授業(カリキュラム)は，課題解決型，能動的志向，一人でもできる運動，自主的，主体的ということが大切にされ授業が展開されているように感じた。それは，他者，モノ，記録，課題などに対して意志的に自分を向かわせる，すなわち「働きかける」という志向性である。このような体育授業(カリキュラム)では，積極的受動性，すなわち他者やモノなどからの情報を受動し，それに合わせて自らが動かされる，「働きかけられる」という志向性にはあまり着目されていないのではないかと考えた。

よって本研究では「働きかけられる」ということに着目するために，運動者が主体的に操作するとともに，ある程度身を任せることが必要であり，「自由に操ろう」という意識が強すぎると上手くいかない(後藤，2008)といわれる，ラート運動の中学校の体育授業への導入を手がかりに，中学校体育のカリキュラム改善の視点を明らかにすることを目的とする。

研究の進め方

(1)　第Ⅰ章では，岡野(2003)の論を手掛かりに，これまでの体育カリキュラムの問題点を提示し，これまでと本研究でのカリキュラム改善に関わる考え方や立場を明確にする。

(2)　第Ⅱ章では，全国で初めて中学校でラート運動の導入を試みた体育授業を取り上げ，生徒への質問紙調査の結果をまとめる。

(3)　第Ⅲ章では，第Ⅱ章での質問紙調査の結果を考察し，明らかになったことから，カリキュラム改善の視点を提示する。

第Ⅰ章　カリキュラム改善と中学校の体育カリキュラム

カリキュラムについて，佐藤(1996)の文献から「カリキュラム＝プラン(計画)」という従来の捉え方ではなく，「カリキュラム＝学びの経験(履歴)」と捉えることで，カリキュラムは「教え・学びのレベル」＝〔カリキュラム①〕，「学校の計画のレベル」＝〔カリキュラム②〕，「国の政策レベル」＝〔カリキュラム③〕の３つに整理され（駒林，1987)，学習指導要領など〔カリキュラム③〕や〔カリキュラム②〕をそつなくこなし，カリキュラムをよりよく変えようという姿勢を持たない，カリキュラム・ユーザーではなく，実際の子どもの姿からカリキュラムを考え，子どもと共に生成していく，カリキュラム・メーカーとして位置づかなくてはならないということを検討した。その上で，筆者は３つのレベルのうち〔カリキュラム①〕つまり「教え・学びのレベル」での改善に目を向け，自分自身の実習などから現在の中学校の体育カリキュラムをみなおした。

現在の中学校体育は機能的特性を背景としており，学習指導要領で取り上げられる種目は，欲求充足として「競争・克服・達成」の要素を含む競技スポーツが多くを占めている。つまり，現在の中学校の体育カリキュラムの問題点に，岡野の「働きかける－働きかけられる」という視点から，カリキュラムが「働きかける」というほうに傾斜しているという問題が明らかになった。よって「働きかける」と共に「働きかけられる」にも着目することが大切であるということを考えた。

そこで今回は，ラート運動を取り上げていくことにする。これまでの中学校体育と本研究での筆者の立場をまとめたのが表１である。

表１　これまでと本研究の立場

	これまで	本研究
教師の立場	カリキュラム・ユーザー	カリキュラム・メーカー
中学校体育において大切にされる視点	働きかける 主体性	働きかける－働きかけられる 主体とともに客体
運動種目	スポーツ(競争・克服・達成) 中心	ラート運動

第Ⅱ章　中学校体育におけるラート運動の導入の試み

本章では前章をうけ，M県Ｔ市立Ⅰ中学校の体育授業におけるラート運動の導入の試みを取り上げた。そこでは全 60 時間の参与観察と，単元終了後に質問紙調査を行った。質問紙調査の内容は，「体育授業についての形成的授業評価」(調査項目Ⅰ)，「ラート運動の特性について」(調査項目Ⅱ)，「ラート運動と中学校体育の他領域との関係」(調

査項目Ⅲ)，「自由記述」(調査項目Ⅳ)の 4 種類で，これらを 1 つにまとめ，シートを作成した。また，それぞれを集計し，その結果をまとめた。

調査項目Ⅰでは，「成果」「意欲関心」「学び方」「協力」の 4 つの次元と「総合評価」があり，2 年生は全体的に「協力」次元が高く，3 年生は全体的に「成果」「学び方」の 2 つの次元と「総合評価」が高い評定であるという結果が得られた。

また，調査項目Ⅱでは，ラートの特性についての質問項目が 5 つあり，「気持ちがよかった」「浮遊感を味わえた」という質問に対しては「そう思う群」に回答した生徒が全クラスの平均で 6 割，「どちらともいえない」と合わせると 8 割を超えるという結果が得られた。また，「怖かった」「目が回った」「疲れた」という質問に対しては，ほとんどのクラスで「そう思う群」と「そう思わない群」が同じ比率であるという結果が得られた。

調査項目Ⅲでは，カリキュラムについての質問項目が 8 つあり，その中の「またラート運動をやってみたいか」という質問には，「そう思う群」に回答した生徒が全クラスの平均で 8 割を超えているという結果が得られた。また，球技以外の領域と比べるとラート運動の方が楽しかったと回答する生徒が半数を超えていた。

調査項目Ⅳでは，自由記述を KJ 法にかけた。そこでは，3 年生は回転場面など「働きかけられる」という局面に関するコメントの件数が多くあった。一方，2 年生は「競争・克服・達成」といった，より意志的な「働きかける」という局面に関するコメントの件数が多かった。

第Ⅲ章　中学校体育のカリキュラム改善の視点

第Ⅱ章の結果について考察すると，調査項目Ⅲから，ラート運動はおおむねの中学生に受け入れられているということが明らかになった。その理由としては調査項目Ⅱから，「気持ちがよい」「浮遊感を味わえる」や，多少の怖さ「ハラハラ・ドキドキ」や遊園地のコーヒーカップに乗って感じられるような多少の「眩暈」を感じられるからではないかと推測される。また「疲れるけど疲れない」，つまり「働きかける」局面と「働きかけられる」局面のどちらも生徒は感じられているということが推測できる。授業としてみてみると，調査項目Ⅰより，ラート運動の授業としては，クラス，学年によって受け入れられ方が違い，2 年生よりも，3 年生に多く受け入れられ，調査項目Ⅳからは，3 年生はラート運動の「働きかけられる」という側面に楽しさの多くを感じており，一方 2 年生は「競争・克服・達成」など「働きかける」という意志的なところに楽しさの多くを感じていたということが明らかになった。

以上のことから，ラート運動はおおむねの中学生に受け入れられていること，つまり，ラート運動が特性としてもつ「働きかけるー働きかけられる」，特に「働きかけられる」という視点は中学生に受け入れられるということが分かった。また，発達段階や，クラスの実態に応じて，人，物的障害，記録などに向かい，それを超えていこうとする「達成・超越志向」と，人やモノに融けこみ，感じようとする「共感志向」の取り上げ方，ラートであれば前者は「技ができるようにしよう」，後者は「ラートに合わせて回ってみよう」など，同じ運動を取り上げるにしても，どのようなことを大切にしてカリキュラムを構成していくか，授業の進め方を考えていくかという，カリキュラム改善の視点が必要だということが明らかになった。

まとめと今後の課題

本研究では，以下の 2 点がカリキュラム改善の視点として明らかになった。

1 つは，「働きかける」と共に「働きかけられる」にも着目していかなければならないということ。2 つは，他領域でも，発達段階やクラスの実態に合わせて「達成・超越志向」「共感志向」の取り上げ方を考えていくことである。つまり，今回のようにラート運動を取り上げれば，「働きかけられる」という側面に着目できるという事ではなく，取り上げる種目で，「達成・超越志向」と「共感志向」のどちらを中心としてカリキュラムを考えていくかということが必要であるということである。

今後の課題として挙げられるのは，本稿では，この実践について教師はどう感じているのか，また実際の運動場面での検討がなされていないというところである。今後，検討が必要である。

【引用・参考文献】

後藤洋子(2008)「保健体育科授業にラート運動を導入するという取り組み」，三重大学教育学部・一身田校区連携推進協議会編，p.55
駒林邦男(1987)「子どもは授業で何を学ぶか」，『岩手大学教育学部研究年報』第 46 巻第 2 号，pp.79-80
岡野昇(2003)「『かかわり合い』の成り立ちを基軸とした授業構想の視座」，『学校教育研』，No.18
佐藤学(1996)「序論　カリキュラムの言語と実践」，『カリキュラムの批判　公共性の再構築へ』，世織書房

中国新聞　2008年（平成20年）9月21日（日曜日）

器械運動もっと楽しく

津の一身田中

ドイツ生まれの「ラート」
鉄輪で〝宇宙遊泳〟

宇宙遊泳に似た無重力感覚を楽しめるドイツ生まれの器械運動「ラート」の授業が、二学期から津市の一身田中学校で始まった。ラートを中学校の授業で取り入れているのは全国的にも珍しい。（吉田優美恵）

ラートでシーソーの動きをする生徒たち＝津市の一身田中で

ラートは直径一・七―二・一㍍の鉄の輪二本を平行にした用具を使う。持ち手六カ所と足の置き場がついている。手や足の場所を変えると、側転のほか、前後転などの技ができる。重力や遠心力を使ってバランス感覚を養える。

同校では、三年前から三重大教育学部の協力で教員らが研修。今月から二、三年の約三百二十人が体育の授業で学ぶ。最初は二人一組で輪にしがみつきシーソーの動きをするのがやっとの生徒たちも、最後の六時間目にはほぼ全員が回転できるようになるという。

自分の力だけでは、うまく回転できないので、押したり、止めたりするには同級生と協力が欠かせない。三年の川端凌介君（一五）は「信頼し合ってないとシーソーで上にあがっても止まってしまう。初めは怖かったけど、もっとやってみたい」と楽しそうだった。

ラートの授業は十月初旬まであり、来年度以降も続ける予定。

20/9/18 毎日 雑記帳

◇津市立一身田中学校（笠原哲校長）で今月から鉄製の器具「ラート」を使う体育の授業が始まった＝写真。三重大と協力した取り組み。日本ラート協会（東京都）によると、中学校が授業に取り入れたのは全国初という。

◇器械体操の授業の一環。跳び箱やマット運動に苦手意識を持つ生徒にも、「初めは頭が下になるのが怖かったが、慣れると楽しい」などと好評だ。

◇どの生徒も初体験だけに、互いにラートを支え合い「助け合いの精神が身に着いた」（体育教諭）とか。ぐるぐる回るうちに平衡感覚を鍛えるスポーツは、「仲間の輪」もはぐくんでいるようだ。【山口知】

ドイツ生まれの「ラート」に挑戦する生徒ら＝津市一身田中野の一身田中学校で

20/9/12 伊勢新聞

くるくる回って楽しんで

津・一身田中 体育に「ラート」全国初導入

【津】ドイツ生まれの競技「ラート」を取り入れた体育の授業が、津市一身田中野の一身田中学校（笠原哲校長）で始まっている。同中と三重大学が連携する文部科学省の「現代的教育ニーズ取組支援プログラム事業」の一環。中学校での導入は全国初という。

ラートは、巨大な車輪を思わせる直径約二㍍の鉄製の輪を二本平行につなげた運動器具。中に入り、遠心力を生かして回転する競技。ドイツ発祥で、国内では二十年ほど前から生涯スポーツとして普及している。

器械運動が苦手な生徒の対策として企画。同大教育学部の後藤洋子教授らの指導のもと教員が研修を重ね、二学期から二、三年生の授業で試行している。

十一日は三年生の三クラスが三度目の授業。七台使い、四―五人一組で交代して挑戦。革の留め具で足を固定し、教諭や友人に支えてもらいながら遠心力でゆっくり回転。体が床と平行になったり、逆さまになったりして、悲鳴を上げる生徒もいた。

島川将樹君（一五）は「最初怖かったけど慣れたら楽しい。宙に浮いたりさかさまになったり、違う世界に来た気がする」と笑顔。

同中体育科の下地啓一教諭は「誰もが初めてなので苦手意識を持たずに済むし、グループで支え合うことで信頼関係も生まれる。生徒もとても意欲的です」と効果を話した。

後藤教授によると、グループ補助が必要で器具の保管の課題もあるが、小中学校の体育に適した競技で「今後ほかの学校にも広げていけるといい」と意欲を見せていた。

新聞　第3種郵便物認可

無重力体験 ラートの授業

すぐに回れて達成感

津の一身田中

ぐるぐる回り、体育館で無重力体験――。鉄の輪に入り体ごと回転するドイツ生まれのスポーツ「ラート」を、津市立一身田中学校が体育の授業に取り入れている。体育が苦手な生徒も楽しめるだけでなく、生徒が自然に補助役を務めて助け合ったりする効果もあったという。日本ラート協会によると、中学の授業でラートを取り入れているのは同校だけだという。

（伊沢健司）

同中学の体育館には、直径2㍍ほどの二重の鉄の輪7台が並ぶ。体育の器械運動の時間、生徒はその輪に入り両足を固定。右足を踏み込むと、体ごと右へぐるり。「ゆっくり。手を離さないで」。補助役の生徒は手をさしのべながら、転がる輪を追いかける。体育館に広がるこの不思議な光景は、ラートというスポーツだ。

同校は06年、器械運動が苦手な生徒が多いことから、教師の1人がテレビで見たことがあったラートを授業に取り入れることを決めた。だが、経験者はゼロで、器具もない。そこで、教員派遣やカリキュラムなどで連携している三重大学に相談したところ、ラートを持っていることが分かり、無償で7台借りたという。

同大教育学部の後藤洋子教授や同協会の指導員を招いて、体育教師が練習を続ける。日本ラート協会によると、日本では第2次世界大戦中、「フープ」として航空操縦士を養成するために使われていたという記録があるという。現在の国内の競技人口は約500人。

三重　13版　2008年（平成20年）10月7日　火曜日　朝日新聞

器械体操が苦手でも

ラートに挑戦する生徒たち＝津市一身田中野の市立一身田中学校

体育を担当する下地啓一教諭は「ラートは、経験者がいないのでスタートラインは同じ。最初は恐怖心があるが、器具に身を任せると、誰でもすぐに回れて達成感がある」。全6時間の授業で、回っている最中に手を組み替えられるようになる生徒もいたという。

3年の山岡恭輔さん(15)は「回っているときは宙に浮いているみたい。最初は怖かったが、今は新しい技に挑むのが楽しみ」と話す。「マット運動が苦手で回る感覚が分からなかったが、回る感覚が楽しめた」という生徒もいたという。

下地教諭は「何も言わなくても生徒同士が自然に補助役にまわってお互いを助け合う場面もあった」と話した。

キーワード　ラートは1925年にドイツで生まれた。競技は側転のように回る「直転」、二重の輪の片方だけを地面につけて回る「斜転」、転がるラートを跳び越える「跳躍」の3種目があ

朝日新聞　2008年(平成20年)8月31日　日曜日　13版　声・主張　10

若い世代

親子の関係を家族で話そう

大学生　加藤　真史（三重県鈴鹿市　21）

親による子供の虐待や子供が親を刺すといったニュースを、よく目にする。本来、親子というものは強いつながりを持っているはずなのに、なぜこのようなことが起こるのだろうか。

親にしても子供にしても、自分の立場に対する自覚が欠けているからではないか。親は子供に愛情を注ぎ、子供はそんな親に感謝の心を持つ。この当たり前の関係が、崩れてしまっているのではないのだろうか。

逆に親子のつながりが強すぎて、親離れや子離れができず、親子の殻の中に閉じこもっている場合もあるようだ。

授業の一環で地域の小学校で親子活動に携わった結果、色々と考える機会を持つことができた。

親子関係については、それぞれの親子によってどれが良くて、どれが悪いということは言えないが、日常の親子の対話の中で、一度考えてみてもいいのではないか。

育てられる者であった子供たちが育てる親になった時に、自分が親に育てられたように、自分も子供を育てたいと考えられるような関係が築かれればいいと思う。

朝日新聞　2008年(平成20年)9月7日　日曜日　13版　声・主張　10

若い世代

ふれ合う喜び子らに伝える

大学生　飯田　健二（津市　19）

総合演習という授業で親子活動を行った。ダンスを通して親と子の「ふれあいの場」をつくるための企画を立て、小学校へ持っていった。

印象に残ったのは、「ふれあいをつくること の難しさ」だった。親と子に分かれて大きな二重の輪をつくり、順々にずれてペアを変えながら踊ってもらった。

参加した親子は楽しそうに踊っていたが、本当に心が通じ合ったかどうかは分からなかった。

人と人がかかわる喜びは、自分の気持ちを理解されることや同じ感情を共有することから生まれると思う。ただ、その喜びを得ようとすると、自分の考えや意思を否定される可能性もある。

だから私たちが「教える立場」になったとき、楽しいかかわりの場や協力の場を子どもたちに提供し、うまくかかわれない子には、しかったり、話しかけたりして「かかわりの喜び」を伝えたいと思う。

朝日新聞　2008年(平成20年)9月14日　日曜日　13版　声・主張　8

若い世代

当然のことを見つめ直そう

大学生　加藤　拓史（三重県鈴鹿市　21）

「人は一人では生きていけない」。昔からよく言われてきた言葉だが、これは大人になるに連れて、何でも自分の力でできるような気になっても、本当はそうでないことを表しているように感じる。

むろん、子どもの時は、誰も一人で生きることなど不可能な話で、必ず周りの人に支えられて生きている。育てられる立場の人間がいれば、必ず育てる立場の人間がいることになる。

大学生になって、様々な経験をする中で、自分のことだから好きなようにして何が悪い、と思う時がある。けれども、これほど無責任な考えはないと思うようになった。

今、こうしていられるのも、自分を育ててくれた人、私の場合は特に両親がいるからであり、自分一人で成長してきたわけでは決してないのだ。

育てる――育てられるという関係があるのは当然だが、当たり前だからこそ、あまり気にもとめずに、その関係が希薄になりつつあるように思える。そんな今だから、それぞれの立場から、もう一度、お互いを見つめ直す機会があってもいいのではないだろうか。

(3)家政教育講座における取組

食に関する指導における幼稚園・小学校との連携

家政教育講座　磯部由香
林未和子

１．幼稚園での取り組み

（１）保護者を巻き込んだ食教育

以前から、幼稚園における食教育については、子どもに対して指導を行うだけでは、効果をあげることはできないことから、保護者を巻き込んだ実践の必要性を感じていた。そこで、幼稚園教員と大学教員で協議し、園児に対する食指導と合わせて、保護者に対しても食に関する活動を行うことにした。具体的には、保護者にレシピを募り、全保護者が関わる料理レシピ集を作成した。また、大学教員が食教育講演会を実施し、保護者とともに調理実習を行った。この活動については、事前・事後の保護者へのアンケート調査を実施し、研究的側面から省察する予定である。

（２）未就園児保育における食教育

幼児教育コースが実施している未就園児保育「ぴょんちゃんくらぶ」において、食に関わる活動を取り入れてもらった。この活動をとおして、絵本や手遊び歌など、未就園児への食教育の教材について、いくつかの示唆を得ることができた。また、活動に関わった学生に、小さいうちからの食教育の重要性について、認識してもらうことができたと考えている。この活動についても、園児と同様に未就園児の保護者へもアンケートを行い、子どもとともに食に関わる活動を経験することによって保護者にどのように影響するか、について検討する予定である。

２．小学校での取り組み

（１）栗真小学校での「弁当作り」を題材とした家庭科の授業

平成１９年度に中学校で行った「弁当づくり」を、今年度は、小学校の教員からの提案により、６年生を対象とした家庭科の授業において実践した。まず、小学校の教員と大学の教員で協議しながら授業計画を作成した。「弁当づくりのポイントの学習」、「主菜・副菜の調理実習」を経て、各児童が自分の弁当の献立を作成し、実習計画を立てて、「弁当作り」を行った。実習計画および実習時には家政教育コースおよび消費生活科学コースの３、４年生が補助に入った。実習後の児童の感想から、最初から最後まで一人で責任を持って取り組んだ中から、達成感や困難さを感じている様子が伺えた。この「弁当作り」は食に関する指導の視点からも効果的な教材であり、今回の実践により、小学校での実践の可能性

を示すことができた。

（２）一身田小学校での「さつまいも」を題材とした生活科の授業

一身田小学校からの要請により、２年生の生活科において、さつまいもを題材とした食に関する指導を実践した。この一連の授業に家政教育４年生がかかわらせていただき、卒業論文をまとめた。一身田小学校における２年生生活科の授業「さつまいもにチャレンジ！～みんなでさつまいもパーティー～」では、２００８年１１月に「さつまいもの収穫」「ツル遊び」「栄養」「蒸しパンと茶巾絞りの調理実習」「さつまいもクリーム作りの調理実習」が行われた。卒業論文に取り組む学生は、「さつまいもの収穫」「ツル遊び」の参与観察、「蒸しパンと茶巾絞り」の実習補助、「栄養」「さつまいもクリーム作りの調理実習」の授業実践を担当し、指導案の作成から授業実践の分析・考察までを行った。

「蒸しパンと茶巾絞りの調理実習」は、２年生の児童が自分たちで育てたさつまいもで蒸しパンと茶巾絞りを作り、そのうち蒸しパンの半分を１年生にプレゼントするというものである。各クラスに３～４人の大学生(家政教育コース３・４年生、消費生活科学コース４年生)が加わり、班ごとに安全管理、調理法の指導を補助した。

「栄養」の授業では、昨年度と同様に、紙芝居を用いたさつまいもの栄養指導を行うとともに、自分たちが育てたさつまいもへの思いを表現するため、「さつまいもに手紙を書こう！」という活動を新たに企画・実践した。「さつまいもクリーム作りの調理実習」では、食物繊維を目で見ることができるよう、さつまいもクリームのレシピを試作し、実践した。

学生という立場での参与観察・実習補助および教師という立場での授業実践という異なる体験を通して、以下のような様々な学びが得られた。

〇一連の授業を継続的に観察し、児童の言動や感想を分析することによって、児童の中から多様な気づきを読み取り、どのような働きかけをすればよいかを考えることができた。

〇実際の授業における教師と児童の関わりから、コミュニケーションのあり方について深く考えることができた。

〇生活科における食育の位置づけ、題材として「さつまいも」を取り上げる意味について考察し、教材研究をすることができた。

〇学生は、学校での児童の様子を踏まえた授業展開を予想し、自分で作成した指導案に基づいて授業実践を行うことができた。

課題としては、学生に授業実践の貴重な機会を与えていただいたにもかかわらず、事前に小学校教員と十分な打ち合わせやご相談ができず、準備に時間がかけられなかったこと、事後の検討会によって省察の機会を持つことができなかったことが挙げられる。

３．今後の課題

幼稚園での取り組みは、大学教員と幼稚園教員との間で最初に十分に協議を行ったうえで実践したことから、充実したものとなった。また、大学教員側からの希望を現場で受け

入れてもらえたことから、研究的な側面でもとらえることが可能となった。しかし、昨年度「学生、現場教員、大学教員」の三者に学びがあることを取り組みの目標に掲げたが、学生を関わらせることができなかったことが課題である。そのためには、他コースとの連携が必須であり、学部内にコーディネートできる機関の設置を希望する。

小学校の実践は、卒論で取り組んだ学生にとっては、現場に基づいた研究ができたことから、学生の学びという点での目的を果たせたといえるであろう。しかし、昨年度と同様に、現場教員との事後の省察を行うことができなかったことが課題である。また、参加した大部分の学生については、大学の授業における活動として位置づけることができず、取り組みごとに希望する学生を募るという形になった。実践的指導力を持った教員の育成という視点からは、単に授業の補助を行うだけでなく、現場教員との密な連携の上での学生への指導が必要であると思われる。

(4)幼児教育講座における取り組み

2 度目の一身田現代 GP 事業を進めて

幼児教育講座　中西智子

白塚幼稚園児制作『白塚幼稚園版・音楽物語』と学生制作『音楽物語』

昨年は、白塚幼稚園で学生制作『音楽物語』を保育室で上演している。今年の 5 歳児は、昨年 4 歳児の時に『音楽物語』を観劇しており、園児たちが喜んで観ていた様子は学生たちへ演じる気持を高めてくれたように観察している。昨年の上演時から「もし、幼児が観る側から演じる側になれば、どのような表現をするだろうか」と幼児のことが気になっていた。例えば、縫いぐるみの劇・紙芝居・ペープサートなどの視覚的なストーリー展開によって、音・音楽・せりふのある“お楽しみ”のイメージを引き出すことができるだろうか、園児の表現を集約した表現活動へと導くことができるだろうか、と漠然と考えていた。

昨年は幼児に大学生の『音楽物語』を観劇してもらった。本年度は幼稚園の先生たちへ【音楽教育学概論Ⅰ】の受講学生が助っ人になり、5 歳児（11 人）が制作する『白塚幼稚園版・音楽物語』の取り組みへの提案をした。そして、『白塚幼稚園版・音楽物語』の成果を大勢の学生が観劇する計画になった。

園児からの意見を取り入れながら制作する活動は始めての園児と学生であり、当初は両者に戸惑いもあった。しかし、学生 3 人は 11 人の 5 歳児からの発想による自由なストーリー展開に添い、担任の本多先生からの助言を毎回いただきながら、幼児の想いの表現へと支援した。5 人と 6 人の 2 グループでストーリーをまとめる展開に、必要となる道具・音・音楽・歌の創作へ、幼児と一緒に『白塚幼稚園版・音楽物語』実現へ向かった。

学生が幼児の 1 週間後の姿を想定する気持は、反省会と次回に向けての意気込みとなった。幼児への言葉掛けや準備物への検討に熱意を持って取り組むことができた。5 歳児担任の本多先生と浅田園長をはじめ、白塚幼稚園の職員の後押しで、『白塚幼稚園版・音楽物語』が完成した。

一方、大学では【表現ⅠA】の受講者が園児たちへ観劇のプレゼントをする『音楽物語』の制作に入るために、幼児教育専攻学生以外の受講生が幼児の姿を把握できる為に、白塚幼稚園へ日常の保育の姿を見学に行った。大学での『音楽物語』制作は、白塚幼稚園で『白塚幼稚園版・音楽物語』の制作に関わっている学生も含めての制作である。しかし、幼児教育専攻学生以外の幼稚園訪問を経験していない受講生にも、幼児が興味をもって観劇をする方向性の予測が必要であり、幼児の日常の姿を見せていただくために白塚幼稚園を全員で訪問した。

学生制作の『音楽物語』上演は 6 月 27 日で、4 歳児と 5 歳児に観劇してもらった。その後、学生たちは 7 月 9 日に 5 歳児(5 人のグループと 6 人のグループ)が演じるが演じる 2 本

の『白塚幼稚園版・音楽物語』を観劇させてもらった。11 人それぞれが役割を演じつつ、自分以外の仲間のことも気にしながらタイミングを計るような間があり、また、台詞を忘れた子へ教えてあげるなど、各グループの個性と一体感が伝わる演技であった。

学生たちは幼児自身が楽しみながら演じる世界を実地に見て、幼児が持つメッセージ性の具現化を目の当たりに学ぶことができた。

学生が白塚幼稚園の幼児から学んだ成果は、白塚幼稚園以降に出前上演した幼稚園と保育所の一体化施設(白山町・香良州町)での上演に役立った。そして、学生はそれぞれの施設における幼児の様子を実感することができた。受講生には保育所へ就職希望の学生もいて、就学前教育施設についての幼児の多様な姿を学ぶ機会となった。

白塚幼稚園での学びは、就学前教育における表現活動の学びとして貴重な経験であり、このような場を提供していただいて感謝しています。

白塚小学校：なかよし学級

昨年は中西 1 人が参加していたが、今年はゼミ生 2 人と一緒に参加した。基本的には音楽的な活動の展開により、リズム・音色・タイミングを声・身体で呼応できる活動が中心であった。8 人の児童との活動として「私は心地良い」「仲間と一緒の私の活動は心地良い」をベースにすることでクラスの活動を先生達と計画していった。「ケンパッ ケンパッ ケンケンパッ」の 4 拍子のリズム遊び、バンブーダンスの 3 拍子のリズム遊び、様々な太鼓類の打楽器遊びに声を入れる等、音楽を変えながらも基本的なリズム感覚が身体に染み入るようなねらいで企画を進めた。

児童の気持を引き出す先生達（担任 2 人、介助員 3 人）に 2 人の学生が参加して、児童の豊かな個性と可能な動きを模索しつつの授業参加であった。学生は児童に好意的に受け入れられ、学生自身も一緒に楽しみながらの経験は、彼等が大学で学習した内容の検証にもなったようである。同時に、先生達が友だちの良かったことについて児童に発表を促すタイミングや言葉掛けは、学生には大変勉強になったと思う。

先生達と何気なく話した話題（例えば、足へ鈴の付いたゴムをはめて歩いたり走ったりしながらリズム・テンポを楽しむ事）が、次回になかよし学級へ行った時にはすでに試みられているなど、先生達の教材研究の姿勢に驚くことがあった。児童 8 人 8 様の個性を生かしながら、おとなしい子・自己主張のハッキリしている子など様々なクラスの人間関係をまとめ上げる教師力に脱帽の日々であった。先生達の動きを学んだ学生は、参加経験と共に、児童のトラブル発生時に瞬時に声掛けをして程よくお互いが調和できて次への行動ができるようにする先生達の対応を学ぶ事ができた。我々は参加させていただいたことで多くのことを学び、役割を果たすこともできたように思う。学生と共に参加させていただいたことで、児童や先生から多くのことを学ぶことができてありがたく思っています。

生きもの環境づくりプロジェクト報告

幼児教育講座　河崎道夫
高橋典子（57 期生）

今年度から開設された授業科目「教育実地研究」において、白塚幼稚園において子どもと生きものの関わりを豊かにする環境作りの実践研究を行った。期間は 2008 年 3 月 6 日～ 2008 年 11 月 18 日。実践研究は幼児教育河崎教員、理科教育後藤教員、学生 4 名（岩田桃子、菅谷英美、小野祐子、高橋典子）、幼稚園職員４名（園長、年少児担任教員、年長児担任教員、事務員）で行った。また共同実践研究の内容は高橋典子の卒業研究としてまとめられている。

＜主な取り組み内容＞

１．ウサギの飼育の導入
２．水槽の生きものの飼育（メダカ、タナゴ、テナガエビ、ドジョウ等）の導入
３．畑作り（ミニトマト、落花生、枝豆等）
４．植樹（ミカン、サクランボ、ブルーベリー）

＜取り組みの基本と記録＞

これらの環境づくりの活動は幼稚園教職員とともに、極力幼児の前で、できれば幼児とともに行い、子どもの関心を引き起こし、子どもの活動を促す保育の一環として取り組んだ。その際の子どもの発言、行動を記録し、子どもと生きもののかかわりの意味を検討する資料とした。

＜実践の経過＞

３月６日：「生きもの環境づくり」プロジェクト案について白塚幼稚園と合意（河崎　於・白塚幼）　メダカの導入
３月７日：教育実地研究の学生4名へのガイダンス（河崎）
４月３日（木）：学生と幼稚園職員との活動内容の打ち合わせ（河崎）
４月10日（木）：取り組み内容について協議（後藤、河崎）
４月15日（火）：幼稚園で子どもと畑づくり、花壇づくり（職員４名、学生４名、河崎）
４月17日（木）：メダカの卵を年長クラスに導入（学生）
４月22日（火）：幼稚園で畑づくり及びさくらんぼの植樹（職員４名、学生４名、河崎）
４月23日（水）：ロップイヤーウサギを幼稚園に導入（後藤）
５月９日（金）：年少児クラスにとってきたドジョウエビの導入（学生）、ウサギと子どもとの触れあい（後藤先生）、ミカン・ブルーベリーの植樹（学生）、年長児クラス野菜苗（ミニトマト、オクラ、ピーマン、ナス）を植える（職員、学生）
6月３日（火）　「生きもの環境づくり」子どもと落花生の苗を植える（職員、

学生）
6月6日（金）：年長児クラスで絵本「みかんのひみつ」を読み聞かせる。子どもとともにみかんへの追肥（学生、職員）
7月4日（金）：絵本「ブルーベリーもりでのプッテのぼうけん」を読み聞かせる（学生）、子どもとブルーベリージャムを食べる
7月18日（金）：テナガエビの導入、枝豆の収穫（学生）
10 月 30 日（木）：落花生の収穫、子どもと味わう（学生）

＜子どもの姿＞

生きものと出会い、関わっているとき、子どもたちは多様な言動をしており、この取り組みの重要な意味がうかがえた。子どもの言動を「知識」「感覚」「観察」「感情」「感情移入」「思考」「認識」「表現」に分類し整理した。「知識」「観察」「思考」「認識」において、子どもたちの科学的探究心の芽生えが見られた。それはまた生きものが大好きであるという感情を土台にしていた。「感情」「感情移入」「表現」に整理された記録では、生きものへの温かい言動が多く見られ、生きものへの共感的感情が芽生えていることが考えられる。それらはまた、子どものコミュニケーション意欲を喚起している。ある男児は絵の中のウサギの周りにウサギの好きそうな（実は自分の好きな）果物の絵を描いていた（A）。また落花生を収穫して食べる際子どもたちは生き生きとした落花生の絵を描きながら（B）。「幼虫もおった」「ダンゴ虫もおった」と話しをしていた。教員が「落花生どんな風についてる？」と聞くと「全員ひっついとる」「根っこもある」と答え、「形は？ピーナッツは丸い？」と問うと「細い」「まるい」「ふにゃーって。」「あひるのかたちのもあった。」などとそれぞれがユニークに答えている。

幼児期において、子どもと生きものとのかかわりが豊かにあることはおそらく短期的のみでなく、長期的に大きな意味を持つことが推定される。

A：ウサギ

B：落花生

さらに生きものとの触れ合いを通して、小学生や家庭、地域の人々とのかかわりが生まれた。

＜学生の育ち‥‥レポートより抜粋＞

・またうーちゃんを見て子どもたちが言った「うーちゃん一人で寂しそう。」という発言やうーちゃんの絵にお母さんやお父さんを描いたこともとても印象的であった。私はうーちゃんを見てそんなことを感じたことがなかった。子どもたちのうーちゃんの見方、とらえ方は私たち大人とは違うのだろうか、だとしたら子どもたちの目にうーちゃんはどのようにうつっているのだろうかと悩んだ。うーちゃんという子どもたちの目の前にいる生身の生き物は子どもたちにかわいいという感情だけでなく様々な感情を呼び起こすということが感じられた出来事であった。私たちは今回の実践で様々に環境を変えてきたが、環境が変わることによって子どもたちの新しい行動が始まるということも学ぶことができた。これは私たちが直接したことではないが花壇に使う砂が園庭に盛られた日、子どもたちは皆夢中になって砂遊びをしていた。そのとき河崎先生が「これは砂山という新しい環境が出来たことによって生まれた行動」と説明してくれた。何気なく砂遊びを見ていた私にとってそれは衝撃的であった。

・生き物を飼ったり育てたりすることは、ただ世話の仕方を学ぶだけではなく、心の発達にも大きな影響を与えるものだと感じました。

例えば、うさぎの耳を持って抱っこしようとする子に「耳引っ張ったらうさぎが痛いよ」と注意をする子がいて、その注意を受けた子が「ゴメンね、痛かったね」と謝る場面がありました。実際に生き物と触れ合うことで、思いやりなどの気持ちが育っていくのだと思いました。生きものがいる環境をつくるには、飼育のための用意をしたり、植物を育てるための畑を作ったり、安全面に気をつけたりなど大変なこともありますが、今回の活動を通して生き物との触れ合いの機会を多く与えられるような場を作ることは大切なことだと思いました。

・‥‥また、生きものをきっかけに小学校や地域住民など新たな人間関係が生まれ、深まっていったことに感動した。描画活動においても、子どもの生き生きとした姿が見られ、感動のある実体験をもとにした描画活動について考えるきっかけとなった。絵を描くということがただ物事を絵に表すだけでなく、体験を自分自身で振り返ることや、感動を共有するとこになるのだと思った。

自分自身が得られた成果は、保育者として子どもと関わる上で自分と子どもの関係だけでなく、生きものとの関係、友達同士の関係、他の大人との関係など保育者と子ども以外の関係を豊かにすることについて考えられたことである。また畑を作る、メダカを取りにいく、植樹をするなど自分自身の自然体験を積み重ねることが出来た点も成果といえる。経験し子どもたちの多様な反応を見られたことで、将来保育者となる際、小さなことでも生きものと実際に保育に取りいれて行きたいと思う。

・また、私がこの活動に参加して一番よかったと感じたことは、子どもたちと生きものとの出会いを見ることができたことである。私たちは園に行って子どもたちと一緒に野菜や木を植えたり、魚やエビを持って行ったりと、子どもたちと生きものの出会いに多く関わることができた。子どもたちがどんな風に生きものと出会い、その時ど

んな反応を見せるのか、私の想像以上に子どもたちの反応は様々でとてもおもしろく、貴重な経験をすることができた。

ただ、子どもたちが生きものと出合った時の反応を見ることができたが、その後の子どもたちの気持ちや行動の変化をたくさんは知ることができなかった。ブルーベリーの紙芝居を作り読みに行くことはできたが、それ以外に途中に活動をすることができなかった。もっと出会ってからの子どもたちの様子を見に行くべきだったのではないかと思う。もちろん出会いの場面での子どもたちの様子を見ることができたのは私にとってとてもおもしろく、勉強になったのだが、その後の子どもたちの様子をもっとよく知ることで、子どもたちにとって生きもの環境がどのようなものなのかをより深く考えることができたのではないだろうか。

＜参考＞

・高橋典子　2009 年　幼稚園における「生きもの環境づくり」の実践的研究　2008 年度三重大学教育学部卒業論文

幼児教育講座における取組

幼児教育講座　滝口圭子

1．白塚幼稚園：未就園児保育ぴょんちゃんクラブの運営

（1）ぴょんちゃんクラブとは

●地域の保護者と子ども（0 歳～3 歳）が自由に参加できる。

●毎週火曜日実施

学生は，前期は 2008（平成 20）年 5 月 13 日から 7 月 15 日まで，後期は 2008（平成 20）年 10 月 14 日から 2009（平成 21）年 1 月 27 日まで，原則として毎週参加した。

●運営グループメンバー

白塚幼稚園園長浅田美知子先生

白塚幼稚園保護者ボランティア（前期 9 名・後期 8 名）

幼児教育コース 4 年生：薗田春香・谷田真希・中山郁絵・平田梢・山田真代

●ぴょんちゃんクラブの当日の流れを表 1 にまとめた。

●本活動は 2007（平成 19）年度に引き続き 2 年目となる。

（2）2008（平成 20）年度教育実地研究（通年）との連動

●幼児教育コース4年生に対しては，2008（平成20）年度教育実地研究（通年）の授業として単位認定を行った。

●授業の目的：公立幼稚園で毎週実施されている未就園児保育の運営に関わり，保育内容の一部を企画，創作，実演することを通して，それまで培ってきた実践力をより確かなものとすると同時に，公立幼稚園が担う地域の子育て支援の具体的内容を知り，その課題と具体的対策について考察する。

●参加学生は，毎回の活動後に，当日観察した子どもや保護者の様子を実践記録ノート（通称ぴょんちゃんノート）にまとめて提出した。また，学生には約 1 年が過ぎる中での子どもや保護者の変化をとらえられると望ましいと伝えた。提出された実践記録ノートは，毎回滝口が目を通し，必要に応じてコメントを書き込み学生に返

表 1　ぴょんちゃんクラブ当日の流れ（上段から下段へ時系列に並べた）

9:30～10:25am	登園（毎回共通） ・挨拶をする ・出席ブックにシールを貼る 自由遊び（毎回共通） ・おままごと・お絵描き・ブロック遊び　等
10:25～10:35am	片付け
10:35～11:00am	設定遊び（活動日により異なる） ・手遊び ・リズム遊び ・読み聞かせ　等
11:00am～	降園　掃除　片付け　反省会

却した。また，教育実地研究前期終了後には中間レポートの，後期終了後には最終レポートの提出を求めた。中間及び最終レポートの作成に当たっては，自らのぴょんちゃんノートを見返しながら，以下の点について記述するよう指示した。

①よかった点・課題点・反省点・全体のまとめ

②約 3 か月（中間レポート），もしくは約 1 年（最終レポート）を経て何が変わったか，または変わらなかったのか。変わったとしたら，変容の具体的内容，変容の契機，時期，理由等。

（3）卒業研究への結実

2007（平成 19）年度，2008（平成 20）年度と 2 年間に渡りぴょんちゃんクラブ運営スタッフとして関わった谷田真希は，保護者ボランティアの変容過程に関心を抱き，保護者ボランティアにとってのぴょんちゃんクラブの意義を明らかにすることを目的とし「公立幼稚園の未就園児保育における“お母さん先生”の変容を探る」と題する卒業研究に取り組んだ。白塚幼稚園保護者ボランティア（通称お母さん先生）を対象にインタビュー調査と質問紙調査を実施し，以下の 4 点を明らかにした。

①お母さん先生にとってのぴょんちゃんクラブ

お母さん先生にとってぴょんちゃんクラブは，子育てについての不安や悩みをはじめとする情報や体験について，発信することはもちろん，共有，更には受信する機会にもなっている。また，他の親子の関わりを見ることができるため，お母さん先生自身の子育てを振り返り，自身の子どもや子どもという存在について考える機会を提供している。

②お母さん先生を取り巻く人間関係

多くのお母さん先生が幼稚園における人間関係の深まりを報告し，幼稚園が心の拠りどころとなっている側面が示された。信頼できる幼稚園の教師や仲間がいることは，お母さん先生の大きな力になっていると考えられる。

③お母さん先生の子育て・子どもに対する考え方

ぴょんちゃんクラブにおいて，子どもや親子の関わりを客観的に見ることによって，お母さん先生自身の子育てに変化がもたらされたことが明らかになった。具体的には「絵本を読むようになった」「（子どもを）ほめようと思うようになった」「（子どもの）叱り方を考え直した」などであった。

④お母さん先生自身の内面

「自己肯定感を得た」「人見知りの私を救ってくれた」「この会がなければ他人と関わろうとしなかった」と様々な声が寄せられた。また「ぴょんちゃんクラブが（参加者の）親子の安らぎの場となっている」ことをお母さん先生が実感し，そのことが自身の喜びややりがいとなっていることも明らかにされた。加えて，ぴょんちゃんクラブにおいては，利用者である保護者と関わる，子どもと遊ぶ，子どもの遊び道具を作る，絵本を読むなどその活動は多岐に渡っている。そのため，一人ひとりが自分自身の得意な面や苦手な面を見つめ，得意な分野に積極的に取り組む一方で「人見知りだが積極的に話しかけた」など苦手なことにも果敢に挑戦する姿が認められた。

（4）学生の最終レポートの紹介

最終レポート１

1 年間を通して，ぴょんちゃんクラブを担当してきてよかった点は，まず，子どもたちの成長を感じることができたということである。1 年という長いスパンで子どもたちを見ることができたのは初めてのことであった。ぴょんちゃんクラブの回を重ねるごとに，子どもたちの表情は，緊張でこわばっていたものから安心して過ごせていると感じられるものに変わっていった。これは，子どもたちがぴょんちゃんクラブという場に慣れ，また，私たち学生にも慣れたからであろう。子どもたちの方から遊びに誘ってくるということもあった。1 年の最後には，子どもたち同士の関わりもみることができた。また，お母さん方の表情や雰囲気にも最初の頃と比べて変化があったように思う。回が進むにつれて，お母さん方同士で話している姿がみられたり，お母さん方から私たちに話しかけてくるということが多くなった。ぴょんちゃんクラブがお母さん方にとって安心できる場になっていったことが，子どもたちの遊びが安定した一因ではないかと思う。

ぴょんちゃんクラブでは，私たちとお母さん方との距離が近い。今まで実習やコアラの会の運営を経験してきており，お母さん方と接することもあったが，ぴょんちゃんクラブほどお母さん方との距離が近いことはなかった。最初は，お母さん方と話すのも「私から話さなくてはいけない」という気持ちで，義務感のようなものがあったように思う。しかし，回を重ねるごとに会話もだんだん続くようになり，あまり気負いせずに話しかけられるようになった。毎週続けて参加することで，お母さん方との関係もでき，私からも話せるようになり，またお母さん方からも話しかけやすくなったのだと思う。ぴょんちゃんクラブでお母さん方と近い距離で接することができたのは，私にとって，とてもいい機会であったとともに大きな自信にもなった。最後の方には，お母さん方と話すことを楽しいと思えるようにまでなった。

このような良かった点があるのも，反省会のおかげだと考える。反省会の場は，私にとって，反省の場であるということはもちろん，自信を持てる場でもあり，また新しい発見の場でもあった。これでよかったのかなということに対して意見をいただいたり，「こういうことがあってこう思った」ということに対して「そう思うことは，こんな力がついてきているということだよ」と言っていただいたりするなかで，もっと頑張っていこうと思えた。また，この場でお母さん先生と話ができることも大きかった。ぴょんちゃんクラブに参加しているお母さん方と話すことができるようになったのも，お母さん先生がいたからだと思う。

次に，反省点・これからの課題として，まず，最初は緊張感を持って運営していたのだが，徐々に慣れてきて，時に緊張が緩んでしまうことがあったということである。活動内容をきちんと考えられておらず，当日になって困るということがあった。気を抜かずにある程度緊張感も持続させて取り組まなければならないと思った。また，ふれあい遊びの時に，「次はこんな動きです」といったように，動作の途中で説明を入れることが難しかった。その遊びがまだ自分のものになっていなかったということもあると思う。しっかり自分のものにする必要があったと思う。そして，今までずっと反省点として挙げてきた声かけのことは，以前に比べれば，少しは適切にできるよう

になったと思うが，園長先生や他の学生を見ていると，まだまだだなと思うので，これからも自分の課題として考えていきたい。

変化したこととして，子どもたちの成長や変化に気づけるようになったということが挙げられる。ぴょんちゃんクラブの最中に，ふと「最初の頃，緊張してあんなに固まっていたのに，今では伸び伸びと遊んでいるな」と感じることがあった。子どもたちの成長を所々で感じることができたので，もっと一人一人をしっかり見ようという意識を持つことができた。一人一人しっかりと見ることができていない時は「全体的に表情が変わったな」といったように漠然と雰囲気でしか捉えられていなかったが，しっかり見ることによって，子どもたちの個別の成長や変化に気づけるようになった。

変化しなかった点は，臨機応変さがないことである。予想外のことが起こった時に，焦ってしまい何もできないことがあった。失敗を恐れているということもあるのかもしれない。まずは，行動するようにしていかなければならないと思う。

ぴょんちゃんクラブは，私にとっていい経験の場となった。また，他の学生から学ぶことも多かった。これまでは，他の学生と一緒に考えて活動を進めてきたが，今後は自分一人で取り組んでいかなればいけない。今後，ここで学んだことを生かし，反省点や課題を克服していきたい。

最終レポート 2

今回 2 年間に渡った未就園児保育実践をしめくくるにあたって，自分自身がこれまでつづってきた資料を読み返した。その中で，改めて今回のような実践に関わらせていただいたことや，多くの人の協力と理解をいただいたことをありがたく感じた。私が今感じていることを大きく 4 点に分けて述べていくことにする。

まず 1 点目は，色々なものに対して，それぞれの良さを見出し臨機応変に対応できる柔軟性を，身につけることができたのではないかと感じる。ぴょんちゃんクラブは天候によって人数が大きく左右することもある。また子どもたちの年齢も様々で，設定した活動が子どもの実際の年齢に合わないということもしばしばある。また，少人数の時には寂しいと感じがちであるが，その一方で一人ひとりの子どもや保護者の方とゆっくりと関わることができ，来ている親子もそのことを感じ取っているのではないかと考えるようになった。少人数の際にはその相手ととことん向き合い，信頼関係を築くための機会としていきたいと思うようになった。また，製作活動では，子どもたちに経験して欲しい活動を設定しているのは言うまでもないが，大部分をお母さんが製作し，結果的にその活動に子どもたち自身が取り組むことができなかったということもあった。しかし，そこでお母さん同士が製作活動を通してつながっていくのではないかと考え，作り方を教えながら，保護者同士が関わりを持つように働きかけるよう意識した。このように，その時々の良さを見出し，意識してその良さがより引き出されるように関わろうとする姿勢が持てるようになったと感じている。しかしこれは裏を返せば，活動設定が甘かったということであるので，反省点でもある。反省点はどこであったかをしっかり見つめ，次回につなげていかなくてはならないと思う。

この実践では様々な人と相対することで，得られたものが多くあったと思う。2 点目は，これまでも何度も述べてきたことであるが，子どもたちの姿から学んだことである。2 年間の実践を通して，子どもたちの表情や姿の変化を逃さずにキャッチする姿勢

が持てるようになったのではないかと感じている。子どもたちは毎回違った表情や成長を見せ，そのことに喜びを感じることができた。これは，継続してきたからこそ得られたものである。また，私自身が子どもの様子をしっかり見ることができていないと感じる時もあったが，そのような時には反省会が大きな役割を果たした。他の学生やお母さん先生の意見を聞いたり，自身で振り返ったりすることで，自分が今どのように子どもに向かっているかといったことなどを見つめ直すきっかけとなったのである。実際に保育者として保育に携わる際には，日々子どもたちを見ていくことになる。毎日の生活では，子どもたちの変化は小さなものの繰り返しである。それを見逃すことのないよう，他の人の話も聞きながら自身の在り方を振り返るというこの実践で培った姿勢を忘れずにいたいと感じている。また，実際の子どもの姿から保育を考える機会を持つことができたとも思う。例えば落ち葉プールの時，子どもがきれいな葉を探している様子を見て，次の週には形や色のきれいなものを用意したことや，子どもが「読んで欲しい」と持ってきた絵本を設定保育で読んだことなどである。子どもたちの思いに寄り添った活動は，子どもたちはもちろん保護者の方々も笑顔にすることができたのではないかと感じている。

更に，運営側のお母さん先生から学ぶことも多かった。お母さん先生と私たち学生とが協力して会をよりよいものにしていこうとする姿勢が成り立ってきたころから，会の雰囲気はどんどんよくなっていった。また，お母さん先生は，次第に自分のできることをしようという思いを強めていき，皆で子どもたちを育てていこうという姿勢になっていったように感じる。それは参加する親子や園全体にも安らぎを与えていき，そのことがまたお母さん先生たちの保育に対する主体的な活動につながっていった。子どもを育てる時，保育者としても親としてもこの「皆で子どもを育てよう」という姿勢は，子どもたちを豊かに育てていくひとつの要因となると感じた。幼稚園の保育者と保護者ボランティアであるお母さん先生，そしてぴょんちゃんクラブ参加者である保護者の安定した関係に支えられた保育がいかに重要かを痛感した実践となった。

そして 4 点目は，保育者の姿勢である。特に浅田園長は，未就園児保育の運営に当たって，保護者ボランティアに協力を求めているが，これは教師が不足しているからという理由からだけではない。保護者が園の保育に関わることで，保護者が園に来る機会を増やす，お母さんが頑張る姿を在園児が見る機会を持つ，などのねらいもあったのではないだろうか。また，浅田園長はそうしたねらいを持って実践をする中で感じた保護者たちの変化を，日々の反省会や，登園，降園時の保護者との会話の際に直接本人に伝えている。このようなまっすぐな姿勢は，保護者たちの「もっと園を盛り上げよう」という姿勢につながっていく。これは PTA 活動なども含め，未就園児保育に限ったことではないが，今回の実践なくしては感じられなかったことであった。

最後に，2 年間通わせていただいた白塚幼稚園の教職員の方々や，お母さん先生と築いた信頼関係は，私にとって本当に大きな財産となった。園の方々の理解と協力のもとで学んだことを，現場やこれからの人生でも活かしていきたいと考えている。園の方々の受容的で純粋な姿勢は，対面する相手に安心感を与えるものである。私が保育においても，他の面においても目標としたい方々と，ぴょんちゃんクラブを通して深く関わることができたことは，本当に幸せなことであると感じている。

最終レポート３

ぴょんちゃんクラブには，2 年間という長い期間継続して関わらせていただきました。その中で，会に参加した子どもやお母さん，そして一緒に活動したお母さん先生のそれぞれの様々な思いに触れることができました。2 年間という期間で，自分の中で変化した点や考えが深まった点は大きく 3 点あります。

1 点目は，子どもの姿についてです。1，2 回だけ参加した子どももいれば，2 年間継続して関わることのできた子どももいました。ぴょんちゃんクラブの運営に関わらせていただいた最初の方は，子どもの遊びにどのように介入していけばよいのかわからず，戸惑いながら関わっていたことが多かったのですが，戸惑いながらも関わることで子どもの遊びが広がったり，学生と子どもとの間の関わりが深まっていったり，子どもと関わることがその子どものお母さんと話すきっかけになったりと，ただ子どもと関わるだけでも様々なつながりを生み出すのだと，次第に実感していくことができました。子どもと関わっていると毎回が発見の連続でした。お絵描きの場面では様々な色を混ぜて楽しむ子どももいれば，お母さんや学生の似顔絵やうさぎなどの絵をひたすら描いている子どももいて，毎回，一人ひとり少しずつ異なる子どもの姿に驚き，未就園の子どもの多様な姿を知る機会となりました。また，継続して子どもと関わっていったことにより，子どもの行動一つひとつに対して，「こんなことができるようになったんだ」というように変化を感じとることも日常的にできるようになったと思います。子どもの変化に気づいていくことのできる目というものも，このぴょんちゃんクラブを通して身につけていくことができたのではないかと感じています。

2 点目は，保護者の方との関わりについてです。1 年目は，保護者の方にどのように話しかければよいのか戸惑いながら，緊張して声をかけることがほとんどでした。子どもの遊びに介入していくことはできても，側にいるお母さんとの距離をどのように

第 2 回フォーラム in 一身田でのポスター発表
「白塚幼稚園での未就園児保育の運営　ぴょんちゃんクラブ：みんなで子育て」
2008（平成 20）年 2 月 27 日　三重大学・三翠ホール

取っていったらよいのか難しく感じていました。お母さんに働きかけることができたら，その都度反省会でこの働きかけはどうだったのか，あの時どのような言葉かけをすればよかったのか等振り返り，お母さんへの支援に適した働きかけというものも考えていきました。ぴょんちゃんクラブの運営に参加した最初の頃は，お母さんと話をして関わりを持つようにしようと考えていましたが，関わっていく中で次第にお母さんの状況や背景を考えて声をかけようとしたり，お母さん同士が交流できるように働きかけを考えたりというように，働きかけの視点が変化していったのではないかと感じています。初めて来たお母さんは，このぴょんちゃんクラブがどのような場かわからず，少なからず不安な気持ちを抱いていることと思います。そのことから，特に初めての方には積極的に声をかけるようにしたり，しばらく参加していなかったお母さんが久しぶりに参加されたら，周りの状況を見つつ声をかけたりと，保護者の方の状況を把握しつつ，何を求めているのかということも併せて考え，働きかけを工夫できるようになったと思います。それは，このぴょんちゃんクラブがお母さんにとって安らぎの場，交流の場，保育について相談できる場，居心地のよい場として機能すべきであるという認識の深まりから生まれたものではないかと考えます。また，お母さんが笑顔でリラックスした状態で過ごしていると，子どもも安定して遊べるのではないかと思われた場面があり，お母さんの気持ちの安定が子どもの活動や子どもの気持ちにも影響しているのだと感じられたことがありました。そのことから，お母さんとの関わり，またお母さん同士の関わりが持てるよう，様々な角度から働きかけていくことは，結局は子どもの成長につながっていくのだと感じ，保護者の方との関わりは重要なことであると再認識することができました。

3 点目は，運営側の連携についてです。この 2 年間，お母さん先生と学生で協力して会を運営してきました。このぴょんちゃんクラブの運営側の連携を通して，保育はチームで行うのだと改めて感じることができました。お母さん一人きりで子どもの様子を見ていくことはできないし，また先生一人きりでもよりよい保育は目指せないと思われます。お母さんの存在，周りで見守ってくれる先生の存在，友達のお母さんの存在など，周りの様々な大人による働きかけから子どもの保育は成り立っています。子どもの姿を周りの大人が見守り，関わり，その子どもの姿について相談しあったり，お互いに助言しあったりする，そんな環境の中で子どもたちは育っていくのではないかと思います。反省会の場においても，子どもの様子について運営側全員で話をし，成長を喜び合ったり，活動について反省をしたりすることを通して，自分一人の視点のみではなく何人かの様々な視点から子どもの姿を見つめていくということが，よりよい保育につながっていくと感じました。また，運営側の連携によって活動をスムーズに行えたり，運営側の雰囲気によって会自体の雰囲気も変化したりと，運営側の在り方がもたらす影響は大きいものです。保育はチームワークであるということを実感できたことから，そうしたチームワークの重要性を念頭に置きながら様々な視点から子どもの姿を見るよう，今後も努力すべきであると認識しました。

ぴょんちゃんクラブに 2 年間継続して関わらせていただいたことで，子どもへの働きかけのみではなく，お母さんへの働きかけ，また子育て支援について深く考えていくことができたと思います。参加されたお母さんから「先生たちが子どもを見てくれ

るので安心」「子どもの成長を一緒に喜べて嬉しい」との言葉をかけていただいたことがありました。その言葉から，お母さんも先生を必要としていること，つまり一緒に保育をしていく存在が必要なのだということを改めて感じ，保育者の存在意義を新たな視点から再度見つめ直す機会となりました。お母さんと近い距離の中で子どもを保育することによって，お母さんの思いに近づこうとしたり，子どもの姿を通してお母さんと話をしたりすることができ，私にとってこのぴょんちゃんクラブでの 2 年間は，お母さんと一緒に保育をすることができた場であったと感じています。そして，お母さんとの信頼関係が少しでも持てたのではないかと感じられた関係のもとで保育ができたことにより，保育者とお母さんとの信頼関係が子どもにとってもお母さんにとっても大切なことであると実感しました。今後，保育者として，お母さんと一緒に子どもを育てるという意識のもとに，お母さんの思いに寄り添い，周りの先生方とも連携し，「みんなで子どもを育てていく」という姿勢を常に保ちながら子どもの姿もお母さんの姿も考えていけるよう，努力していきたいと思います。

最終レポート 4

2 年間という長い間ぴょんちゃんクラブの運営に関わらせていただき, 本当に多くのことを学んだ。1 年を通して同じ子どもと関わったことで子どもの成長を感じることができたのはもちろん, 2 年間をかけて経験を積んできた自分自身の成長も感じることができた。

2 年間継続して参加している子どもも多く, 様々な場面で子どもたちが成長していく姿をみることができた。始めたばかりの頃は，私たちが「おはよう」と挨拶をしても挨拶を返す子はとても少なかったように思う。しかし時間が経つにつれて返事をする子が増え，次第に自分から挨拶するようになり，最後の方では私たちが気づく前に自分から入り口の所で大きな声で挨拶をする子が出てくるほどだった。朝の挨拶一つをとってみても子どもたちの変化は驚くほどのものだった。また，始めはお母さんが近くにいないと不安で十分に楽しんで遊べていなかった子がほとんどだったが，だんだんお母さんと離れていても安心して遊べる子が多くなっていった。お母さんはお母さん同士で話をし，同じ空間内で子どもたちが楽しそうに遊んでいるという光景が常に見られるようになり，子どもたちにとっても保護者の方にとっても居心地がいい場所になっているように感じ，とても嬉しかった。

全体の雰囲気もどんどん変化していった。設定遊びの時，始めはどの子もお母さんの膝の上に座り，保護者の方も遠慮し合って後ろの方に座り，前の方には誰も座っていないという状態だった。しかし会の雰囲気がよくなるに従って子どもたちも安心してお母さんから離れ，私たちが前の方へ来させようとしなくても，絵本が見やすいところへ行きたいなという子どもたち自身の思いによって動くことができていた。また，絵本を見て思ったことを口に出して言う，初めての手遊びでも前を見ながら一緒にするなど，子どもたちが活動を楽しんでいる様子をたくさん見ることができた。そのような子どもたちの姿を見た時，ぴょんちゃんクラブは子どもたちが自分の思いを表現できる場になっているのだなと感じ，嬉しくなった。保護者の方も，始めは手遊びなどを一緒にしている方は少なかったのだが，だんだん参加してくださるようになり，最後にはリズム遊びのダンスを完璧に覚えている方もいるほどだった。前向きな気持

ちで積極的に参加してくださっていることが伝わり，とても嬉しかった。

また，自由遊びの時にも，保護者の方の雰囲気が大きく変化したように思う。始めは少し戸惑いながら親子 2 人で遊んでいる方がほとんどだったのだが，回を重ねるごとに保護者同士の関わりが増え，それに伴って自分の子ども以外の子どもにも声をかける姿が見られるようになった。同じ空間で遊んでいる保護者同士で育児についての相談をし，アドバイスをし合い，楽しく会話している姿が部屋のあちこちで見られるようになった。また，初めて参加されてまだ雰囲気に慣れることができないでいる方に，親しく声をかけている方もいた。初めて参加する時の不安な気持ちを知っている保護者の方であるからこそできる，温かい支援だなと感じた。保護者の方の雰囲気がよくなると，子どもたちも安心して遊べているようだった。自分が好きな遊びを次々と見つけ，とてものびのびと遊んでいるように見えた。また，子どもたちがのびのびと遊んでいる姿を見た保護者の方は，更に安心し，嬉しい気持ちで会に参加できているように感じ，相互に作用し合ってよりよい雰囲気になっているのだなと思った。

また，お母さん先生の様子も，2 年間で大きく変わったように思う。多くのお母さん先生が 2 年間継続してぴょんちゃんクラブの運営をしてくださった。始めはお母さん先生も私たち学生も，どのように関わればよいのかお互いに戸惑ってしまい，うまくコミュニケーションをとることができなかった。しかし回を重ね，色々な話をしているうちにその戸惑いは消え，ぴょんちゃんクラブに行ってお母さん先生方に会えることが楽しみだと思うほどになっていった。お母さん先生は始め絵本を読むことなどもためらい，あまり進んで読んでいる様子はなかったが，最後の方には「今日は私が読もうかな」という会話が聞こえてくるようになっていた。子どもたちの前で何度か絵本を読んだことで自信が生まれ，もう一度読んでみようという気持ちになったのではないかと感じる。自由遊びの時間も，保護者の方と積極的に関わり，育児相談などにも乗っていて，お母さん先生だからこそできる支援をしていた。また，毎回反省会をしていくうちに，どうしたらぴょんちゃんクラブがもっと充実した会になるのかを真剣に考えてくださっている様子がどんどん増えてきたように感じる。お母さん先生も学生も，お互いがぴょんちゃんクラブをもっとよくしたいという思いを強く持つようになってから，両者の関わり方にも変化があったように思う。話し合いではお互いの考えを伝えることができたし，家庭での話などの雑談までできるようになり，信頼関係があるからこそできる関わり方だったのではないかと感じる。私たちスタッフの雰囲気は，子どもたちや保護者の方にも伝わり，よりよい雰囲気を作りあげていたように思う。また，園児の保護者（ぴょんちゃんクラブではお母さん先生が園児の保護者であった）と幼稚園の先生が関わる場面を目にすることはこれまでほとんどなかったので，とてもよい経験となった。学生という第三者的な立場であるからこそ見える両者の関係や関わり方，考え方もあると思う。私はこれから保育者として，他の先生方や保護者の方と関わっていくことになるのだが，その前に，保育者，保護者のどちらでもない「学生」という立場で参加することができて本当によかったと感じる。

ぴょんちゃんクラブによって多くの子どもたちの成長を感じることができたが，自分自身についても成長できた部分がたくさんある。ぴょんちゃんクラブに参加し始めたばかりの頃は，反省会で話すことといえば「子どもたちや保護者の方にどのように

関わればよいのかわからない」ということばかりだった。始めはスタッフの人数がとても多かったということもあり，自分の役割を探すことがとても難しかった。子どもとは関わるが保護者の方とはほとんど話ができないということも多かった。しかし何度も経験していくうちに，反省の内容が変わってきた。少しずつ周りを見ることができるようになり，子どもの成長や保護者の方の変化，会の雰囲気や保育室全体の様子など様々なことが見えてきた。それに伴って，当初は自分自身についての反省がほとんどだったのが，そのうち会をよくするための反省が大半を占めるようになった。毎回色々な経験をすることで会にも慣れて余裕ができ，視野を広く持てるようになったのだと思う。また，これまでほとんど経験したことがなかった制作活動もたくさん経験することができた。1 年目には保育室がもっと充実した遊び場になるように，牛乳パックで机や椅子を作った。制作は実際に経験してみないと知ることができないことが多々あった。どのようにすればよりきれいに仕上げることができるのか，どのようにすればより早く作ることができるのかなど，先生に教えていただいたり自分たちで試行錯誤したりしながら学ぶことができた。2 年目の後期には私たち学生が壁面制作をさせていただいた。時間がない中で効率よく準備をすること，子どもたちが参加できる形の壁面を作ることなど，その時にも多くのことを学んだ。自由遊びや設定遊びの時間には，1 年目の経験や反省を活かして，様々な活動を取り入れることができた。子どもたちに，家ではあまり経験できないであろう活動をして欲しいという気持ちから，自由遊びで落ち葉プールを取り入れたり，設定遊びでパネルシアターやエプロンシアターを披露したり，1 年目にはできなかった活動を行った。この活動も，1 年目の経験があったからこそだと思う。毎回の流れを学生同士で考えることができたことも，とてもよい経験になった。全員で話し合う時間を確保することができず，会の当日の朝にリズムの CD を探したり，当日の朝の話し合いが不十分でスタッフ全員が流れを理解できていないことがあったりと，最後まで反省点も多かったが，全体を通してとてもよい会にできたのではないかと感じる。そしてそのことを，会を運営していたスタッフ全員が感じているのではないかと思える，とても素敵なメンバーだった。

本当に，ぴょんちゃんクラブとの出会いがなければできなかったであろう経験をたくさんし，多くのことを学ぶことができた。ぴょんちゃんクラブで学んだこと，感じたことを，これからに活かしていきたい。

最終レポート 5

ぴょんちゃんクラブの運営に関わることを通して，よかったと感じる点は，お母さん先生や保護者の方と継続的に，そして深く交流を持てたことである。あまり保護者の方との交流の機会がない私たちにとって，貴重な経験だった。始めは，お母さん先生にも保護者の方にもなかなか話しかけられず，もっと話さなければいけないという気持ちが強かった。しかし，回を重ねるにつれ，お母さん先生とも保護者の方とも打ち解けていき，特に意識をしなくても話すことができるようになり，話さなければいけないという気持ちから，もっと話したい，色々なことを聞きたいという気持ちへと変化していった。話さなければいけないという気持ちの頃は，話すという行為に意識が向き過ぎており，話していても自分の中にどこかよそよそしい感じがあった。また，話すことができても，話すことができてよかったという気持ちが大きく，会話できて

楽しかったという気持ちにまでなっていなかったように思う。しかし，徐々に頑張って話そうとしなくても話ができるようになり，子どものぴょんちゃんでの様子，また，家での様子を話し合うことで，子どもの成長をみんなで共有することができるようになった。子どもの成長を共有することで，以後，子どもへの接し方の見通しをより具体的に持てるようになった。保護者の方は共有できること自体に喜びを感じているようだった。そのことに気づいた時，お母さん先生や保護者の方ともっと話したい，色々なことを聞きたいという気持ちへと変化していったのだと考えられる。また，そのことに伴い，ぴょんちゃんクラブの雰囲気がよくなっていき，温かく穏やかで全員にとって安心できる場になっていったように思う。学生とお母さん先生という運営する側の関係も，運営する側と参加する保護者との関係も，会の雰囲気に大きく作用するのだということを肌で感じることができた。

また，継続的に運営に関わることで，子どもたちの成長を感じることができたのもよかった点である。緊張気味だった子の表情がだんだん柔らかくなってきた，あまり声を出さなかった子が声を上げて笑うようになった，1 人で黙々と絵を描いていた子が描いた絵を周りの大人に見せながら説明するようになった，絵本の読み聞かせの時にお母さんと離れて自ら前に出てくるようになった，ふれあい遊びや手遊びで少しずつ体を動かせるようになってきたなど，断片的な関わりでは決して目にすることのできない子どもの成長を多々見つけることができた。子どもの成長を感じると心から嬉しくなり，また成長を認められた子どもも嬉しそうだった。そういったことから，子どものちょっとした変化や成長も見逃すまいという意識が高まったように思う。保育は，まず子どもの姿ありきで考えていくものなので，このような意識が強くなったことは今後役立っていくのではないかと思う。

反省点は，打ち合わせ不足のまま設定遊びを進め，歌や手拍子が揃わないという姿が時折見られたことである。順調に進んでいることで，知らず知らずのうちにいい意味での緊張感がなくなり，なんとかなるだろうという思いが生まれ，その姿勢が運営に表れてしまったのだと思う。子どもにとっては毎回毎回が貴重な時間であり，気を抜いてよい回などあるはずがない。そういったことをきちんと念頭におき，毎回毎回を大切にする気持ちを常に忘れないようにしたい。クリスマス会で披露する劇の練習をお母さん先生と一緒に行った日に，私たちの準備不足で十分な練習ができず，終了時間がオーバーしてしまった上に，練習日を 1 日追加させてしまったことがあった。打ち合わせ不足に加え，具体的な練習の想定が不十分だったために，予測できたであろう問題が練習を開始してから露わになったことが原因である。計画の段階で実際の動きや姿を具体的にイメージしておくことの大切さを改めて痛感した出来事だった。

ぴょんちゃんクラブは，現場での実践であるため，頭の中で考えるだけではなく，実際に見たり，聞いたり，感じたりしながら学び，反省し，次に繋げていくというスタイルで，勉強になることが多かった。そして，至らない点はしっかり形として露わになってしまうが，そのことが自分の成長に大きく繋がっていったのだと思う。ぴょんちゃんクラブでの経験は今後の糧となりまた自分の自信となっていくであろう。よかったことや，自分の中で成長できたと思う点はこのまま更に伸ばし，反省で挙げられた点については同じことを繰り返さぬよう意識を強めていきたいと思う。

2. 白塚幼稚園：土曜参観日の親子のふれあい時間の担当

（1）開催要領

●日時：2008（平成 20）年 6 月 14 日（土）

●時間：親子土曜参観日の午前 9 時 15 分から 10 時 15 分までの 1 時間

●場所：白塚小学校体育館

●対象：白塚幼稚園年少児及び年長児とその保護者

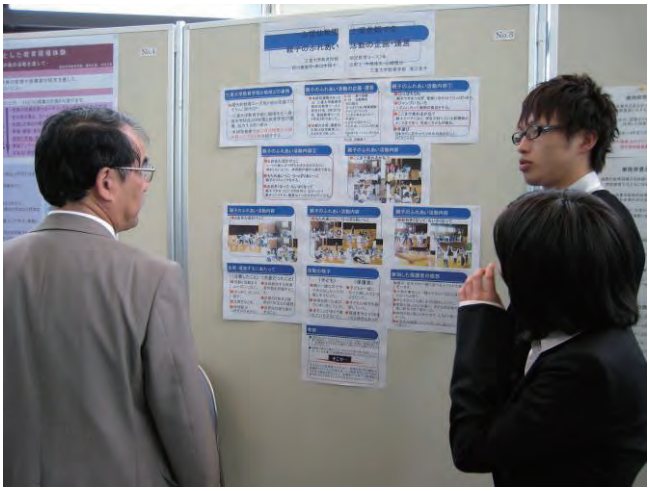
●内容：親子で体を使って楽しむゲーム
今年度は白塚幼稚園から「幼稚園でお父さんの出番を増やしたい。お父さんも活躍できる場を作って欲しい」という要望があった。学生はその要望に応えるべく，以下の活動を計画した。
①ひっぱろうね（準備運動）　②ジャンプいろいろ　③ここまで来れるかな？
④手遊び（「体でポン」「キャベツの中のあおむし」「ピクニック」）
⑤とおせんぼかけっこ　⑥もたれあいっこひっぱりあいっこ
⑦おおきくなってちいさくなって

●司会進行：幼児教育コース 3 年生 12 名

●幼児教育コース 1 年生 11 名，英語教育コース 1 年生 3 名はサポーターとして参加した。

●本活動は 2007（平成 19）年度に引き続き 2 年目となる。

●幼児教育コース 3 年生が主体となり，2008（平成 20）年度日本教育大学協会研究集会（2008 年 10 月 25 日・三重大学）において「白塚幼稚園土曜参観における身体を使った親子のふれあい活動の企画・運営」と題するポスター発表を行い，2008（平成 20）年度白塚幼稚園土曜参観日の親子のふれあい時間の担当について紹介した。



2008（平成 20）年度日本教育大学協会研究集会でのポスター発表
2008（平成 20）年 10 月 25 日　三重大学・三翠ホール

（2）白塚幼稚園での協議の記録

●2008（平成 20）年 5 月 26 日（月）土曜参観事前打ち合わせ

白塚幼稚園：浅田園長　本多先生　足立先生

三重大学：滝口

幼児教育コース 3 年生：出席 6 名（欠席 6 名）

幼児教育コース 1 年生：出席 10 名（欠席 1 名）

英語教育コース 1 年生：出席 3 名（欠席者なし）

●2008（平成 20）年 7 月 18 日（金）土曜参観事後反省会

白塚幼稚園：浅田園長　本多先生　足立先生

三重大学：滝口

幼児教育コース 3 年生：出席 12 名（欠席者なし）

幼児教育コース 1 年生：出席 11 名（欠席者なし）

英語教育コース 1 年生：出席 3 名（欠席者なし）

●事後反省会コメント

英語教育コース 1 年

・お客様意識が抜けなかった。遠慮してしまった。

・子どもとの関わり方がわからなかった。

・子どもの目線で接することができなかった。

・後ろの方に列になって座ってしまい，申し訳なかった。

幼児教育コース 1 年

・とてもよい経験になった。

・恥ずかしさがあった。声がけが少なかった。

・割り振られた役をこなすだけだった。

・何をしていいかわからない時に動けなかった。

・親子の間に積極的に入っていけなかった。自然な入り方がわからない。

→足立先生：親子活動が中心であったので，学生が必要以上に親子の間に入り込みすぎず，そのことがよかったのではないか。

・自分のことで精一杯で，1 人になっている子どもに気づけなかった。

・親子と自分たちの間の距離を感じた。

・親に対する対応がわからなかった。

・子どもたちが話しかけてくれたのに，うまく話をつなげることができなかった。

・3 年生との打ち合わせの時にわからないことをきちんと聞いておけばよかった。

・運営する側なのに，遊んで帰ってきただけのようでよくなかった。

幼児教育コース 3 年

・活動の中で，走った後の並ばせ方を考えていなかった。

・ゲームで勝敗をつけるかどうか迷った。

・台本にとらわれすぎた。その日の子どもたちのペースを見ながら活動を考えられるとよかった。

・子どもたちを名前で呼べるとよかったかもしれない。

・手遊びをしていない親子の所に行ったが，父親が戸惑っていた。子どもも恥ずかし

そうだった。
・転んだ子どもへの対応をどうすればよかったのか。
→本多先生：そうした場合は担任がフォローするので大丈夫である。
・予定より早く時間が過ぎた。
・言葉と言葉との間に間があった。
・音楽を流したことがよかった。
・3 班とも時間配分をしっかり考えることができていた。
・大学で適切なリハーサルの場所がなくて困った。
・自分に余裕を持てるとよかった。
→本多先生：それは自分でも難しいことである。
・白塚幼稚園での事前打ち合わせの時に，自分たちの甘さを感じた。
・実際にやってみること，本番を想定することの大切さを学んだ。
・運営側の大変さがわかった。
・去年はわからなかったが，先輩の努力を知ることができた。
・今回は 3 年生が全部を企画したが，1 年生と一緒に企画ができるとよかった。
・1 年生の不安にもっと目を向ける必要があった。

白塚幼稚園：足立先生

・事前打ち合わせで調整した結果が出ていた。
・自分が入る隙もないくらい，その場の空気，雰囲気ができていた。
・自分も，人の姿を見ながら楽しめたと思う。
・説明や子どもへの言葉がけなど，間違ったとしてもその人の人間らしさがにじみ出てよいと思う。表情なく説明するよりも，笑顔で表情豊かに話す方がよい。

白塚幼稚園：本多先生

・1 年生と 3 年生の打ち合わせがよくできていた。
・活動と活動のつなぎ目がスムーズだった。
・1 人 1 人が自分に課せられた仕事をしっかり頭に入れていた。
・3 年生が 1 年生に対して，気づいた時に対応を教えている姿もよかった。
・昨年に比べて安心して見ていられた。
・学生がゲームの説明をしている時に，近くにいる子どもに話しかけられた時は，子どもと会話をするのではなく，しっかり前を向いて説明を聞かせるようにすること。
・わからないことがあって当たり前である。その時のために，3 年生がいるし，私たちがいる。先輩や先生をどんどん頼りにして，活動に取り組んで欲しい。

白塚幼稚園：浅田園長

・今回は，父親が輝ける場を作りたかったが，その趣旨に沿った活動内容になっていてありがたかった。
・父親の参加が多かったので嬉しかった。父親の参加は全 20 組中 18 組であった。
・親子活動の盛況を受け，その後のワークショップも盛り上がった。
・思っているだけではなくて，言葉にして伝えていくことを学んで欲しい。

三重大学：滝口

・昨年度の反省点が活かされていてよかった。

・事前打ち合わせは大変であるが，本番を経験して事前打ち合わせの大切さを実感できたのではないか。
・1 年生にとっては，3 年生や幼稚園の先生方の対応や姿を見るという貴重な機会になったと思う。
・「教育実地研究基礎」は 1 年生の時点で現場に赴き，自分の課題を見つける授業である。今回見つけた課題について，その課題を克服するために，今後自分は何をすればよいのかをしっかり考えて欲しい。課題を見つけただけでは，次も同じ課題にぶつかるだけである。どうすれば克服できるのか，そのためには何をすればよいのかを，自分自身で考えて明らかにして欲しい。
・1 つ 1 つの活動それぞれに，幼稚園の先生方の思いがある。学生は，その思いを知ることができてよかったのではないか。
・このような活動ができるのは多くの方々の支えがあってこそである。子どもたち，保護者，先生方，先輩，友だち等々に対して，感謝の気持ちを持とう。

（3）2008（平成 20）年度教育実地研究基礎（前期集中）との連動

●幼児教育コース 1 年生 11 名，英語教育コース 1 年生 3 名に対しては，2008（平成 20）年度教育実地研究基礎（必修・前期集中）の授業として単位認定を行った。2008（平成 20）年度教育実地研究基礎のスケジュールを表 2 に示す。
●授業の目的：公立幼稚園で実施される参観日の親子のふれあい時間を担当することを通して，子ども，保育者，保護者が関わる幼児教育の現場を知ることにより，幼児教育の学修に臨むことへの自覚と責任を促す契機とする。

表 2　2008（平成 20）年度前期集中「教育実地研究基礎」スケジュール

日付	活動内容
5/14（水）	大学でのオリエンテーション
5 月 第 4 週まで	3 年生が中心となり，1 年生の役割分担も考慮しながら活動内容を計画する。頭の中で考えるだけではなく，実際にやってみて実感を得ておくこと。事前打ち合わせで白塚幼稚園の先生方からの質問に答えられるように，手順，子どもや保護者への説明，進行，列の作り方等々を具体的に考えておくこと。
5/26（月）	全員で白塚幼稚園に行き事前打ち合わせをする。3 年生が中心となって白塚幼稚園でプレゼンをし，先生方から指導やアドバイスをいただく。
6 月第 1 週	アドバイスを参考にしながら活動内容を練り上げる。1，3 年生合同練習をする。白塚小学校体育館に行き，実際の活動の場で距離，間隔等の確認をする。
6 月第 2 週	アドバイスを参考にしながら活動内容を練り上げる。 1，3 年生合同練習をする。
6/14（土）	白塚幼稚園土曜参観当日　活動時間 9:15～10:15am
6/23（月）	大学で当日のビデオを確認しながらの反省会
7/18（金）	白塚幼稚園での反省会 各自感想レポートを持参し白塚幼稚園に提出する。

●3 年生が中心となり 1 年生と協力しながら白塚幼稚園土曜参観の 1 時間を運営する。3 年生は 1 年生に対して，幼稚園にうかがう際の基本的な心構え（服装，挨拶など）の指導も担当する。

（4）学生の感想レポートの紹介

1 年生感想レポート 1

今回の白塚幼稚園の土曜参観が私たち1年にとって初めての実習ということもあり，とても勉強になった。先輩たちの姿を見て，子どもたちと遊びをする上で，まず，第一にゆっくり大きな声でわかりやすく喋ることが大切だとわかった。こちらが元気よく喋れば子どもも元気よく返してくれる。こちらがわかりやすく丁寧に何度も教えれば子どもも必ず理解してくれる。当たり前の事だけどそれができなければ何も始まらないと思った。次に，先輩たちは司会を進める中でも時々子どもにわかったか尋ねながら進行していて，それもすごく重要だと思った。それだけでも，子どもに自分だけ理解できず置いていかれている感じをなくすことができると思う。それに，常に子どものことを考えているのがよくわかった。子どもにもそれが伝わったと思う。

自分の反省としては，もう少し子どもたち一人一人に声かけをすべきだったと思う。練習どおりに遊びの手伝いはできたし応援も自分なりに一生懸命大きな声でやったけれど，そればかりに集中しすぎた。先輩や他の人は前で遊びを進行していきながらも，困っている子どもがいないか常に見ていて行動も素早く的確だったように思う。私もそのようになるためには，もっと実習をたくさんやって，経験を積み重ねることが必要だと思った。そして，次にこういう機会がある時は，この反省がいかせるよう積極的に動けることを目標にしたい。また次の反省として，保護者も参加した形であったため，親と子どもの中に入っていくのが予想以上に難しかった。変に遠慮をしてしまい，どう接すればいいのかわからず，とまどってしまった。手遊びなどをする時でも，もっと親と子の輪の中に入っていくべきだった。ビデオで見た時，親と子ども，私たち 1 年生との間にすごく距離感があってさみしい感じがした。遊び全体もさみしい感じに見えてしまった。最初にもっと近くに立って遊びが始まるにつれ，親と子どもの輪に少しくらい無理やりにでも入り込んでいくぐらいした方がよかったかなと思う。これも経験が必要だと思った。

しかし，今回の土曜参観は素晴らしいものだったと思う。親，子ども，皆が楽しめていたのが伝わってきた。私も緊張や不安はあったけれど，本当に楽しかった。それは皆が笑顔になっていたからだと思う。遊びの内容にしても，「ひっぱろうね」や「ジャンプいろいろ」や「もたれあいっこひっぱりあいっこ」は大切な親子のスキンシップを図れて親にとっても子どもにとっても嬉しかったと思う。「とおせんぼかけっこ」ではお父さんも活躍できる場をみごとに実現できたと思うし，最後の「おおきくなってちいさくなって」では皆で輪になった時，すごく一体感があって感動した。最後のしめにはぴったりだと思った。先輩たちのこの企画に参加して，私も 3 年になったらこんな風にシンプルで皆が楽しめる遊びをやりたいと思った。

私個人としては反省もすごく多かったが，その分いろんなことを学べた。なによりこんな素晴らしい場に自分が参加できて本当によかった。すごくありがたいことだと

思った。今回のことを忘れずに必ず次の実習につなげていきたい。

1年生感想レポート2

今回,3年生の先輩方が土曜参観を運営するにあたってお手伝いさせてもらうという形で，大学に入って初めて幼稚園での実習に行かせてもらいました。私自身，小学校や中学校の頃に幼稚園・保育園には何回か行ったのですが，自分たちが主体になって計画し，動くということは初めてだったので今回の実習が楽しみでもあり，不安でもありました。

今回の実習は去年の反省を生かして，話し合いやリハーサルを何回も先輩方が設けてくれました。話し合いやリハーサルのおかげで内容の企画には関わっていない私たち1年生も本番での流れ，内容がよく分かりました。当日も朝に通し練習をしたのですが，時間配分などが上手にいくか心配でした。しかし，本番では時間がぴったりに終わりさすが先輩だなと思い，また話し合いやリハーサルの大切さが本当によく分かりました。

全体的には反省点もありますが，成功だったと思います。お父さんと一緒に活動するという目標も達成できたのではないかと思います。土曜日だったし多くのお父さんが来てくださるかどうかがとても心配だったけれど，当日は本当にたくさんのお父さんが来てくださっていて，積極的に活動にも参加してくださったので成功した理由にはそれも入るかなと思います。

最初に園児を迎える時，朝の練習の延長線上のような形になってしまって残念でした。そのせいで少しバタバタしてしまって（1年生が）あまりいい出迎えができなかったかもしれません。活動の始まる前は余裕をもって完璧な準備をしなければいけないと思いました。その後の準備体操で私は学生同士で組んでいたのですが，その時お父さんと子どもたちの様子を見て本当に楽しそうで嬉しかったです。しかし，その時に中には活動をしたくなさそうな子どももいて，その子を見て私は何をしてあげればいいか分かりませんでした。手遊びの時にもそのような子を見かけたのですが，その時

『ここまで来れるかな？』

もその子に何をしてあげればいいか分かりませんでした。どうしたら楽しんで活動してくれるのか，何故活動したくないのかが分からず結局行動出来ませんでした。手遊びの時は先生が子どもを説得しに来てくれました。これからは子どもに話しかけることだけでもしようと思いました。今回はあまり積極的に子どもたちに話しかけにいくことができなかったので，これからはそれが私の課題です。先輩方の子どもへの接し方を見ていて，やっぱりこういった場に先輩方は慣れていると思ったし，子どもたちもそういった場に慣れている先輩方に近寄っていくなと感じました。また，体育館で全員に話す時の話し方なども先輩の話し方を聞いてとても参考になりました。

反省会にも出た内容ですが，活動中に転んだ子がいた時の対処も難しいと思いました。今回その子がすぐに活動に参加してくれたのは先生の的確な対応があったからだと思います。そのような場合どうすればよいかなどこれから勉強すべきことがたくさんあると思いました。

今回の活動に参加してみて，子どもたちのことを本当に知らないし，何かあった時の対処の仕方，子どもたちへの関わり方さえも自分ひとりではわからないと思いました。3 年生から渡されたシナリオ通りにしか動けず，臨機応変に行動するということができませんでした。でも今回，先輩方や白塚幼稚園の先生方の様子や子どもたちへの関わり方をみて本当に勉強になりました。また，子どもたちと一緒に活動できて本当に楽しかったです。これから私が実習に行く時には今回の反省を生かして頑張りたいと思いました。自分が 3 年生になった時，このような企画を立てられるか，先輩方のように上手に子どもたちや保護者の方々と関わっていけるかどうかは不安ですが，今できることを精一杯していきたいと思いました。

最後になりますが，今回の教育実地研究基礎は私にとって，とても勉強になり参考になりました。子どもたちと関わってみて改めて将来を考える機会になり，幼児教育に関わる仕事に就きたいと思いました。またこれから実習をするにあたっての課題などもでき，大学生活の中で学ぶべきことを考える機会にもなりました。確かに 1 年生と 3 年生，そして先生の予定を合わせて短い期間で企画を考えることは大変でしたし，初めての実習が親子参観という場であったことも負担がなかったとは言えませんが，私にとっては本当に貴重で有意義な時間でした。自分にプラスになることが多い授業でした。白塚幼稚園の先生方，滝口先生，3 年生の先輩方，貴重な場を設けてくださって本当にありがとうございました。

1 年生感想レポート 3

私は今回，3 年生の補助という形で白塚幼稚園の土曜参観に参加させていただいて，色々感じたことがありました。

まず，私にとって土曜参観という行事に参加することは初めてのことだったので，どうやって対応したらよいのかわからず，戸惑ってしまうことがたびたびあり，自分の経験のなさや未熟さを改めて感じさせられました。今回の反省点は，なかなか勇気が出ず，どう話しかけていってよいのかもわからなかったため，親子の間に入ってコミュニケーションをとることができなかったこと，自分に与えられた役目を果たすことで精一杯で，周りの状況に気を配る余裕がなかったことでした。そんな中，落ち着いた態度で園児・保護者ともうまく対応していた 3 年生の動きにはとても感動しまし

た。場の盛り上げ方，聞き取りやすい話し方などたくさん考慮していて，とても頼もしく，私たちがこれから見習っていくべきことをたくさん教わりました。

また，白塚幼稚園の先生のプロの仕事を目の前で体験できたことはとても良かったと思います。手遊びの時に，機嫌をそこねていたのか一緒に手遊びに参加しない園児がいたので，私はその園児に楽しんでもらおうと話しかけたりしたのですが，私にはどうすることもできず，困っていた時に，白塚幼稚園の先生に助けてもらいました。さっきまでの不機嫌さがうそだったかのようにすっかり機嫌を直したその園児を見た時に，先生のプロの仕事のすばらしさを実感しました。これから私たちも将来そのようにプロの仕事ができるように，今回経験したことを積極的に吸収していきたいと思いました。

今回の 3 年生が企画したものは，前回の反省点であった時間配分は克服していたし，体を激しく動かす遊び，体を休めるゆったりした遊び，と交互に入れたりしていて，とても考慮されていてすばらしいものだと思いました。それに園児も保護者も私たち学生もみんなが楽しめる内容でした。私たちは子どもたちをサポートする役なのに，気づいたら私自身が楽しんでゲームに夢中になっていました。「とおせんぼかけっこ」の時，ある保護者の方に「こういう体を動かすのも楽しいね」と声をかけてもらった時はとても嬉しかったです。なかなかお父さん同士が触れ合う機会はないと思うので，とてもよい機会であったと思います。会場にいる全員が楽しめる遊びを考えた先輩方はすごいと思います。私たちも先輩方を参考にし，またもっとよいものを作っていけるようになりたいと思います。

私は今回，子どもたちと触れ合うことで元気をもらった気がしました。子どもたちはとても素直で明るくて元気いっぱいで素敵な笑顔でした。その笑顔を見ていたら，自然と自分もたのしくなり，もっと幼稚園の先生になりたいと思いました。

最後に今回，このような幼稚園の行事に参加する機会を与えてくださったことに感謝しています。初めてのことで反省すべきことばかりだったと思いますが，一生懸命

『とおせんぼかけっこ』

に私自身が頑張れたことに満足していますし，自分に足りないものを認識できたよい機会であり，今後幼児教育を学んでいく上でどのようにそれらを改善していったらよいかという課題が見つけられたと思います。確かに，初めての現場体験が親子参観ということは，何もわからない 1 年生にとっては大変なことだったかもしれないけれど，私にとってはとてもよい経験になったと思うので，これからもこのような機会を続けていってほしいと思います。

3 年生感想レポート 1

白塚幼稚園親子参観のお話を聞いた時，去年の先輩方が企画・運営し，私たちが手伝った時のことを思い出した。今回は手伝いではなく，企画から私たちの仕事である。そして，1 年生を引っ張っていくという大きな役割も担っていた。やはり，プレッシャーもあり，不安も大きかった。幼稚園からはお父さんが積極的に参加できるようなことをして欲しいという要望もあったので，企画の際，配慮することがたくさんあった。ゼミごとに分かれ，長い時間をかけ企画し，本番に臨んだ。

本番では，きょうだいが来る可能性もあったし，お母さんだけが来る可能性もあった。人数の把握はとても難しかった。不安な気持ちで始まったが，子どもたちが登園してきて，挨拶をしていると，少し気持ちが楽になった。子どもたちの笑顔に元気づけられた。そして，まず音楽ゼミ企画の準備運動が始まった。私たちは前で見本を見せた。ビデオを見て反省会をした時に，ジャンプの見本が少しずれていたことに気づいた。思っていたよりも，リズムのとりにくさを実感した。そして次に，心理ゼミ企画の「ここまで来れるかな？」が始まった。私たちが企画したのだが，やはり，その場で人数を把握し 3 グループに分けるというのは難しく，各グループで同じ人数にはならなかった。しかし，本番の人数は，本番になるまで分からなかったので，このゲームをするにあたっては，人数把握はそうするしかなかった。またこのような機会があれば，人数を把握しておく必要があると感じた。そしてゲームが始まった。このゲームの時に音楽を流したことは成功だったと思う。反省会の時にビデオを見て，音楽があることで楽しい雰囲気になっているように感じた。しかし，この時私は自分の担当である進行で頭がいっぱいであり，なかなか応援をすることができなかった。それが反省点である。学生が活動の補助に回っていたこともあり，この時応援の声が少なかった。しかし，新聞を持っている 1 年生 6 人は常に「頑張れ！頑張れ！」と応援していた。子どもたちも，近くでお兄さんお姉さんに応援されると心強かったのではないかと思う。皆ゴールし，どのチームについてもよいところを挙げようとしたのだが，予想以上に難しく苦戦した。ある程度考えてきてはいても，実際はその時にならないと分からない。そのため，その場でしっかり考えていかなければならないなと思った。そして，次に手遊びをした。私がマイクで進行をしたのだが，ビデオで確認すると早口になってしまっていた。次回からは，ゆっくりと子どもたちと話をする感覚で言えるようになりたいと思った。最後に，教育ゼミ企画の「とおせんぼかけっこ」が始まった。お父さんと子どもたちはそれぞれ別の場所で別の説明を受ける。これはとても分かりやすくてよかったと思う。そして，チームを組んでいるお父さん同士も 2 人で 1 つという感覚で，子どもたちを捕まえる楽しみを共有できたのではないだろうか。子どもたちは，精一杯走り，精一杯逃げていた。その時の笑顔がとても印象的だった。

教育ゼミは活動を多様に用意していてどのような状況であっても対応できるようにしてあり，すごいなと思った。そして，ちょうどよい時間になり，リラックスしたあとに「おおきくなってちいさくなって」をした。小さい円から始まり，どんどん大きい円になっていく。そして，最後には全員で大きな円を作る。これはとても感動した。たくさんのゲームをし，たくさん笑い，たくさん頑張った子どもたち，お父さんお母さんたち，自分の役割をしっかり考え，動き，楽しんだ学生たちが 1 つの円になった。皆で，気持ちを共有している気持ちになった。そして，園長先生に代わり，お話を聞き，親子参観が終わった。

終わったあとの気持ちはとてもすっきりしていた。本当に力いっぱい頑張ったと思えた。みんなで協力することの大切さも改めて実感した。涙が出そうになった。今回の授業で，企画する大変さを身をもって感じた。学生同士で時間を合わせて話し合いや練習をすることが大変だった。しかし，とてもやりがいがあった。先生，幼稚園の先生方，このような機会を設けて頂き，本当にありがとうございました。

3 年生感想レポート 2

今回保育参観での 1 時間を担当させていただくことになり，不安な点が多くあった。昨年の先輩方の活動の様子を見て，時間配分や活動と活動の合間，活動内容，司会の臨機応変な言葉掛けなど，難しいながら考慮して改善していかなければいけない点が多く見つかった。

始めに活動内容を準備し，幼稚園に打ち合わせに行かせてもらった時には，自分たちの甘さを実感した。活動内容を決めるのに精いっぱいで，実演し，本番を想定することができていなかった。子どもたちや保護者の方たちにとっても貴重な親子のふれあいの時間は 1 回きりであり，私たちに任せてくださった園の先生方にも申し訳ないと思った。また，私たちが引っ張っていかなければならない 1 年生に対しても同じである。

園の先生方にいただいた意見などをもとにみんなで何度も話し合った。学校で話し

『もたれあいっこひっぱりあいっこ』

合ったことも，家に帰って 1 人で考えているとまた新たな問題が出てくることの繰り返しだったように思う。私たちの班では「ここまで来れるかな？」というゲームを企画したのだが，チーム戦にするかどうか，チームの分け方，親子でどのように走れば楽しいかなど，何度も話し合った。そして，他のグループや 1 年生と合同練習をすることによって新たな問題が挙げられ，改善を加えていくこともできた。またこの合同練習で，自分たちが担当する活動のことばかり考えていて，他の班が担当する時間での自分の動きがわかっていないことにも気づけた。

保育参観当日まで話し合いは続いた。当日のリハーサルで気づいたこともあったからである。準備物は後ろではなくて前に置いたほうがよいとか，司会の話し方など，時間ぎりぎりまで話し合っていた。本番は意外にも淡々と進んでいった気がする。子どもと保護者の方たちが体育館に集まってきた時には緊張して慌ててしまっていた。私は司会を担当するところがあったので，セリフなどを数回イメージしながら練習していたが，本番では予想以上に間があくところが多かった。チーム分けのメダルを配る時や，ゲームスタート前に時間がかかってしまった時などである。セリフのメモ書きを見る余裕もなかったので，その場で思いつく言葉掛けをしたのだが，間の時間をすべて埋めることはできなかったように思う。また私たちはゲームの事で頭がいっぱいで，その後の手遊びに対する意識が希薄になってしまっていた。例えば「体でポン」という体を使った遊びでは，速さを変えて遊ぶことを忘れてしまっていた。また，これらの遊びを家に帰ってから親子でできるように，プリントにして最後に配布すればよかったなと感じた。しかし，子どもたちや保護者の方が楽しそうに笑っている姿を見ることができ，本当に嬉しく思った。

活動後，大学でビデオを見ながら客観的に振り返ることによって，気づくことも多かった。まず「ここまで来れるかな？」のゲームの時に，私の司会の声があまり聞こえていなかったことである。声掛けによってもっと盛り上がることができたのではないかと思う。次の活動や進行のことばかり気にしてしまっていたので，私自身がもっとゲームを楽しむことによって自然に言葉掛けができたのではないかと思う。次に，「とおせんぼかけっこ」の時に転倒してしまった女の子のことである。ビデオを見て初めて気づいたのだが，本多先生が怪我がないかなどの確認をしにその女の子のところに駆け寄っていた。私たちは，そこまで意識を配ることができなかったことを反省した。やはり，担任であるという意識があってこそできることだと思う。幼児教育に臨もうとする者として，本多先生の行動はとても見本になった。

今回 1 番に学んだことは，本番を想定して考えることの大切さである。本番当日まで改善を加えていったこともあり，本番を想定することで出てくる問題点・改善点を実際に多く見つけることができたと思う。

改善点としては，もっともっと時間をかけてみんなで話し合うということである。自分たちの班はもちろん，他の班との意見交換が大切である。他の人の意見を聞いて気づくこともあるだろうし，何より自分たちの活動を客観的に把握する機会になる。次に，本番を意識した合同練習が何度かできればよかったと思う。もっと前から話し合いを進め，体育館で実際に通し稽古ができればよかった。1 年生とは合同練習だけの顔合わせとなってしまい話し合うこともなかったため，受け身になってしまい，分か

らないことも多かったのではないか思う。また何度も本番を想定した練習をすることにより自信がつき，本番の臨機応変な言葉掛けにも繋がったのではないかと思う。

今回の経験で学んだことを今後に生かしていきたいと思った。

ありがとうございました。

3年生感想レポート3

私たち3年生にとって，一時間という長い時間を企画・運営するのは初めてであった。昨年の先輩方の活動を振り返り，反省レポートを読み返し，同じミスだけは繰り返さないようにしようと決めていた。土曜参観という大事な時間を任されるようになった嬉しさ，絶対に成功させたいという意欲，子どもたちや保護者の方々と触れ合う楽しみなど，様々な期待に胸が膨らんでいた。その一方で，私たちにできるのだろうかという不安が多くあったのも確かである。昨年の反省点が改善されていたかどうかを確認しつつ，今回の活動を見直していこうと思う。

まずは活動の説明について，分かりやすい言葉・聞き取りやすいスピード・堂々とした態度で話すよう心掛け，特に台本を読んでいるような口調にならないように気をつけた。だからといって，まだまだ経験不足な私たちがアドリブで本番に望むことは到底無理である。よって，あらかじめセリフを暗記したのだが，一字一句間違えないようにするというよりは，伝えなければならないことを全体的につかむことにした。私が担当したゲームは，子ども1人と大人2人の3人1組で行うものであった。私たちが考え出した活動なので，手本を見せて理解してもらう必要があった。初めは私たち学生が親子役を演じるつもりだったが，似たような背の3人が並んでもリアリティが無く，動きも不自然になってしまうので，子どもたちに参加を募り，協力してもらうこととなった。親子全員が集合したあと，「今からゲームのお手本をみんなに見せようと思います。誰かお手伝いしてくれるお友達はいないかな～？」と呼びかけた。もしも手が挙がらなかった時のことも考えて，学生に依頼してあったが，そんな心配は要らなかった。また，新聞紙を破ることが吉（＝楽しい）と出るか凶（＝怖い）と

『おおきくなってちいさくなって①』

出るか，不安だった。しかし想像以上に大好評であった。

次に，活動の合間の沈黙を極力減らすようにした。今回 3 つのグループに分かれて出し物をしたのだが，引継ぎはなかなかスムーズにいったと思う。自分の担当でない時も余裕を持って全体を見回し，必要があれば補助に回る姿勢を一人ひとりが自覚していた。全員が運営の主体であるという責任感を持ち，自分の役割をしっかり果たせていた。時間配分の問題は，昨年度誰もが後悔した点として取り上げていたものなので，それぞれの班が時間調整できるよう，予備の活動を用意したり，活動を発展させて繰り返したりできるようにしていた。また，タイムテーブルを作り，1・3 年生の動きを目に見える形にしたことで，時間が余ることはなかった。

これまでにたくさんの保育現場を見させていただき，徐々にではあるが，子どもたちにも保護者の方にも積極的に話しかけられるようになってきた。今後の課題としては，もっと細かい部分まで気を配り，自ら進んで行動することである。先生方や先輩方から教わってきたことを今度は後輩たちに伝える番だと思う。1 年生にはまず，自分自身が笑顔で楽しんでほしいと伝えた。

今回の活動で新たに発見した反省点は，分かりやすい手本の見せ方である。大きな声やダイナミックな動きはもちろんだが，ビデオで自分たちを客観的に見た時に「果たしてこれで理解してもらえただろうか」と疑問が残った。自分の体で隠してしまったり，学生同士の動きの上下左右がバラバラになったりすることのないよう気をつけたつもりではあったが，これからはもっと気をつけて改善していきたい。また，けがへの対応の仕方も学んでいかなければと思った。私たち学生が率先して楽しむ姿勢は忘れてはならないが，常に冷静さも持ち合わせていなければならない。これからの実習などで今回の反省を十分に活かしていきたい。

最後になりますが，昨年に引き続き，今年も白塚幼稚園の土曜参観に参加できたことを本当に嬉しく思い，感謝しています。やはり私たちにとって，このような実践は自分自身を見直す機会となり，とても勉強になります。まだまだ多くの改善点が残っていますが，しっかり反省し，成長していきたいと思います。ありがとうございました。

『おおきくなってちいさくなって②』

3. 白塚小学校：4 年生の学年活動での親子のふれあい時間の担当

（1）開催要領

●日時：2008（平成 20）年 11 月 13 日（木）
●時間：学年活動日の午後 1 時 45 分から 3 時 20 分までの約 1 時間 30 分
●場所：白塚小学校体育館
●対象：白塚小学校 4 年生とその保護者
●内容：親子で体を動かす遊び
①アブラハム（準備体操）
②お絵かき伝言ゲーム：画用紙とペンとテーマの書かれた用紙を配り，与えられたテーマを示す絵を子どもたちが 1 人ずつ順番に少しずつ画用紙に描いていき，チームで 1 つの絵を完成させ，同じチームの大人がそれを見て，テーマが何であるかを当てるゲーム。10 人の大人子ども混合チーム戦。
③ヒップホップ：それぞれのチームで体育館の両端に分かれ，約 1 メートル間隔で 1 人ずつ座り，おしりだけを使って前の人のところまで行き，バトンの風船を渡してリレーをするゲーム。
④ミッションインポッシブル：それぞれのチームの列の前に約 2 メートル間隔でフラフープを 3 つ置き，スタート地点に近いフラフープから順に 10 点，20 点，30 点とスタートから遠くなるほど点数が高くなるよう配点する。制限時間内に 1 人 1 個ずつボールを運びフラフープ内にボールを置き，その合計点を競うゲーム。約 10 人のチーム戦。
●司会進行：幼児教育コース 3 年生
奥山木綿子・恒川文香・寺本由佳・西口真梨子・平野梢・水谷りさ
●本活動は 2007（平成 19）年度に引き続き 2 年目となる。

（2）学生の感想の紹介

・これまで，小学生やその保護者と関わる機会がなかったのでとても新鮮でしたし，また勉強になりました。活動と活動の間の移動の仕方や，それぞれの活動の準備などについて細かく計画を立てていくことが難しかったです。
・今まで幼児としか関わったことがなかったため，小学校 4 年生というのがどのような特徴を示す年齢であるのかがわからず，活動内容を考える時に少し困った。当日は，子どもたちがとても元気に楽しんでいた様子を見ることができて嬉しかった。保護者の方々にも楽しんで体を動かしてもらえたのでよかったと思う。
・小学生の活動を担当するのは初めてで，どのような活動ならば親子が楽しめるのか迷ってしまった。1 番最初に行った準備体操のアブラハムでは，ほとんどの生徒が恥ずかしがり，動いている姿があまり見られなかった。私はなるべく大きく体を動かせばみんなに楽しんでもらえると思っていた。しかし小学生 4 年生にアブラハムは少し幼すぎたように感じた。全ての活動において，小学生 4 年生に適しているのかどうか不安だったが，自分たちが楽しんで一緒に活動に参加することで，どの活動も楽しんでもらえていたように感じた。どのような活動でも，前に立つ者の表情や態度が大きく影響すると思った。また，どの活動もチーム戦にしたことで，親子が

応援し合い，触れ合う機会がたくさんできた点はよかったと思う。

・中学年は照れや恥ずかしさが出てくる時期なので，「子どもたちが活動に参加しなかったらどうしよう」という不安がありました。しかしそんな心配をよそに，子どもたちは大いに楽しんでいたように思います。みんなの笑顔に救われました。私自身の反省点はゲームの実況中継です。その場に合った言葉選びが難しかったです。また，予め原稿を準備しておいたルール説明もうまくできませんでした。しかし，前で話す私を見る姿勢や友達同士で確認し合う姿など，一生懸命理解しようとしている 4 年生の姿に感動しました。

・今回は小学校 4 年生ということで，活動内容の決定に苦慮しました。4 年生が楽しめる遊び，理解力などを考えながら，時間をかけて活動案を練りました。本番の直前まで不安でしたが，子どもたちの笑顔に助けられてスムーズに進行することができました。普段あまり関わることのない小学校 4 年生の子どもたちとたくさん関わることができてとても嬉しかったです。ありがとうございました。

・対象が小学校 4 年生，大人数，全員の保護者が来るわけではないというこれまでとは違う条件のもとで，戸惑いながらも活動を計画し運営しました。保護者が来られない児童のことを考慮し，今回の活動のねらいは「親子の絆」ではなく「保護者が子どもの友達を知る」「保護者同士のコミュニケーションを図る」としました。しかし，親子活動であるのにこのねらいでよいのかと疑問が残り，学年活動を担当された PTA の方も交えてもっと話し合うべきだったと思いました。

4. 一身田小学校：1 年生音楽授業の担当

（1）開催要領

●日時及び時間：表 3 に示す。
●場所：一身田小学校 1 年各教室
●対象：一身田小学校 1 年生
●内容：音楽授業の担当（計 2 回）

表 3　2008（平成 20）年度一身田小学校 1 年生音楽授業担当日時

クラス	第 1 回	第 2 回
1 組	11 月 18 日（火） 第 1 限　8:45～9:30am	12 月 2 日（火） 第 1 限　8:45～9:30am
2 組	11 月 17 日（月） 第 1 限　8:45～9:30am	12 月 1 日（月） 第 1 限　8:45～9:30am
3 組	11 月 17 日（月） 第 3 限　10:45～11:30am	12 月 1 日（月） 第 3 限　10:45～11:30am
4 組	11 月 17 日（月） 第 2 限　9:40～10:25am	12 月 1 日（月） 第 2 限　9:40～10:25am

●授業担当者：幼児教育コース 2，3 年生
1 年 1 組：冨井先生　リーダー：伊藤加奈（2 年）
天野由貴（2 年）・雨皿麻希（2 年）・久野恵理（2 年）・迫田里紗（2 年）
1 年 2 組：加藤先生　リーダー：山口麻衣（2 年）
藤岡真衣（2 年）・森萌野（2 年）・森陽子（2 年）・吉村淳美（2 年）
1 年 3 組：山羽先生　リーダー：鈴木麻友（3 年）
中嶋祐太（3 年）・成実由希子（3 年）
1 年 4 組：中川先生　リーダー：高瀬由美子（3 年）
辻彰士（3 年）・山崎理沙（3 年）
●各クラス担当グループは計 2 回の指導案作成に取り組み，またクラス担任の先生方には事前指導及び事後指導をしていただいた。
●全 2 回の授業終了後には，学生から担当クラスの子どもたちに手紙を送り，その手紙を読んだ子どもたちから学生宛に返事が来るというやり取りも行われた。

（2）学生の感想の紹介

1 年 1 組担当

・子どもたちが楽しんでくれてよかったですし，私自身も一緒に授業をしてとても楽しかったです。私たちが紹介した“音見つけ”の活動が，子どもたちが色々な方法で音楽を楽しむきっかけになってくれるといいなと思います。普段は幼稚園へ行く事が多いので小学校での授業はとても新鮮でいい体験になりました。
・子どもたちの反応が思っていた以上にあり，驚くとともに非常に嬉しく感じた。積極的に自己表現をする子どもが多かったのでそのような子どもたちへの対応で精一杯になってしまい，他の子どもへ気を配ることがおろそかになってしまった。全体を見ることが難しかった。
・小学校に行くのも司会を務めるのも初めてであったのでとても緊張した。司会では，言葉をうまく使うことができず，何度も戸惑ってしまった。しかし，子どもたちが元気で，こちらから問いかけた時の反応もよく，活動を 1 つ 1 つ楽しんでいるようだったので嬉しかった。
・小学校で 45 分の授業を担当させていただくということで，子どもたちの反応や時間配分など不安なことが多々ありましたが，実際に活動してみると，みんな元気に歌ってくれて，45 分はあっという間に楽しく過ぎていきました。幼稚園とはまた違った場所での活動は，様々な発見がありよい刺激となりました。みんなからの手紙もとても嬉しかったです。またみんなと校庭で縄跳びや追いかけっこをして遊びたいです。貴重な体験をさせていただきありがとうございました。

1 年 2 組担当

・初めて授業をさせていただいて，始めは不安でしたが元気に活動する子どもたちを見て緊張がなくなり，私自身楽しむことができました。貴重な経験ができ，色々と学ぶものもありました。また機会があれば取り組みたいです。子どもたちから返事の手紙も届いて嬉しかったです。
・子どもたちと先生に喜んでもらい，「ありがとう」と言ってもらったり，お手紙を

いただいた時は，本当に嬉しかったです。子どもたちともっと長い時間関わりたかったです。加藤先生の子どもたちと向き合う姿から学ぶことがたくさんあり，小学校の現場で貴重な経験をさせていただきました。

・子どもたちの感想には，私たちの授業が「楽しかった」という思いが書かれていて，とても嬉しかった。子どもたち一人ひとりに何かが心に残る授業をすることの大切さ，難しさを学べたと思う。

・予想以上に元気いっぱいでしっかりしている 1 年 2 組の子どもたちに驚きました。グループ活動では，子どもたちは自分の意見を発言し，他の人の意見もしっかり聞き，意見が食い違った時は解決策を出して話をまとめていました。こちらから何も言わなくても，活動を更によくするための工夫も色々としていて，子どもたちの力に感心させられました。時間配分が上手くいかなかったり，当初の意図とは異なる活動になってしまったものもありましたが，大きな声で元気よく歌う子どもたちに元気をもらって本当に楽しく授業をさせていただきました。

1 年 3 組担当

・一身田小学校の音楽授業を担当して，小学生との関わり方や全体を見ながらの活動の進め方が少しつかめた気がしました。また機会があればぜひやってみたいです。

・踊ったりタンバリンを鳴らしたりして幼児教育コースらしい授業ができたのではないかと思っています。しかし，授業で取り上げたのは子どもたちにとっては初めての歌だったため，1 回の授業ではなかなか覚えることができなかったように思います。2 回の授業の連続性を考えて，しっかり歌唱指導をすることができたら更によかったのではないかと思いました。

1 年 4 組担当

・普段，小学校に行く機会はあまりありません。だからとても貴重な経験になったと感じています。子どもたちが楽しんでいることがわかりとても嬉しかったです。今回の授業は，幼稚園の子どもたちを対象とする時とはまた違う視点で活動を考える機会となりました。そして実際の授業においては，私たち 3 人とも心から楽しむことができ，本当によい経験になりました。

・小学校 1 年生の子どもたちは，幼稚園の年長さんよりも少し大人という印象を受けました。1 回目の授業では恥ずかしがって一緒に踊ることができなかった子どもも，2 回目の授業では楽しく踊る様子が見られ，こちらも楽しむことができました。小学校においても音楽を体全体で楽しむことを大事にした授業が必要なのだと感じました。ありがとうございました。

・授業という形で小学生の子どもたちと関わることは初めてだったので，最初は楽しみと不安が入り混じっていた。しかし，実際に活動が始まると，子どもたちの楽しそうに活動をする様子が見られ，私たち自身も楽しく活動を進めることができた。この活動を通して，予想外の事態に対応して臨機応変に動くこと，1 つの活動をじっくり行うことの大切さなど多くのことを学んだ。この経験を今後も生かしていきたい。

(5)音楽教育講座における取組

一身田地区と音楽教育講座とのかかわり

根津知佳子（音楽教育講座）

音楽教育講座では、ジョイント音楽祭からスタートした一身田地区との関わりについて、「質的な向上」に焦点を当てて検討を重ねてきた。

2007 年度はステージ上での交流だけであったが、2008 年度には「教育実地研究基礎」の学生（1年生）を中心に合唱支援を行った。この新しい試みについて講座で検討した結果、次のような指導・支援を行う上での実践力の問題があげられた。

（１）歌唱指導の専門的な知識と技術
（２）変声期・思春期に関する心理的側面などの知識

また、学生の内発的動機づけを高めるためには、次の２点について条件を整える必要があった。

（３）意欲・仕上がりなどクラスや学年による差
（４）往復の交通手段や安全面の保証

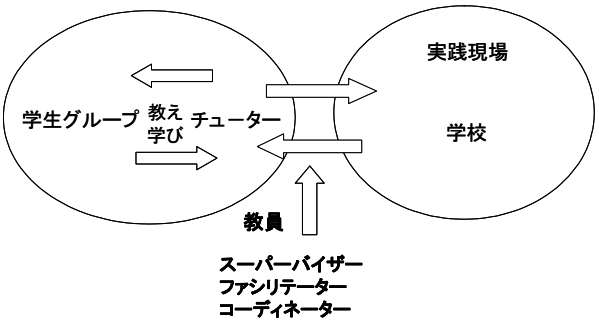
そこで、３年目となる 2009 年度は、音楽科としてのかかわりを次のように整理し、改善を図った。

（1）　１年生対象の「教育実地研究基礎」では、授業参観を基盤としたワークショップ型の授業を提案し実践する。
（2）　コラボ音楽祭全体への支援として、声楽専門教員による発声指導の出前授業を行う。
（3）　コラボ音楽祭における合唱に関しては、基本的には学生が自主的に練習をする。音楽科教員は随時指導にかかわる。
（4）　コラボ音楽祭の合唱支援は、教育実習を経験した３年生以上の学生の自主的な活動とする。
（5）　授業補助、合唱・合奏支援、演奏会なども自主的な活動とし、計画・実施・省察について教員がサポートする。

2009 年度の活動をまとめると次ページのようになる。

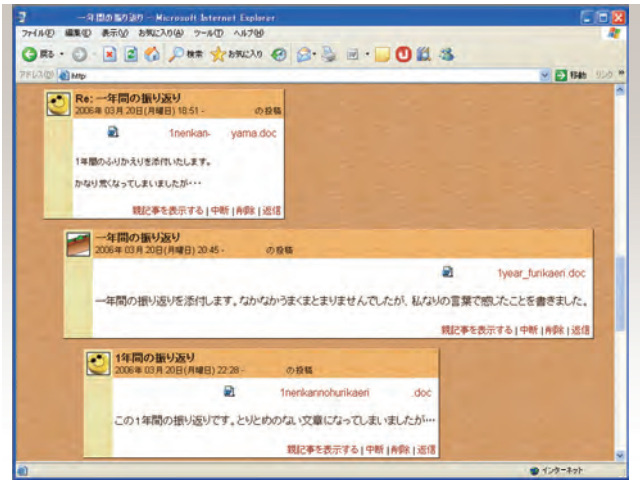
		活動場所	参加学生数・学年	指導教員
1	教育実地研究基礎	一身田中学校１年生	１年生９名 大学院生３名	桂直美
2	出前授業	一身田中学校１・３年生	大学院生２名	弓場徹
3	コラボ音楽祭出演	三翠ホール	大学院生１名 １年生～４年生３６名	弓場徹、兼重直文、高瀬瑛子、桂直美、根津知佳子、森川孝太朗
4	合唱支援	一身田中学校全学年	大学院生４名 ４年生７名、２年生２名	根津知佳子
5	授業補助	栗真小学校	大学院生１名 ４年生１名	根津知佳子
6	演奏会	栗真小学校	大学院生４名	根津知佳子
7	演奏会	白塚小学校・白塚幼稚園	大学院生２名 ４年生１名 ２年生９名	根津知佳子

原則として３～５は学生の自主性にまかせたが、学年をこえた学生同士の学びや記録の保管については教員がサポートし、振り返り・省察の質を向上させることを目指した。



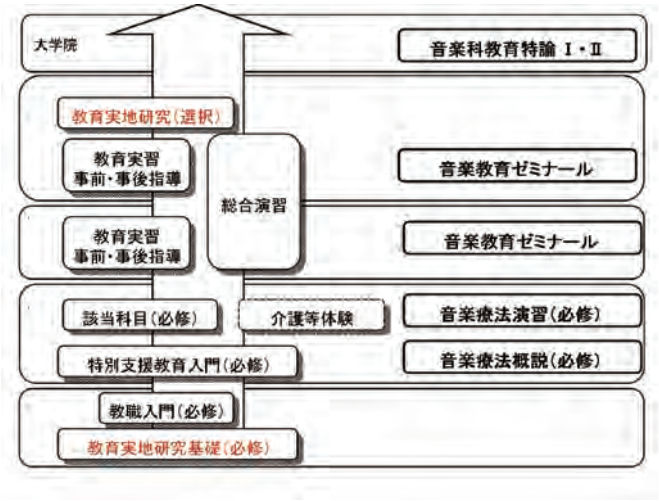
ファイル転送・共有などの機能を持ち、登録された教員と学生が web 上で情報交換ができる e-Learning システム Moodle（Modular Object Oriented Dynamic Learning Environment）をツールとし、記録やポートフォリオを蓄積した。教育現場に関わる活動で留意すべき個人情報の保護が可能であるため、大学における事例検討会で問題となったテーマなどを自学により深化することができるようになった。

【Moodle でのやりとり例】



例えば、白塚小学校・幼稚園のクリスマス会には、2008 年度の「教育実地研究基礎」の受講生が参加し、「音楽療法演習（２年後期）」の授業において企画・実践・省察を行った。体験に系統性を持たせることを試みた例である。

【コア科目群と専門の学び】



このように音楽教育講座では、一身田地区におけるすべての活動について、大学での理論や実技などの学びと体験が結びつくように改善を進めている。

(6)数学教育講座における取組

1)栗真小学校・白塚小学校・一身田小学校における「教育実地研究基礎」の取組

授業科目「教育実地研究基礎」(1年生対象)に、数学教育コース学生18名、学校教育コース学生11名が履修し、一身田校区の3小学校で教育アシスタント活動を行なった。以下、実施に至るまでの経過を整理して報告する。

まず、4月23日に学生対象のガイダンスを行ない、「教育実地研究基礎」とはどのような趣旨の授業科目であるかを説明した。続いて、5月2日に栗真小学校・白塚小学校・一身田小学校の現代GP担当者との打合会を実施し、「教育実地研究基礎」の趣旨を理解していただき、その実施のための具体的日程を協議した。「教育実地研究基礎」の趣旨は、「学生が教育現場に入って、子どもの学習支援活動や教員のアシスタント活動をすることによって、子ども理解、学校理解を深めつつ、教職への意識を高める」というものである。

大学と小学校の授業時間帯が異なるため、学生に対する説明資料として、小学校の授業時間帯一覧表を作成して、配布し、自分の大学での授業時間帯を考慮して、小学校へ行くことのできる時間帯の調査を行なった。それをもとにして、割り振り一覧表を作成し、5月15日に一身田小学校と栗真小学校へ、5月16日に白塚小学校へ、学生が大学教員の引率で行き、初顔合わせを行ない、各学生が学習支援に入る学級が決定された。

そして、学生の活動が開始されたのは5月19日であった。各学生は毎週一回、決まった小学校へ行き、学習支援・教育アシスタント活動を行なった。学生の割り振り一覧表は以下の通りである。また、下記の学生以外に、学校教育専修の大学院生1名が白塚小学校での教育アシスタント活動を行なった。

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1時間目 8:45〜9:30	吉岡(栗) 吉村┐ 当广┤(白) 浅井┘ 藤井(一)	松田(白) 奥田(一)			
2時間目 9:40〜10:25				山口　曽根　石黒(一) 加山　服部(白) 加藤　森下(栗)	
3時間目 一・栗 10:45〜11:30 白 10:40〜11:25				中尾　増田 久保田(一) 中平　湯浅(白) 山尾　伊藤(栗)	
4時間目 一・栗 11:40〜12:25 白 11:35〜12:20				森　西村(一) 河俣(白) 鈴木(栗)	
5時間目 一 13:50〜14:35	河合(一)				
6時間目 一 14:40〜15:25 栗 14:45〜15:30		加藤(一) 政谷(一) 佐伯(栗)			

(一)は一身田小学校、(白)は白塚小学校、(栗)は栗真小学校、を意味する。

「教育実地研究基礎」の実施にあたっては、下記のような記録ノートを作成するように指示した。

「記録ノート」について

1. A4 版のノートを使用
2. 表紙（右枠）

2008 年度 教育実地研究基礎 記録ノート 数学教育コース 学籍番号 氏名

「記録ノート」に記録する事項

1. 実地研究に行なった小学校名
2. 実地研究に行なった月日、時間帯
3. 実地研究に行なった学年、組、児童人数、担任教員の氏名
4. 実施した活動内容
5. 上記の 4. について、自分の得たこと、反省、感想等
6. その他

「記録ノート」からは、学生は昨年度と同じく、下記のような多様な活動を行なったことがわかり、その感想も概ね肯定的なものであった。

行なった活動内容

①算数の計算のプリント学習のとき、アドバイスや、まる付けをする。
②マット運動のときのアドバイスをする。
③テスト直しのときに質問してくるので、それに答える。
④授業を見学する。
⑤スポーツテストのとき、整列させるなどの補助をする。
⑥休み時間に子どもと一緒に、こおり鬼、ケイドロなどをして遊ぶ。
⑦朝のスピーチをする。
⑧運動会の練習のとき、補助活動をする。綱引きの準備や後片付けをする。
⑨保育園児を迎えて遊ぶときの補助活動をする。
⑩プールサイドで子どもたちを見守る。
⑪図工の時間で、ボンド付けなどして、子どもの活動をサポートする。
⑫七夕の飾り付けを子どもたちと一緒にする、鶴の折り方を教える。
⑬児童集会で、子どもを整列させるなどの補助活動をする。
⑭体育のリレーでのゼッケンの準備や、子どもの誘導をする。

学生の意見・感想

① 算数の授業で、子供たちが授業中にやったプリントのまる付けやアドバイスをした。間違えている所を教えるとき、説明の仕方が難しかったが、よく理解してくれて嬉しかった。

② 先生が注意をすると、子どもはきちんと言うことを聞いていた。先生と子どもの信頼関係が大事だと思った。

③ 自分が当たり前に知っている言葉でも、全く知らない言葉が小学生には沢山あり、教えるときに、さらにその言葉を説明しなければならず、教える難しさを感じた。

④つまずきやすい所は、どの子どもも似ていて、そこをどういう風にわかりやすく説明するかが大事だと感じた。実際に現場に行って、子供たちと接することからは、得るものが多い。

⑤ 提出物には、先生は厳しかった。忘れてきても正直に言わない子には、特に注意していた。見ていて、とてもいい経験になった。

⑥ 最後に、「今日はあの子についていてくれてありがとう」と先生に言ってもらえたのが、とても嬉しかった。改めて教師になりたいと思った。

⑦わからなくても、少しヒントを与えてあげると、考えて自分で答えを見つけ出す子どもたちの考える力のすごさを体感しました。

⑧ 漢字の書き順や難しい漢字など、戸惑っていた子供たちにアドバイスをした。みんなよく聞いてくれて、教えた後、よくできていたので嬉しかった。

⑨ 文章問題をたくさん解いた。かける数とかけられる数を逆にしている子供が多かった。自分の中では、掛け算は常識となっているので、１から教えるのは難しかった。よい経験になった。

小学校において学習支援を行なう学生たち

2）一身田中学校における学習支援・教育アシスタント活動・SAS 活動

授業科目「数学科教育法」の受講生（数学教育コース学生：15 名、情報教育課程学生：23 名、社会科教育コース学生：1 名、計 39 名）が一身田中学校において、生徒の学習支援・教師のアシスタント活動を行なった。SAS 活動とは「study after school」の略称で、放課後の生徒学習支援の活動のことであり、「寺子屋いっちゅう」と命名されている。実施に至る経過は以下の通りであった。

5 月 1 日の学生ガイダンスにおいて、趣旨説明を行ない、5 月 9 日に一身田中学校数学科教員と日程の打合せを行ない、5 月 26 日ー30 日に学生を引率して、中学校の教員と顔合わせを行なった。このとき、各学生が支援に入る学級が決定し、6 月 2 日から活動を開始することとなった。

学生の割り振り一覧表は次ページの通りであった。また、「教育実地研究基礎」と同様に、実施にあたっては、次ページのような記録ノートを作成するように指示した。

「記録ノート」について

1. A4 版のノートを使用
2. 表紙（右枠）

2008 年度 数学科教育法実地研究 記録ノート 数学教育コース 学籍番号 氏名

「記録ノート」に記録する事項

1. 実地研究に行なった小学校名
2. 実地研究に行なった月日、時間帯
3. 実地研究に行なった学年、組、児童人数、担任教員の氏名
4. 実施した活動内容
5. 上記の 4. について、自分の得たこと、反省、感想等
6. その他

一身田中学校数学科　大学生指導支援　時間割

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1 時間目 8：50〜9：40	**2クラス** 中村　小川 小畑　小林 林	**2クラス** 吉田　福田 丸山　境 橋元	**3クラス** 針本　上村	**2クラス** 石原	**3クラス** 星野（4 年） 河俣 野田
2 時間目 9：50〜10：40	**1クラス** 星野（4 年） 浅野	**3クラス** 横山　丹羽	**1クラス**	**3クラス**	**2クラス**
3 時間目 10：50〜11：40	**3クラス** 谷本　松山 岡田　早瀬	**3クラス** 西田　勝又 岩谷	**3クラス** 池山　石原	**2クラス**	**2クラス**
4 時間目 11：50〜12：40	**1クラス**	**2クラス**	**3クラス** 星野（3 年）	**3クラス**	**3クラス**
5 時間目 13：20〜14：10	**なし**	**1クラス** 斉藤	**なし**	**2クラス** 森下　服部 河合　草田 加藤有 立松　横井	**2クラス**
放課後 寺子屋「いっちゅう」 15：00〜16：00	○ 朝日　柴山	×	×	×	○ 村瀬　石原

学生が行なった活動

① 図形の証明、文字式の計算、方程式の解法、１次関数、作図問題などの学習で、生徒が練習問題などに取り組んでいるとき、机間指導して、サポートする。

②生徒が演習問題を解いているとき、巡回しながら、赤ペンによる〇付けをする。

③授業を見学し、数学授業のあり方、発問や板書の仕方、生徒との対応の仕方などを学ぶ。

④放課後の学習機会である「寺子屋いっちゅう」（15：00ー16：00）において、生徒の数学学習をサポートする。

学生の意見・感想

①中学生でも、しっかり考え、いろいろな考え方や発想する力がある子がいるのだと実感した。

② 全員が理解する授業、楽しい授業というのは難しいですが、そうするための努力は決して惜しまなくしていくべきだと考えます。

③ 一人の生徒が「なぜ、面積は S というアルファベットを使うの？」と聞いてきた。上垣先生のおっしゃっていた事を思い出し、きちんと説明したら、生徒が「へえ、そうなんだ」という顔をしてくれたことが、とても嬉しかった。

④ 証明の問題で、仮定と結論をはっきりさせることが苦手な生徒が多いので、はっきりさせる指導の重要性を実感した。

⑤ 生徒に板書の時間をしっかり与えると同時に、先生が説明するときは、しっかり前を見させることを徹底していた。とても大事なことだと感じた。

⑥学習支援という貴重な経験を通じて、生徒の気持ちを敏感に読み取ること、生徒と同じ視線から考えること、教師としてどんな急なアクシデント、展開になっても、冷静に考え、授業を再構成していくことの大事さというものを僕の中で得ることができた。

⑦ 今回で一身田に行くのは最後だったので、終わってしまうのは寂しかったけど、授業について、生徒理解、指導について勉強することがとても多くて、とても良い経験ができ、良かったなと思っています。ありがとうございました。

中学校において学習支援を行なう学生たち

3）一身田小学校における授業研究

一身田小学校は算数科における学力向上の取組の一環として、各学年ごとに指導案検討を行ない、それにもとづく公開授業を実施し、事後検討会を開催したが、この取組に大学教員（数学教育講座上垣渉教授）が支援を行なった。

7 月 24 日、28 日の 2 日間、各学年団が指導案検討会を開催し、そこで練られた指導案を 8 月 28 日の全体研修会において発表し、意見交換を行ない、最終的な指導案の作成にとりかかった。これらの指導案にもとづいて、下記の日程で、公開授業及び事後検討会が開催された。

①10 月 1 日、第４学年「はしたの大きさの表し方を考えよう」

②10 月 9 日、第３学年「わり算を考えよう」

③10 月 23 日、第２学年「形に名前をつけよう」

④12 月 3 日、第１学年「12 のひみつ」

⑤1 月 15 日、第５学年「比べ方を考えよう(1)」

4）一身田中学校における授業研究

一身田中学校は数学科における学力向上の取組の一環として、8 月 25 日に「授業づくり研究会」を開催し、それにもとづく公開授業を実施したが、この取組に大学教員（数学教育講座上垣渉教授及び中西正治准教授）が支援を行なった。

１年生の内容については、8 月の「授業づくり研究会」で検討した「アルキメデスの立体」や「準正多面体」などを、教具を用いて作る内容を予定していたが、実際には、空間図形の単元で「デルタ多面体をつくろう」というテーマに変更し、デルタ多面体を考察する中で、正多面体の特徴を確認することをねらいとする内容となった。3 月 17 日ー19 日までに１年生の５クラスで授業公開を行なった。

２年生の内容は、「図形の性質・平行四辺形になるための条件」に関するもので、「はと目返し」の授業であった。四角形を対辺の中点を結んだ線で４つ切り分け、並び替えて平行四辺形をつくり、その四角形が平行四辺形になることを説明する。さらに、長方形に並び替えるにはどうすればいいのかを考える内容であった。２月６日ー16 日にかけて５クラスで授業公開を行なった。

なお、3 年生については、相似の単元における測量の授業を予定していたが、実施できなかった。

(7)日本語教育コースにおける取組

日本語教育コース　林朝子

◎一身田小学校クラブ「世界を結ぼう」

開始時期：平成 20（2008）年度 4 月～　月曜日 6 限目
対象学年：4 年生以上（所属は 4 年生 16 名）
開催回数：5～7 月、10～2 月に各 1 回、合計 8 回
クラブ担当教員：一身田小学校・富田先生／シルビア先生

◎クラブの目的

1）世界には様々な国や文化があることを知るきっかけを作ること
2）母国の文化や習慣を知り、アイデンティティ確立の一助となること
3）わかったことや知ったことを学校の友達に発信すること

◎クラブの活動内容

回	月	活動タイトル	活動内容	学生の参加方法
1	5	クラブ名を決めよう	子どもたちが話し合い、クラブ名を「世界を結ぼう」クラブと決めた。	
2	6	ブラジルについて知ろう	ブラジルの友達に手紙を書く前に、ブラジルについて知る。家族の人に聞いたり、本やニュースを見たり、シルビア先生に聞いたりした。	
3	7	手紙を書こう	ブラジルの日本人学校「めぐみ学校」の友達に日本の学校生活や習慣について手紙を書く。(後日、ブラジルからも返事が届く)	
4	10	日本を知ってもらおう	夏休みの間に各自インスタントカメラでブラジルでは珍しいと思うものを写真に取り、それに説明をつけてブラジルの友達に送る。	支援型
5	11	みんなで歌おう	ブラジルの「ねこに棒をなげた」という歌を歌った。ポルトガル語も少し体験した。	観察型
6	12	シルビア先生って どんな先生？	先生からブラジルの話を聞き、それについて色々質問をした。	観察型 協同参加型
7	1	ダンスを踊ろう	ブラジルの「POPPOP（ポピポピ)」という楽しい局に合わせて、皆で踊った。	協同参加型
8	2	お菓子を作ろう	ブラジルのお菓子（ココナッツ味とチョコレート味の団子のようなもの）を皆で作って、食べた。	協同参加型
その他		クラブ活動の様子を紹介するポスターを作り、一小祭の時に掲示した。		

◎学生のクラブへの関わり

前期（4～7 月）：クラブの立ち上げ時期であり、音楽教育コースの大学院生が準備等に関わった。

後期（10～2 月）：日本語教育コース「実地研究基礎」の一環として、クラブ全般に関わった。参加学生は、日本語教育コース 1 年 11 名、英語教育コース 3 名。

◎学生のクラブ参加の目的と意義・授業の流れ（後期分）

目的意義①：学校の現場を体験する

大学 1 年生にとっては、普段小さな子どもたちと交流する機会がほとんどなく、教室の中の子どもたちにどのように接すればいいのか戸惑うものが多かった。計 5 回のクラブを通して、後半 4、5 回目でやっと子どもへ近づけた者もいた。先生方の指導を見せていただけたのも貴重な機会であった。クラブの中での教師と子ども・子ども同士の様子を数回にわたり観察できたことは、今後彼らが子どもたちとの関係作りについて考える際に非常に有意義な経験であろう。

目的意義②：多文化共生について考える

このクラブを通し、「多文化共生」について考える機会とした。学生の中には教員を目指す者が多く、今回のクラブ空間は、将来彼らが経験するであろう多文化が存在する教室・学校の縮図と言える。このような空間に早い時点から入り込む経験を通して、こちらが一方的に考え方を与えるのではなく、各自「多文化共生」について考えることができ、「多文化共生」を考えることの重要性に気づけたようである。

授業の流れ

事前学習

クラブ前に次のクラブ内容と活動意義について話し合う

↓

クラブ参加

↓

事後学習

毎回クラブ後、翌週にレポート提出と振り返り授業

最終レポート

クラブ参加の翌週には、毎回、レポート提出と振り返りの授業を行った（最終のクラブ後は行わなかった）。〔参加⇒小レポート⇒振り返り〕というサイクルを 4 回繰り返すことで、今回の学生参加の目的である、小学校での子どもたちとの関係作りや多文化共生について各自思考を繰り返す機会が持てたようである。特に、振り返りでのディスカッションは皆が積極的に気づいたことや感じたことを発表し合う時間になった。今回の実地研究基礎では、小学校の現場や多文化共生についてほとんど知らない段階で小学校のクラブに参加し、各自が何らかの疑問点や問題点を見つけ、今後の大学での学習に更に意欲的に取り組んでいく契機としてもらいたい気持ちが大きかった。実際に、最終レポートでは、1 年生の段階での彼らが考える「多文化共生」や「多文化共生教育」について多く触れられていた（次ページで紹介）。それぞれが「多文化って何だろう？」「子どもたちの気持ちはどうなんだろう？」「どうやって多文化を子どもたちに伝えればいいのだろう」などという疑問点を持てたことは、今後の学習に積極的に向かう大きな動機になるのではないだろうか。

◎今後の課題：学生に対する参加方法の指導に関して

5回のクラブ参加であったが、参加方法は様々な形態があり、大きく次の３つに分けられるだろう。

1)　観察型：教室の先生と子どもたちの様子を見て学ぶ
2)　支援型：子どもたちの学習作業に対する手助けをしながら学ぶ
3)　協同参加型：子どもたちと一緒に活動しながら学ぶ

1年生の学生にとっては、支援型での接触が最も難しかったようである。クラブ前に、支援であればどの程度まで行ってもいいのかなど、もう少し具体的に指導する必要を感じた。

第８回
お菓子作
りの様子

◎学生の最終レポートから抜粋

・私たちは毎日たくさんの人たちと関わり合いながら生活している。自分の周りを探してみても自分と全く同じ人など一人としていない。生活習慣も違えば性格も違う、考え方や育った環境も全く違う人たちと関わり合いながら、私たちはその人たちとうまく共生しているのである。そうでなければ、学校をはじめとする様々な社会は成り立たない。私たちは誰もが普段から自分とは全く異なる人たちと共生しているといえる。共生とは人と人との関わりの中での対話から生まれてくるものだと思う。
「多文化共生」は単に普段している共生から文化の違いという点まで視点を広げたものであると私は考える。そのため「多文化共生」は別に特別なことをしようとしなくてもよいと思う。今まで自分が行ってきた人と接する方法を、異なる文化を持つ人たちに対してもそのまま実践すればそれでよいのではないか。
自分と全く同じ人がいないということは誰でもわかっていることである。同じ日本人であっても細かく見ていけば地域によって文化の違いはあるはずであり、大学など様々な地域から人が集まってくるところでは気に留めることは無くても常に「多文化共生」が存在しているといえる。
このレポートのテーマとなっている「多文化共生」とは外国の文化との共生を指している。外国の文化との「多文化共生」となると、言語の違いがあるため困難さが増すかもしれないが、人と人との関わりの中での対話から生まれるという点では基本的に同じであると思う。

・「多文化共生」とは、異国の文化に触れ相互に理解し合い、その上で個人としてのアイデンティティを認め付き合っていくということだと考える。しかし、今の国際理解教育では前半部分までしか達成できていない。この多文化理解があり、そこから発展した「多文化共生」を子どもたちに教育していくことは難しい。そもそも、「多文化共生」とは教育するべきことというよりも、自然と個人の間で行われていくのが本来の姿なのではないかと私は考える。自然と行われるはずのものであるからこそ、敢えて教育となると難しいのである。異文化に触れさせる機会を与えることは簡単かもしれないが、与えてからの関わらせ方が非常に難しい。この関わらせ方こそが現在の、また今後の学校現場での「多文化共生」実現への課題である。

・このクラブに見学参加するまで、「多文化共生」とは自分たちの文化を我慢し合うことのように思っていた。しかし、確かに我慢することも時には必要だと思うが、何より認め合うことが大切なのだと今は思っている。そのために私たちは、日本人と外国人が

互いを認め合い尊重し合える多文化共生教育を目指すべきなのではないかと思う。社会においては、少数の立場の人（マイノリティ）が不利になる場面も多くあるであろう。しかし、そのような人の、母語・文化を大切にしながら、文化的アイデンティティを形成できるような環境を作ることが大切だろう。

・「多文化共生」とは、いろいろな国籍・文化・身体的な特徴をもった人々が、互いに理解し合いながら、共に住みよい社会をつくっていこうとする考え方を表す言葉である。外国人住民の中には、日本語が理解できないために必要な情報が得られなかったり、トラブルが起こったり、文化や生活習慣の違いにより、地域になじめず孤立してしまう人もいるのである。そのためには、日本語学習の推進や生活相談、情報提供など環境をさらに整える必要があるのではないだろうか。外国人住民の自立を支援することで多文化共生の地域づくりが促進されるのである。
　今まで、「多文化共生」という言葉より「国際交流」という言葉をよく耳にしてきた。どちらも同じ意味に思うけれど、「多文化共生」と「国際交流」には大きな違いがあるのだ。「国際交流」は、外国との交流や外国からの訪問者との交流であって、ゲストをいかに歓迎し、日本でよい経験をして本国に帰ってもらうかという発想に立っている場合が多い。しかし、「多文化共生」とは、外国人を住民と認める視点であり、総合的な生活支援を行い、同じ地域の構成員として社会参加を促す仕組みづくりなのである。
日本人で、この違いをまだ理解している人は少ないのではないだろうか。多文化共生を広めていくためには、この意味の違いを知ってもらうことが大切だと思う。

・私が「多文化共生」について感じたこと、それは相手のことを「知りたい」と思うことが大切だということだ。私たちが友達を作るときも同じだ。その人のことが気に入るともっと知りたい、と思うだろう。そして自分のことも知ってほしいと思う。前の段落でも述べたが、「やりたい」授業は彼らに興味を抱かせることができる。そこから「知りたい」と思うのはすぐだ。お菓子作りのときにお菓子の上に乗せる植物のことは、児童が真っ先に「これなに」と質問していた。あれは歯にいいらしい。実際は食べなくていいらしいが全員食べた。とても苦かった。おそらく児童たちは一生忘れないだろう。自分から「知りたい」、「やりたい」と思ったことによる体験は、彼らの心に残り続ける。「やりたい」と思える授業にはこのような機会が多くある。積極的な姿勢がそのまま「知りたい」となりいつのまにか「多文化」のことを理解している。この前向きな姿勢が「共生」だと私は考える。

・多文化共生とは、多くの異なる文化と、「共に生きる」事であると、私は考えている。“多くの異なる文化が１つになる”という認識ではなく、文字通り「共に生きる」、「解り合う」という認識が必要なのである。異なるものが１つになろうとすれば、どうしても障りが生じてしまう。それ故に、お互いが認め合う事が何より大切なのである。多くの文化が認め合い共存する、そういった世界に欠かせない秩序を、多文化共生と呼びたい。

・私の考える『多文化共生教育』とは、日本語でのコミュニケーションが取れない外国籍の生徒に対して、日本人生徒が積極的に手を差し伸べて、友達関係を築いていけるようにするのが狙いである。

・現代社会では外国人の定住化が進み、日本国籍を取得する外国人も少なくない。そのような外国人を異国からのお客様として接するのは間違っているし、同じ地域の構成員

として社会参加を促すことが現代社会にとっては大切なことからも、今求められているのは国際交流ではなく多文化共生であると、私は考える。

・『多文化共生』とは、さまざまな国の子どもたちがお互いにそれぞれの文化・慣習などを尊重しあい、同じ空間の中でおのおのが心よく共存しあえることだと私は考えます。

・『多文化共生教育』とは何かを考えてみたい。考える人によってこの考えは違ってくると思うが、私は『多文化共生教育』とは『互いの国の文化を知る』というだけでなく、『互いの国の文化において共存し、理解する』ということが大事なのではないだろうかと思う。しかし、『理解』といってもどこからが『理解』なのかという範囲を決めるのはあいまいで難しい。しかし、『共存』ならそれよりも容易にできるのではないだろうか。つまり、このクラブのようにまず１つの文化（このクラブの場合ブラジルの文化）に一方の文化を持つ者が触れ、そしてそれを共有する。そこから自分にはルーツのない文化を実感し、その文化について考える。そこから『理解』というものが初めて生まれてくるのではないだろうかと思う。

・やはり人々はそれぞれ自分の中に文化を持っており、それを他のものに侵食されるのはおかしいし、あってはならないことだと考える。

・このクラブでの活動だが、ブラジルの小学校に手紙を送る、ブラジル語で挨拶をする、ブラジルから来た先生からブラジルの話を聞く、ブラジルの音楽をきく、などの活動を行った。これらの活動は「ブラジル」という国を知る、興味を持つきっかけになったと思うし、このクラブはそういうきっかけをつくるクラブでいいと考える。
例えばこのクラブでブラジルに関する何かを学んだあとに、テレビなどでブラジルのことをやっていて「ああ、これ知っている」や「ふーん、そうなんだ」と思えればそれでいいし、またクラスの中でブラジル籍の子供がいる場合でも、「日本ではこうだけれど、ブラジルではそうなんだ。」という多文化理解のきっかけになるだろう。

［4］公 開 活 動

(1)現代 GP のホームページ

三重大学・現代 GP の広報宣伝活動の一環として、平成 18 年 12 月 22 日に、ホームページを立ち上げた。アドレスは、http://chiiki.gp.edu.mie-u.ac.jp/ である。

リニューアルしたホームページのトップページは下記のようであり、そこでは、現代 GP に関する「取組の概要」、「活動内容」、「運営組織」、「公開活動等」、「資料」などを公開した。

現代 GP ホームページのトップページ

現代 GP の Moodle の開設

Moodle（Modular Object-Oriented Dynamic Learning Environment）は、e-learningシステムの1つであり、そこでは電子掲示板（フォーラム）、情報共有フォルダ、情報提示用スペース、ポートフォリオ、アンケートモジュールなどを設置・利用することができる。

本現代GPでは、2007年1月10日にMoodleを設置し利用を行っている。現状では、大学教員と一身田中学校区の教員、教育委員会の担当者の間で情報交換やファイルの共有のために利用している。現状の利用法については、メーリングリストなどでも実現可能であるが、話題ごとにフォーラムを使い分けることができ、情報が整理された形で保管される。そのため、後から情報にアクセスするのが非常に容易である。

（2）「第3回　フォーラム in 一身田」の開催

平成 20 年度の取組及び成果と課題を広く公開するとともに、最終年度にあたって、3 年間の取組を総括するために、平成 21 年 2 月 23 日（月）に「第３回　フォーラム in 一身田」を、三重大学講堂（三翠ホール）の小ホールを会場として開催した。大学関係者、学生、一身田校区の幼小中の教員、教育委員会関係者、報道関係者など 144 名の出席があった。

フォーラムは、13：30 から 14：30 まで、教育学部の根津知佳子准教授（音楽教育講座）の司会進行のもとで、「ポスターセッション＆学生の体験発表」が行なわれ、続いて、上垣 渉・一身田校区連絡協議会代表の開会挨拶の後、「幼・小・中大連携の成果と課題　－３年間をふりかえって－　」と題して、岡野昇准教授をコーディネーターとして、パネル・ディスカッションが行なわれた。パネリストは、本多啓子（白塚幼稚園教諭）、渡邊 史（白塚小学校教諭）、井ノ口八重子（栗真小学校教諭）、加藤真由子（一身田小学校教諭）、笠原 哲（一身田中学校校長）、後藤太一郎（教育学部教授）の諸氏であった。

パネル・ディスカッションでは、後藤教授から現代 GP のテーマである「教育実践力の育成と学校・地域の活性化」についての解説、岡野准教授からパネル・ディスカッションのテーマである「幼・小・中大連携の成果と課題」についての解説がなされた後、後藤教授から平成 20 年度の全体的な事業報告がなされた。続いて、白塚幼稚園、白塚小学校、栗真小学校、一身田小学校、一身田中学校の各教諭・校長から、それぞれの学校園における取組内容及び成果と課題が報告された。

幼稚園からは、多くの学生が参加することによって、活気ある活動が展開でき、一人一人の幼児にも目が行きとどき、楽しい雰囲気の中で親子とともに有意義な時間を過ごすことができて良かったという成果とともに、取組を始める前段階の準備に改善の余地があるとの指摘がなされた。小学校からは、児童の学びにつながる取組ができたこと、多様な取組が児童だけでなく保護者にとっても有意義であったこと、これまで経験できなかった実験や実習が取り入れられ、生の体験をすることができたこと等の成果とともに、小学校と大学とのより綿密な連絡が必要であるとの課題が指摘された。中学校からは、学校の教育目標に沿って、基礎・基本の定着を図る教育活動、創造性や社会性を育むための教育活動、教員の資質向上を高める取組、学びの拠点としての取組、特色ある教育活動などを推進するために、現代 GP の取組は大いに意義があったと報告された。また、大学教員からは、幼・小・中学校園と連携することによって、幼児・児童・生徒の理解が深まり、自分自身の教育活動にとって得ることが多くあったという意見が述べられた。

討論の時間は少なかったが、現代 GP の取組の最終年度である平成 20 年度の後をどうするかという問題について意見交換がなされた。各学校園とも、この取組を継続していきたいとの意見が出され、教育学部としても、引き続き人的・物的の両面で連携・協力を進めていく予定であるとの見解が示された。

最後に、「みんなで楽しく学校参加」と題して、NHK 解説委員である早川信夫氏の講演が行なわれた。三重大学の現代 GP の取組が全国的にも稀な優れた取組であるとの評価をいただいた。講演のレジュメについては、本報告書の「［６］「第３回フォーラム in 一身田」の資料集」を参照されたい。

「第3回　フォーラム in 一身田」のポスター

フォーラムでは、参加者にアンケートを実施したところ、26 名の回答が寄せられた。これらを整理した結果を以下に掲載する。

「第3回　フォーラム in 一身田」のアンケート結果

○参加者の内訳

性別	20 代	30 代	40 代	50 代～	合計
男	2	1	5	1	9
女	4	3	3	7	17
合計	6	4	8	8	26

○「フォーラム in 一身田」を、どうやってお知りになりましたか。

	男	女	無記入	合計
学校からの案内状	7	14		21
地域のお知らせ				
ホームページ				
その他	2	3		5
合計	9	17		26

○「フォーラム in 一身田」について、ご感想、ご意見をお聞かせください。

開始時刻	男	女	無記入	合計
早い方がよい	2			2
よい	4	15		19
遅い方がよい	3	2		5
無記入				
合計	9	17		26

フォーラムの時間	男	女	無記入	合計
長くしてほしい				
よい	5	14		19
短くしてほしい	4	3		7
無記入				
合計	9	17		26

フォーラムの構成	男	女	無記入	合計
よい	2	7		9
普通	7	9		16
よくなかった		1		1
無記入				
合計	9	17		26

ポスター＆学生の体験発表	男	女	無記入	合計
よい		7		7
普通	6	4		10
よくなかった				
無記入	3	6		9
合計	9	17		26

パネル・ディスカッションについて	男	女	無記入	合計
よい	2	9		11
普通	7	8		15
よくなかった				
無記入				
合計	9	17		26

講演について	男	女	無記入	合計
よい	5	5		10
普通	4	6		10
よくなかった		3		3
無記入		3		3
合計	9	17		26

会場について	男	女	無記入	合計
よい	5	11		16
普通	4	6		10
よくなかった				
無記入				
合計	9	17		26

意見・感想など

〇地域とくに保護者の教育力の向上は必要である。いかに、きめ細かくできるか、難しいところではあるが。

〇学生の方の発表も聞きたかったが、授業があり、聞けなくて残念だった。

〇講演について、45 分では短く、本論（聞きたい内容）が十分に聞けず、残念だった。

〇構成について、時間の割には内容が多すぎたようだ。各校の実践発表時間は、内容量により、配当時間の調整があるとよかった。

〇三年間本当にありがとうございました。子どもたちにとって、多くの人との関わりを持てるということは、人間形成上とても大切なことだと考えます。学校にとっても、多岐にわたり、ご指導・連携いただき、新しい考え方、見方に気付くことができました。

〇学生の発表も取組がわかりよかったが、さらに、幼小中へ行っての刺激というか変化も取り入れてもらえるとよかったです。

〇パネルディスカッションでは、もっとパネラーにも語ってほしかったです。

〇以前、学生ボランティアの方に来てもらい、授業をしていて大変助かりました。つまずいている生徒にもかかわってもらい、子どもも喜んでいました。先生の卵である学生には、少しでも現場を知ってもらい、子どもにとっては、１人でも多くの人に見守ってもらえるためにも、この活動を広めるとよいと思います。

〇早川さんのお話しを聞けて、とても良かった。聞く人の姿勢がもう少し積極的であれば、もっと盛り上がっただろうと、少し残念な気がした。

〇一身田校区の教育を考え、前進させるという面で大いに意義があると思いました。学生にとっても良し（子どもを知る、教科・生徒指導方法を学ぶ、教職意欲を燃やす）、子どもたちにも良し（より多く声をかけてもらえる、遊んでもらえる、自分たちにより年齢が近いから親しみを感じる、気軽に質問できる）、教員にも良し（新しい取組の刺激、大学の先生から指導法等を学べた）の取組であったと思う。

〇私自身、大学時代、教育実習の時が一番真剣になり、一番充実していたと思う。現場から、目の前の生きた子どもから、いっぱい学べたものです。学生にとっても、この取組は意義深いと思うし、児童・生徒にとって、それだけきめ細かく声をかけてもらい、教えてもらえ、とても有難いと思う。と同時に、教員にとっても、大きく助けられると思う。また、大学の先生から新しいことや方向性を学べることは大きいと思いました。

〇講演の時間の設定が 45 分と大変短かったのが残念でした。もっと早川先生のお話しを聞きたいと思いました。

〇３年間の取組を通して、大きな成果があったと思います。もちろん、取組の中には、課題・改善点もありますが、こういう場でみんなが課題を確認できたことに意味があり、今後、必ず改善の方向に向かっていくと思います。現場は大変忙しく、時間がないと言われます。確かにその通りだとも思いますが、何でも受け身でいると、負担感が大きくなりますが、自らが主体的に活動しようとすると、負担感は少なくなるのでは・・・？　前向き、主体的な姿勢をぜひ持ち続けたいと思います。（やらされている、というのではなく）

○講演の時間が短すぎる。聞いてみたい内容があり、ゆっくり聞きたかったのですが、時間的に無理があるのではなかったかと思います。
○大学生にとっては、直接児童・生徒にふれ合い、学校の実態も体験して知っていただく機会になったのではないでしょうか。学校側にとっては。若い学生先生から刺激をもらい、楽しく学べ、人的にも、きめ細かく指導できてよかったです。
○来年度からも続けられるといいです。学生によって、やる気意識に差は見られました。それを伝える機会がなかったように思います。大学では、レポート等で評価してもらったのでしょうか。
○公の場での３年間のまとめだけでなく、現場の教員、大学の教員の本音が聞きたいと思った。(難しいとは思うが・・・)
○いくつかの活動に関わったが、学校の活性化につながったのか？という疑問が残る。GP 終了後の４月からが真の連携となるのではないだろうか。やはり、学校・大学・学生の３者の関係をどう築くかにかかっていると思う。
○活動に関わった先生方に、短くてもいいので、反省・感想を書いてもらえたらと思います。
○パネルでは、ダラダラとではなく、それぞれの立場からの意見や感想を短くまとめて話をしていただいたので、聞きやすかったです。
○講演では、レジメの話をもう少し聞きたかったです。
○講演をもう少し聞きたかった。時間の制限があるので、やむをえないかもしれないが。
○フォーラムに地域の方がたくさん参加していただけるような方向で活動が進むといいかと思った。
○とても勉強になりました。価値観が１つになりがちな学校に新しい風を入れていただき、よかったです。今後も、継続して学ばせていただきたいと希望しています。
○学生の参加が少ないと感じた。今年度は 300 名近くの学生が参加しているので、そのような学生がこのフォーラムでの成果、課題を聞かなければ意味がないのでは？　私は参加してとてもよかったと実感している。また来年度からの GP に参加したいと願う。
○駐車場の確保をお願いします。
○普段の取組ではできないような、いろいろな幅広い実践ができ、学校教育にプラスになった。
○発表に負担がかからないようにしていくことが大切と思う。
○実地研究についてですが、欠席のときに連絡がありませんでした。教師になろうとしている学生が連絡しないなんて、人間としてどうなのかと思う時が多々ありました。
○講演をもっと聞きたかったが、時間が短いと思った。
○一人ではできない、しようとしないことが、一人でもできる、やってみようという意識の変革に現代 GP の取組が活用されていたと思います。
○学生の立場に立って考えると、いろんな活動に教育実習期間以外でも参加できるようになっているということは、大変ありがたいと思います。教職を本気で考えている学生にとっては、貴重な練習時間になると思います。自分が三重大にいるときにも、あったらよかったな、と思っていました。
○学生発表は「したこと」が多く、その結果どうだったのか、子どもがどう変化したかなど、もう少し掘り下げた内容がほしかった。学生らしい感想がもっとあってよい。

○音楽療法とは何か、また学習したい。発表では、よくわからなかった。
○ポスターセッションとは何か、どういう発表形式なのか、再度勉強したい。ポスターを見るだけなのか。説明役とかがいないところがほとんど。仲間としゃべっているだけ。指導教員に、ピースで写真とって、はしゃいでいる。これがポスターセッションなら、少し違うと思う。誰のための、何のための活動か、少し厳しい指導が必要ではないか。
○講演は良かったが、もう少し、レジメの内容を聞きたかった。
○学生によるポスターセッション、体験発表から参加したかったが、学校現場では、午後２時 30 分からの参加がやっとの状態だ。土曜日開催や長期休業中の開催も視野に入れてみてはどうか。それが難しいなら、午後３時からの開催で、終了時刻を延長する等のことを考えていくとよいのではないか。
○可能な限り、学校あるいは教科指導等の専門的なニーズに応じる学生による支援がスムーズに行なわれるとよい。
○総合的な学習の時間では、大まかな年間計画はあるものの、実際に課題をもって進めていくのは子どもたちなので、年度途中であっても、学生の支援が必要な場合が出てくるので、なるべく、それに対応できるようにしてほしい。

「第3回　フォーラム in 一身田」の開催を報じた中日新聞（平成 20 年 2 月 28 日付）

三重大との連携
活動成果を報告
一身田の幼園、小中

三重大と津市の一身田中学校の校区にある幼稚園、小中学校の連携の取り組みを振り返る「フォーラムｉｎ一身田」が二十三日、同大講堂で開かれた＝写真。

連携は、文部科学省のプログラムに選定された二〇〇六年に始まり、教育学部の学生に実践の場をつくるとともに、学校や地域の活性化を目指している。

白塚幼稚園、栗真小、白塚小、一身田小、一身田中と同大の担当教員が報告。音楽の指導や理科の親子教室など、これまでの活動を紹介し、成果と課題を話し合った。

成果では「子どもたちにこまやかな指導ができる」「教員の視野が広がる」などが挙げられた。一方で、教員が忙しく、「事前の打ち合わせや事後の反省会の時間が取れない」との意見もあった。

同大の後藤太一郎教授は教員養成課程で今後、現地調査や事例研究などが求められることに触れ、「大学に近い地域との連携は、今後も欠かせない」と意義を強調した。

（吉田優美恵）

ポスターセッションの風景

学生の体験発表

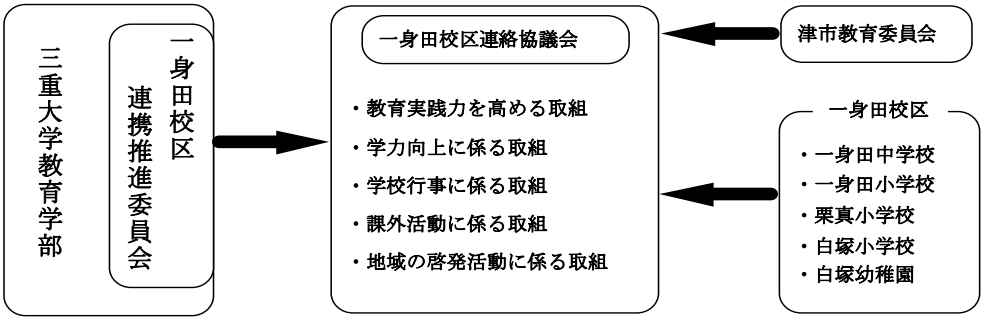
パネル・ディスカッションの風景

講演される早川信夫氏

［5］現代 GP の運営組織及び活動日誌

(1)現代 GP の運営組織

平成 20 年度の取組を企画し、運営した組織は、三重大学教育学部の「一身田校区連携推進委員会」の委員（５名)、一身田校区の５校園（一身田中学校、一身田小学校、白塚小学校、栗真小学校、白塚幼稚園）からの代表（各２名)、津市教育委員会の担当者（２名）の合計 17 名から構成される「一身田校区連絡協議会」であった。その組織図は下のとおりである。



平成 20 年度の取組に関して、一身田校区連絡協議会は３回開催されたが、その内容については、本報告書の「[２] 平成 20 年度の取組(1)」の「(１) 一身田校区連絡協議会の開催」の項を参照していただきたい。

三重大学教育学部の一身田校区連携推進委員会の体制

平成 20 年度の連携推進委員会は、数学教育講座の上垣教授を代表とした総計６人の教員によって構成されるとともに、担当職員数名が事務的業務を担当した。

連携推進委員会

代表　上垣　渉（数学教育講座）

委員　森脇健夫（学校教育講座、教育学部・地域連携担当)、後藤太一郎（理科教育講座)、
　　岡野　昇（保健体育講座)、荒尾浩子（英語教育講座)、中西良文（学校教育講座）

担当職員代表　堀　芳人（教育学部チームリーダー）

財務担当職員　内田　正（事務局財務部管理チームチーフ）

(2)現代 GP の活動日誌

平成 20 年

1 月 8 日（火）一身田校区連絡協議会の開催（平成 20 年度の事業計画の策定）

3 月 6 日（木)「生きもの環境づくり」プロジェクト案について白塚幼稚園と合意
　　(河崎先生　於・白塚幼)　メダカの導入

3 月 7 日(金)「生きもの環境づくり」教育実地研究の学生 4 名へのガイダンス（河崎先生）

4 月 3 日（木)「生きもの環境づくり」学生と白塚幼稚園職員との活動内容の打ち合わせ
　　(河崎先生)

4 月 10 日（木)「生きもの環境づくり」取り組み内容について協議
　　(於・白塚幼稚園　河崎先生、後藤先生)

4 月 14 日（月）「幼児の音楽物語創作」に関する白塚幼担当者との打ち合わせ（於・白塚幼）
4 月 15 日（火）「生きもの環境づくり」白塚幼稚園で子どもと畑づくり、花壇づくり
（職員４名、学生４名、河崎先生）
4 月 16 日（水）白塚幼稚園での「幼児の音楽物語創作支援チーム」学生へガイダンス
4 月 17 日（木）「生きもの環境づくり」白塚幼稚園各クラスで聞き取り調査、メダカの卵年長クラスに導入（幼児教育学生）
4 月 18 日（金）学生から幼児へのお楽しみ「音楽物語」創作説明、学生へガイダンス
4 月 22 日（火）「多文化クラブ（仮名）」立ち上げに関する打ち合わせ（於・一身田小、桂先生、林先生、院生、一身田小学校山口校長先生）
4 月 22 日（火）白塚幼稚園における食育についての打ち合わせ
（於・三重大学、浅田先生、本多先生、磯部先生）
4 月 22 日（火）「生きもの環境づくり」白塚幼稚園で畑づくり及びさくらんぼの植樹
（職員４名、学生４名、河崎先生）
4 月 23 日（水）「教育実地研究基礎」のガイダンスを実施
4 月 23 日（水）「幼児の音楽物語創作支援チーム」幼児と学生顔合わせ(於・白塚幼)
4 月 23 日（水）「生きもの環境づくり」ロップイヤーウサギを白塚幼稚園に導入（後藤先生）
4 月 30 日（水）「幼児の音楽物語創作支援チーム」活動開始(第１回 於・白塚幼、中西智子先生)
4 月 30 日（水）三重大において、「お弁当作りの調理実習」の打ち合わせ
（磯部先生、栗真小・吉田先生、井ノ口先生）
5 月 1 日（木）第 5 期一身田校区カルチャースクールのポスターが納品
5 月 2 日（金）「教育実地研究基礎」に関して、一身田小、白塚小、栗真小の GP 担当者との打合会
（上垣先生、中西正治先生、於・栗真小）
5 月 7 日（水）「多文化クラブ・第 1 回」の打ち合わせ（於・三重大学、桂先生、林先生、院生、一身田小：富田先生・秋澤シルビア先生）
5 月 9 日（金）「生きもの環境づくり」白塚幼稚園年少児クラスにとってきたドジョウ、エビの導入（学生）、ウサギと子どもとの触れあい（後藤先生）、ミカン・ブルーベリーの植樹（学生）、
年長児クラス野菜苗（ミニトマト、オクラ、ピーマン、ナス）を植える（職員、学生）
5 月 12（月）一身田中学校における 1 学年理科の観察・実験補助
（荻原先生、平賀先生指導、理科教育法の受講生 18 名（理科・数学の 3 年生））
6 月 27 日（金）までの毎週月、火、木、金曜日に、毎時限 3-4 名が補助
5 月 13 日（火）三重大学において、一身田小 5 年生の 2 クラスで、親子活動の打ち合わせ
（岡野先生、山本先生、学生 10 名、一身田小・加藤先生、川口先生、山下先生）
三重大学にて、栗真１、２年生親子活動の打ち合わせ（岡野先生、山本先生、学生 10 名、栗真小・佐藤先生）
5 月 13 日（火）白塚幼稚園未就園児保育「ぴょんちゃんクラブ」の運営開始（教育実地研究）
7 月 15 日（火）まで、毎週火曜日に実施

磯部先生に指導を仰ぎ、食育活動も取り入れる（滝口先生、4 年生 5 名）

5 月 15 日（木）一身田小、栗真小へ「実地研究基礎」の学生を引率（初顔合わせ）

5 月 16 日（金）白塚小へ「実地研究基礎」の学生を引率（初顔合わせ）

5 月 16 日（金）栗真小において、合唱・合奏支援の打合会（根津先生、院生 1 名）
10 月まで 8 回支援を実施（院生 1 名、4 年生 1 名）

5 月 19 日（月）一身田小、白塚小、栗真小において、「実地研究基礎」の活動が開始
（学生数は順に、13 名、9 名、7 名、指導は上垣先生、中西正治先生）

5 月 19 日（月）一身田小「多文化クラブ」開始、第 1 回、（桂先生、林先生、院生、一身田小：富田先生、秋澤シルビア先生）クラブ終了後、第 2 回のための打ち合わせ

5 月 19 日（月）白塚幼稚園保護者向け、食生活に関連するアンケートの実施（磯部先生）

5 月 20 日（火）栗真小において、合唱・合奏支援（院生１名）

5 月 21 日（水）「幼児の音楽物語創作支援チーム」活動（第 2 回 於・白塚幼、中西智子先生）

5 月 26 日（月）白塚幼において土曜参観親子活動時間（6/14）の打ち合わせ（教育実地研究基礎）
（滝口先生、幼児教育 3 年生 6 名、1 年生 10 名、英語 1 年生 3 名）

5 月 27 日（火）栗真小において、合唱・合奏支援（院生１名）

5 月 28 日（水）「幼児の音楽物語創作支援チーム」活動（第 3 回 於・白塚幼、中西智子先生）

6 月 2 日（月）一身田中学校において、「数学科教育法実地研究」の活動が開始
（学生数は 36 名、指導は上垣先生、中西正治先生）

6 月 2 日（月）「多文化クラブ・第 2 回」の打ち合わせ（於・三重大学、桂先生、林先生、院生、一身田小：富田先生・秋澤シルビア先生）

6 月 3 日（火）栗真小において、合唱・合奏支援（院生１名）

6 月３日（火）「生きもの環境づくり」子どもと落花生の苗を植える
（於・白塚幼稚園　職員、学生）

6 月 3 日（火）一身田小において、「１年生の音楽活動」打ち合わせ
（滝口圭子先生、一身田小１年担任）

6 月 4 日（水）一身田小において、5 年 2 組親子活動実施（岡野先生、山本先生、学生 14 名、院生 2 名、一身田小・山下先生他 3 名、児童 35 名、保護者 26 名）

6 月 4 日（水）「幼児の音楽物語創作支援チーム」活動（第 4 回 於・白塚幼、中西智子先生）

6 月 6 日（金）「生きもの環境づくり」白塚幼稚園年長児に絵本「みかんのひみつ」読み聞かせる。子どもとともにみかんへの追肥（学生、職員）

6 月 7 日（土）栗真小学校において、１、２年生親子活動実施（岡野先生、山本先生、学生 12 名、院生 1 名、栗真小・1、2 年担任、児童 30 名、保護者 29 名）

6 月 10 日（火）栗真小において、合唱・合奏支援（院生１名）

6 月 11 日（水）「幼児の音楽物語創作支援チーム」活動（第 5 回 於・白塚幼、中西智子先生）

6 月 13 日（金）第 5 期第 1 回一身田校区カルチャースクール開催

6 月 14 日（土）白塚幼稚園の土曜参観の一部である親子活動時間を担当（教育実地研究基礎）
（滝口先生、幼児教育 3 年生 12 名、1 年生 11 名、英語 1 年生 3 名）

6 月 16 日（月）一身田小、「多文化クラブ・第 2 回」（桂先生、林先生、院生、一身田小：富田先生、秋澤シルビア先生）クラブ終了後、第 3 回のための打ち合わせ

6 月 17 日（火）栗真小において、合唱・合奏支援（院生１名）

6 月 18 日（水）「幼児の音楽物語創作支援チーム」活動（第 6 回 於・白塚幼、中西智子先生）

6 月 24 日（火）一身田小学校２年生生活科「さつまいもに関わる実践」の授業計画の助言。（磯部先生、一身田小学校２年生担任）

6 月 24 日（火）栗真小において、合唱・合奏支援（院生１名）

6 月 25 日（水）「幼児の音楽物語創作支援チーム」活動（第 7 回 於・白塚幼、中西智子先生）

6 月 26 日（木）一身田小において、5 年 3 組親子活動実施（岡野先生、学生 3 名、院生 1 名、一身田小・川口先生、児童 33 名、保護者 25 名）

6 月 26 日（木）白塚幼稚園保護者向け、食生活に関連するアンケート結果の検討及びおべんとうレシピ集作成の打ち合わせ（於・三重大学、浅田先生、本多先生、磯部先生）

6 月 26 日（木）一身田小において、4 年生クラス活動「モーターをつくろう！」（牧原先生）

6 月 27 日（金）白塚幼稚園にて、大学生による「音楽物語」上演（中西智子先生、学生 26 人）

6 月 27 日（金）第 5 期第 2 回一身田校区カルチャースクール開催

7 月 1 日（火）栗真小において、合唱・合奏支援（院生１名）

7 月 2 日（水）「幼児の音楽物語創作支援チーム」活動（第 8 回 於・白塚幼、中西智子先生）

7 月 4 日（金）「生きもの環境づくり」絵本「ブルーベリーもりでのプッテのぼうけん」の読み聞かせ（学生）、子どもとブルーベリージャムを食べる（於・白塚幼稚園）

7 月 7 日（月）一身田小、「多文化クラブ・第 3 回」（桂先生、林先生、院生、一身田小：富田先生、秋澤シルビア先生）クラブ終了後、第 4 回のための打ち合わせ

7 月 8 日（火）栗真小において、合唱・合奏支援（院生１名）

7 月 10 日（木）栗真小において、「お弁当の主菜作り」（調理実習）の実施（家政教育コースの４年生２名、消費生活科学コースの４年生１名）

7 月 11 日（金）第 5 期第 3 回一身田校区カルチャースクール開催

7 月 15 日（火）栗真小において、合唱・合奏支援（院生１名）

7 月 18 日（金）白塚幼稚園において土曜参観親子活動時間（6/14）の反省会及び学生のレポート提出（教育実地研究基礎）
（滝口先生、幼児教育 3 年生 12 名、1 年生 11 名、英語 1 年生 3 名）

7 月 18 日（金）「生きもの環境づくり」テナガエビの導入、枝豆の収穫（於・白塚幼稚園　学生）

7 月 24 日（木）一身田小において、公開授業のための算数指導案の検討会
（上垣先生、一身田小の先生）

7 月 28 日（月）一身田小において、公開授業のための算数指導案の検討会
（上垣先生、一身田小の先生）

8 月 4 日（月）一身田中において、第 3 回ラート実技講習会（講師・深瀬友香子さん、後藤先生、岡野先生、学生 1 名、一身田中・教員 4 名）

8 月 21 日（木）一身田小において、体ほぐしの運動の実技講習会
（岡野先生、一身田小学校の教員）
8 月 21 日（木）一身田小において、跳び箱運動の実技講習会
（岡野先生、一身田小 3 年担任他）
8 月 25 日（月）一身田中において「授業づくり研究会（数学)」
（上垣先生、中西正治先生、院生 1 名、一身田中の数学教員）
8 月 28 日（木）一身田小において、公開授業のための算数指導案の検討会
（上垣先生、一身田小の先生）
9 月 3 日（水）～10 月 8 日（水）一身田中において、2・3 年保健体育科授業（ラート運動）に参与観察並びに指導補助（後藤先生、岡野先生、学生 1 名、一身田中・保健体育科教員 4 名)、全 10 クラス 60 時間に参加予定。
9 月 16 日（火）栗真小において、合唱・合奏支援（院生１名）
9 月 17 日（水）一身田中学校 1、3 年生を対象とした、弓場徹先生による「発声指導ワークショップ」開催
9 月 18 日（木）～10 月 16 日（木）一身田中学校コラボ音楽祭のための指導補助
（大学院生 4 名、4 年生 7 名、2 年生 2 名）
9 月 25 日（木）第 6 期一身田カルチャースクール及びコラボ音楽祭のポスターが納品される。
9 月 30 日（火）栗真小において、合唱・合奏支援（院生１名）
10 月 1 日（水）一身田小学校の算数公開授業及び事後検討会（上垣先生、一身田小の先生）
10 月２日（木）栗真小において、合唱・合奏支援（院生１）
10 月 7 日（火）コラボ音楽祭の打合せ
10 月 9 日（木）一身田小学校の算数公開授業及び事後検討会（上垣先生、一身田小の先生）
10 月 9 日（木）栗真小において、合唱・合奏支援（院生１名）
10 月 10 日（金）白塚小学校において、２年生親子活動実施（山本先生、学生 1 名、院生 5 名、栗真小・2 年担任、児童・保護者）
10 月 14 日（火）白塚幼稚園未就園児保育「ぴょんちゃんクラブ」の運営開始（教育実地研究）
1 月 27 日（火）まで、毎週火曜日に実施（滝口先生、幼児教育 4 年生 5 名）
10 月 14 日（火）栗真小において、合唱・合奏支援（院生１名）
10 月 16 日（木）コラボ音楽祭の準備
10 月 16 日（木）一身田小において、特別支援教育研究会津中地区一身田グループ交歓学習会について打ち合わせ（学生５名　斉藤先生、稲垣先生）
10 月 17 日（金）コラボ音楽祭の開催（大学教員 10 名、学生 50 名、中学校教員 40 名、
中学生 500 名、保護者 250 名、その他 20 名）
10 月 17 日（金）三重大にて、一身田小学校 1 年生全 4 クラスにおける音楽授業担当の打ち合わせ
（滝口先生、一身田小・加藤先生、冨井先生、中川先生、山羽先生）
10 月 20 日（月）一身田小、「多文化クラブ・第 4 回」（桂先生、林先生、院生、一身田小：富田先生、秋澤シルビア先生）クラブ終了後、第 5 回のための打ち合わせ

10 月 21 日（火）栗真小において、合唱・合奏支援（院生１名）
10 月 23 日（木）一身田小学校の算数公開授業及び事後検討会
（上垣先生、一身田小の先生、事後検討会は 10 月 27 日）
10 月 24 日（金）一身田小学校５年生家庭科・総合的な学習の時間「米に関わる実践」の授業計画の助言。（磯部先生、一身田小学校５年生担任）
10 月 28 日（火）栗真小において、合唱・合奏支援（院生１名）
10 月 28 日（火）一身田小において「さつまいもをそだてよう」打ち合わせ
（学生１名、２年生担任）
10 月 30 日（木）「生きもの環境づくり」落花生の収穫、味わう（於・白塚幼稚園　学生）
10 月 31 日（金）第 6 期第 1 回一身田カルチャースクール開催
11 月 4 日（火）一身田中学校における「解剖＆調理実習」の実施（2、3 限目　2 年 2 組）
（授業者：後藤先生、安野先生　補助：林先生、理科教育専修院生 1 名、理科学生１名、家政科学生 3 名）
11 月 4 日（火）栗真小において、合唱・合奏支援（院生１名）
11 月 4・5 日（火・水）一身田小学校にて、学生による音楽授業担当に関する事前検討会
（滝口先生、幼児教育 2 年生 10 名・3 年生 6 名、一身田小・加藤先生、冨井先生、中川先生、山羽先生）
11 月 5 日（水）一身田中学校における「解剖＆調理実習」の実施（3、4 限目　2 年 4 組）
（授業者：林先生、安野先生　補助：後藤先生、磯部先生、理科学生 2 名、家政科学生 2 名）
11 月 7 日（金）一身田中学校における「解剖＆調理実習」の実施（1、2 限目　2 年 3 組）
（授業者：林先生、安野先生　補助：後藤先生、理科学生 2 名、家政科学生 3 名）
11 月 7 日（金）三重大学において交歓学習会の打ち合わせ
（学生５名、一身田小特別支援学級担任斉藤先生）
11 月 10 日（月）一身田小において、特別支援教育研究会一身田グループ交歓学習会実施（学生７人　一身田小、白塚小、栗真小、大里小、高野尾小、豊が丘小の特別支援学級の児童３０人と、教員９人、介助員１３人　）
11 月 10 日（月）一身田中学校における「解剖＆調理実習」の実施（1、2 限目　2 年 1 組）
（授業者：林先生、安野先生　補助：後藤先生、理科学生 2 名、家政科学生 3 名）
11 月 11 日（火）「多文化クラブ・第 5 回」の打ち合わせ（於：三重大学、桂先生、林先生、一身田小：富田先生、秋澤シルビア先生）
11 月 12 日（水）一身田中学校における「解剖＆調理実習」の実施（3、4 限目　2 年 5 組）
（授業者：林先生、安野先生　補助：後藤先生、理科学生 2 名、家政科学生 3 名）
11 月 12 日（水）一身田小学校２年生の生活科「さつまいもの収穫」「さつまいものつるで遊ぼう」授業補助（家政４年生１名）
11 月 13 日（木）白塚小学校 4 年生の学年活動での親子のふれあい時間の担当
（滝口先生、幼児教育 3 年生 6 名）

11 月 14 日（金）第 6 期第 2 回一身田カルチャースクール開催

11 月 17 日（月）一身田小、「多文化クラブ・第 5 回」（桂先生、林先生、院生、一身田小：富田先生、秋澤シルビア先生）クラブ終了後、第 6 回のための打ち合わせ

11 月 17 日（月）一身田小学校２年生の生活科「さつまいもの栄養」家政４年生１名による授業実践（三重大学の教員・林先生が授業参観）　２年３組「さつまいもを使った料理」調理実習補助(家政３年生１名、家政４年生３名、三重大学の教員・林先生が授業参観、2 年担任角谷先生、片山先生)

11 月 18 日（火）一身田小学校２年１組・２年５組生活科「さつまいもを使った料理」学生による調理実習補助（学生 6 名、2 年担任駒田先生、今鷹先生）

11 月 17・18 日（月・火）一身田小学校にて、学生による第 1 回音楽授業担当（滝口先生、幼児教育 2 年生 10 名・3 年生 6 名、一身田小・加藤先生、冨井先生、中川先生、山羽先生）

11 月 20 日（木）一身田小２年４組生活科「さつまいもを使った料理」学生による調理実習補助（学生４名、２年担任角谷先生）

11 月 25 日（火）一身田小学校２年生の生活科「さつまいもの食物繊維」家政４年生１名による授業実践(調理実習)　２年２組「さつまいもを使った料理」調理実習補助（学生 5 名、2 年担任大口先生、角谷先生）

11 月 26 日（水）白塚幼稚園　保護者対象の食教育：保護者向け食育講演会と調理実習（磯部先生）

11 月 28 日（金）第 6 期第 3 回一身田カルチャースクール開催

11 月～12 月　一身田小学校２年生生活科「さつまいもを使った料理」実習補助（家政３年生３名、家政４年生６名、消費４年生４名）

12 月 1 日（月）一身田小、「多文化クラブ・第 6 回」（桂先生、林先生、院生、一身田小：富田先生、秋澤シルビア先生）クラブ終了後、第 7 回のための打ち合わせ

12 月 1・2 日（月・火）一身田小学校にて、学生による第 2 回音楽授業担当（滝口先生、幼児教育 2 年生 10 名・3 年生 6 名、一身田小・加藤先生、冨井先生、中川先生、山羽先生）

12 月 2 日～5 日　一身田小学校５年生家庭科「お米を使った料理　計画を立てよう」授業補助。（磯部先生、家政４年生３名、消費４年生１名）

12 月 3 日(水)一身田小学校における５年１組と 4 組の親子活動「砂糖を科学する」（5、6 限目）（理科学生 8 名、荻原先生、平賀先生、後藤先生）

12 月 3 日（水）一身田小学校の算数公開授業及び事後検討会の実施（上垣先生、一身田小の先生）

12 月 4 日（木）一身田小学校 3 年生体育科授業研究及び事後検討会の実施（岡野先生、3 年生教員他）

12 月 8（月）一身田中学校における 1 学年理科の観察・実験補助（荻原先生、平賀先生指導、理科教育法の受講生 18 名（理科・数学の 3 年生））

12 月 19 日（金）までの毎週月、火、木、金曜日に、毎時限 3-4 名が補助

12 月 9 日～12 日　一身田小学校５年生家庭科「お米を使った料理」調理実習補助
（家政３年生２名、消費３年生１名、家政４年生４名、消費４年生 3 名）
12 月 11 日（木）栗真小学校６年生家庭科「お弁当を作ろう」調理実習補助。
（家政３年生１名、家政４年生１名、消費４年生２名）
12 月 11 日（木）栗真小において、「お弁当作りの調理実習」の実施（家政教育コースの４年生１名、
３年生１名、消費生活科学コースの４年生２名
12 月 17 日（水）白塚小学校、白塚幼稚園の合同クリスマス会における演奏「音楽療法演習」
（根津先生、大学院生 2 名、4 年生 1 名、2 年生 8 名）
12 月 24 日（水）「多文化クラブ・第 7 回」の打ち合わせ（於：三重大学、桂先生、林先生、
一身田小：富田先生、秋澤シルビア先生）
12 月 24 日（水）一身田校区連絡協議会の開催（第 3 回フォーラムの打合せ他）

平成 21 年

1 月 15 日（木）一身田小学校の算数公開授業及び事後検討会の実施（上垣先生、一身田小の先生）
2 月 3 日（火）一身田小学校 1 年生及び 3 年生体育科授業研究及び事後検討会の実施予定
（岡野先生、1 年生及び 3 年生教員他、学生 5 名）
2 月 6 日～16 日　一身田中学校 2 年生（数学）の公開授業を実施
2 月 10 日（火）第 3 回フォーラムでのパネル・ディスカッションの打合会
2 月 14 日（土）一身田小学校「一小祭」にて、「おもしろ理科実験教室」開催
（後藤先生、学生、一身田小ＰＴＡ）
2 月 23 日（月）「第３回フォーラム in 一身田」の開催
3 月 3 日（火）栗真小学校「6 年生を送る会」への特別出演
三重大生による「ミニコンサート」（音楽科・大学院生 4 名）
3 月 12 日（木）一身田中学校の「教育活動情報誌」発行
3 月 17 日～19 日　一身田中学校 1 年生（数学）の公開授業を実施
3 月下旬　平成 20 年度・現代 GP 報告書（最終報告書）の作成

［6］「第3回 フォーラム in 一身田」の資料集

(1)ポスターセッション＆学生の体験発表の資料

(2)パネル・ディスカッションに関する資料

(3) NHK 解説委員・早川信夫氏の講演レジュメ

ポスターセッション

&

学生の体験発表に関する

資料

栗真小学校親子活動「つながりの輪」

「栗真小学校　親子活動」

2008 年 6 月 7 日（土）津市立栗真小学校にて三重大学教育学部学生 11 名が企画運営を行い、親子活動を実施した。参加者は、1 年生児童 12 名、2 年生児童 18 名、保護者 29 名、三重大学教育学部学生 11 名であった。

今回の親子活動では「ふれあい」を手がかりに「つながりの輪」を広げることを目的とした。

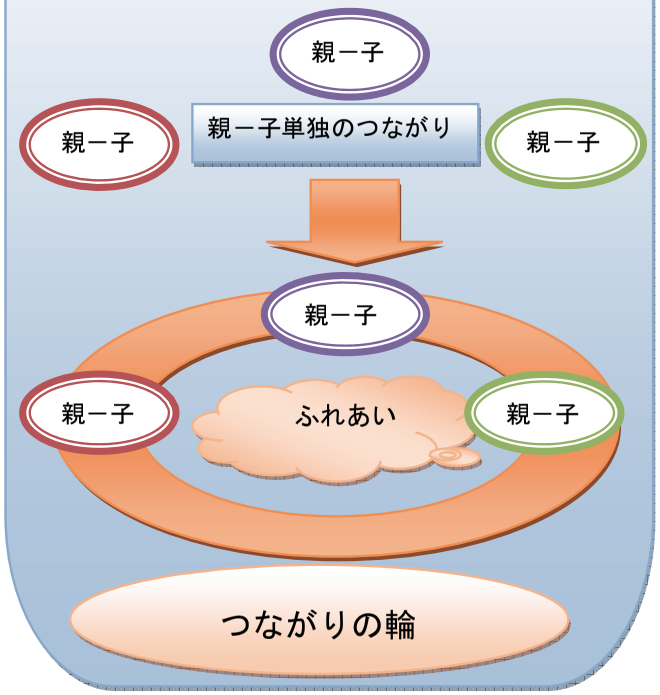
活動内容

1．ペアストレッチ
2．バタ子さんを守れ（輪っかオニ）
3．グループ作り（自己紹介）
4．フワポン（風船ゲーム）
5．くっつけ新聞島（グループ作り）
6．輪っか通し（フラフープ遊び）
7．クールダウン

発表者：○松岡弘高　浦知世　伊藤亜季
大西康太　加藤拓史　加藤真史
田中奈津美　高橋由紀
内田めぐみ　飯田健二
指導教員：山本俊彦　岡野昇

キーワード「つながりの輪」

家庭内で、すでに出来上がっている単独のつながりを地域のつながりに広げ、線であったつながりを輪にしたいと考えた。そこで、「ふれあい」を手がかりに会話が生まれ、親同士、違った親子間での新たなつながりを生み、今あるつながりから「つながりの輪」となるような活動を行った。



ふりかえり

栗真小学校からの感想で一番多く挙がったことは、親と子の関わりについての感想であり、2 番目に多かった感想はねらいであった、他の親子との関わりについてであった。これらの感想の「もっと関わりたい」という気持ちは、「つながりをつなげる」原動力となり、「つながりの輪」に向かう姿であった。

今回の親子活動では、ゲームの内容で全てのグループにおいて表面的なつながりは作り出すことができた。しかし、実際には、親子の壁を越えてつながるグループと、ゲームをこなすだけにつながっていたと感じられるグループの二つの姿が見られた。そこには、親同士、子同士が知り合いで、すでに親子関係を一歩超えたつながりの存在があった。このつながりが、更なるつながりをつくっていた。「つながりの輪」を広げるために、関係というものを深く、考えねばならないことを学んだ。今後はこのような視点を生かし「つながりの輪」を広げる実践家となってきたい。

栗真小学校における音楽会に向けた取り組み

教育学研究科2年　日下瑶子

2008年11月7日に行われた津市連合音楽会に向けての支援活動を行いました。

◇対象：栗真小学校4～6年生

◇期間：6月下旬～11月上旬　全12回(30分~2時間/回)

◇活動参加者：大学院生1名、学部生1名　　計2名

◇内容：現場の先生方とパート分けやステージ配置、編曲などに関して相談

子ども達の器楽合奏、合唱のパート別の支援、合奏でのアドバイスなど

Start

●6月下旬～8月

・パート分け

・4～6年の音楽の授業に入り、見学・補助を行う。

・夏休みの練習での支援

⇒

●9月～

・各学年の授業や合同練習での支援を行う。

⇒

●11月7日

音楽会本番！！

◇支援記録から～

先生は指揮をしながら子ども達を見渡す。1番から5番まである『パフ』だが、1回1回それぞれのグループが楽器を変えたり、マレットを変えたりするので音色が全然違う。また5回の流れの中で、たいこを叩くのが弱まったり、しっかりした音が聞こえてきたりする。また、演奏隊形を子ども達が意識しているようには見えないが、ちょうど太鼓の集団の音が、1つの音になって聞こえてきた。また楽器の組み合わせを変えて奏でられる多様な旋律。子ども達は周りを見渡しながら、顔をあわせて笑顔で演奏していた。(2008.06.17/4年生の授業記録より)

栗真の子ども達は、他者がいることで安心して過ごしているように感じた。誰かが一緒に演奏しているから楽しくて、みんなで演奏しているから、安心して音を出して、そして人の音を聴いてだんだん変化させていく。何人もの人が演奏しているという環境だからこそ、それぞれが守られているのだと思う。

また、子どもたち同士で技術的な教えあいもみられた。上記2つのエピソードでは、子ども達が他者の存在に守られていると書いたが、それで終わってしまうのではなく、子ども達は、お互いに“言い合える”強さも持っていると感じる。

Cさんは、夏休みも来ていたこともあり、リズムはたたけるようになっていた。B君と重なるということも理解していたようだった。しかし、多少早くなってしまうことやリズムのすべりが気になる。Cさんは、夏休みは黙々と練習しているだけだったが、今日は、B君と2人で合わせたとき、B君に「こうやって～」と教えようとしたり、積極的だった。(2008.9.16/夏休みの練習)

◇活動を終えて・・・

子ども達の演奏技術の面、意欲の面を考えさせられ、目の前にいる子が何をクリアしたらもっと深められるのかということを常に考えていた。大学での音楽理論や実技、教育学ではそれぞれバラバラの知識として持っていたが、これらの学びを常に結び付けて考えることが必要だと感じた。毎回毎回子ども達の大きな力を感じながら、一緒に音楽に取り組めたことはとても貴重な体験になった。

世界を結ぼう！

外国につながる子どもたちが多く在籍する一身田小学校において、平成 20 年 4 月からスタートした 4 年生以上が対象のクラブ活動。担当は富田先生とシルビア先生。

クラブの目的：

①世界には様々な国や文化があることを知ること

②母国の文化や習慣を知り、アイデンティティの確立の一助となること

③わかったことや知ったことを皆に発信すること

三重大学教育学部　日本語教育コース１年 11 名・英語教育コース１年３名

指導教員：桂直美・別府直苗・林朝子

第1回　クラブ名を決めよう

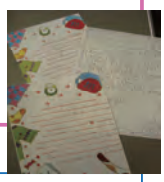
子どもたちが話し合って決めたクラブの名前は「世界を結ぼう」。これからのクラブで行いたい活動を考えた。

第2回ブラジルについて知ろう！

ブラジルの友だちに手紙を書く前に、まずブラジルについて調べた。家では家族の人に聞いたり、ニュース・新聞を見て、教室では本で調べたり、シルビア先生にお聞きしたりした。ブラジルのお祭りや学校生活の違いにびっくり。手紙で伝えたいこと・聞きたいことを決めた。

第3回　手紙を書こう！ To ブラジルのめぐみ学校

ブラジルの日本人学校「めぐみ学校」のお友達に手紙を書く。外国に手紙を書くのは初めてで、とても嬉しそうだった。



第4回　日本を知って

この日の活動は「ブラジルの子どもたちに日本について紹介する手紙を書く」というもの。自由に写真を選び、色画用紙の台紙に貼り付けた。先生からは工夫するよう指示があり、特に女子児童は得手と見えて、難なくこなせていた☆

第5回みんなで歌おう！

この日のクラブには２人のブラジル人児童が来てくれ、子ども達は異文化を肌で感じられた。ブラジルと日本での動物の鳴き声の比較をしたり、ブラジルの「ねこに棒をなげた」という歌を歌ったりして、楽しみながら言葉の違いを学べた。椅子に座る形での活動ではなかったため、子ども達はとても開放的に見えた。

第6回　Who is シルビア先生？

クラブ担当のシルビア先生からブラジルについて（生活・学校・食べ物など）の話を聞き、その後子ども達や私達大学生が疑問に思ったことや聞きたいことを質問して、シルビア先生がそれに答えてくださった。シルビア先生は子ども達にも分かりやすいように説明してくださり、子ども達だけではなく私達も新しい知識をたくさん得ることができた。

第7回　ダンスを楽しもう！

この日の活動は、３年生のブラジル人児童を加えて、ブラジルの子供たちがほとんど皆知っている「ＰＯＰＰＯＰ」（ポピポピ）を歌って踊った。この「ＰＯＰＰＯＰ」という音楽は歌詞に手や足、頭やおしりなどの体の部位をさす言葉が入っており、歌いながらそれぞれを動かすというもの。やはり子供たちは実際に自分たちで体験することの方が好きなようで、皆イキイキと活動を行っていた♪

第8回　お菓子作り

みんなで楽しくブラジルのお菓子を作る予定…♪

一身田小学校
親子活動

2008. 6. 4

実践者 ：○内田めぐみ　浦知世　飯田健二　松岡弘高　加藤真史　田中奈津美　高橋由樹 伊藤亜季　加藤拓史　大西康太　山本大進
伊藤暢浩　加納岳拓　大日方政之　日比野達規　山本洋也
指導教員：　山本俊彦　岡野昇

ー活動概要ー

２００８年６月４日、津市立一身田小学校 PTA５年２組親子活動において児童（３５名）、保護者（２６名）を対象に活動を企画考案し、実践した。三重大学教育学部生１４名、院生２名が参加した。

テーマ：親子の殻から出ることを体験しその良さに気づこう

一般的に“親子関係”は、人と人との関係の中でもつながりが強く、よりよく人が成長していくために必要な関係である。その関係から人は多くのことを学びながら、成長していく。しかし、その関係の強さゆえに、「家庭内」の枠組みから「社会」という広い枠組みの中に飛び込めなかったり、社会に出ても自分の力であらゆることに適応しながら生きていくことが困難になっていたりする側面を持っているように考える。そこで私たちは、親子の関係が密である傾向に着目し、「親子の殻から出ることのよさを体験してもらうこと」をねらいとした。そのねらいを達成するために、私たちはすべての活動をダンスで行い、親と子が離れながらもそれぞれが多くの人と出会い、かかわることのできる活動を考え実行した。

集団で活動することへの戸惑いや緊張があった。しかし、だんだん慣れてくると笑顔も見られるようになった。

親子で向き合って、楽しそうに手を合わせて踊っている様子が多く見られた。

ー活動内容ー

①ウォームアップ　②チュンチュン列車
③花まつり　④人間イス

動きが分かると次第に動きが参加者自身の踊りになっていたが、中には腕を組もうとしない人や、相手を見つけられない人もいた。

人と人とがかなり密着する活動であったが、自然に触れ合えていた。できたときには大きな歓声があがり、一体感が生まれていた。

ー振り返りー

実際の活動では、参加者が私たちの作った簡単な動きを自分自身の動きにし、リズムに合わせて体を動かすことにより緊張をほぐし、多くの他者と出会い、かかわりを持つことができた。

しかし、そのかかわりは私たちが期待したかかわりとはズレがあった。そのズレとは、手を合わせたり腕を組んだりの身体のかかわりはあったが、相手の顔をよく見たり、目を合わせたりはしていなかったというかかわり方だった。それは本当にかかわっていると言えるのだろうか。そもそもかかわりとは何なのか、なぜかかわりが必要なのかを私たちは明らかにする必要がある。

食に関する授業における一身田小学校との連携

家政教育コース 57 期　中川知美
家政教育コース　林未和子・磯部由香

2 年生　生活科

さつまいもにチャレンジ！～みんなでさつまいもパーティー～

自分たちでさつまいもを育てる、調べる、料理をするといった活動を通して
食に対する関心を高めていこうとする単元

さつまいもほり

大きく
なったよ！

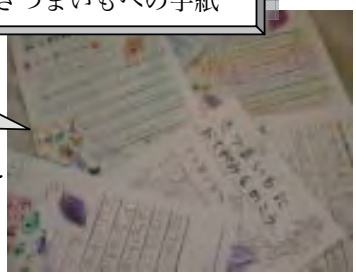
いろんなさつまいもが
とれたよ

- ○　授業観察
- ○　さつまいもの栄養面の指導
- ○　さつまいもへの思いを手紙で表現
- ○　さつまいもクリームのレシピ試作
- ○　当日の実習準備及び実習補助

さつまいもの栄養

さつまいもって
体にいいんだね

さつまいもへの手紙



さつまいもくん
ありがとう！

おいしい料理を
作るから
楽しみにしていてね

調理実習

蒸しパンの片方は
１年生にプレゼント

みんなで作った
茶巾絞り

食物繊維が
見えたよ

実践を通して…

- ○　『知っている』→『わかった！』　体験活動は記憶に残る理解につながる
- ○　発達段階に応じた安全管理や調理法の工夫を知ることができた
- ○　活動計画に対する子どもたちの生きた反応を見ることができた
- ○　現場の先生からアドバイスをいただけるよい機会に！

白塚幼稚園・白塚小学校におけるクリスマス会
～「音楽療法演習」の学びを活かして～

奥田博子（チューター・大学院2年）・根津知佳子（授業担当教員）

2008年12月白塚小学校体育館において白塚幼稚園・白塚小学校のクリスマス会が行われた。
幼稚園児の合唱奏、小学校教諭と3年生による合奏に続いて、大学生（10名）・院生（2名）による演奏、全員合唱などが行われた。
大学生のプログラムは、「音楽療法演習」での学びを基盤としている。

三重大学「音楽療法演習」 2年次

受講生は、音楽を媒体として他者とコミュニケーションをする体験を通して「音楽の持つ機能」を理解することを大学で学んできた。
今回の実践では、子ども達に合わせたプログラムづくりに取り組んだ。

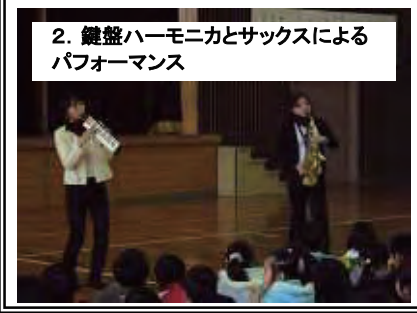
準備期間　プログラム作り・練習（3週間）

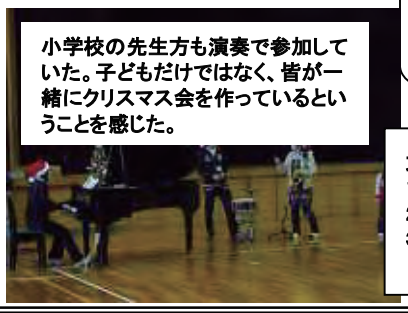
演奏練習だけではなく、受講生同士で子どもの代わりに演奏を聴いて、フィードバックするというリハーサルも行った。
昼休みなどにも集まり、立ち位置や曲順・服装や演奏中のふるまいなど細やかな指導を受けた。

現場での学び

1. 鍵盤ハーモニカ・ピアノ・トランペットパーカッション・フルートによる演奏

3. トーンチャイムとギターによる演奏


2. 鍵盤ハーモニカとサックスによるパフォーマンス


小学校の先生方も演奏で参加していた。子どもだけではなく、皆が一緒にクリスマス会を作っているということを感じた。

白塚小学校でのクリスマス会

予想外のｱﾝｺｰﾙがあり手拍子や打楽器・ピアノ・サックスなどを即興で盛り込んだ演奏をした。

大学生のプログラム
1. サンタが街にやってくる
2. チャルダッシュ
3. きよしこの夜
　ジングルベル（ｱﾝｺｰﾙ）

授業内容の応用

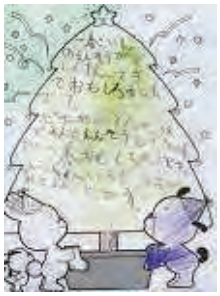
クリスマス会を終え、後日行われた受講生・担当教員との振り返りでは、

「目の前の子ども達の反応に合わせてパフォーマンスすることの大切さを実感した」

「子どもたちに楽しんでもらえる音楽とは、大げさなほど表現して丁度よく、質も高いものであることが大事」

などの意見が出た。

子ども達から後日届いた感想（一部）



数学教育・学校教育コース学生による教育実地研究の活動

小学校での活動

数学教育・学校教育コース学生（１年生、29 名）が、「教育実地研究基礎」の授業の一環として、栗真小･白塚小･一身田小で教育アシスタント活動を実施した。具体的な活動例は以下の通りです。

①算数の計算のプリント学習のとき、アドバイスや、まる付けをする。
②テスト直しのときに質問してくるので、それに答える
③スポーツテストのとき、整列させるなどの補助をする。
④運動会の練習のとき、補助活動をする。綱引きの準備や後片付けをする。
⑤図工の時間で、ボンド付けなどして、子どもの活動をサポートする。
⑥七夕の飾り付けを子どもたちと一緒にする、鶴の折り方を教える
⑦児童集会で、子どもを整列させるなどの補助活動をする。
⑧体育のリレーでのゼッケンの準備や、子どもの誘導をする。

学生の意見・感想

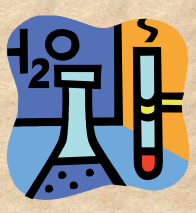
① 算数の授業で、子供たちが授業中にやったプリントのまる付けやアドバイスをした。間違えている所を教えるとき、説明の仕方が難しかったが、よく理解してくれて嬉しかった。
② 先生が注意をすると、子どもはきちんと言うことを聞いていた。先生と子どもの信頼関係が大事だと思った。
③ 自分が当たり前に知っている言葉でも、全く知らない言葉が小学生には沢山あり、教えるときに、さらにその言葉を説明しなければならず、教える難しさを感じた。
④つまずきやすい所は、どの子どもも似ていて、そこをどういう風にわかりやすく説明するかが大事だと感じた。実際に現場に行って、子供たちと接することからは、得るものが多い。
⑤ 提出物には、先生は厳しかった。忘れてきても正直に言わない子には、特に注意していた。見ていて、とてもいい経験になった。
⑥ 最後に、「今日はあの子についていてくれてありがとう」と先生に言ってもらえたのが、とても嬉しかった。改めて教師になりたいと思った。
⑦わからなくても、少しヒントを与えてあげると、考えて自分で答えを見つけ出す子どもたちの考える力のすごさを体感しました。
⑧ 漢字の書き順や難しい漢字など、戸惑っていた子供たちにアドバイスをした。みんなよく聞いてくれて、教えた後、よくできていたので嬉しかった。
⑨ 文章問題をたくさん解いた。かける数とかけられる数を逆にしている子供が多かった。自分の中では、掛け算は常識となっているので、１から教えるのは難しかった。よい経験になった。

中等理科教育法Ⅰ・Ⅱ

一身田中学校（理科）における授業支援

三重大学教育学部　理科教育コース

○講　　義　この活動は、下記の講義の中で実施した
　中等理科教育法Ⅰ（前期）　指導教員：平賀伸夫、荻原彰
　中等理科教育法Ⅱ（後期）　指導教員：荻原彰、平賀伸夫
○目　　的　（前期）　教育実習にむけて現場の様子を把握する
　（後期）　教育実習で学んだ経験を活かし、さらに教育実践への認識を深める
○活動概要　近隣中学校における授業補助、実験補助および授業実践
○学　　生　三重大学 教育学部　理科教育コース　３年生 15名
　数学教育コース　４年生　３名
○対象学校　一身田中学校　１年生　理科　（受講生 約40名×５クラス）
　３年生 選択理科　（受講生 約10名）
○期　　間　前期：５月上旬～７月上旬（全30日間、学生１人あたり４時間担当）
　後期：12月上旬～１月下旬（全20日間、学生１人あたり３時間担当）
○課　　題　４回にわたるアンケートへの記入



前期の活動

＜単　　元＞
2分野　植物のくらしとなかま

＜活動内容＞
○授業見学
○生徒への個別支援
○実験操作の補助

教育実習

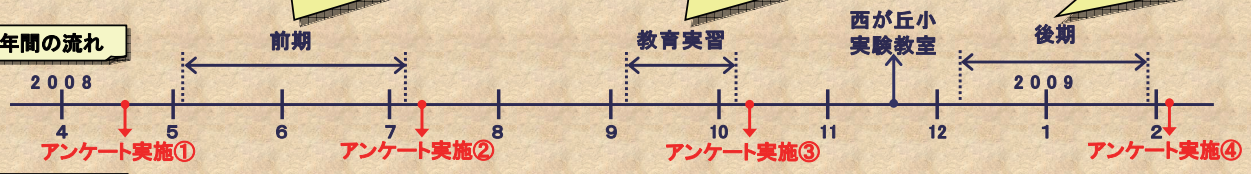
学　　生：理科教育コース　３年生 15名
対象学校：三重大学附属小学校　２名
　三重大学附属中学校　８名
　協力校　（小学校）　２名
　協力校　（中学校）　３名
期　　間：９月上旬～10月上旬

後期の活動

＜単　　元＞
1分野　身のまわりの物質

＜活動内容＞
○授業実践
（ワインの蒸留実験）
○生徒への個別支援
○実験操作の補助

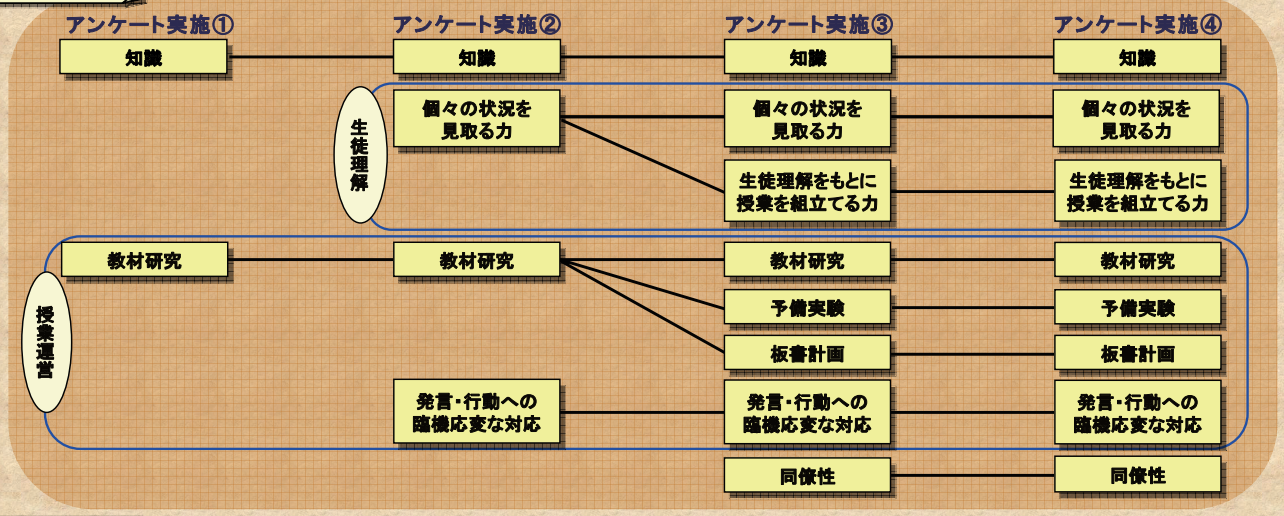
1年間の流れ



アンケート内容

理科の教師として、どのような力が大切だと思いますか。具体的に記してください。

アンケート結果



まとめ

１年間の活動を通して、教師としての資質を多面的にとらえられるようになった。

感想・改善点

・良い授業には、生徒を理解することや、生徒と信頼関係を築くことが必要であると感じた。
・現場を体験する機会は実際にあまりないので、教育実習前に現場を体験できたことはとてもよかった。
・現場の教師と事前うちあわせをもっと行って、授業に臨む必要があった。
・前期が終わった段階で、ポートフォリオの発表を行う等しておけば、新たな視点を持って支援ができたと思う。

一身田中学校と音楽科との連携
―コラボ音楽祭―

代　　表：伊藤加織（大学院教育学研究科音楽教育専修１年）
指導教員：根津知佳子

【コラボ音楽祭とは】

音楽科では、一身田中学校のコーラスコンクールに学生が参加するという取り組みを、2006 年度より行っている。
コンクールは 10 月に三翠ホールで開催され、音楽科学生も合唱でステージに立つ。
2007 年度からは、学生が一身田中学校に出向き、先生のサポート役として中学生の練習を支援している。
音楽を通して中学生と大学生とが「つながる」活動である。

【今年度の取り組み】

＜支援への参加～コーラスコンクールまで＞

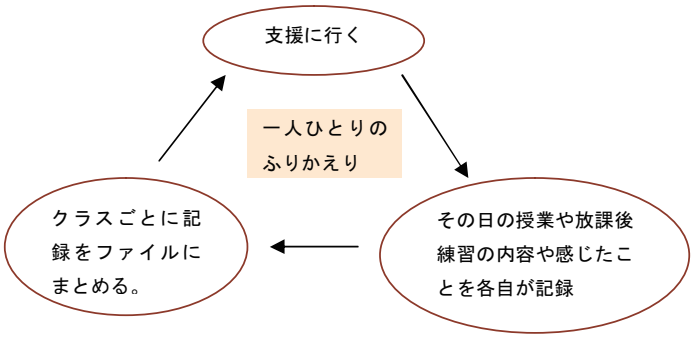
各クラスに１人ずつ担当の学生を決め、９月中頃から 10 月の本番まで自分の担当クラスの授業および放課後練習の時間に中学校に出向き、練習に参加する。
授業時間中は、音楽の先生のサポート役として、音の確認や発声のアドバイスをしたり、感想を伝えたりする。
放課後は、各クラスの担任の先生にご協力いただき、教室での練習の様子を見ながらアドバイスや指導を行う。

今年度は、大学院生４名、学部４年生７名、２年生２名 の計 13 名が参加した。

＜コーラスコンクール当日＞

中学生の発表のあと、ステージで音楽科学生の合唱を披露。音楽教育コース１～４年生全員（36 名）と院生１名が参加した。

【大学でのふりかえり】



急遽自分の担当外のクラスに入ることになった場合、その学生はクラスのファイルを見ることで、それまでの支援の経過やクラスの様子を知ることができ、担当外のクラスでもスムーズに支援に入ることができる。

支援メンバー全員でのふりかえり

定期的にメンバーで集まり、支援の内容や方法について話し合いを行う。学生一人ひとりが自分の担当するクラスの様子や学んだことなどを発表し、互いに聞きあうことで、更に考えを深めることができる。

数学教育・情報教育コース学生による教育実地研究の活動

中学校での活動

数学教育・情報教育コース学生（３、４年生、39 名）が「数学科教育法」の授業の一環として、一身田中学校で教育アシスタント活動を実施した。具体的な活動内容は以下の通りです。

① 図形の証明、文字式の計算、方程式の解法、１次関数、作図問題などの学習で、生徒が練習問題などに取り組んでいるとき、机間指導して、サポートする。

②生徒が演習問題を解いているとき、巡回しながら、赤ペンによる〇付けをする。

③授業を見学し、数学授業のあり方、発問や板書の仕方、生徒との対応の仕方などを学ぶ。

④放課後の学習機会である「寺子屋いっちゅう」（15：00ー16：00）において、生徒の数学学習をサポートする。

学生の意見・感想

①中学生でも、しっかり考え、いろいろな考え方や発想する力がある子がいるのだと実感した。

② 全員が理解する授業、楽しい授業というのは難しいですが、そうするための努力は決して惜しまなくしていくべきだと考えます。

③ 一人の生徒が「なぜ、面積は S というアルファベットを使うの？」と聞いてきた。上垣先生のおっしゃっていた事を思い出し、きちんと説明したら、生徒が「へえ、そうなんだ」という顔をしてくれたことが、とても嬉しかった。

④ 証明の問題で、仮定と結論をはっきりさせることが苦手な生徒が多いので、はっきりさせる指導の重要性を実感した。

⑤ 生徒に板書の時間をしっかり与えると同時に、先生が説明するときは、しっかり前を見させることを徹底していた。とても大事なことだと感じた。

⑥学習支援という貴重な経験を通じて、生徒の気持ちを敏感に読み取ること、生徒と同じ視線から考えること、教師としてどんな急なアクシデント、展開になっても、冷静に考え、授業を再構成していくことの大事さというものを僕の中で得ることができた。

⑦ 今回で一身田に行くのは最後だったので、終わってしまうのは寂しかったけど、授業について、生徒理解、指導について勉強することがとても多くて、とても良い経験ができ、良かったなと思っています。ありがとうございました。

中学校体育のカリキュラム改善に関する一考察

保健体育コース　57 期　205121 番　山本洋也
指導教員　岡野　昇

問題の所在及び目的

筆者は公立中学校の教育実習を経験し，中学校の体育授業(カリキュラム)は，課題解決型，能動的志向，一人でもできる運動，自主的，主体的ということが大切にされ授業が展開されているように感じた。それは，他者，モノ，記録，課題などに対して意志的に自分を向かわせる，すなわち「働きかける」という志向性である。このような体育授業(カリキュラム)では，積極的受動性，すなわち他者やモノなどからの情報を受動し，それに合わせて自らが動かされる，「働きかけられる」という志向性にはあまり着目されていないのではないかと考えた。

よって本研究では「働きかけられる」ということに着目するために，運動者が主体的に操作するとともに，ある程度身を任せることが必要であり，「自由に操ろう」という意識が強すぎると上手くいかない(後藤，2008)といわれる，ラート運動の中学校の体育授業への導入を手がかりに，中学校体育のカリキュラム改善の視点を明らかにすることを目的とする。

研究の進め方

(1)　第Ⅰ章では，岡野(2003)の論を手掛かりに，これまでの体育カリキュラムの問題点を提示し，これまでと本研究でのカリキュラム改善に関わる考え方や立場を明確にする。

(2)　第Ⅱ章では，全国で初めて中学校でラート運動の導入を試みた体育授業を取り上げ，生徒への質問紙調査の結果をまとめる。

(3)　第Ⅲ章では，第Ⅱ章での質問紙調査の結果を考察し，明らかになったことから，カリキュラム改善の視点を提示する。

第Ⅰ章　カリキュラム改善と中学校の体育カリキュラム

カリキュラムについて，佐藤(1996)の文献から「カリキュラム＝プラン(計画)」という従来の捉え方ではなく，「カリキュラム＝学びの経験(履歴)」と捉えることで，カリキュラムは「教え・学びのレベル」＝〔カリキュラム①〕，「学校の計画のレベル」＝〔カリキュラム②〕，「国の政策レベル」＝〔カリキュラム③〕の３つに整理され（駒林，1987)，学習指導要領など〔カリキュラム③〕や〔カリキュラム②〕をそつなくこなし，カリキュラムをよりよく変えようという姿勢を持たない，カリキュラム・ユーザーではなく，実際の子どもの姿からカリキュラムを考え，子どもと共に生成していく，カリキュラム・メーカーとして位置づかなくてはならないということを検討した。その上で，筆者は３つのレベルのうち〔カリキュラム①〕つまり「教え・学びのレベル」での改善に目を向け，自分自身の実習などから現在の中学校の体育カリキュラムをみなおした。

現在の中学校体育は機能的特性を背景としており，学習指導要領で取り上げられる種目は，欲求充足として「競争・克服・達成」の要素を含む競技スポーツが多くを占めている。つまり，現在の中学校の体育カリキュラムの問題点に，岡野の「働きかけるー働きかけられる」という視点から，カリキュラムが「働きかける」というほうに傾斜しているという問題が明らかになった。よって「働きかける」と共に「働きかけられる」にも着目することが大切であるということを考えた。

そこで今回は，ラート運動を取り上げていくことにする。これまでの中学校体育と本研究での筆者の立場をまとめたのが表１である。

表１　これまでと本研究の立場

	これまで	本研究
教師の立場	カリキュラム・ユーザー	カリキュラム・メーカー
中学校体育において大切にされる視点	働きかける 主体性	働きかけるー働きかけられる 主体とともに客体
運動種目	スポーツ(競争・克服・達成) 中心	ラート運動

第Ⅱ章　中学校体育におけるラート運動の導入の試み

本章では前章をうけ，M県Ｔ市立Ⅰ中学校の体育授業におけるラート運動の導入の試みを取り上げた。そこでは全 60 時間の参与観察と，単元終了後に質問紙調査を行った。質問紙調査の内容は，「体育授業についての形成的授業評価」(調査項目Ⅰ)，「ラート運動の特性について」(調査項目Ⅱ)，「ラート運動と中学校体育の他領域との関係」(調

査項目Ⅲ)，「自由記述」(調査項目Ⅳ)の 4 種類で，これらを 1 つにまとめ，シートを作成した。また，それぞれを集計し，その結果をまとめた。

調査項目Ⅰでは，「成果」「意欲関心」「学び方」「協力」の 4 つの次元と「総合評価」があり，2 年生は全体的に「協力」次元が高く，3 年生は全体的に「成果」「学び方」の 2 つの次元と「総合評価」が高い評定であるという結果が得られた。

また，調査項目Ⅱでは，ラートの特性についての質問項目が 5 つあり，「気持ちがよかった」「浮遊感を味わえた」という質問に対しては「そう思う群」に回答した生徒が全クラスの平均で 6 割，「どちらともいえない」と合わせると 8 割を超えるという結果が得られた。また，「怖かった」「目が回った」「疲れた」という質問に対しては，ほとんどのクラスで「そう思う群」と「そう思わない群」が同じ比率であるという結果が得られた。

調査項目Ⅲでは，カリキュラムについての質問項目が 8 つあり，その中の「またラート運動をやってみたいか」という質問には，「そう思う群」に回答した生徒が全クラスの平均で 8 割を超えているという結果が得られた。また，球技以外の領域と比べるとラート運動の方が楽しかったと回答する生徒が半数を超えていた。

調査項目Ⅳでは，自由記述を KJ 法にかけた。そこでは，3 年生は回転場面など「働きかけられる」という局面に関するコメントの件数が多くあった。一方，2 年生は「競争・克服・達成」といった，より意志的な「働きかける」という局面に関するコメントの件数が多かった。

第Ⅲ章　中学校体育のカリキュラム改善の視点

第Ⅱ章の結果について考察すると，調査項目Ⅲから，ラート運動はおおむねの中学生に受け入れられているということが明らかになった。その理由としては調査項目Ⅱから，「気持ちがよい」「浮遊感を味わえる」や，多少の怖さ「ハラハラ・ドキドキ」や遊園地のコーヒーカップに乗って感じられるような多少の「眩暈」を感じられるからではないかと推測される。また「疲れるけど疲れない」，つまり「働きかける」局面と「働きかけられる」局面のどちらも生徒は感じられているということが推測できる。授業としてみてみると，調査項目Ⅰより，ラート運動の授業としては，クラス，学年によって受け入れられ方が違い，2 年生よりも，3 年生に多く受け入れられ，調査項目Ⅳからは，3 年生はラート運動の「働きかけられる」という側面に楽しさの多くを感じており，一方 2 年生は「競争・克服・達成」など「働きかける」という意志的なところに楽しさの多くを感じていたということが明らかになった。

以上のことから，ラート運動はおおむねの中学生に受け入れられていること，つまり，ラート運動が特性としてもつ「働きかけるー働きかけられる」，特に「働きかけられる」という視点は中学生に受け入れられるということが分かった。また，発達段階や，クラスの実態に応じて，人，物的障害，記録などに向かい，それを超えていこうとする「達成・超越志向」と，人やモノに融けこみ，感じようとする「共感志向」の取り上げ方，ラートであれば前者は「技ができるようにしよう」，後者は「ラートに合わせて回ってみよう」など，同じ運動を取り上げるにしても，どのようなことを大切にしてカリキュラムを構成していくか，授業の進め方を考えていくかという，カリキュラム改善の視点が必要だということが明らかになった。

まとめと今後の課題

本研究では，以下の 2 点がカリキュラム改善の視点として明らかになった。

1 つは，「働きかける」と共に「働きかけられる」にも着目していかなければならないということ。2 つは，他領域でも，発達段階やクラスの実態に合わせて「達成・超越志向」「共感志向」の取り上げ方を考えていくことである。つまり，今回のようにラート運動を取り上げれば，「働きかけられる」という側面に着目できるという事ではなく，取り上げる種目で，「達成・超越志向」と「共感志向」のどちらを中心としてカリキュラムを考えていくかということが必要であるということである。

今後の課題として挙げられるのは，本稿では，この実践について教師はどう感じているのか，また実際の運動場面での検討がなされていないというところである。今後，検討が必要である。

【引用・参考文献】

後藤洋子(2008)「保健体育科授業にラート運動を導入するという取り組み」，三重大学教育学部・一身田校区連携推進協議会編，p.55
駒林邦男(1987)「子どもは授業で何を学ぶか」，『岩手大学教育学部研究年報』第 46 巻第 2 号，pp.79-80
岡野昇(2003)「『かかわり合い』の成り立ちを基軸とした授業構想の視座」，『学校教育研』，No.18
佐藤学(1996)「序論　カリキュラムの言語と実践」，『カリキュラムの批判　公共性の再構築へ』，世織書房

パネル・ディスカッションに関する資料

テーマ「幼・小・中・大連携の成果と課題

－３年間をふりかえって－」

コーディネーター　岡野　　昇　（教育学部准教授）

パネリスト　本多　啓子　（白塚幼稚園教諭）

井ノ口八重子（栗真小学校教諭）

渡邊　　史　（白塚小学校教諭）

加藤真由子　（一身田小学校教諭）

笠原　　哲　（一身田中学校校長）

後藤太一郎　（教育学部教授）

教育実践力の育成と学校・地域の活性化

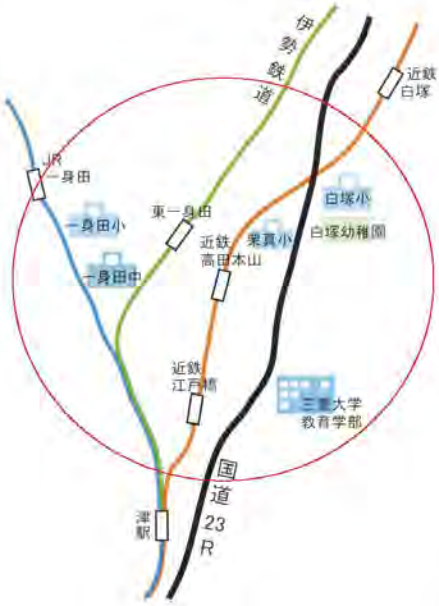
三重大学教育学部・現代GP 3年間の取り組みから

事業推進責任者
三重大学教育学部教授
上垣　渉

2009年2月23日
報告者：後藤太一郎

現代GP地域連携（18～20年度）

事業名称「教育実践力の育成と学校・地域の活性化」



○三重大学教育学部に隣接する津市立一身田中学校区（1中学校、3小学校、1幼稚園）と教育学部が連携協力

○教員養成段階における学生の「実践的指導力の基礎」を涵養する教育実地研究の場

○各学校園の各教科の教育活動、総合的な学習、課題学習、選択学習、課外活動等の諸教育活動を総合的に支援

学校・地域活性化モデル
幼小中大連携モデル

事業の基本骨格

1.「一身田校区カルチャースクール」の実施

2. 中学校文化祭における合唱コンクールの支援と協同

3. 特色のある授業の開発と支援

4. 児童・生徒の学力向上と学生の教育実践力の推進

5. 公開授業のための指導案の検討

6. フォーラムの開催(取り組みの総括)

現代GPにおける20年度の取り組み

コース	学習支援	授業研究	学校行事	課外活動	連携学校園
社会				キャリア教育	
数学	小中学校での補助 数学の学習支援	公開授業のための 指導案検討会		放課後の学習支援 (SAS活動)	小中学校
理科	解剖と調理実習		学年活動	青少年のための科学 の祭典への出展	小中学校
	理科実験指導 出前授業				
音楽	合唱指導	参与観察 ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ型授業	文化祭における 合唱コンクール 発声法ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ		幼小中学校
体育	水泳指導	授業実践 ゲーム活動検討会 ラート研修会	学年活動		小中学校
家政	食に関する授業				小中学校
幼児教育	生活科の活動支援 出前授業		学年活動	親子活動	幼稚園、小学校
	未就園児保育の運営				
人間発達科学	多文化理解				小学校

地域連携活動の事例

特色ある授業の開発と支援

2007年11月13日

理科と家庭科 合同授業

ニジマス解剖し料理

一身田中2年生

命の大切さ学ぶ

焼いてムニエルに利用

理科と家庭科のクロスカリキュラム(18年～)

学校行事への支援

連携教育"ハーモニー"

津一身田中 合唱コン三重大で

中学校文化祭における合唱コンクールの準備に音楽科の学生が指導
-コラボ音楽祭- （18年～）

2008年9月21日

自転車運動もっと楽しく

津の一身田中

鉄輪で宇宙遊泳

ドイツ生まれのラート

中学校におけるラート運動の導入 （19年～）

3年間の活動数

	18年度	19年度	20年度
参加教員数	11名	19名	24名
取組数	10	36	39
一身田中学校	9	10	10
一身田小学校	1	11	14
栗真小学校	0	7	5
白塚小学校	0	3	4
白塚幼稚園	0	5	6
取組の主な内容			
学習支援	2	15	13
授業研究	4	5	7
出前授業	1	6	4
学校行事	1	7	9
教員研修	3	2	5
学生が参加した取組	6	29	28
授業に関連した取組	3	12	19
連携日数(延べ数)	57日	705日	787日
参加学生数(延べ数)	112名	294名	306名
学生の参加時間	8.8時間	8.4時間	9.9時間

3年間の活動に関する記録

	18年度	19年度	20年度
学生への課題			
レポート	3	18	23
授業記録	1	6	11
ポートフォリオ	1	7	10
省察の方法			
検討会	3	21	23
e-ﾗｰﾆﾝｸﾞ	0	1	2
学生による授業評価	0	4	6
内外への発信			
学内でのﾎﾟｽﾀｰ発表	0	18	13
卒論発表	0	0	5
学会発表	0	1	1
論文発表	1	1	0
報告書等	1	1	4
広報			
新聞	2	2	10
テレビ	0	0	2
HP	0	0	1
その他	0	0	1

教員養成における課題（1）

教員免許法施行規則の一部改正

教職実践演習の導入

普通免許状に係わる所要資格を得るために習得が必要な「教職に関する科目」として、「教職実践演習」を新設する。

○４年次配当科目とする

（21年度申請、22年度入学生からスタート、25年度から実施）

○教科に関する科目及び教職に関する科目の履修状況を踏まえ、教員として必要な知識技能を習得したことを確認したものとする

○授業方法として以下のようにする

●役割演技、事例研究、現地調査、模擬授業を取り入れる

●現職の教員や教員勤務経験者を講師とした授業を取り入れる

●連携先となる教育委員会及び学校を確保することや授業計画の立案にあたって、当該教育委員会または学校の意見を聞く

教員養成における課題（２）

教職指導及び教育実習の円滑な実施の努力義務化

教職課程を有する大学は、学生に対する適切な教職指導及び教育実習の円滑な実施に努めなければならないこととする。

- ○学生の学習履歴
- ○大学教員と実習校の教員が連携して指導
- ○母校実習については避ける方向で見直す
- ○実習生を円滑に受け入れていく具体的仕組みを検討

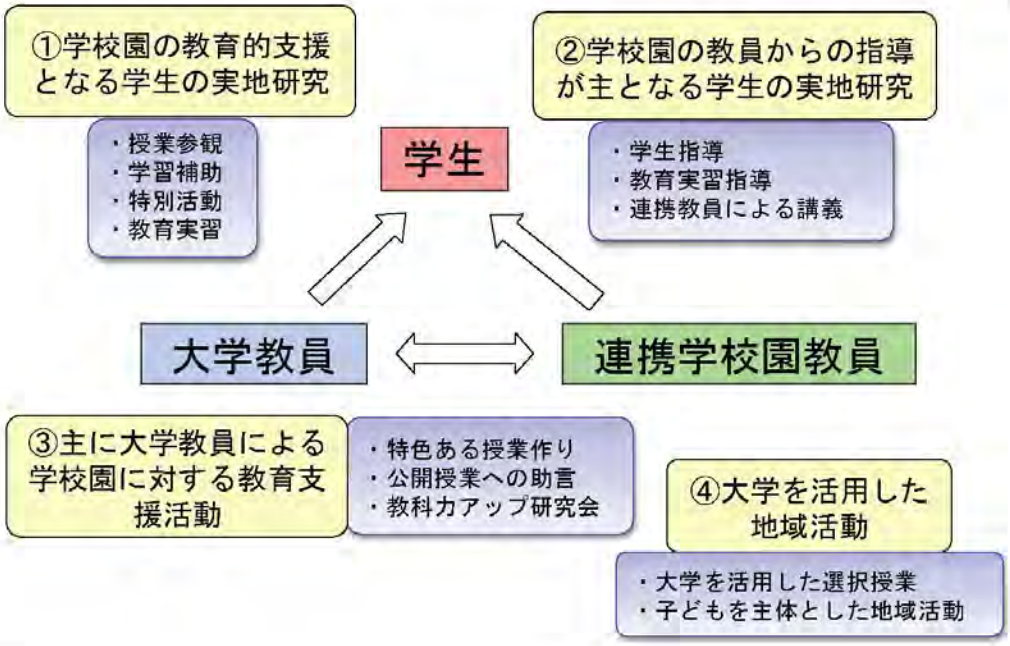
現状は…

４週間実習（３年次）	附属学校 協力校 母校
２週間実習（４年次）	

協力校での実施に係わる問題

- ・事前に学校の様子をみる時間が少ない
- ・遠方のために大学教員は特練授業をみるだけで、実習校教員だけが指導

隣接学校区との連携活動の強化



18年度

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳
取組番号	担当教員	連携校	学年	クラス数	連携校の担当教員数	活動名称	実施内容	場所（連携校以外）	活動期間	活動日数	参加学生数	連携校での学生1人当たりの活動時間）	学生の役割	大学における該当授業科目名	学生への課題	省察の方法	学生による授業評価	内外への発信	広報	備考
1	上垣　渉	一身田小学校	5	5	39	算数授業研究	2.授業研究		10月1日 10月9日 10月23日 12月3日 1月15日	5	0	0								
2	上垣　渉	一身田中学校	1	5	2	算数指導案検討会	6.教員研修		2月7日～9日	3	36	3	1.参観	数学科教育法	1.レポート					
3	後藤太一郎 磯部由香 吉本敏子	一身田中学校	2	5	2	解剖＆調理実習	1.学習支援　2.授業研究　5.出前授業		10月11日 11月22日 2月7日	3	15	2	2.補助	―						
4	後藤太一郎	一身田中学校	2	選択理科受講クラス	1	「青少年のための科学の祭典」出展	1.学習支援 4.課外活動	三重大学	12月8,9日	2	0	0		―				3.その他 （大会解説集）		
5	後藤太一郎 荻原　彰 新居淳二 伊藤信成 本田　裕	一身田中学校	2	選択理科受講クラス	1	身近な自然の理解	1.学習支援 2.授業研究 4.課外活動	三重大学	6月～9月	21	15	18	2.補助	―		1.検討会		3.その他 （論文）		
6	荻原　彰 平賀伸夫	一身田中学校	1	5	1	理科授業支援	1.学習支援		11月6日～12月15日	8	11	15	1.参観 2.補助 3.授業	理科ゼミナール	1.レポート	1.検討会	無			
7	平賀伸夫	一身田中学校	1	1	1	理科指導案検討会	6.教員研修		1月	3	0	0								
8	弓場　徹 根津知佳子	一身田中学校	全	全	5	ジョイント音楽祭	3.学級行事		10月13日	1	30	3	4.その他 （演奏）							
9	岡野　昇	一身田中学校	2	5	5	現代的なリズムのダンス	1.学習支援　2.授業研究		1月11日～2月9日	10	5	12	1.参観 2.補助	保健体育学ゼミナール	1.レポート 2.授業記録 3.ﾎﾟｰﾄﾌｫﾘｵ	1.検討会				
10	荒尾浩子	一身田中学校	1	1	3	英語指導案検討会	6.教員研修		1月19日	1	0	0								
										57	112	53								

19年度

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳
取組番号	担当教員	連携校	学年	クラス数	連携校の担当教員数	活動名称	実施内容	場所（連携校以外）	活動期間	活動日数	参加学生数	連携校での学生1人当たりの活動時間	学生の役割	大学における該当授業科目名	学生への課題	省察の方法	学生による授業評価	内外への発信	広報	備考
1	山根栄次	一身田中学校	2	全		キャリア教育	5.出前授業		9月7日	1	0	0								
2	上垣　渉	一身田小学校	全	13	13	教育アシスタント	1.学習支援		5月21日～3月	150	9	30	2.補助	教育実地研究基礎	1.レポート	3.その他	無	1.学内でのポスター発表		
3	上垣　渉	栗真小学校	全	6	6	教育アシスタント	1.学習支援		5月21日～3月	150	5	30	2.補助	教育実地研究基礎	1.レポート	3.その他	無	1.学内でのポスター発表		
4	上垣　渉	白塚小学校	全	9	9	教育アシスタント	1.学習支援		5月24日～3月	150	7	30	2.補助	教育実地研究基礎	1.レポート	3.その他	無	1.学内でのポスター発表		
5	上垣　渉	一身田中学校	全	22	6	教育アシスタント	1.学習支援		6月1日～3月	125	34	30	2.補助	数学科教育法	1.レポート	3.その他	無	1.学内でのポスター発表		
6	上垣　渉	一身田小学校	全	5	39	算数授業研究	2.授業研究		10月3日 11月2日 11月7日 11月30日 12月5日	5	0	0				1.検討会				
7	上垣　渉	一身田小学校	全		39	算数指導案検討会	6.教員研修		8月6日 8月7日 8月30日	3	0	0				1.検討会				
8	上垣　渉	一身田中学校	全			授業づくり研究会	6.教員研修		8月17日 11月19日											
9	後藤太一郎 磯部由香 吉本敏子	一身田中学校	2	5	2	ニジマスの解剖＆調理実習	1.学習支援　2.授業研究　5.出前授業		11月1日～12日	5	19	5	2.補助	―				2.学会発表	1.新聞（　1件）	
10	後藤太一郎	一身田中学校	2	選択理科受講クラス	2	「青少年のための科学の祭典」出展	1.学習支援 4.課外活動	三重大学	12月1,2日	2	0	0		―				3.その他（大会解説集）		
11	後藤太一郎	栗真小学校	6	1	1	ニジマスの解剖＆調理実習	5.出前授業		6月11日	1	6	2	2.補助	生物学実験						
12	後藤太一郎	栗真小学校	6	1	1	心臓と血流	5.出前授業		6月25日	1	2	2		―						
13	荻原　彰 平賀伸夫	一身田中学校	1	5	1	理科授業支援	2.授業研究		6月～7月,12月	30	9	15	1.参観 2.補助	理科教育ゼミナール	3.ﾎﾟｰﾄﾌｫﾘｵ	1.検討会　3.その他（メールによる情報交換）	無	1.学内でのポスター発表		
14	牧原義一	一身田小学校	3	1	1	おもしろ理科実験	3.学校行事　5.出前授業		2月28日	1	3	2	2.補助							
15	根津知佳子 高瀬瑛子 森川孝太朗	一身田中学校	全	全	1～3年の先生方	コラボ音楽祭の支援	1.学習支援		9月10日～10月11日	17	19	2	2.補助	教育実地研究基礎	1.レポート 2.授業記録 3.ﾎﾟｰﾄﾌｫﾘｵ	1.検討会 2.e-ﾗｰﾆﾝｸﾞ		1.学内でのポスター発表		
16	弓場　徹 根津知佳子 桂　直美 高瀬瑛子 兼重直文 森川孝太朗	一身田中学校	全	全		コラボ音楽祭	3.学校行事	三重大学	10月16日	1	30	4	4.その他（演奏）		1. レポート 3. ポートフォリオ			1.学内でのポスター発表		

17	根津知佳子	栗真小学校	高学年	全	1	6年生を送る会ミニコンサート	1.学習支援		2月29日	1	4	2	2.補助							
18	岡野　昇 山本　俊彦	栗真小学校	3	1	1	親子活動（体ほぐし）	7.その他（学級行事）		5月31日	1	7	2	3.授業	総合演習	1.レポート 2.授業記録 3.ﾎﾟｰﾄﾌｫﾘｵ	1.検討会	有	1.学内でのポスター発表		5月8日に打合せ。参加保護者数26名。
19	岡野　昇	一身田小学校	5	4	1	キャンプファイアー時のゲーム活動検討会	7.その他（学年行事）	三重大学	6月19日	1	0	0								
20	岡野　昇	一身田小学校	全学年	全クラス	全教員	夏休み中における学生による水泳指導	7.その他（学校行事）		7月25日 ～8月7日	7	1	21	2.補助 4.その他（指導）		1.レポート	1.検討会	無			
21	後藤　洋子 岡野　昇	一身田中学校			5	ラート運動の導入検討会	6.教員研修		8月6日	1	0	0								
22	岡野　昇	一身田小学校	3	3	3	体育科授業研究及び事前検討会	6.教員研修		9月27日	1	2	3	1.参観	保健体育学ゼミナール	1.レポート	1.検討会	無			
23	山本　俊彦	白塚小学校	2	3	3	親子活動（体ほぐし）	7.その他（学級行事）		10月12日	1	11	2	3.授業	保健体育学ゼミナール	2.授業記録	1.検討会	無			
24	後藤　洋子	一身田中学校			4	第1回ラート実技講習会	6.教員研修	三重大学	10月18日	1	0	0								講師・後藤洋子教員（三重大学）
25	岡野　昇	一身田小学校	3	1	3	体育科授業研究及び事後検討会	6.教員研修		11月16日	1	3	4	1.参観 2.補助 3.授業	保健体育学ゼミナール	1.レポート 2.授業記録 3.ﾎﾟｰﾄﾌｫﾘｵ	1.検討会	有	1.学内でのポスター発表		授業者・岡野昇教員（三重大学） アシスタント・院生1名、学部4年生2名
26	岡野　昇	一身田小学校	3	1	3	体育科授業研究及び事後検討会	6.教員研修		12月7日	1	3	4	1.参観 2.補助 3.授業	保健体育学ゼミナール	1.レポート 2.授業記録 3.ﾎﾟｰﾄﾌｫﾘｵ	1.検討会	有	1.学内でのポスター発表		授業者・岡野昇教員（三重大学） アシスタント・院生1名、学部4年生2名
27	後藤　洋子 岡野　昇	一身田中学校			4	第2回ラート実技講習会	6.教員研修		12月27日	1	2	4	4.その他（参加）		1.レポート	1.検討会				講師・西井英理子先生（日本ラート協会） アシスタント・中京大学生（日本ラート協会）
28	岡野　昇	一身田小学校	3	1	3	体育科授業研究及び事後検討会	6.教員研修		1月25日	1	2	4	1.参観 2.補助 3.授業	保健体育学ゼミナール	1.レポート 2.授業記録 3.ﾎﾟｰﾄﾌｫﾘｵ	1.検討会	有	1.学内でのポスター発表		授業者・学部4年生1名 アシスタント・岡野昇教員（三重大学）、学部4年生1名
29	磯部由香	栗真小学校	,6	1	2	牛乳を活用した調理	1.学習支援 2.授業研究		7月11日	1	6	2	2.補助	―	1.レポート	1.検討会	無	1.学内でのポスター発表		
30	磯部由香	栗真小学校	6	1		実験・牛乳のひみつを知ろう	1.学習支援 2.授業研究		11月28日	1	5	2	2.補助	―	1.レポート	1.検討会	無	1.学内でのポスター発表		
31	磯部由香	一身田小学校	2	4	4	さつまいもを使った料理	1.学習支援		10月18日 10月23日 10月24日	4	13	2	2.補助	―	1.レポート	1.検討会	無	1.学内でのポスター発表		

32	磯部由香 吉本敏子	一身田中学校	2	4	4	お弁当づくり	1.学習支援　5.出前授業		5月31日 6月14日 6月21日 7月5日	4	5	4	2.補助	―	1.レポート	1.検討会	無	1.学内でのポスター発表 2.学会発表 3.その他 （論文発表）		
33	中西智子	白塚幼稚園	5歳児クラス	2	1	ドレミランド	1.学習支援		5月22日 ～7月10日	10	2	10	2.補助	音楽教育楽概論Ⅰ	1.レポート	1.検討会				
34	中西智子	白塚幼稚園	4歳児・5歳児	2	1	音楽物語	7.その他 （訪問活動）		6月29日	1	18	1	4.その他 （音楽物語上演）	表現ⅠA	1.レポート	1.検討会				
35	滝口圭子	白塚幼稚園	未就園児		1	未就園児保育「ぴょんちゃんクラブ」の企画・運営	7.その他 （地域連携活動支援）		5月10日 ～7月12日	10	10	20	4.その他 （企画・運営）	幼児教育学演習Ⅰ	1.レポート 3.ﾎﾟｰﾄﾌｫﾘｵ	1.検討会		1.学内でのポスター発表		
36	滝口圭子	白塚幼稚園	未就園児		1	未就園児保育「ぴょんちゃんクラブ」の企画・運営	7.その他 （地域連携活動支援）		10月11日 ～1月24日	10	3	20	4.その他 （企画・運営）	幼児教育学演習Ⅱ	1.レポート 3.ﾎﾟｰﾄﾌｫﾘｵ	1.検討会		1.学内でのポスター発表		
37	滝口圭子	白塚幼稚園	年少・年長	2	3	土曜参観における身体を使った親子のふれあい活動の企画・運営	3.学校行事	白塚小学校	6月16日	1	25	1	4.その他 （企画・運営）	―	1.レポート	1.検討会		1.学内でのポスター発表		
38	滝口圭子	白塚小学校	4	4	4	学年活動での親子のふれあい時間の企画・運営	3.学校行事		11月14日	1	6	2	4.その他 （企画・運営）	―	1.レポート	1.検討会		―		
39	滝口圭子	一身田小学校	1	4	4	生活科「ようこそ一小へ」活動支援	1.学習支援 2.授業研究		10月24日	1	18	1	1.支援	―	1.レポート	1.検討会		―		
										704	289	263								

20年度

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳
取組番号	担当教員	連携校	学年	クラス数	連携校の担当教員数	活動名称	実施内容	場所（連携校以外）	活動期間	活動日数	参加学生数	連携校での学生1人当たりの活動時間	学生の役割	大学における該当授業科目名	学生への課題	省察の方法	学生による授業評価	内外への発信	広報	備考
1	上垣　渉 中西正治	一身田小学校	全	13	13	教育アシスタント	1.学習支援		5月19日～3月	150	13	30	2.補助	教育実地研究基礎	1.レポート	3.その他	無	1.学内でのポスター発表		
2	上垣　渉 中西正治	栗真小学校	全	6	6	教育アシスタント	1.学習支援		5月19日～3月	150	7	30	2.補助	教育実地研究基礎	1.レポート	3.その他	無	1.学内でのポスター発表		
3	上垣　渉 中西正治	白塚小学校	全	9	9	教育アシスタント	1.学習支援		5月19日～3月	150	9	30	2.補助	教育実地研究基礎	1.レポート	3.その他	無	1.学内でのポスター発表		
4	上垣　渉 中西正治	一身田中学校	全	22	6	教育アシスタント	1.学習支援		6月2日～3月	125	36	25	2.補助	数学科教育法	1.レポート	3.その他	無	1.学内でのポスター発表		
5	上垣　渉	一身田小学校	5	5	39	算数授業研究	2.授業研究		10月1日 10月9日 10月23日 12月3日 1月15日	5	0	0				1.検討会				
6	上垣　渉	一身田小学校	5	5	39	算数指導案検討会	6.教員研修		7月28日 8月28日	2	0	0				1.検討会				
7	後藤太一郎 磯部由香 吉本敏子	一身田中学校	2	5	1	ニジマスの解剖＆調理実習	1.学習支援　2.授業研究　5.出前授業		11月3日～12日	5	12	5	2.補助	―						
8	後藤太一郎	一身田中学校	2	選択理科受講クラス	2	「青少年のための科学の祭典」出展	4.課外活動	三重大学	11月29,30日	2	0	0		―				3.その他 （大会解説集）		
9	後藤太一郎 荻原　彰 平賀伸夫	一身田小学校	5	2	2	5年生クラス活動「砂糖を科学する」	1.学習支援　3.学校行事		12月3日	1	9	2	2.補助	―						保護者宅40名
10	後藤太一郎	白塚幼稚園		1	3	動物とのふれあい	5.出前授業		5月9日	1	0	0		―						
11	後藤太一郎	栗真小学校	6	1	1	ザリガニの遺伝	5.出前授業		5月28日	1	0	0		―						
12	平賀伸夫 荻原　彰	一身田中学校	1	5	1	理科授業支援	1.学習支援　2.授業研究		5月～7月	30	18	15	1.参観 2.補助	理科教育法Ⅰ	3.ﾎﾟｰﾄﾌｫﾘｵ	1.検討会　3.その他（メールによる情報交換）	無	1.学内でのポスター発表		
13	荻原　彰 平賀伸夫	一身田中学校	1	5	1	理科授業支援	1.学習支援		12月～2月	20	18	10	1.参観 2.補助 3.授業	理科教育法Ⅱ	3.ﾎﾟｰﾄﾌｫﾘｵ	1.検討会　3.その他（メールによる情報交換）	無	1.学内でのポスター発表		
14	牧原義一	一身田小学校	4	1	1	モーターをつくろう	3.学校行事 5.出前授業		6月26日	1	0	0								保護者30名
15	後藤太一郎 荻原　彰 牧原義一	一身田小学校	全	全		おもしろ科学実験	3.学校行事		2月14日	1	10	3	2.補助 4.その他（実験ブース演示者）			1.検討会				一小際のイベント

16	桂　直美 根津知佳子 高瀬瑛子 兼重直文 弓場　徹 森川孝太朗	一身田中学校	1	1	1	教育実地研究基礎	2.授業研究		12月17日～ 1月21日	15	12	2	1.参観 4.その他（ ワークショップ形式の授業）	大学院1年生は、音楽科教育特論演習Ⅱ	1.レポート	1.検討会				
17	弓場　徹	一身田中学校	1，3	10	1，3年の先生方	発生指導ワークショップ	5.出前授業		9月17日	1	5	4	2.補助							
18	根津知佳子	一身田中学校	全	15	1～3年の先生方	コラボ音楽祭の支援	1.学習支援		9月18日 ～ 10月16日	25	13	2	2.補助		1.レポート 2.授業記録 3.ﾎﾟｰﾄﾌｫﾘｵ	1.検討会 2.e-ﾗｰﾆﾝｸﾞ		1.学内でのポスター発表	3.HPへの掲載	
19	根津知佳子	栗真小学校	高学年	全	1	合奏支援	1.学習支援		5月16日 ～ 3月1日	8	2	3	2.補助	課題研究Ⅲ	2.授業記録 3.ﾎﾟｰﾄﾌｫﾘｵ	1.検討会 2.e-ﾗｰﾆﾝｸﾞ 3.その他				
20	根津知佳子	白塚小学校	4	2	1	クリスマスコンサート演奏	3.学校行事		12月17日～	1	11	1	4.その他（演奏）	音楽療法演習	1.レポート 3.ﾎﾟｰﾄﾌｫﾘｵ	1.検討会				
21	岡野　昇 山本　俊彦	一身田小学校	5年	1	4	親子活動（体ほぐし）	7.その他（学級行事）		6月4日	1	16	1	3.授業	総合演習	1.レポート 2.授業記録 3.ﾎﾟｰﾄﾌｫﾘｵ	1.検討会	有	1.学内でのポスター発表 3.その他（三重大学教育学部保健体育科同窓会にて発表。新聞投稿）	1.新聞（ 3件）	5月13日に打合せ。 参加保護者数26名。
22	岡野　昇 山本　俊彦	栗真小学校	1年 2年	2	2	親子活動（体ほぐし）	7.その他（学級行事）		6月7日	1	13	1	3.授業	総合演習	1.レポート 2.授業記録 3.ﾎﾟｰﾄﾌｫﾘｵ	1.検討会	有	1.学内でのポスター発表 3.その他（三重大学教育学部保健体育科同窓会にて発表。新聞投稿）	1.新聞（ 3件）	5月13日に打合せ。 参加保護者数29名。
23	岡野　昇	一身田小学校	5年	1	1	親子活動（体ほぐし）	7.その他（学級行事）		6月26日	1	4	1	3.授業	保健体育学ゼミナール	1.レポート 2.授業記録 3.ﾎﾟｰﾄﾌｫﾘｵ	1.検討会	有	3.その他（卒論発表会）		参加保護者数25名。
24	後藤　洋子 岡野　昇	一身田中学校	2年 3年	10	4	第3回ラート実技講習会	6.教員研修		8月4日	1	1	3	4.その他（参加）	保健体育学ゼミナール	1.レポート 2.授業記録 3.ﾎﾟｰﾄﾌｫﾘｵ	1.検討会	無			講師・深瀬友香子先生（日本ラート協会）
25	岡野　昇	一身田小学校			約30	体ほぐし運動・跳び箱運動の実技講習会	6.教員研修		8月21日	1	0	0								
26	後藤　洋子 岡野　昇	一身田中学校	2年 3年	10	4	保健体育科授業参与観察及び指導補助	1.学習支援　2.授業研究		9月3日～ 10月8日	24	1	60	1.参観 2.補助	保健体育学ゼミナール	1.レポート 2.授業記録 3.ﾎﾟｰﾄﾌｫﾘｵ	1.検討会	無	1.学内でのポスター発表 3.その他（卒論発表会にて発表。三重大学教育学部保健体育科同窓会にて発表。）	1.新聞（ 4件） 2.テレビ（ 2件）	

27	山本　俊彦	白塚小学校	2年	3	3	親子活動（体ほぐし）	7.その他（学級行事）		10月10日	1	6	2	3.授業	保健体育学ゼミナール	2.授業記録	1.検討会	無			
28	岡野　昇	一身田小学校	3年	1	約5	体育科授業研究及び事後検討会	6.教員研修		12月4日	1	0	0								
29	岡野　昇	一身田小学校	1年 3年	2	約10	体育科授業研究及び事後検討会	6.教員研修		2月3日	1	5	4	1.参観	保健体育学ゼミナール	1.レポート 2.授業記録	1.検討会	無			
30	磯部由香	栗真小学校	6	1	2	弁当づくり	1.学習支援 2.授業研究		7月10日、12月11日	2	5	2	2.補助	―	1.レポート		無			
31	磯部由香	一身田小学校	5	4	5	米を使った料理	1.学習支援		12月2～12日	6	13	2	2.補助	―	1.レポート		無			
32	磯部由香	一身田小学校	2	4	4	さつまいもを使った料理	1.学習支援		11月17～25日	4	13	2	2.補助	―	1.レポート		無			
33	磯部由香 林　未和子	一身田小学校	2	1	1	さつまいもに関連した実践	1.学習支援 2.授業研究		11月12～25日	5	1	2	2.補助 3.授業	卒業研究	1.レポート		無	1.学内でのポスター発表 3.その他(卒論発表会)		
34	桂　直美 別府直苗 林　朝子	一身田小学校	4年以上	クラブ活動	2	多文化クラブ	1.学習支援　3.学校行事		5月19日～2月27日	8	14	8	2.補助	実地研究基礎	1.レポート 2.授業記録 4.その他	1.検討会	無	1.学内でのポスター発表		クラブ実施日前後で、小学校・大学の教員で打ち合わせ実施、クラブ後にはクラブ参加見学の振りかえり授業実施
35	中西智子	白塚幼稚園	4・5歳児クラス	2	3	4歳児と5歳児の音楽劇鑑賞	5.出前授業（出前公演）		6月27日	1	26	2	4.その他（音楽物語上演　）	表現ＩＡ	1.レポート 4.その他（制作活動）	3.その他（反省会）	有	3.その他（教育委員会報告）		連携以外の幼稚園へ、上演許可についての依頼回り
36	中西智子	白塚幼稚園	5歳児クラス	1	2	表現活動（5歳児が創る音楽物語）	2.授業研究（創作活動）		3月26日～7月9日	11	3	11	2.補助	音楽教育学概論Ⅱ	1.レポート 2.授業記録	3.その他（反省会）	有	3.その他（表現ＩＡ受講生へ発表のお知らせ）		学生と幼稚園との打ち合わせ2回、教員との打ち合わせ3回
37	中西智子	白塚小学校	1（特別支援教室）	1（仲良し学級）	5	リズム奏を通した仲間づくり	1.学習支援　2.授業研究		10月22日 11月5日 12月3日	3	3		2.補助	幼児音楽研究Ⅱ	1.レポート 2.授業記録	3.その他（反省会）	有			大学にて打ち合わせ2回
38	滝口圭子	白塚幼稚園	未就園児		1	未就園児保育「ぴょんちゃんクラブ」の企画・運営	7.その他　（　）		5月13日～7月15日 10月14日～1月27日	24	5	20	4.その他（企画・運営）	教育実地研究	1.レポート 3.ﾎﾟｰﾄﾌｫﾘｵ	1.検討会	無	1.学内でのポスター発表	4.その他（三重大エックス）	
39	滝口圭子	白塚幼稚園	年少・年長	2	3	土曜参観における身体を使った親子のふれあい活動の企画・運営	3.学校行事		6月14日	1	26	2	4.その他（企画・運営）	教育実地研究基礎	1.レポート	1.検討会	無	2.学会発表	―	

40	滝口圭子	白塚小学校	4	4	4	学年活動での親子のふれあい時間の企画・運営	3.学校行事		11月13日	1	6	2	4.その他（企画・運営）	―	1.レポート	1.検討会	無	―	―	
41	滝口圭子	一身田小学校	1	4	4	学生による音楽授業担当（全2回）	2.授業研究		11月17・18日 12月1・2日	4	16	4	3.授業	―	1.レポート	1.検討会	無	―	―	
42	河崎道夫	白塚幼稚園			3	生きもの環境作り	1.学習支援 2.授業研究		3月6日～11月18日	20	4	30	4.その他（環境作り保育実践）	教育実地研究	4.その他（卒業論文）	1.検討会 2.e-ﾗｰﾆﾝｸﾞ 3.その他	無	3.その他（卒業論文）		
										816	356	321								

白塚幼稚園の取組

津市立白塚幼稚園
本多　啓子

＜実施項目＞

① 園児との音楽劇作りと上演
②「音楽物語」の上演活動の実施
③ 未就園児保育（ぴょんちゃんクラブ）の運営支援
④ 休日参観での「親子で体を動かそう」の実施
⑤ 「食教育」の講演と調理実習（保護者向け）の実施
⑥ うさぎについての話と生き物コーナー整備の支援
⑦ 花壇・畑作りと植樹の支援

＜対象児＞

・ ４歳児　１０名　　５歳児　１１名　　合計　２１名

＜活動内容および考察＞

①園児との音楽劇創りと上演・・・4 月 23 日～7 月 9 日　活動日数　全 11 日(1 日 1 時間半)

（中西智子先生、幼児教育３年生３名）

５歳児１１名の子どもたちを２グループに分け、そこに学生が１名ずつ入り、子どもたちが“興味をもっていること”“好きなこと”などを聞きながら、一緒にストーリーを組み立てていった。ストーリーを追う中で、一人一人の役にあったセリフや動きを考えたり、歌をうたったりして「みんななかよし」「くだものやさんのおはなし」という『創作劇』を仕上げ、７月９日に年少児や大学生の前で発表した。

年長児は、昨年ごっこを基盤とした劇的な活動をしているが、創作劇は初めての経験である。

教師にとっては、進級して間もない子どもたちが、初対面の３名の学生たちと、どのように気持ちを通わせ、自分の思いを表現していくのだろうかということ、また学生にとっても、子どもたちと、このような活動をすることは初めてということから、一人ひとりの子どもの様子や気持ちを把握できないことや、どのように進めていけばいいのかわからないことなど、いろいろな不安の中、活動が始まった。

実際に動いていく中で、週１日１時間半の限られた活動時間とであったので、子どもの気持ちをつなげたり活動を発展させたりする面で少し無理があったと思われた。しかし、時間が足りない分は担任が日頃の活動の中で補ったり、子どもたちに次回の活動への期待をもてるよう言葉をかけたりした。

学生たちは慣れない活動ではあったが、戸惑いながらも何とか活動を進めていこうとする意欲が感じられ、発表会までよくがんばったと感心した。１日の活動時間が短いので慌ただしく過ぎ、また、担任と学生とが、その日の反省や次回の打ち合わせ・準備をする時間もなかった。もう少し学生たちが安心して取り組めるようにしていく方法はなかったのだろうか。

時間的なことについては課題が残るが、子どもたちにとって活動の幅ができたこと、学生たちにとっては自分で工夫しながら成し遂げられたことは、きっと今後の力になっていくだろう。

②「音楽物語」の上演活動の実施について・・・６月２７日　９：００～１０：００

（中西智子先生、幼児教育３年生１２名・日本語教育３年生４名）
「おばけかぞくの一日」「うさこちゃんのワンピース」の話の中で、手作りの人形やペープサートを使い、歌詞やお話の内容に合わせて楽しく演じてくれた。
子どもたちはブラックライトの美しさや手作りの温かさ、オリジナルのお話のおもしろさを感じながら、愉快な人形の動きや効果音の楽しさに見入っていた。

また、お話の間には手遊びをして、子どもたちの気持ちを和ます場面もあり、子どもの気持ちを考えながら、時間を構成していたように感じられた。
子どもたちは一緒にうたったり、友だちと顔を見合わせて楽しさを共感したりする姿が見られ、　豊かな経験をするができた。

③未就園児保育（ぴょんちゃんクラブ）の運営支援・・・５月１３日～１月２７日

（滝口圭子先生、幼児教育４年生５名　）
毎火曜日の午前中、当園では未就園児（幼稚園入園までの０歳～３歳の乳幼児対象）が保護者と共に粘土遊びや積み木、ままごと、絵を描く、砂場で遊ぶなどの機会を設けている。
毎回５名の学生が当園の保護者ボランティアと一緒に、その日の計画や担当について話し合いを持つと共に、その後やってきた未就園児に声をかけ一緒に遊んだり、保護者と子どもの成長について話し合ったりなど、活動の支援を行ってくれた。

この活動は、昨年度から継続され、同じ学生が引き続き参加している。製作、歌、お話、リズムなど、未就園児の興味や関心を考えながら自分たちで教材を準備したり、保育室の壁面を飾って環境を整えたりなど、昨年の経験を土台に自分たちで積極的に動き進めることができた。
本年度も、会終了後には進行役を決め、保護者ボランティアも学生も教師も必ず全員が感じたことを声に出し合う“反省会”の時間を大切にしてきた。“その日の未就園児や保護者に対して自分たちは適切な支援はできたか”という視点で、各自が感じたことを言葉にしメンバーの話も聞いてみんなで話し合うことは、子どもや保護者への意識したかかわりにつながるし、自分が知らない子どもや保護者の姿や声、あるいは声のかけ方などを知ることにもつながる。また“今度はこうしよう”という意欲にもつながった。

④休日参観での「親子で体を動かそう」の実施・・・６月１４日　９：３０～１０：３０

（滝口圭子先生、幼児教育３年生８名、２年生９名、１年生８名）
３年生が中心になって計画をたてて進行していき、その他の学生も活動の中に入り援助した。本年度は、事前に会場の下見をし、“どの場所で活動をするか”“見ている人はどこに座るか”“誰がどこの持ち場を担当するか”など、実際に動いたり確認しあったりして準備をする姿が見られた。

当日は、それぞれ役割分担をし、わかりやすく説明したり園児にかかわったりして「親子で楽しむ簡単な体操」や「新聞紙を使っての遊び」など、楽しい時間を過ごすことができた。

学生たちがたくさん参加してくれたことで活気ある活動になり、一人一人の子どもや保護者にも目が行きとどき、楽しい雰囲気の中で親子ともに有意義な時間を過ごすことができた。

保護者が参加できない幼児には優しく声をかけて一緒に活動したり、時間配分をうまく考えながら動いたりできた。

昨年の反省点をふまえ、今年度は３年生と１・２年生との連携がスムーズにできており、活動の途中で教え合ったり指示を出したりなど、各自が周りの様子を感じながら進めていたように思った。

３年生は活動の説明をしたり、活動のつなぎ目を工夫したりなど難しいことが多々あったと思うが、各自が昨年の経験を生かし自覚をもって、計画→打ち合わせ→自分の持ち場に責任をもつ→みんなで助け合う・・・ということが、うまくできていたと思った。

上記のほかにも、都合のつく学生に来園してもらい運動会・生活発表会では道具などの準備の手伝いをしてもらったり、クリスマス会では保護者や職員と一緒に劇に参加してもらったりして、子どもたちに楽しい経験の場を作ってもらった。

園側が協力を依頼すると、学生たちが連絡をとりあい都合をつけて快く参加してくれ、前向きで意欲的な気持ちを嬉しく思った。

⑤「食教育」の講演と調理実習（保護者向け）の実施・・・
１１月２６日　９：３０～１２：００

（家政教育コース　磯部由香先生）

子どもたちが「食」に関心をもち、自分の体を自分で守る力をつけるための工夫や手だてを保護者と一緒に考えていくという取組をもった。

磯部先生に「食べることは生きること」という演題で講演していただき、実際にご指導いただきながら保護者対象に調理実習をした。ほとんどのお母さんが参加され、和やかな雰囲気の中で調理実習を楽しんだ。その後の親子試食会は「おいしいね」「野菜もたっぷり食べられるね」と子どもたちからも保護者からも好評だった。

また、当園は給食ではなく毎日お弁当である。子どもたちはお弁当をとても喜ぶが、作り手にとっては毎日のこと、メニューに困る日もあるということから、みんなでお得意簡単メニューを出し合って“白塚ママのお弁当レシピ集”を作ることになった。磯部先生にも原稿とレシピをいくつか頂き、載せさせていただいた。レシピ集が白塚幼稚園保護者と職員、全員が参加して出来上がったことをとてもうれしく思うし、このような取組をきっかけにお弁当作りが以前より楽しくなるよう願っている。

⑥うさぎについての話（５月９日　１０：３０）と生き物コーナー整備の支援

（後藤太一郎先生、河崎道夫先生）

生き物は、子どもたちの心を和ませ、温かい気持ちにさせてくれる。そのようなことから、幼稚園にうさぎを買っていただき、子どもたちが触れたり世話をしたりする中で気持ちを和ませ、“命”の大切さに気づくことができるよう、環境の整備をしていただいた。

小さなホーランドロップイヤーという種類のうさぎを「うーちゃん」と名付け、その愛らしい姿に子どもたちは、まるで自分がお母さんやお兄さんになったような気持ちで、そばでじっと見たり触れたり話しかけたりして、命の温かさを感じていた。

また、年長児が毎日世話をする中で「今日は餌をあまり食べていなかった。どうしたんだろう？」と心配したり、「今日はよく動いて元気だったよ」と喜んだりして、いろいろなことに気づくことができるようになってきた。

後藤先生には、うーちゃんを飼育する上での注意事項を教えていただいたり、心臓の音を聞かせていただいたりし、子どもたちはよりいっそう親しみを感じたことと思う。

また、河崎先生には、めだかやタナゴ、えび、どじょうなどを準備していただき、子どもたちは動く様子を楽しげに見たり、餌をやったりして関心をもってかかわっている。

めだかが卵を産み付け小さな命が生まれると、毎日、数を数えて興味をもったり「寒くなってきたから、あまり動かなくなったね」と気づいたりして、子どもたちの観察の目が育ってきたことを感じた。今後も、子どもたちが生き物を通して、命の大切さに気づいていけるよう、教師が愛情をもってかかわっていきたいと考えている。

⑦花壇・畑作りと植樹の支援・・・４月１５日、４月２２日

（河崎道夫先生、幼児教育４年生　４名）

「幼稚園に木を植えよう」ということで、河崎先生と学生に花壇・畑の整備をしていただいた。

年長児は畑に入れる土を運び、“自分たちの畑を作ろう”という思いが持てたことと思う。子どもたちは「何植えるの？」「何ができるの？」と、興味深げに作業を覗き込んでいた。

さくらんぼ、みかん、ブルーベリーの苗木を一緒に植え「早く実ができるといいなぁ・・」と願いながら、毎日水やりをしていた。

今年はまだ苗木のため実を食べることはできなかったが、実をつける日を楽しみに、今後も子どもたちと一緒に大事に世話をしていきたいと思っている。また、畑には落花生・人参・枝豆・チンゲン菜を植え、毎日世話をする中で成長に気づき、自分たちで育てることで収穫の喜びも感じることができた。

卒論の参考にしたいとのことで、子どもたちの様子を観察しに来園する学生もいて、子どもたちと自然なかかわりの中で記録をとることができたと思う。

＜３年間を通して・・・＞

○　成果

普段、私たち教員だけでは実現できない活動や環境整備をしていただいたことは、子どもたちだけでなく保護者にとっても経験の幅が広がり、プラスになったと思う。子どもたちは、新しい活動をする中で、いろいろな刺激を受け、その中で自分の力を出して取り組むことで、充実感や達成感を味わうことができた。

休日参観や食教育の活動においては、保護者が日頃の幼稚園での子どもの姿を知ったり声をかけあったりして楽しい時間を過ごし、親子のコミニュケーションを深めることができた。

また、学生からは新しいことにも意欲的に取り組もうとする気持ちが感じられ、前年度の反省点や課題を先輩から後輩にしっかりつなげて計画・実行されている点も良かったと思った。学生たちが、前年度の経験を生かして、更に一歩進んで前向きに取り組もうとする気持ちが、実行力につながったのだと思う。

学生が参加する活動の前には（①③④において）、学生の計画した内容に教員が、その時期の

子どもたちの姿を考えあわせながら話し合う時間をもった。このことは、お互いの気持ちの中で活動内容がはっきりし、子どもたちへのかかわり方がより明らかになって良かった。また、活動後には反省会をもち振り返りを行うことで、次回への課題が見え、生かしていくことができたと思う。

また、大学の先生にお願いした活動においては、当園にとって何が大事かを話す中で、大学の先生から情報やアドバイス、講演などをいただき、私たち教員にとって、新しい活動へのきっかけ作りや刺激をいただいたように思う。

園内では、全ての活動において教員３名が話し合いながら進めている。職員数が少ないことから、自分たちだけでは考えが拡がらなかったり、足踏み状態になったりすることがあったが、大学の先生方や学生たちとかかわる中で“もっと工夫する余地があること”“新しいことにチャレンジする気持ちの大事さ”を学んだ。

今後も、子どもたちがいろいろな方に出会わせていただくことで喜びと楽しさを感じ取り、経験の幅を拡げてほしいと願っている。

ますます厳しく、且つ難しくなっている教育現場ではあるが、私たちは学生たちが教師という仕事に夢や希望、意欲をもって取り組んでいってほしいと願うと共に、自分たちの後輩を育てていくという気持ちで、力になりたい。

○　**課題**

教育にかかわるものとして一番大事にしていることは、一人ひとりの子どもの気持ちや育ちを知るということである。活動の中で、子どもたちがどのように気持ちをふくらませたのか、どんなところに戸惑ったのか、あるいは教師としてその気持ちをどのように受け止め返していくのかなど、大事な部分について十分な話し合いができなかった取組があった。

継続して行った活動①においては、学生に時間的な余裕がなく、毎回慌ただしく過ぎていったことがとても残念である。私たち教師が学生にアドバイスする時間や、学生が見通しを持ちながら準備する時間こそ大切だと思うので、その時間の確保という点で課題が残る。学生にとって難しい活動であるだけに、たとえば、大学での学生へのアドバイスを教師が聞かせてもらっておくとか授業時間の考慮など、大学と話し合う中で何か手だてを考える必要があった。

今後も、３年間の現代ＧＰの取組の中で幼稚園として積み重ねたものを大事にし、子どもたちには豊かな体験を、そして学生や私たち教師には学びの場となる取組をしていきたい。

栗真小学校の取組

井ノ口　八重子

「教育実地研究基礎」を受講している学生との連携

昨年度に引き続き、年間を通して各学年の授業時に支援に入っていただいた。昨年同様、原則として、毎回同じクラスに同じ学生に入ってもらい、子どもたちとの親睦を深めながら授業の中で主に個別の支援を行ってもらった。子どもたちは、学生の来校を楽しみにしており、学生の支援のもと意欲的に活動する姿が見られた。支援の仕方については、授業の中で担任が指示をして、その都度子どもたちに適切な支援をしてもらった。しかし、昨年の反省を十分に生かすことができず、授業の進め方等について担任と学生との打ち合わせの時間が十分取れなかったことが、課題として残った。また、前期後期で学生の時間割が変更になったり、学期で学校の時間割が変更になったりするので、希望する支援が必要な教科や学生が得意とする教科に必ずしも入ってもらえないことがあった。

１・２年生の学年活動について

三重大学の岡野先生と山本先生、体育科の学生の指導・進行により、１・２年生ＰＴＡ親子活動を行った。１学年の人数が少ないため、２学年合同の活動となった。

事前の打ち合わせでは、学生の考えたゲームの計画を聞き、内容だけではなく予想される動き、安全面への配慮、準備物などを入念に検討した。

学年をこえて、子どもも親も学生も一緒になって、汗を流した。何よりも、学生の若いはつらつとした動きに促され、参加者みんなが新鮮な気持ちで十分楽しむことができた。

４年生　ザリガニの飼育活動について

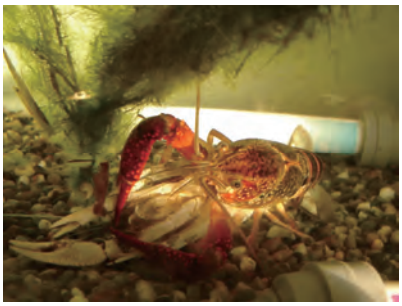
本校は、2004年度から三重大学の後藤先生より白ザリガニを譲っていただき飼育を行っている。本年度は、４年生の児童に後藤先生によるザリガニの体の構造、摂食、生態等の授業を行っていただいた。子どもたちは、興味をもって聞いていた。

その後、その白ザリガニと、通常みられる赤ザリガニとの交雑を行い、親の形質が子孫に受け継がれるという実践を行おうと試みた。６月に赤色のメスと白色のオスとの交配が成功したが、途中、保育していたメスザリガニが死んだ。そのため、夏休みが終わる頃には、２匹になってしまった。その

後９月に１匹がさらに死んだ。現在１匹の交雑オスを飼育している。そのオスと白色メスザリガニを交配させ、その子どもたちの形態を観察しようと考えている。

子どもたちは、毎日観察をして、ザリガニの様子を互いに話し合っている。

長い飼育実践であるが、三重大学理科教室との連携の上で行っている。



４・５・６年生　連合音楽会に向けての支援について

毎年行われる「津市小中学校連合音楽会」に、本校では、４・５・６年生の子どもたちが参加している。そこで、本年度は、根津先生を通じて音楽科の大学院生に、連合音楽会に向けて、それぞれの学年の音楽の授業時や合同の練習時に支援に入っていただいた。

合奏の支援では、子どもたちに分かりやすく各楽器の演奏指導を行ってもらった。子どもたちだけでなく、教員も分からないところやより効果的な演奏の仕方についてアドバイスをもらうことができ、そのことが子どもたちの技術を高めることにつながり、子どもたちは自信をもって本番に臨むことができた。

合唱指導においても、適切な支援を根気良く行っていただいた。練習当初は、斉唱を考えていたが、大学院生の支援のもと２部合唱を行うことができた。

音楽会当日、子どもたちは緊張しながらもそれまでの練習の成果を十分に発揮して、満足した演奏を披露し、演奏後やりきったという笑顔が見られた。

６年生　“お弁当作り”の活動について

６年生の子どもたちは、５年生の３学期にお弁当作りの学習に取り組み、実際にお弁当に入れる副菜を考え調理した。この学習をもとに、６年生では、最終的に一人で自分のお弁当のおかずを調理するという活動に取り組んだ。まず、１学期にグループで主菜を考え調理し、２学期に一人一人が主菜１副菜２の合計３品のお弁当のおかず作りに取り組んだ。

この活動で、“お弁当作りのポイント”を磯部先生に教えていただいたり、子どもたちの考えたメニューについてアドバイスをいただいたりしてお世話になった。また、調理実習時には、家政教育・消費生活科学コースの学生３～４名に来ていただき、子どもたちの活動の支援をしていただいた。調理するメニューの数が多いので、担当の教員だけではなかなか目が行き届きにくく、子どもたちに思ったときに的確なアドバイスができないことがあるが、子どもたちは、困ったときにタイムリーに学生に教えてもらい、充実した活動をすることができた。

今後、６年生を送る会で－

昨年、「６年生を送る会」の中で、三重大の根津先生と音楽科の学生にお世話になって「三重大生によるミニコンサート」をしていただいた。なじみの曲の生演奏を聴き、子どもたちは、学生たちの奏でるすてきな音色にふれることができた。今年も、昨年同様、３月３日に行われる「６年生を送る会」でミニコンサートをしていただくことを予定している。

成果と課題・・・昨年度の反省をふまえて

＜事前の打ち合わせや事後の反省の取組について＞

（「教育実地研究基礎」を受講している学生との打ち合わせ）

・ 昨年度、学生との事前の打ち合わせの時間が十分とれずそのことが課題として残ったが、残念ながら、本年度もその反省を生かしきれず、十分に時間をとることなく授業の支援に入ってもらうことになった。ただ、担任が授業の中で、その時必要とする支援を学生に指示し、学生に適切な支援をしてもらうようにしてきた。そうやって毎時間担任と学生がやりとりすることを積み重ねることによって、子どもたちへの支援の仕方もより適切なものとなっていった。

（各活動における打ち合わせ・反省）

・ 活動内容を計画するにあたり、事前に大学の先生や学生とお会いして、打ち合わせを行った。絶えず会って打ち合わせを行っていくことは難しいので、その後は主にメールを使って進めていった。
・ 昨年度の活動をふまえ、次はどういった活動が可能か大学の先生と話し合いながら活動内容を決め、本年度の活動へとつなげることができた。
・ 事後は、活動が終わった時点でともに話し合い、反省を行った。また、打ち合わせ同様、メールを使って行うことも多かった。

＜学生の学ぶ姿勢について＞

・ 子どもとのふれ合いを積み重ねるにつれ、自分から進んで子どもたちの中に入り、声かけをしたり、子どもに合った支援を心がけたりする姿が見られた。ただ、授業が急に入ったり、私的な都合で欠席したり、中には、連絡もなしに欠席する学生もいたりしたのは、残念だった。子どもたちは、学生の来校を楽しみにしており、欠席を告げたときは、がっかりしていた。
・ 大学での学生に対するオリエンテーションが、どのように行われているのかと感じることがあった。本校においても、学生を受け入れる側としての対応をもっと考えて行うべきであったと反省している。

＜学校・教師への影響について＞

・ 大学という外からの刺激をもらい、教師は、今までにない活動に踏み込むことができた。専門的な知識を学ばせてもらうことで、子どもたちにより深い指導・支援ができたように思う。また、人的、物的の両面において援助をいただいたことは、学校現場としては、大変ありがたいことである。

白塚小学校の取組

白塚小学校　　渡邊　史

１．今年度の取組

（１） 特別支援学級での取組＜リズム遊び＞

昨年度は、中西智子教授の助言の元、太鼓を使ったリズム遊びを行った。子どもたちは、自分が感じたリズムで太鼓を楽しく打つことにより、表現活動をしようとする意欲をもって取り組むことができた。今年度は、引き続きリズム遊びをしていくということで、和太鼓以外に、ミニボンゴ・キッズドラムという新しい打楽器を取り入れた。

また、昨年と違った、体全体を使ったリズム遊びに取り組みたいということを伝えると、中西教授から「バンブーダンス」を取り入れてはどうかという提案があった。

「バンブーダンス」は、安全面に不安があった（床がすべりやすい）ので、子ども祭りジョグ（地下足袋）を履かせて行った。また、子どもたちにとって難しい取り組みかと思われたが、一人ひとりに応じた活動を考えた。

はじめは、二本の竹棒を床に置いておき、足の動かし方の練習を行った。次はオルガンでゆっくり「たぬきのたいこ」を弾いて、音楽に合わせて足を動かした。

棒を閉じたり開いたりしてできるようになり、「たぬきのたいこ」では曲の速さが遅く、物足りなくなってきた子もでてきた。そこで、もっとテンポの速い「いるかはザンブラコ」に合わせてバンブーダンスに取り組むようになった。

バンブーダンスは子どもたちにとても合ったリズム遊びで、とても楽しんでできた。今年度は、中西教授のゼミの学生も２～３名、子どもたちにかかわってもらった。

いろいろな打楽器や、バンブーダンス等、小学校とはまた違った視点で提案、助言をいただいたことにより、子どもたちが興味をもって、意欲的に取り組むことができるよりよい活動につなげていくことができた。これからも引き続き連携して取り組んでいければと考えている。

（2）教育実地研究

昨年度に引き続き、９名の学生が学級へ入って授業を参観したり、子どもたちの学習活動への支援をしたりした。

つまづいている子どもへの支援、プリントの採点、掲示物の貼り替え、体育で使用する器具の準備、生活科での活動やグループ活動での作業への支援、特別支援学級の子への介助等、様々な場面で活動してもらった。

また、休み時間に一緒に遊ぶことで、子どもたちはより親しみを感じ、学生に来てもらうのを楽しみにする姿もみられた。

２．３年間のまとめ

（1） 成果

① 事前・事後の打合せ、反省

昨年度の取組をさらに広げる形で連携を進めることができた。

時間がうまく調整できない時は、メールや電話で連絡を取り合い進めた。

② 教師の学び

保護者と子どもたちとの行事の際の様々なレクリエーションや、特別支援学級の生活単元学習での助言等、今までになかった新しい取り組みをすることができた。授業づくりをする上でとても役立った。

③ 学生の学ぶ姿勢

教育実地研究では、学生と子どもたちとが実際にふれ合う中で、関係性が生まれ、子どもたちは学生が来るのを楽しみにする姿がみられた。また、学習でつまずいている子どもへの支援だけでなく、休み時間一緒に遊んでもらうことや、運動会等の行事の中で応援してもらったことで、子どもたちは、自分たちのことをきちんと見てくれていると感じ、とても喜んでいた。

（2） 課題

① 事前・事後の打合せ、反省

打ち合わせの時間が取りにくい。

② 教師の学び

実地研究では、学級担任とも、どういった目的でやるのか、どのようにやっていくのか等、１年間の計画をたてたり、確認したりする時間があるとよい。

③ 学生の学ぶ姿勢

大学の授業時間が違い、うまく入ってもらえない時があったり、学生によって来られない時があり、計画をたてにくい面がある。

学生によって学ぶ姿勢に差がみられる。大学の休業中も来てくれる学生もいれば、子どもたちとの関わりが薄い学生もいた。

一身田小学校の取組

津市立一身田小学校　加藤　真由子

教育実地研究基礎

○　人員が増え、子どもたちによりきめ細やかな指導ができた。学生が入ることで、子どもたちもはりきって学習できた。

○　子どもたちの様子を見ながら、優しく接する学生の姿が印象的だった。ただ算数の個別指導で入って説明してもらったり、図工で子どもの思いをていねいに聞き出し、助言を与えてもらったりした。

○　できれば通年で、同じ時間に学生が入れるよう、システムの確立を望みたい。

各学年の取組

１年生の取組について　～小１プロブレムの解消・音楽の授業を考える～

保育園や幼稚園では、生活の中に様々な歌や手遊び、リトミックが取り入れられ、音楽に親しんできた子どもたちであるが、小学校に入学すると、教科としての音楽を学ぶことになる。１年生の音楽の題材には、手遊びやリズム遊びが取り入れられているが、指導者であるわたしたちの側にどう扱えばよいのか迷いがあり、子どもたちが違和感なく、スムーズに音楽を学ぶためには、どんな導入や言葉がけが有効か課題であった。

そこで、幼児教育の滝口先生と学生に協力いただき、音楽の指導案の検討と、学生による授業を２回行った。内容は以下の通りである。

１組・・・「山のおんがくか」手作り楽器を使って

２組・・・絵本の読み聞かせから音楽へ・遠足へ行こう（歌・手遊び）

３組・・・「ミックスジュース（身体表現）」学生によるバイオリンの伴奏で歌う
ボディパーカッション

４組・・・手遊びと歌・身体表現　物語（ペープサート）から音楽へ
ボディパーカッション

「この歌、幼稚園で歌ったよ」と言った子どものうれしそうな顔が印象的だった。各クラスに３～５人の学生が入ったことで指導が充実し、子どもたちは楽しそうに学生とやりとりをしながら、生き生きと表現していた。グループで活動した学級もあったが、それぞれのグループに学生が入って子どもたちの気持ちを引き出すような言葉がけをしたので、活発な話し合いができた。子どもたちがいつの間にか音楽の世界に引き込まれ、自然に歌ったり演奏したりできるような工夫や、授業の導入の大切さを改めて実感した。授業前・授業後には、指導案や授業の検討をし、色々な歌や手遊

びも紹介してもらうことができたので、その後の音楽の授業でも取り入れ、楽しく授業を進めることができた。私たちにとっては、１年生の子どもたちが喜んでとびつくような教材の収集ができたことも大きな成果だった。

２年生の取組について　～生活科　グングンのびろ　“元気”にそだて～

２年生では、１学期に生活科でナスやピーマンなどの野菜を育てる活動を行った。子どもたちは、育てる喜びと収穫の喜びを体験し、植木鉢で育てる小さな野菜から、畑で育てる野菜へと関心をうつしていったようだった。

そこで､収穫までに多くの世話が必要であることに気づくと共に、収穫の喜びや調理をしてみんなで食べる楽しさ、食物の大切さを感じてほしいと願い、家政科教育の磯部先生と学生に協力いただき、「さつまいもを育てよう」の活動に取り組んだ。収穫後には、つるを使ってどのように遊べるかや、どのような料理が作れるかを、家の人に聞いたり、本で調べたりして考えた。さつまいも蒸しパンと茶巾しぼりを作ることになり、調理実習には、各班に一人ずつ教師や学生が入りアドバイスや手助けをしてもらいながら、おいしく作ることができた。

完成したさつまいも蒸しパンは､１年生やお世話になっている先生方にプレゼントをした。学生が入ってくれることで、衛生や安全に気をつけながら、子どもたちは意欲的に調理をすることができた。また、さつまいもの栄養についての紙芝居や、繊維を取り出し、実際に見ることで、いもや野菜を食べることの大切さを知った。給食にさつまいもが出ると、身近に感じ、学習したことを思い出しながら喜んで食べていた。他の食品についても、バランスよく、頑張って食べようとする姿がみられるようになった。さらに一小祭では、いもカルタやいも紙芝居、いもほり体験など、それまで学習してきたことを、意欲的に工夫をこらして発表することができた。

３年生の取組について　～体育　マットの山に挑戦～

全体的に子どもたちは体を動かすことは好きだが、跳び箱・マット・鉄棒など回転を伴う運動になると、筋力や回る体験の不足などからうまくできない児童や、怖がって積極的に取り組もうとしない児童がいる。また、跳び箱の高さや硬さ、最上頭部の面積の狭さなどの要因から苦手意識を持つ児童が多いと考えられる。そこで､「マット」の山という場を設定することにより、跳び箱に対する抵抗感を少しでもなくすことができるのではないかと考えた。

短マットを１４枚積み上げたマットの山を２つ、セーフティマットを４枚重ねた山を１つ用意し、クラス全体を３つの班に分けて３つの山をローテーションして跳ばせた。子どもたちははじめびっくりしていたが、跳び始めると何回も楽しそうにマットの山に挑戦していた。自由に跳ばせていたところ、片足で踏み切ったりマットに手をつかずに登ったりする児童がいたので、「両足で踏み切ること」「マットに手をつくこと」の２つの条件をつけて跳ばせた。跳び方については何も説明しなかったが、自分で考えて台上前転や腕立て前転に近い動きをする児童もいた。また、マットの上で横に転がったり向きを変えて後転をしたりとおもしろい技に挑戦する児童も見られた。

「マットの山」という場を、子どもたちは初めて経験したと思われる。準備に時間がかかりすぎることや日程の都合などで１回しか実践できなかったが、子どもたちが自発的に繰り返し挑戦する姿を見て、「場の工夫」によっては子どもたちの意欲をそれほどにも掻き立てることができるのかと驚いた。場の工夫の大切さを痛感した。また、自発的に取り組む事によって、子どもたちは本当に自由な発想で運動することができることを教えてもらった。跳び箱の楽しさの本質は、踏み切ってから着手するまでの**「フワッと感」**と着手してから着地までの**「グルッと感」**を味わうことであると教えてもらった。今後も、その**「フワッと感」**と**「グルッと感」**をより楽しむことのできる場や環境を整え、より楽しい跳び箱の授業に臨みたい。

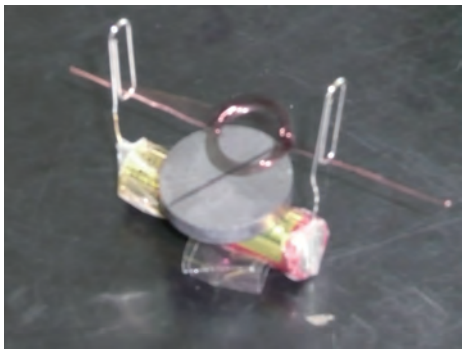
４年生の取組について　～親子活動（理科教室）～

自分で作ったり、工夫したりすることに興味関心が高く、新しいことには進んで取り組む。自力で解決できない事に直面したときに、適切な支援があると、さらに前向きに取り組むことができる子どもたちである。

ＰＴＡの学級活動を「親子理科教室」として行った。牧原教授の、モーターの作り方を説明している手元の細かな作業の様子を、ビデオカメラで投影し実況中継しながら進めた。子どもたちは電気について学習したところであったので関心も高く、授業とのつながりを持って取り組んでいくことができた。日常生活で目にするもの（ゼムクリップ）とエナメル線を使って自作のモーターを作り回転させることを目標に、親子で協力し作成した。子どもだけが作って回り出したグループや、親がアドバイスを入れたことによって回ったグループなどさまざまな姿が見られた。真剣に取り組む親子の様子は普段の授業では見られない集中した様子で、回ったときの歓声が教室のあちこちに響いた。

子どもたちは、「こんな簡単にモーターってできるの！」とか「自分でモーターなんて作れるんや」と目を輝かせていた。回ったモーターを横や下から眺めながら、もっと速く回す方法を聞き、コイルをたくさん巻いたり、隣のグループと協力して乾電池の数を増やすなど工夫する姿も見られた。回らないグループにアドバイスしたり、教え合ったりすることで拡がりながら、協力することの楽しさを実感しているように感じた。

さらに、家に持ち帰ってからも、相当数の電池をつなげて高速で回転したという報告や、夏休みの自由研究で自作の扇風機を作成するなど、家庭でも興味関心をつなげた支援をしてもらっている様子があった。



自分の力で作ったモーターが回ったことで、身近にあるものを見ると「先生、これは作れないの？」
など、まず作ることができないかといった、ものに対して自分のとらえる姿勢が主体的に変わったように感じる。

その後、ペットボトルを使った「ルーペ」を子どもたちだけで作成した。季節ごとの自然の様子を観察学習する理科の授業等で活用し、自作のルーペを首に下げて自然観察している。与えられることが多い中でも、自分でできることを探す意欲を大切にしていきたいと感じた。

５年生の取り組み ～親子活動・総合的な学習　楽しくできたよ、ありがとう～

５年生では、ＰＴＡ親子学級活動とお米を使った料理で学生に協力していただいた。

ＰＴＡ親子学級活動では、親子ドッジボールなど毎年同じような活動が行われていたために、保護者から「今年は違う活動をしたい。」という相談があった。

そこで、６月に２・３組が岡野先生と学生の指導の下「体ほぐし運動」、１２月に１・４組が後藤先生と学生の指導の下「おもしろ理科実験」を行った。

「体ほぐし運動」では、‘ちゅんちゅん列車’（振り付きのじゃんけん列車）や、‘花まつり’というダンスなど普段の授業では体験できない活動を通し、親子が楽しくふれ合うこ

とができた。また、音楽に合わせて体を動かすことの楽しさを子どもたちとともに感じることができた。保護者からも、「無理なく、楽しく運動ができた。」と好評であった。

「おもしろ理科実験」では、１個のあめから綿あめを作る実験や、カルメ焼きを作る実験などを通し、糖の状態変化の学習を楽しみながら行うことができた。教科書に載っていない実験を行ってもらい、科学のおもしろさを垣間見ることができたと思う。実際、子どもたちや保護者からも、「すごい。」「楽しい。」という声が聞かれた。

１２月には、総合的な学習の時間に「お米を使った料理を作ろう」という学習も行った。

地域の方に協力してもらいながら、田植え・稲刈りを行った子どもたち。自分たちが作ったお米を、自分たちの力で料理することは、子どもたちにとって貴重な体験となると考え、磯部先生と家政科の学生に協力していただいた。

子どもたちは、作りたい料理をそれぞれの班で話し合い、実習計画を立てていった。学生から材料や調理手順などアドバイスを受けたことで、子どもたちは自信をもって実習に取り組めたと思う。

調理実習では、教師一人では各班の細かいところまで目が行き届かないこともあるが、学生がいることによって、困った班は学生にアドバイスをもらいながら進めることができたので、子どもたちも教師も安心して実習を行うことができた。でき上がった料理を見て子どもたちは、「〇班の料理おいしそう。」「△班の料理、家で作ってみたい。」など自分たちの作った料理だけではなく、友達の班が作った料理も評価することができた。

今回の実習では、教師によって決められたものではなく、自分たちで計画・準備・実習と進めてきた。どの場面でも、子どもたちが自主的に、生き生きと活動していたことが印象に残っている。これからも、子どもたちが「やってみたい」「楽しい」と感じるような授業を目指して連携を続けていきたい。

椎の木の取り組みについて　～色々な人との関わりをひろげる取組～

一身田・大里地区の小学校（一身田小、白塚小、栗真小、大里小、高野尾小、豊が丘小）の特別支援学級の子どもたちには、毎年交流の場が設けられている。担当の小学校に集まってゲーム等をして交流している。各学校でゲームを考えていたが、同じような傾向で、子どもたちが飽きてきたこともあり、本年度は、三重大の学生の協力を得て、企画運営していきたいと考えた。他校の子どもたちや支援者との関わりだけでなく、地域の大学の学生との関わりは特別支援の子どもたちにとって有意義であると考えた。

大学の特別支援教室の先生を通して３年生の学生に協力を呼びかけていただいたところたくさん応じてくれた。各学校との日時の調整もあり、呼びかけが遅かったために打ち合わせの日が余りとれないだろうと思われた。そのため、その交流会でしていたことと、今

回のねらいを伝えるとともに、感覚統合のゲームの資料等を代表者に送り、協力してくれる学生たちで予めやりたい活動の構想を練っておいてもらうことにした。

打ち合わせは、１日だったが学生は活動内容をきちんと提示し、体育館で練習もしていった。またパネルシアターは、大学へ持ち帰り練習をしておいてくれた。

当日、感覚統合のゲームを担当がした後、後半を三重大の学生たちが担当した。「アブラハムと七人の子」は、子どもたちがとても楽しそうに踊っていた。日頃余りダンスを好まない子どもたちも楽しげだったのが印象的であった。おいかけっこの「むっくりくまさん」も子どもたちは、本当に楽しそうに逃げ回っていた。パネルシアターは、みんな集中して見ていた。三重大の学生が用意したどの企画も子どもたちは、楽しげで、満足げだった。

後日各校から、「家に帰って家族に楽しかったと報告した子どもが何人かいた。」とか、「楽しいから、三重大のお兄さん、お姉さんとまた追いかけっこがしたい。」という感想が寄せられた。また、「パネルシアターをした学生の提示の仕方や、間の取り方がとても上手だった。よく練習されていて良かった。」との声が支援者の何人かからもあった。

「アブラハムと七人の子」は、自分が指導したときは、子どもたちがあまりのらなかったのに、三重大の学生のときは、なぜあんなに楽しく踊れたのか。後からよく考えてみると、学生たちは、自分自身が楽しんで一生懸命真剣に手足を伸ばして踊っていたように思った。それに子どもたちも引き込まれたのだと思う。考えさせられた。

来年も機会があれば、もっと早くから計画を練り合わせ、楽しい交流会を企画運営できたらと思っている。

世界を結ぼう（多文化共生）クラブの取組

世界には、いろいろな文化があることを知ることと、外国につながる子どもたちにとっては、母国の歴史や習慣、文化を深く知ることでアイデンティティを構築すると同時に、日本の子どもたちに発信することを目標に、クラブを立ち上げた。大学でカラーのチラシを作っていただいて掲示し、簡単なクラブ紹介もしたが、去年までは無かったクラブなので、子どもたちには内容がよく伝わらなかったようだった。特に、外国につながる子どもたちに入部してほしかったが、個人の自由意思に基づいて所属を決定するため、日本人の４年生ばかり１６名が入部した。そこで、クラブに所属しない学年である３年生の外国につながる子ども２名の保護者に了解を取り、必要に応じて参加を求めることにした。

またシルビア先生にお世話になり、先生の母校である日本語学校(めぐみ学園)と交流を持つことになった。

クラブで行った内容は以下の通りである。

第１回　クラブ名決定・自己紹介・クラブでやりたいことを考える。
第２回　ブラジルについて知る。
第３回　学校生活や行事などについて、ブラジルの友だちに手紙を書く。
第４回　身近な物や出来事の写真を選んで、簡単な説明を書く。(ブラジルに送るため)
第５回　ポルトガル語を知って、自己紹介をしたり、遊び歌で遊んだりする。
第６回　ブラジルと日本との交流の背景や、シルビア先生について知る。
第７回　ブラジルの音楽を楽しむ。(ダンス・カバサなどリズム楽器の演奏)
第８回　簡単なブラジルのお菓子を作る。(予定)

↓ブラジルから届いた手紙

活動内容は、子どもたちの希望をもとに、大学の桂先生や林先生と打ち合わせをして決定した。

夏休みに、インスタントカメラを配り、ブラジルでは珍しいと思う物の写真を撮るように伝えると、子どもたちは、とまどいながらも一生懸命に考えて写真を撮ってきた。また、自分たちが書いた手紙がブラジルに届き、それに返事をもらった事は、とても嬉しかったようである。ブラジルの遊びや音楽は、言葉はよく分からなくてもみんなで楽しむことができた。

３年生で参加している２人は、ブラジルの遊びや音楽になると、事前に日本語教室で練習を重ね、クラブの日を楽しみにしている様子であった。当日は、左の写真のように４年生や大学生の前で堂々と歌やダンスを披露していた。

このクラブの活動を一小祭で発信しようと、班に分かれて模造紙などにまとめた際にも、３年生もその中に入って作業に参加した。

桂先生や林先生に助言をいただいて活動内容を考え、シルビア先生に教えていただいて、ブラジルの遊びや歌や楽器にふれることができたし、めぐみ学園との交流も、始めることができた。子どもたちにとっても、よい経験になったと思う。特に、３年生の子どもたちは、日本語が流暢に話せないことから、クラスでの活躍の機会が少ないが、クラブでの活動の中で生き生きとした表情を見せていたことが嬉しかった。

日本語でコミュニケーションがとりにくい子どもたちを、日本人の子どもたちとつなげ

ていく手だてとして、遊びや音楽が有効であることが分かった。そこで、クラブで取り上げた遊びや音楽を、３年生のクラスでも紹介してみると、どの子も楽しそうにしていた。中には、外国につながる子といっしょに日本語教室に行って、遊んだり話をしたりする子どもの姿も見られるようになった。

個人の自由意思に基づいて所属を決定するというクラブの性格上、外国につながりを持つ子どもたちの入部の確保が難しい所があるので、今年度の活動内容をアピールしていきたい。また、ブラジルの学校との交流の中で、長期の休暇や新学期の時期にずれがあるため、手紙のやりとりの時期を考えていく必要があると思う。当初は、ブラジルにビデオレターを送ることも考えていたが、限られた時間の中では難しかった。

校内研修への指導・助言

本校では「主体的に学び、高め合う子どもの育成」のテーマで、算数科の研修を行っている。昨年度に引き続き、数学教育の上垣教授に来ていただき、「子どもが考えを深めたり広げたりするための授業者の関わり方」について指導・助言をいただいた。

１～６年の指導案検討会から、研究授業・事後検討会全てに参加していただき、研修を深めることができた。

成果と課題

○　授業内容の充実
○　教材収集・教材開発
○　学生さんとともに実践して
○　事前の打ち合わせ・事後の反省会の時間確保

未来創造・学びの城　一中

平成20年度、「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」の取組から

ネットワーク型授業

1．カリキュラムの目的に沿ったゲストを迎え、生徒の思考回路を刺激し、タイムリーに情報を獲得することで、新しい価値観の形成をする。

2．正解のないテーマを題材に、物事の本質を考える。

3．学校と社会がつながっていることを体感させる。

創造的に考え、主体的に行動できる生徒の育成

津市立一身田中学校のキャリア教育

キャリア教育でのねらい

1．実社会に関わりをもちながら、自ら課題発見し、主体的に課題解決する学びをとおして、創造性や社会性を育むキャリア教育の推進

2．3年間見通したキャリア教育カリキュラムの作成に取り組むこととなった。

基礎・基本の定着を図る教育活動

学習内容を理解し、思考力を高めるためのティーティグアシスタントの活用（個別支援や実験補助）

生徒の主体的な学びを引き出す魅力的な内容

教員の資質向上を高める取組

興味、関心を高めるための教材開発と授業実践

表現力を高める音楽科の授業

能力に適した課題をもって
技能を高める体育科の授業

創造性や社会性を育むための教育活動

社会的変化に柔軟に対応できる資質や能力を育成する起業教育

知的好奇心を喚起する課題解決学習（社会科自由研究）の取組

知識や技能を存分に発揮し、自己と社会との関わりを追求する

学びの拠点としての取組

地域教育力を目指した
カルチャースクール

基礎学力の定着及び論理的思考力を
高めるためのナイトスクール

文教都市としての地域活性化モデルの構築

「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代 GP)」を活用した ネットワーク型授業の成果と課題

津市立一身田中学校
校長　　笠原　　哲

国立大学法人三重大学教育学部の「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代 GP)」事業では、学習指導に留まらず、学校行事の共催や地域社会の活性化に向けた取組など、幅広い分野でご指導ご支援をいただいた。

３年間に亘る取組の成果と課題を整理することで、本校が目指しているネットワーク型授業（地域連携）における、高等教育機関（大学）との連携の意義を再確認したい。

Ⅰ　高等教育機関（大学）との連携のねらい

本校では、生徒の個性や地域の特色を生かした人づくりとともに、生まれ育った郷土を愛する「郷土心」をもった生徒の育成を図るため、保護者及び地域社会と学校が一体となって学校教育と社会教育の融合を図る、ネットワーク型授業に取り組んでいる。

ネットワーク型授業では、低下している地域内のコミュニケーションを呼び戻し、地域と学校のインターフェース機能を向上させるため、本校が地域の「ハブ」となることを目指している。

地域の「ハブ」となるためには、学習内容の改善や教員の資質の向上など学校機能の強化が不可欠と考え、専門的な知識や機能を有する高等教育機関（大学）が校区に隣接している特色を生かして、平成１７年度から、大学との連携に取り組んでいる。

Ⅱ　「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代 GP)」を通じて目指したもの

現代 GP を通じて、教育内容の改善や教員の資質の向上などを図るとともに、保護者や地域住民の教育に関する意識を高め、本校の教育活動と子どもの成長を見守り、支えることのできる地域連携を目指してきた。

具体的には、本校の教育目標に沿った、（１）基礎・基本の定着を図る教育活動、（２）創造性や社会性を育むための教育活動、（３）教員の資質向上を図る取組、（４）学びの拠点としての取組、（５）特色ある教育活動の推進などに取り組んだ。

（１）基礎・基本の定着を図る教育活動

各教科の学習が、生徒の主体的な学びを引き出す魅力的な内容となる授業づくりについての研修を深めるとともに、より分かる授業づくりに取り組んだ。

（２）創造性や社会性を育むための教育

自己理解や社会理解を深めることのできる、キャリア教育などの体験的な学習活動を導入し、自己の適正や可能性を理解するとともに、自己と社会との関わりを認識することで、社会人として自立できる資質や態度の育成を図った。

（３）教員の資質向上を図る取組

基礎学力の定着と、問題解決能力や社会的実践力を高める探求的な学習指導方法についての研修を深めるとともに、授業実践においてその効果の検証を行った。また、先進的な学習プログラムの開発や、実生活に密着した学習プログラムの開発に取り組んだ。

（４）学びの拠点としての取組

地域、家庭の教育力のさらなる向上を目指し、教養講座「カルチャースクール」を開設した。また、平成２０年度から「学校支援地域本部」を立ち上げ、大学を含めた地域との協働による活動が発展・拡大することを目指して、地域ボランティア（サポーターいっちゅう）の組織化に取り組んだ。

（５）特色ある教育活動

実社会における様々な状況や変化を的確に見抜き、分析する能力を高めるスキルアップトレーニングを取り入れた「職業調べ学習」などを実施した。

Ⅲ　「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代 GP）」を活用したネットワーク型授業の成果と課題

現代 GP は、基礎・基本の定着を図る教育活動、創造性や社会性を育むための教育活動、教員の資質を高める取組、学びの拠点としての取組、特色ある教育活動の推進など、本校の教育目標であるネットワーク型授業の推進に大いに資するものとなった。

生徒、教員、地域それぞれに見られる成果と課題は、以下のようなものであった。

（生徒）

基礎･基本の学習では､６教科で双方の教科担当者が合同研究会を開催して指導案の検討などを行い、日常の授業や公開授業に繋げ、また、大学生によるＴ･Ｔ（ティームティーチング）が年間を通して行われるなど、生徒の学習意欲の向上や教科理解に有効であった。

また、創造性を育む教育として取り組んだスキルアップトレーニングの「起業家教育」などが、キャリア教育の推進に有意義であった。

一般的なカリキュラムでは得られないこうした諸活動が、生徒に新たな緊張感と意欲をもって取り組む姿勢を涵養し、クラスとしてまた全校的にも一体感の醸成（集団づくり）に寄与した面が大いにあったのではないかと感じる。こうした側面は、生徒の問題行動の減少などにも顕れてきていると考えている。

大学生との共催による、「コーラスコンクール」でご指導を受けたことなども含め、生徒は、地域社会（大学）が学校を支えてくれていることの意義を格段に意識し始めていると感じる。

今後の課題

地域連携に基づく教育活動が学習意欲の向上などの刺激にはなっても、一人ひとりの生徒の「動機づけ」にどこまで有効であったかは検証していく必要があると感じており、事前・事後の十分な指導時間の確保など、さらなる工夫が必要と考えている。

（教員）

地域人材の力を教科や教科外の授業で活用することの意義については、時間の経過とともに、教員に認識が浸透しつつあるように感じる。授業指導や授業支援を通して、教員の力量の向上とともに、教員自らの課題の把握にも繋がり、発展性をもった授業が行われるようになったと感じている。

課題提示型学習の見直しがいわれる今日にあって、地域連携による発展的な教育活動は、課題解決型学習（キャリア教育）の必要性に対する教員の理解を深めるとともに、教員一人ひとりのキャリア形成のきっかけづくりになっているのではないか。

今後の課題

日常的に多忙を極める教員が、発展的な学習活動や地域連携を負担と感じ、継続的に取り組む余裕がないという声があることに対しては、地域連携による教育活動の高品質化や学校の機能化を通して、学力の向上や生徒の学習意欲の涵養を目指していく中で、学校運営や学級活動が効率化され、業務負担の軽減にも繋がることを理解してもらうよう努めていきたい。

（地域）

公立学校のよさは地域があり、地域の「人材」という財産があることだと思うが、地域連携に効果的に取り組むためには、地域の「人材」が主体的・自主的に関われる機運を高めるよう働きかけるとともに、関わっていただく方をどれだけ発掘できるかが肝要といえる。

その意味で、「カルチャースクール」や「学校支援地域本部」事業、さらにネットワーク型授業（地域連携）の取組をまとめた「情報誌」の発行などが地域との繋がりを深化させ、学校と地域の連携についての理解を広げるとともに、その重要性が認識され、学校の諸活動を支援していただける地域「人材」の参画に大いに寄与した。

今後の課題

過去３年余りで構築してきた大学を始めとする地域連携を、中期的にどう維持・発展させていくか、そのための確かな連携づくりが一段と求められていると思う。

「第３回 フォーラム in 一身田」講演レジュメ

「みんなで楽しく学校参加」

NHK解説委員 早川信夫

（１）はじめに…きょうのテーマと自己紹介

（２）放送の仕事から教育を考える
　①　「週刊こどもニュース」が誕生したわけ
　②　制作経験から感じた「教育」

（３）はがれおちない学力のために
　①　変わる小中学校教育
　②　学びの楽しさを伝えた人々
　③　体験型教育の必要性

（４）「学校は地域と連携を」と言うけれど
　①　学校が地域に見せている顔とは
　②　学校と地域の連携が言われるようになったのは
　③　「よい関係」ができると

（５）私たちにできることは
　①　異世代協働でこどもは育つ
　②　まずは「大きな耳」から
　③　「キレない心を育てる」
　④　「あなたの笑顔は自分の心」

（６）まとめ
　今こそ求められる「ナナメの関係」

・ＮＨＫ解説委員室ホームページ＆ブログ
　http://www.nhk.or.jp/kaisetsu/
・「教育の忘れもの」（上坂冬子著　集英社）
・「これならわかる教育改革１・２」（ＮＨＫ教育フォーカス取材班　中央出版）
・ＮＨＫティーチャーズネット　「早川解説委員の“イマドキの教育”」
　http://www.nhk.or.jp/school/net/index.html

［7］現代 GP の3年間の総括及び外部評価

（1）3年間の総括と自己評価

平成 18 年度から 20 年度までの３年間にわたって取り組まれた現代 GP の事業を終えるにあたって、その総括と自己評価を、下記の５点にわたって行ない、最後に、事業全体に対する総括・教訓を述べる。

［１］事業目的と活動内容の妥当性について
［２］各活動の達成度について
［３］学校・地域活性化モデルの構築の達成度について
［４］幼小中大連携モデルの構築の達成度について
［５］津市教育委員会との連携について

［1］事業目的と活動内容の妥当性について

本事業の目的は、教育学部に隣接する一身田校区の５学校園と連携して、教員養成段階における学生の教育実践力の育成をはかること、当該学区の幼稚園、小中学校の諸教育活動を支援することを通して、学校・地域活性化モデル及び幼小中大連携モデルを構築すること、当該学区の地域教育力を高め、教育学部としての地域貢献に資することであった。

この目的は、多様化し複雑化する教育的課題に適切に対応できる教師力の育成にとって、教科及び教職に関する理論的学習だけではなく、学校現場に入って、幼児・児童・生徒の生きた姿に接し、子どもの理解と学校及び教師の仕事の理解を、実地的に進めることの重要性に鑑みて、きわめて適切な目的設定であったと考える。そして、この目的の達成をはかる取組は、今後ますます重要性を増していくものと思われる。

上記の目的を達成するために取り組まれた活動内容を教育学部の教員組織及び学生組織の側から整理すると、

社会科教育講座：中学校におけるキャリア教育への支援
数学教育講座　：小中学校での算数・数学に関する学習支援、公開授業への支援、放課後学習への支援
理科教育講座　：幼稚園での動物飼育への支援、小中学校での理科実験指導と出前授業、「青少年のための科学の祭典」での出展に係る支援
音楽教育講座　：小学校の「６年生を送る会」への支援、中学校とのコラボ音楽祭に向けての合唱指導、発声法ワークショップへの支援
保健体育講座　：小学校での水泳指導、親子活動への支援、公開授業への支援、中学校でのラート指導と公開授業への支援
家政教育講座　：小中学校での「食に関する授業」への支援
英語教育講座　：中学校での公開授業への支援
幼児教育講座　：幼稚園での音楽活動への支援、生きもの環境づくりへの支援、未就園児保育活動への支援、小学校での音楽活動、親子ふれあい活動への支援
日本語教育講座：小学校における多文化共生クラブ活動への支援

となる。

また、上記以外には、理科教育講座と家政教育講座の協働による「クロスカリキュラム」の実施がなされた他、一身田校区カルチャー・スクールが６期・18 回にわたって開催され、それへの支援として、国語・社会・数学・理科・家政・音楽・保健体育の教員が関わった。そして、各年度ごとの活動のまとめと総括を行ない、次年度の取組につなげるために、課題と教訓を明らかにするためのフォーラムを開催した。

３年間にわたる現代 GP 事業の活動内容は、学生の子ども理解・学校理解のための良い機会となるとともに、幼稚園及び小中学校の教育活動への支援ともなり、きわめて適切な内容であったと考える。これらの諸活動の規模を数値的に示せば、下記の表のようになる。

	18年度	19年度	20年度
参加教員数	11名	19名	24名
取組数	10	39	42
一身田中学校	9	12	10
一身田小学校	1	12	16
栗真小学校	0	7	5
白塚小学校	0	3	4
白塚幼稚園	0	5	6
取組の主な内容			
学習支援	5	14	16
授業研究	4	6	8
出前授業	1	5	5
学校行事	1	6	8
教員研修	3	9	4
学生が参加した取組	6	29	34
授業に関連した取組	3	17	24
連携日数（延べ数）	57日	704日	816日
参加学生数（延べ数）	112名	289名	358名
学生の参加時間（平均）	8.8時間	9.1時間	9.4時間

以上のことから、事業目的及び活動内容の妥当性については、**「妥当であった」**と考える。

［2］各活動の達成度について

上記の［１］に示した活動内容について、簡単なコメントを付し、「非常に優れている」「優れている」「良好」「おおむね良好」「不十分」の５段階の表示をもって自己評価を行なう。

①中学校におけるキャリア教育への支援（社会科）

大学教員のみの単発的な支援であった点に課題が残った。**「良好」**

②小中学校での算数・数学に関する学習支援（数学科）

関わった学生数は、３年間で 156 名であり、取組自体は優れた内容であったが、活動に対する学生の姿勢に差が見られた。**「優れている」**

③小中学校での公開授業への支援（数学科）

大学教員のみの支援であったが、継続した取組として、子どもと学校教員に歓迎された点は大きく評価できる。**「優れている」**

④中学校の放課後学習への支援（数学科）

取組の趣旨は優れているが、その規模に課題が残った。**「良好」**

⑤幼稚園での動物飼育への支援（理科）

幼児期における動物との触れ合いの意義と方法を提供できた。**「優れている」**

⑥小中学校での理科実験指導と出前授業（理科）

関わった学生は、３年間で 111 名であり、子どもと学校に歓迎されるとともに、学生の実験企画力の向上につながった。優れた取組であった。**「優れている」**

⑦クロスカリキュラムの実施（理科、家政科）

関わった学生は、３年間で 52 名であり、解剖実習と調理実習を組み合わせたユニークな取組であり、子どもと学校から大いに歓迎されるとともに、授業内容を組み立てる上において、また教材研究の面において大きく貢献した。**「非常に優れている」**

⑧「青少年のための科学の祭典」での出展に係る支援（理科）

中学校の「選択理科」受講の生徒が、大学及び学校教員の支援を受けて、科学の祭典に実験ブースを出展するという優れた取組であった。**「優れている」**

⑨小学校の「６年生を送る会」、クリスマスコンサート等への支援（音楽科）

関わった学生は、２年間で 13 名であり、子どもと学校から歓迎され、学生の企画運営力の向上につながった。**「優れている」**

⑩中学校とのコラボ音楽祭の開催及び音楽祭に向けての合唱指導（音楽科）

３年間継続して中学校と教育学部音楽科が協働して音楽祭・合唱コンクールを開催した。関わった学生は、3 年間で 92 名であり、学生が中学生に対して音楽祭に向けての合唱指導をするなど、学生の教育実践力の育成につながった。**「非常に優れている」**

⑪中学校での発声法ワークショップへの支援（音楽科）

コラボ音楽祭のために、中学生に対して発声法の指導を行なった。３年目だけの取組であったのが残念であった。**「良好」**

⑫小学校での水泳指導（保健体育科）

小学校の夏期休業中に、学生が水泳指導を行なった。１年目だけの取組であったのが残念であった。**「良好」**

⑬親子活動等への支援（保健体育科）

学校行事や PTA 行事等における親子活動の企画運営に学生が参加し、子ども・学校・保護者から大いに歓迎された。その他、キャンプファイヤー時のゲーム検討会にも参加して、関わった学生は、２年間で 57 名であり、学生の実践指導力の向上につながった。**「非常に優れている」**

⑭小中学校における公開授業への支援（保健体育科）

関わった学生は、３年間で 21 名であり、継続した取組として、子どもと学校教員に歓迎された点が大きく評価できる。**「優れている」**

⑮中学校でのラート指導と公開授業への支援（保健体育科）

器械運動具「ラート」を中学校に導入したのは日本最初であり、学校教員に対する研修から始め、中学校での公開授業まで実施した優れた取組であった。**「非常に優れている」**

⑯幼稚園、小中学校での「食に関する授業」への支援（家政科）

関わった学生は、３年間で 61 名であり、学校園のにおける種々の教育活動に大きく貢献するとともに、学生の教育実践力の向上につながった。**「非常に優れている」**

⑰幼稚園での音楽活動への支援（幼児教育）

関わった学生は、２年間で 52 名であり、学生の企画運営力の向上につながった。**「優れている」**

⑱生きもの環境づくりへの支援（幼児教育）

幼稚園における「生きもの環境づくりプロジェクト」を企画運営した取組であり、子どもと幼稚園から歓迎された。また、学生の卒業研究にもつながった優れた取組であった。**「優れている」**

⑲未就園児保育活動への支援（幼児教育）

幼稚園における未就園児保育に関わって、「ぴょんちゃんクラブ」の企画運営に学生が参加した取組であり、２年間で 18 名の学生が関わった。幼稚園から非常に歓迎されたと同時に、学生の教育実践力の向上につながった。**「非常に優れている」**

⑳小学校での音楽科及び生活科での活動支援（幼児教育）

関わった学生は、２年間で 34 名であり、子どもと学校から歓迎された。**「優れている」**

▯小学校での親子ふれあい活動への支援（幼児教育）

関わった学生は、２年間で 63 名であり、子ども・保護者・学校から歓迎された。**「優れている」**

▯中学校における公開授業への支援（英語科）

中学校の英語授業への支援であったが、１年目だけの取組であったのが残念であった。**「良好」**

▯小学校における多文化共生クラブ活動への支援（日本語教育コース）

多文化共生クラブ「世界を結ぼう」の活動を、14 名の学生が参加して、年間８回実施した。平成 20 年度だけの取組であったのが残念であった。**「良好」**

▯一身田校区カルチャー・スクールの開催

全体として６期・18 回の講座を開催した。当初は目新しさもあって、参加者は 40 名前後であったが、次第に減少し、20 名前後の参加者となった。地域住民の要求及び開催時間帯等に問題があったと考えられるが、参加者にとっては好評であった。**「優れている」**

［3］学校･地域活性化モデルの構築の達成度について

学校の活性化に関しては、「［２］の諸活動の達成度について」で概観したように、総じて、子ども･保護者･教師に歓迎されたとともに､子どもの成長と教師の専門性向上に貢献したとともに、教師自身が教育実践や授業研究を見直す（振り返る）機会になったと考える。**「優れている」**

地域の活性化に関しては、一身田カルチャー・スクールの取組には課題を残したが、一身田中学校に関しては、地域住民が学校を支援する組織としての「サポーター・一中」を立ち上げ、新たな事業が開始されるなど、一定の成果を収めたと考える。**「良好」**

［4］幼小中大連携モデルの構築の達成度について

NHK 解説委員・早川信夫氏が「第３回 フォーラム in 一身田」で述べられたように、大学が中学校区全体と連携して取り組んだ現代 GP 事業は、コラボ音楽祭の開催、器械運動具「ラート」の

導入、未就園児保育支援、クロスカリキュラムの実施、学校行事・PTA 行事における親子活動の実施、カルチャー・スクールの開催など、全国的にも稀な内容を含んでおり、現代 GP の事業によって、幼小中大の連携が初めて実現し、幼小中大連携のあり方について、１つのモデルを構築することができたと考える。**「優れている」**

［5］津市教育委員会との連携について

現代GP事業の推進は、津市教育委員会との連携協力なしには成り立たなかったと言ってもよい。一身田校区が地理的に大学に隣接していたとしても、教育活動の内容に関わって連携することができたのは、ひとえに津市教育委員会のバックアップがあってのことであった。財政的な支援がなかったことは残念であったが、現今の地方自治体の状況を見れば、やむを得ないと言わざるを得ない。

大学にとって必要不可欠であったことは、大学と学校園の連携を暖かく見守り、精神的な支援を寄せていただくことであったが、その姿勢を津市教育委員会は一貫して示して下さった。その意味において、津市教育委員会との連携は機能的であったと考える。**「優れている」**

【現代 GP 事業全体に関する総括】

３年間にわたる現代 GP 事業について、上記の５点について個別的な概括と自己評価を行なったが、最後に、事業全体に関する総括・教訓を３点にわたって述べる。

第１に、この事業が今後の教育学部の教育研究活動の基盤を形成することになったと考えられ、その意味において、教育学部の特色ある事業であったと思われる。本事業に関わった教員数は約 25％であるが、教員組織数としては約 70％、学生組織数に至っては約 85％と高い事業参加率を示している。これらの数値に対する評価は決して低いものとは言えない。結論的には、本事業が、学生の教育実践力育成にとって機能的であったと考える。ただ、関与した教員数が 25％であったことは今後の課題として残る。

第２に、連携した一身田校区の５学校園に関しては、教員の専門性と授業力、教材開発力等の向上にとって効果的であり、子どもの学びと成長に大きく貢献したことは、各学校園からの報告によって明らかである。また、部分的にではあるが、地域ボランティアによる学校支援の気運が出てきたことは評価できる。ただ、学校園に行って活動する学生の姿勢、指導を担当される学校教員の指導方針等に関する調整機能を大学が十分に果たし得なかったことは、今後の課題として残っていると言わざるを得ない。

第３に、大学と学校園の連携を進める上で重要なこととして、きわめて陳腐なことではあるが、「どれだけ相互理解を深めることができるか」という問題を改めて指摘したい。大学は“学生の教育”を、学校園は“子どもの教育”を、当然のこととして、常に念頭に置いて教育活動を行なっている。その接点を「互恵」という観点から止揚できる度量が双方に求められている。この互恵精神を確立しなければ、大学と学校園の連携を成功させることはできない。

（２）外部評価（三重県教育委員会、津市小中学校長会）

現代ＧＰの取組について

三重県教育委員会事務局小中学校教育室

三重大学教育学部が、「教育実践力の育成と学校・地域の活性化」をテーマとして、「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」を３年間にわたって実施され、優れた成果を収められたことに敬意を表します。

自己評価に示された５点について、下記のとおり意見を述べます。

（１）事業目的と活動内容の妥当性について

本事業は、三重大学教育学部に隣接する津市立一身田中学校区（１中学校、３小学校、１幼稚園）と教育学部が連携することによって、教員養成段階における学生の教育実践力の育成を図ることを一つの目的としている。３年間にわたる取組では、年々活動内容が充実され参加学生の増加がみられるとともに、学生が子どもや教職員に実際にふれ合うことを通して、「学校」を知り教育への認識の深まりがみられる。

また、幼稚園、小学校、中学校への協力体制を構築し、教育活動への支援を行ったことは、学校の活性化に大きく寄与している。

これらのことから、事業目的と活動内容は妥当であったと考える。

（２）各活動の達成度について

各活動の実施にあたっては、活動の目的を明確に持ち、計画的、継続的に取組を続けることによって、多くの活動で優れた成果を収めることができた。さらに実りある活動とするためには継続的な改善活動を行っていくことが大切であると考える。特に、「フォーラム in 一身田」におけるパネルディスカッションの意見交換にあるように、各学校と大学の綿密な連絡が必要となる。

（３）学校・地域活性化モデルの構築の達成度について

学校の教育活動全体にわたって連携した取組を進めることができた。幼稚園からは学生の参加により活気ある活動ができたこと、小学校からは、これまでにできなかった多様な学習活動を行うことで子どもの学びの充実が図られたこと、中学校からは、基礎・基本の定着を図る教育活動、社会性を育む教育活動、教員の資質を高める取組などを推進するために大いに意義があったことが報告されている。

本事業の取組は学校の活性化おいて大きな成果を収めることができたと考える。

（４）幼小中大連携モデルの構築の達成度について

３年間にわたる取組によって、多様な教育活動において幼小中大の連携が実現し、幼小中大連携のあり方について、一つのモデルを構築することができたと考える。

（５）津市教育委員会との連携について

自己評価に示されているように、大学と中学校区の連携事業がこのように大きな規模で円滑に実施され、優れた成果を収めることができた背景には、所管する津市教育委員会のあたたかい理解と大きな支援があったものと考えられる。

「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代 GP）」外部評価

三重県津市小中学校長会

（1）はじめに

本事業は、三重大学の立地条件を活用し、隣接する一身田中学校区との幼小中大連携モデルの構築を図られた三重県でも全国的にも例を見ない教育活動の総合的な支援事業であることをまず大きく評価いたします。小中学校への支援プログラムについては、これまでも三重県教育委員会の取組で、学生の教育アシスタント事業が展開され、学生にも学校にも有益な事業であることが実証されていますし、各地でも同様の取組が実施されています。しかし、さまざまな分野で、幼稚園、小中学校と連携協力を行い、地域・保護者を巻き込み、このように総合的に実施された事業は他にはないように思います。「普段できない体験ができた」、「専門的な立場から話を聞けた」、「大きなホールで合唱ができ、緊張したけど貴重な経験になった」など、たくさんの成果の声を聞きました。

さらに、幼稚園、小中学校の子ども、教職員だけでなく、本事業にかかわった三重大学教育学部生にとっても、子どもたちと触れ合う体験により大学の中だけでは得られない、貴重な体験をすることができたのではないかと拝察いたします。

一方で、各校・園の取組の成果と課題から、地域の方々の参画する人数の増加、サポート体制の構築や強化等については一定の成果が認められますが、教職員の意識改革に帰することができたかについては、資料からは読み取れないため評価が難しいところであります。

学校では、子どもたちの指導だけに時間をかけることができない現状があり、ともすると、文部科学省から委託された大きな事業には、教職員の多忙化が進むのでないかと懸念される声が上がります。新たな事業に取り組むとき、自分自身がどう受け止めるかにより大きな差が出てきます。平成２０年度のフォーラムの感想にそれを如実にあらわす言葉がありました。『現場は大変忙しく、時間がないといわれます。確かにそのとおりだとも思いますが、なんでも受け身でいると、負担感が大きくなりますが、自らが主体的に活動しようとすると、負担感は少なくなるのでは・・・？前向き、主体的な姿勢をぜひ持ち続けたいと思います。』こういった声が膨らみ、さまざまな事業に取り組む姿こそ、教育効果を挙げていくのだと思います。

（2）項目別評価

〔1〕事業目的と活動内容の妥当性について

学生の教育実践力の育成について

本事業に携わった学生が、子ども理解、教科指導・生徒指導方法を学ぶ、教職に携わる意欲を燃やすといった点で、学生により取組姿勢の差はあるものの多くの大学の先生方の指導のもと、たくさんの講座が設定され、実施されたことを大いに評価し、「妥当であった」と

考えます。

当該中学校区の教育支援について

専門的な指導、興味を引く授業内容の提供、通常では体験できないプログラムの実施等々により「妥当であった」と考えます。

学校地域活性化モデル、幼小中大連携モデルの構築について

地域活性化には今後多くの時間や広報が必要であると感じます。また、幼小中大連携モデルの構築といった点で、全国的にも例を見ないダイナミックな取組であるといえます。しかし、大学と幼稚園、大学と学校との連携の姿はみえていますが、同様の教育支援を受けている学校間の連携や、ベースとなる幼小連携、小中連携についての取組が資料からは読み取れず、今後充実されるよう願うとともに連携充実の方策が必要であると感じます。この３点から「妥当であった」と評価します。

〔2〕各活動の達成度について

キャリア教育への支援について

この取組は、中学生が、はっきりとした目的意識を育て、進学・就職していくために始めた取組で、教育の実施については「良好」と評価できますが、追跡調査の必要性は感じます。

放課後支援、算数数学の学習支援等について

子どもたちと年齢の近い学生による〇付け法や、アドバイスは効果的で、学生にとっても実地体験しての学びの場となったと感じます。また授業研究における専門的な教授の継続的な指導・助言は、現場にとってはありがたく、「優れている」と評価します。

理科実験指導、出前授業、動物飼育への支援等

多くの学生の参加があり、子どもたち、幼稚園、学校の支援に多大な貢献ができたという点で、また、クロスカリキュラムは、独自に開発されたもので、子どもたちにも命を頂く貴重な体験活動になっていたという点で、「非常に優れている」と評価します。

幼稚園、未収園児保育への支援について

学生の企画力の向上がみられたこと、スタッフの少ない幼稚園の支援になったという点で、「優れている」と評価します。

音楽祭等への支援について

音楽については、小中学校教員の中でも専門性を持つ人材が限られ、また学生にとっても企画運営力の向上につながった、コラボ音楽祭参加者から、「感激した」と絶賛されていたという点で、「非常に優れている」と評価します。

水泳指導・親子活動支援、ラート指導等について

子どもだけでなく保護者も参加した場面での支援、日本初のラート指導支援等の点から

「優れている」と評価します。

英語科の公開授業支援

１年目だけの支援で残念であり、「やや良好」と評価します。

カルチャースクールの開催

参加者が年々減少したものの、６期１８回の開催、参加者から好評であった、地域貢献という点から、「優れている」と評価します。

〔3〕学校地域活性化モデルの構築の達成度について

「サポーター・一中」のたちあげ、カルチャースクールの開催による参加者の声から、地域活性化への機運は高められているのではないかと感じます。また、特筆すべきは、平成20年度の一身田中学校のまとめにある「問題行動の減少」です。この現代GPの直接的な取組成果であるといえるかどうかは定かではありませんが、生徒が、地域社会、大学が学校を支えていると意識してきている、大学の支援により授業が変わり、生徒の学習意欲の向上につながったということが記されており、「優れている」と評価できます。

〔4〕幼小中大連携モデルの構築の達成度について

はじめにも述べたとおり、幼小中大連携の取組としては、総合的、包括的に種々の取組がダイナミックに展開されたという点で、「非常に優れている」と評価します。しかし、大学と個々の幼稚園、学校との連携は充実が図られていますが、学校間、幼小間、小中間の連携の充実方策を今後模索されることを願うという点を加味し、「優れている」と評価します。

〔5〕津市教育委員会との連携について

津市教育委員会の限られたスタッフの中での連携は、三重大学にとってはどうだったのかという点には疑問が残りますが、大学の一身田中学校区への連携協力は、津市の教育に多大な貢献をされたと思います。地域貢献が大学の使命の一つとまでいわれる時代ではありますが、これほどまでの多くの大学の関係者の方々に学校、幼稚園にご支援を頂いたことは津市の教育を発展させる大きな礎を築いてくださったといっても過言ではありません。「優れている」と評価します。

最後に、三重大学の本事業推進責任者、推進委員の皆様に３年間の取組に敬意を表しますとともに、一身田中学校区の幼稚園、小中学校関係者の皆様のご努力に感謝し、津市全体にこの成果を還流いただくことをお願いいたしまして、外部評価といたします。

お わ り に

平成 18 年度の「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」（現代 GP）に採択された三重大学教育学部の事業の 3 年目（最終年度）が終了した。現代 GP のテーマ「教育実践力の育成と学校・地域の活性化」に付けられたサブテーマである「中学校区全域との連携による学校・地域活性化モデル及び幼小中大連携モデルの構築」という視点からみると、平成 18 年度の取組には、不十分さが残ったと言わざるをえないが、平成 19 年度は一身田校区の 5 校園（一身田中学校、一身田小学校、白塚小学校、栗真小学校、白塚幼稚園）のすべてと連携・協力の取組を展開することができ、さらに、平成 20 年度は一層広範囲にわたる取組を展開することができた。これもひとえに一身田校区 5 校園の校園長をはじめとする教職員の皆様、津市教育委員会、三重大学教育学部の教職員のご支援、ご協力の賜物と感謝している。

初年度の報告書の「おわりに」において、「一般に、異なる伝統や慣習等を持ち、必ずしも同一でない諸課題を持って活動を進めている複数の組織が連携協力して諸事業を推進していくことには種々の困難が伴うものである。しかし、お互いが率直な意見、疑問を出し合いながら、お互いの立場、考え方を尊重しつつ、幼児・児童・生徒の健やかな成長、そして学生の教育のために、大局的に、粘り強く、取組を進めていかなければならないと考えている。」と書いたが、私たちは一貫して、その姿勢を堅持しつつ、諸活動を全面展開できたと考えている。

平成 21 年 2 月 23 日（月）の「第３回　フォーラム in 一身田」も 144 名の参加者のもとに、盛会のうちに終了することができ、ここに平成 20 年度報告書（最終報告書）をお届けすることができるようになったのも、一身田校区の 5 校園をはじめとする関係の諸組織、教職員等の皆様のおかげである。厚くお礼申し上げたい。

文部科学省からの支援をいただいた現代 GP の取組は平成 20 年度で終了するが、３年間培ってきた一身田校区の５校園との連携・協力がこれで終了するわけではなく、平成 21 年度から、この取組は新しい出発の第一歩を踏み出すものと考えている。

一身田校区連携推進委員会は、教育学部教職員、5 校園の教職員並びに津市教育委員会のご支援、ご協力を得ながら、諸活動を推進していく決意である。

三重大学教育学部・一身田校区連携推進委員会

平成 20 年度
現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代 GP）報告書
〜教育実践力の育成と学校・地域の活性化〜
（最終報告書）

平成 21 年 3 月　発行

編集　三重大学教育学部・一身田校区連携推進委員会
発行　三重大学教育学部
〒514-8507　津市栗真町屋町 1577
TEL：059-231-9347
FAX：059-231-9352
現代 GP ホームページ：http://chiiki.gp.edu.mie-u.ac.jp/

印刷　合資会社　黒川印刷
〒514-0008　津市上浜町 2-11
TEL：059-226-4877
FAX：059-226-4889
E-mail：kurokawa@ztv.ne.jp